2016年12月発行
ISSN 1882-4234

作業科学研究

Japanese Journal of Occupational Science

第10巻　第1号

巻頭言

発刊10周年によせて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・近藤 知子　1

10周年記念特集

初代・現日本作業科学研究会会長のことば
作業科学の振り返りと今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・宮前 珠子　3
作業科学：振り返りと展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・吉川 ひろみ　5
世界の作業科学組織からの祝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
作業科学セミナー20年の振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ボンジェ・ペイター　17
作業科学研究10年の振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・青山 真美　20

第19回作業科学セミナー佐藤剛記念講演

トランジション：移住，教育，就労を通しての考察・・・・・・・・・ 浅羽 エリック　24

第19回作業科学セミナー基調講演

高齢期に意味ある存在を生きる・・・・・・・・・・・・・・ Jeanne Jackson・小田原 悦子　41

研究論文

作業を中心とした教育プログラムの活用プロセス―地域在住高齢女性の事例研究―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤文香・他　46
作業療法学生における作業的公正／不公正の統計的実態とQOLとの関連
―質問紙による統計的調査の試み― ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今井 忠則　56

短報

プレイバックシアターのストーリーにおけるテラー経験・・・・・・・・・ 小森 亜紀・他　68
青年期・成人期高機能自閉症スペクトラム障害者の生活の工夫とそれにいたる経過
・・・・・・・・・・・・・・・・・ 鴨藤 菜奈子・他　73

作業的存在

書画はその人を想う発信のツール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村井 真由美　78

資料

第20回作業科学セミナー抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84

日本作業科学研究会

Issued in Dec. 2016

ISSN 1882-4234

Japanese Journal of Occupational Science

Vol.10 (1)

Forword

Celebration for the 10th anniversary・・・・・・・・・・・・・・Tomoko Kondo

Special Issue of The 10th Anniversary

Words from the first & current presidents

Past and future of Occupational Science・・・・・・・・・Tamako Miyamae

Occupational Science: Past and future・・・・・・・・・・Hiromi Yoshikawa

Messages of congratulations from the world・・・・・・・・・・

Reflection of past 20 years of Occupational Science Seminars in Japan

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Peter Bontje

Reflection of past 10 years of the Japanese Journal of Occupational Science

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Mami Aoyama

The 19th OS Seminar, Tsuyoshi Sato Memorial Lecture

Transition: contemplation through illustration of migration, education and work

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Eric Asaba

The 19th Occupational Science Seminar, Keynote Lecture

Living a meaningful existence in old age

・・・・・・・・・・・・・・Jeanne Jackson, Etsuko Odawara

Research Articles

The process of utilizing an occupation-centered education program

- A case study of a community-dwelling elderly woman-

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ayaka Ito

Occupational Justice and quality of life in occupational therapy students

- A questionnaire-based survey -

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Tadanori Imai

Short Report

The experience of being a teller in a story of playback theatre

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Aki Komori

Strategies for everyday life and the process to acquire them for adolescenes and young adults who have high function autism spectrum disorders

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Nanako Kamoto

Occupational Being・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Mayumi Murai

Information

The 20th Occupational Science Seminar abstracts・・・・・・・・・

巻頭言

発刊10周年に寄せて

近藤　知子

作業科学研究　編集委員長

「作業科学研究」は，2007年に第1巻が発刊され，本巻で10巻目となります．日本における作業科学は，故佐藤剛先生が1995年に南カリフォルニア大学のFlorence Clark先生とRuth Zemke先生を招聘して作業科学セミナーと全国研修会を開いたことから歩みを始めました．当初セミナーは，この学問に惹かれる人が一つの教室に集う程度の小さなものでした．しかし，2006年には日本作業科学研究会が発足し，現在では200人を超える会員を擁しています．毎年学術集会が開催され，ニュースの発行，研修会の企画・実施，電子媒体を使った情報の周知などを行うようになりました．本誌もまた，日本作業科学研究会の発足の翌年から，研究会の機関誌として10年間毎年発刊され続けています．

現在，作業科学を冠する学術誌は，世界で本誌以外にはJournal of Occupational Scienceがあるだけです．つまり，世界の中で，母国語で作業科学に関する知識を読み書きできる場は非常に限られているということです．本誌は，日本語以外での投稿を認めてはいるものの，主に日本語を母国語とする研究者や読者を対象とするものであり，日本独自の社会的文脈や文化的文脈にそって，作業や作業的存在の知識を発信したり，獲得したり，論じたりするための場としての役割を担っていると考えております．また同時に，邦文と英文が併記されている講演録や各論文の英文抄録を通し，日本の動向を世界に伝える橋渡しにもなっています．

私は，昨年より本誌の編集長として着任しました．編集の仕事は私にとって初めてのものでしたが，日本における作業や作業的存在に関わる学術的知識の生産・発信・普及に携わりたいという思いが，編集長を引き受ける動機となりました．先にも触れましたが，日本の作業科学は，この20年間，日本独自のあり方で発展しております．その特徴のひとつに，作業科学研究会に所属してくださっている会員多さ，そして，作業科学の知識を実践に役立てようと意識されている作業療法士の方の多さが挙げられます．これまでの編集委員長および編集委員方々が作り上げてくださったスタイルを足がかりにしつつ，このような日本の独自性を背景に，本誌が何を求められているのか，何をなすべきなのかを，７名の編集委員とともに模索しながら進んでいきたいと考えております．

10周年の記念として，初代会長である宮前珠子氏と現会長である吉川ひろみ氏による作業科学の振り返りと未来への展望を載せております．宮前氏は世界の作業科学の動向を多角的に捉えつつ，日本の今後の方向性に対する見解を記して下さいました．また，吉川氏は作業科学が包含するものとその影響を，ご自身の振り返りの中から記されています．お二人は，本誌の創刊号でも，作業科学の可能性についての思いを語ってくださっています（日本作業科学研究会のホームページから，閲覧していただくことができます）．二人の日本の作業科学のリーダーが，この10年間何を考え，そしてこれからの作業科学が何をなすべきだと考えてきたのか，是非読み比べて頂きたいと思います．

10周年を祝い，国際作業科学者協会(ISOS)，ヨーロッパ，カナダ，チリ，アメリカなどの世界の作業科学組織から祝辞をいただいております．それぞれの国・組織は，それぞれの歴史・社会状況・信念を反映しながら発展しています．作業と作業的存在のあり方は，国や文化を超えて重なり合う点があります．また，その重なり合う点を見据えるが故に見えてくる違いもあると考えます．自身の研究・臨床・生活の中にあらわれる価値観を理解するためには，目の前のことを見つめるとともに，自分を外から目を養う力も必要となるかもしれません．この機会を通し，多くの皆様に世界の作業科学の存在とその動きについて関心をもっていただければ幸いです．

本巻ではさらに，機関誌編集班のPeter Bontje氏ならびに青山真美氏による日本作業科学セミナー20年間の振り返り，本誌の10年間の振り返りを載せております．セミナーの振り返りでは，これまでのセミナーの開催地，開催年月日，実行委員長，テーマ，基調講演の題と講師の先生，演題数，参加者数等を掲載しております．また，本誌の振り返りでは，過去の論文数，論文のタイトル，キーワード，目的開催地，実行委員長，研究の種類，そこで用

いられている作業の視点等をまとめています．今後の作業科学の動向を見据えるために，また，作業科学研究の実施や論文執筆のためにお役立てください．

これに加え，通常巻と同様，前年度の作業科学セミナーのJeanne Jackson先生による基調講演を土台としたとJackson先生と小田原悦子先生の講演録とEric Asaba先生の特別講演録，また，2編の研究論文と2編の短報を載せております．今回のコラムは，作業療法アーティストのkoshikiさんです．

日本の作業科学が世界との交流を一層進めつつ次の10年に向けてさらなる発展を遂げ，これに際し，「作業科学研究」が作業科学発展のための学術的交流の場として，学術性を保ちつつも，多くの方々に興味を持っていただける雑誌となるよう努めて参ります．皆様方のご支援，ご協力をお願い申し上げます．

10 周年記念特集
初代・現日本作業科学研究会会長のことば

作業科学の振り返りと今後の展望

宮前　珠子

初代日本作業科学研究会会長　聖隷クリストファー大学

「人間は作業的存在である」という中心的概念のもと，作業科学は「作業の形態（form），機能（function），意味（meaning)」を研究する基礎社会学領域の学問として1989 年南カリフォルニア大学 (USC)」に誕生した．「心理学が行動に，社会学が社会組織に，文化人類学が文化に焦点を当てるように，作業科学は作業に焦点を当てる学問」とする壮大な考えのもとに始まったのである．その後，「作業科学 (OS) は作業療法 (OT) を助けるものとならない」とする Mosey との論争を経て，1993 年に「OS は基礎科学であると同時に応用科学」であり，作業に関する研究は全て OS であると再定義された[1]．

2005 年 F.Clark[2,3] は，OS 誕生 16 年を振返る講演を行い，存亡の危機に瀕した 2 つの学問の振返りから，「これまで順調に発展してきた OS が引続き繁栄するためには，時代と環境の変化に対応し続けなければならない．OS の存続を可能にする要因は，「知的バイタリティ，学生を惹きつける能力，強い財政基盤，肯定的政治状況」である．OS が活動的，健康であるためには OS 論文が新しい博士号取得者によって指数関数的に増えなければならない．これまで量的論文よりも質的論文が多く発表されているが，世界的な研究社会のゴールドスタンダードを考えると，多人数対象の「量的研究」を生産することが重要である」と述べた．そして最後に，「OS 研究の OT へのエビデンス提供→OT 需要の増加→OT コースへの入学者増加→財政基盤の強化→OS 研究の基盤強化」という OS と OT の再生産サイクルを図示した．

このような考えがある一方，OT 研究と OS 研究の間に線を引く立場もある．

Journal of Occupational Science の編集者であるニュージーランドの C.Hocking(2010)[4] は，第 14 回 OS セミナーで講演し，OT 研究と OS 研究の違いについて，前者は，「OT，クライエント，学生」が参加者で，「治療関係，評価ツール，介入効果」について研究するのに対し，OS 研究では，「健康状態にある人とそうでない人」が参加者で，「日常作業」が研究テーマであるとし，基礎科学としての立場を守ろうとしているように思われる．OT に密着した発展を目指している米国とは OS の定義が異なり，医療・教育制度の違いが OS 研究の考え方にも反映していることが伺われる．

OS が OT の世界で正式に認知されたことは，OT 教科書のバイブルである Willard & Spackman's Occupational Therapy[5] に章として取り上げられたことから明らかである．その変遷をみると，2003 年に出版された第 10 版では第 2 章として OS が 12 頁にわたって解説され，第 11 版 (2009) では第 1 部の 1 章から 9 章までの 96 頁が「OS と人の作業的本性」となり，OT の枠組み全体の説明に OS という用語が用いられている．一方，第 12 版 (2014) では，第 7 章「作業科学―作業の研究」というタイトルのもと 11 頁が割かれるのみとなり，OT 実践に対する OS の量的研究の重要性を強調するものとして，脊髄損傷者の褥瘡に対する OS 的アプローチと従来型アプローチの比較など，対照群をおく3つの数百人単位の研究が紹介されている．これは先に F.Clark が示した量的研究への価値付けと一致し，OT へのエビデンス提供にエネルギーが傾注されていることを示すものと考えられる．

このような OS の方向性の差異や変化にどのような背景があるのか確たることは不明であるが，OS はそれぞれの国情や時代に対応して，自由度と柔軟性を持って生き残りと発展の道を探っているように思われる．それでは，我が国の OS はどうであろうか？

1989 年 USC に OS が誕生して 27 年，1995 年佐藤剛氏が F.Clark 氏を招き札幌で第一回 OS セミナーを開催して 21 年，2002 年暮れに佐藤剛氏が急逝され，2006 年日本 OS 研究会が発足して 10 年が経った．毎年 OS セミナーが開催され 200 名前後の参加者を集め，2007 年 12 月に発刊された「作業科学研究」は昨年で 9 冊になった．

数では，最近のセミナーの一般演題数は 10 題前後，「OS 研究」9 冊に発表された研究論文は実践報告を含めて合計 14 編と少なく，英文添付，OS 研究としての採択基準の分かり難さなどが敷居を高くしているのではないかと思わせられる．一方，「作業療法概論」「基礎作業学」の教科書最新版を見てみると，日本 OT 協会のものは索引に作業科学という用語もなく，医学書院のものは用語のみ，メディカルビュー社のもののみ，少々内容まで踏み込んで OS が取り上げられていた．OS とは何かを研究会でわかりやすく定義し広く伝える必要があるように感じられた．他方，日本 OT 協会が，OT 起死回生の策として打ち出した「生活行為マネジメント」の中心概念は「人間は作業的存在である」であり，OS の中心概念と一致する．我が国で現在ほど OS 的研究を推進し OT にエビデンスをもたらすことが求められている時はこれまでなかったように思われる．現在我が国の OS 学者に求められるのは，F.Clark が示した OT と OS の再生産サイクルの実現ではないかと思われる．

文献

1. Clark, F.，宮前珠子：作業的存在としての人間を研究する作業科学．OT ジャーナル 34(12):1157-1163, 2000.
2. Clark, F.：One person's thoughts on the future of occupational Science. Journal of Occupational Science 13 (3):67-79, 2006.
3. 宮前珠子：作業科学の系譜と今後の発展．作業科学研究 2(1):2-6, 2008.
4. Hocking, C.：作業科学研究の現在と未来．作業科学研究 5(1):14-30, 2011.
5. Willard & Spackman's OT：Lippincott, Williams & Wilkins．10, 11, 12ed., 2003, 2009, 2014.

10 周年記念特集
初代・現日本作業科学研究会会長のことば

作業科学：振り返りと展望

吉川ひろみ

現日本作業科学研究会会長　県立広島大学

Occupational science（作業科学）の文字を最初に見たのは 1991 年．職場の毎週の文献抄読会の準備で，American Journal of Occupational Therapy を読んでいたときだった．Academic discipline（学問）という言葉が，遠く澄ました感じがした．1992 年にウェスタンミシガン大学に留学して，授業の課題で Elizabeth Yerxa の論文や Ann C. Mosey の論文を読んだ．作業療法の基盤となる知識を提供する作業科学を創設する必要性を訴える立場と，作業療法は応用科学だから，多様な学問領域の知識を使うのであって作業療法独自の基礎学問など必要ないという立場があることを知った．私も最初は，作業療法の基礎研究として日本で行われていた研究（健常者の指腹に圧センサーをつけてマクラメするとか）を思い出して，作業科学に対してあまり興味がなかった．そうでなくても作業療法研究が少ないのに，実践に役立たない研究を作業療法士がするのはやめてほしいと思った．Mosey が言うように，作業療法と離れて作業科学を学問として発展させたいなら，どうぞやってくださいという感じだった．1993 年に帰国して Florence Clark の講演録を読んだ．40 代で脳卒中になった大学教授が障害者としてではなく，文学好きの女性ペニーとして再生する物語だった．私が作業療法士になってから 10 年間身をおいていた「リハビリテーション」に対する懐疑心が煽られる内容でもあった．留学中に倫理学の授業を受けたり，Clark の論文に引用されていたロバート・マーフィが書いたボディ・サイレントの翻訳を読んだり，1995 年に赴任した現在の職場で始めた倫理研究会の活動が，私の作業科学への興味をつないでいると思う．

作業科学を知ってよかったと思うのは，現象学や言語学といったそれまで読むことがなかった本を読むようになったことだ．私が存在している世界を私がどう認識しているかを，注意深く問い直すことで，いろいろな現象をうまく理解できるようになったと思う．無意識な自分の認識，思い込みや偏見や自分が考える「普通」を，意識化することができる．言語学を知っている人には当たり前のことらしいが，シニフィアン（言葉そのもの）とシニフィエ（言葉の意味）を区別することや，話し言葉（パロール）と書き言葉（エリクチュール）を区別することを知ったときは，便利なことを知ったと得をした気持ちになった．文化人類学のエティック（行為）とエミック（行為の意味）の区別も同様だ．私が作業科学と出会った初期の頃は，作業科学を入り口に，いろいろな学問がもっている，世界を理解するための便利な概念を知ることができる喜びを感じていた．

その後，作業科学は作業療法とのつながりを深めていったような気がする．Clark が基礎科学と応用科学を区別するよりも，科学的知識を実際の社会に役立つようにする橋渡し科学（translational science）が重要だと主張したことも，この傾向が強まったのだと思う．日本では，最初から「作業科学をどう作業療法に生かすか」という議論が盛んだったように思う．こうした議論に対して，私は違和感をもっていた．作業療法の発展には作業療法の知識と技能を身に付ける努力をするべきだと思うからだ．

作業科学にも参加しているカナダの作業療法士である Elizabeth Townsend と Helene Polatajko は，私の作業療法の考え方や実践に大きな影響を与えている．作業を大事にする真の作業療法を追求する上で，この人たちの主張はとても役立っている．オーストラリアの Alison Wicks は，大学院で Anne Wilcock に出会って，作業科学に感染してしまったと言った．公衆衛生的規模で作業の活用を考える視点は，私の活動に影響を与えた．Wicks の作業レンズを通して世界を見るという考えは，真の作業療法実践の方法を追求している Anne Fisher の心も動かしたようだ．最近は，「作業中心の実践（occupation-centered practice を）」と言っている．

作業科学には，大きな可能性があると思う．作業的公正（occupational justice）は，作業科学が生み出した重要な概念で，社会的公正（social justice）と共に，何が

なぜ公正だと考えられるのかについての熱い議論が続くことを期待する．学問は，権威者から与えられるものではない．自然界で突然見つかるものでもない．学問の終わりは見えないが，目指す方向に向かって進み続ける必要がある．作業を知ろうとする態度，作業を知るために取り組む研究が増えることで，作業科学が，今後も発展し続けることを期待したい．

国際作業科学協会

国際作業科学協会から*作業科学研究* 10 周年記念にむけてのメッセージ

*作業科学研究*の 10 周年記念に対し，国際作業科学協会 (ISOS) より心からのお祝いを申し上げます．過去 10 年間，*作業科学研究*は，日本や世界で増え続けている作業科学者や作業療法士に対し，学術研究や特集記事を掲載し，作業の理解や知識を増し続けてきました．

ISOS の使命は，「作業の研究と教育に対する個人や組織の世界的ネットワークの構築を促進する…」(www.isoccsci.org) ことですが，この使命のもとに，これからの 10 年，そしてそれ以上の期間も，*作業科学研究*を支持し，支援するよう努めます．

ISOS は，*作業科学研究*が成長し続け，国際的な作業科学の発展に貢献することを確信しております．作業科学が真に国際的，学際的なものとして確立していくためには，多様性の理解や，日本からのような文化相互間の視点は，単に重要であるというだけでなく，必要不可欠なものです．

*作業科学研究*の成し遂げた重要な成果は，誇りを持つに値するものです．

誕生日おめでとう！

国際作業科学協会理事
Rebecca Aldrich
Susan Forwell
Suzanne Huot
Tomoko Kondo
Alison Wicks

International Society for Occupational Science

Message to JJOS from ISOS for its 10th anniversary

The International Society for Occupational Science (ISOS) sends heartfelt congratulations to the Japanese Journal of Occupation Science (JJOS) on its 10th anniversary.

For the past 10 years JJOS has been increasing knowledge and understanding about occupation by disseminating scholarly research and feature articles to a growing population of Japanese and international occupational scientists and occupational therapists.

As the mission of ISOS "is the facilitation of a world-wide network of individuals and institutions committed to research and education on occupation …" (www.isoccsci.org), ISOS will endeavour to support and promote JJOS as much as it can and looks forward to working together over the next 10 years.

ISOS is confident that JJOS will continue to grow and to contribute to the development of occupational science internationally. Diverse understandings and cross-cultural perspectives such as those from Japan are not only valued but also essential, ensuring that occupational science does become truly international and interdisciplinary.

JJOS deserves to be very proud of its significant accomplishment. Happy Birthday!

The ISOS Board
Rebecca Aldrich
Susan Forwell
Suzanne Huot
Tomoko Kondo
Alison Wicks

アメリカ作業研究協会

日本作業科学協会理事ならびに*作業科学研究*編集者の皆さんへ

アメリカ作業研究協会を代表し，日本作業科学研究会（JJSO）の理事ならびに会員，そして *作業科学研究* の現編集委員並びに前編集委員の方々に，10 年間作業科学の研究を促し，出版し続けたことへのお祝いの言葉を述べることを大変光栄に思っております．私たちの科学の発展のためには研究を発信できる複数のルートを持つことが不可欠です．過去 10 年間，*作業科学研究*ならびに日本作業科学研究会は，自らの論文や考えを他国の学者と共有する重要な機会を提供してきました．

作業科学の各組織は，私たちが生み出してきた作業科学の産物の中に，作業療法と作業科学の学問を設立したパイオニアが残した共通の足跡をなぞることができます．作業科学の博士号を作り上げた南カリフォルニア大学の Elizabeth Yerxa 氏，Florence Clark 氏，Ruth Zemke 氏，その他の教員，学生など，創立時の学者達は，作業の厳密な科学的探求のための基盤を作り上げました．Zemke 博士と Clark 博士は，日本での講演，相談，初の作業科学博士号プログラムでの教鞭のために招聘され，日本の作業科学の発展に寄与しています．これを土台とし，日本の学者は，驚くべきペースでこの学問を成長させてきました．

この領域は，札幌医科大学の佐藤剛先生のように，世界で生まれている作業の研究に触発された先見の明のあるリーダーを通じて成長を続けています．先生は，日本が文化的，国際的，学際的共同作業から利益を享受できるよう，作業科学の種を植え，育てました．このような共同作業は，私たちの使命が，作業の理解が人間の発達と繁栄を支えるものであることを再認識させてくれます．

JSSO によって成し遂げられ，*作業科学研究* によって発刊された数多くの共同作業は，作業科学の発展に貢献するものです．これ以外の交流に，JSSO の会員が，アメリカで毎年開催されるアメリカ作業研究会の学会に，定期的に参加し，研究発表するという貢献もあります．私たちリーダーは，国際共同学会の可能性についても探っています．このような交流は，作業科学の継続的成長を約束するものだと言えます．

日本における組織と雑誌の誕生からの 10 年は，大変豊かなものであり，作業科学の未来が大変明るいことを示しています．私たちは，これからの共同作業が，明るい未来の構築をどのように支え得るかを楽しみにし，また，この記念すべき年が素晴らしいものであることを祈っております．10 年の記念すべき年，そして，今年の学術集会でお会いする際の皆さんのますますのご清栄に祝杯をあげます．カンパイ！

お祝いを込めて
John A. White, Ph.D., FAOTA, OTR/L
前アメリカ作業研究協会会長 (2010-2014)
JSSO 第 18 回作業科学セミナー基調講演講師

SSO:USA
Society for the Study of Occupation:USA

To the officers of JSSO and editors of the JJOS,

It is with a deep honor that I represent the Society for the Study of Occupation: USA to offer our sincere congratulations to the officers and members of the Japanese Society for the Study of Occupation and to current and past editorial staff of the *Japanese Journal of Occupational Science* to celebrate ten years of promoting and publishing occupational science research. It is critical to the development of our science that there are multiple channels for research dissemination. For the past decade, *JJOS* and JSSO have provided important opportunities for international scholars to share their work and ideas.

Our Societies trace a common heritage for our work in occupational science to the pioneers who first established the disciplines of occupational therapy and occupational science. Founding scholars who established the PhD in occupational science, Elizabeth Yerxa, Florence Clark, and Ruth Zemke, and faculty and students at the University of Southern California created a foundation for a rigorous scientific exploration of occupation. Drs. Zemke and Clark contributed to the development of occupational science in Japan when invited to speak, consult, and teach in the first Japanese PhD program in occupational science. From that foundation, Japanese scholars have cultivated the discipline's growth at an impressive pace.

The field continues to grow through visionary leaders inspired by the early work in the study of occupation around the world such as the late Professor Tsuyoshi Sato of Sapporo University. He nurtured occupational science in Japan to benefit from cultural, cross-national, and cross-disciplinary exchange. These collaborations assure that our missions are realized as the understanding of occupation serves human development and flourishing.

Collaborations support contributions to occupational science made by the JSSO and how many of those are published in the *JJOS*. In other exchanges, JSSO members regularly contribute to the SSO:USA annual research conference and published research. Our leaders are exploring a possible joint international conference. These interactions promise continued growth of occupational science.

The rich first decade of the Japanese Society and Journal promises a future of occupational science that is very bright. We look forward to how future collaborations can help build that bright future, and we wish you an exciting year of celebration. We shall raise a toast to your 10th anniversary and your continued success when we meet for our research conference this year, Kanpai!

With congratulations,

John A. White, Ph.D., FAOTA, OTR/L
Former Chair, SSO:USA Board of Directors (2010-2014) & Keynote Lecturer JSSO-18th Occupational Science Seminar

カナダ作業科学協会

作業科学研究 10 周年へのメッセージ

カナダ作業科学者協会（CSOS）は，2001 年に創設され，カナダ国内外における作業科学の成長を育成してきました．これまで 15 年以上にわたり， 作業の学問性を育て， 大学院生への機会を拡大し， 政治， 公共， 学問領域における作業の気づきを促進するために， 複数のことをスタートしてきました． 例えば， カナダにおいて学者と学生が出会い作業科学コミュニティーを作るために， 作業科学シンポジウムを 5 回開催しております． また， 国際的連携と学問の育成の手段として， アメリカ作業研究会（SSO:USA）や国際作業科学協会 (ISOS) との合同シンポジウムにおいて， リーダシップの役割を取っています． 2009 年には， カナダ作業療法士協会（CAOT）とのパートナーシップを構築し， 作業科学者と作業療法士の知識の交換のためのシステムができたことで， カナダ作業療法学会に作業科学の流れを作り出しています．創立に貢献した Townsend と Polatajko の名前を冠した賞が 2008 年より作られ， これまでに5名が受賞し講演を行っています． 作業科学の学問の継続的発展と普及を支援するため， 2012 年には， 学生メンバーの無料化， C SOS 活動への学生の積極的包含など， 学生のための特典を開始しました． 今後行うものとして焦点を当てているのは， 社会メディアを用い，社会にとってわかりやすい存在となることです． また，カナダ全土，そして世界の両方の側面においてより広く繋がっていくために， 作業科学と作業科学者をプロファイリングします． CSOS を代表とし， 私たちは *作業科学研究* に 10 周年の区切りを心からお祝い申し上げます． これからもより深く協力していくことを楽しみにしております．

Linna Tam-Seto
カナダ作業科学者協会， 代表責任者
https://sites.google.com/site/occupationalsciencecanada/

Canadian Society of Occupational Scientists

Message to JJOS for its 10th anniversary

Since its inception in 2001, the Canadian Society of Occupational Scientists (CSOS) has fostered the growth of occupational science within Canada and more broadly. Over its 15 years of existence, it has enacted several initiatives to foster scholarship on occupation, enhance graduate student opportunities, and promote awareness of occupation within policy, public and academic arenas. For example, it has hosted five Canadian Occupational Science symposia which served to build an occupational science community by connecting academics and students from across the country. As well, it has played a leadership role in joint symposia with the Society for the Study of Occupation: USA and ISOS as a means to foster international linkages and scholarship. It established a partnership in 2009 with the Canadian Association of Occupational Therapists (CAOT) to create an Occupational Science stream at the CAOT conference, creating a mechanism for knowledge exchange amongst occupational scientists and occupational therapists. To honour its key founders, the Townsend and Polatajko lectureship was established in 2008, with five lectureships awarded to date. It has also supported the continued development and dissemination of occupational science scholarship through launching a student award in 2012, offering free student memberships, and actively including students in CSOS activities. Future initiatives will focus on enhancing the visibility of the society through social media strategies. We will be profiling occupational science and scientists as we look to connect more broadly both across Canada and the globe. On behalf of CSOS, we extend to the Japanese Journal of Occupation Science (JJOS) our heartfelt congratulations on the milestone of your 10th anniversary. We look forward to greater collaborations in the future.

Linna Tam-Seto
Executive Director, Canadian Society of Occupational Scientists
https://sites.google.com/site/occupationalsciencecanada/

チリ作業科学協会

日本の皆さんへ

チリ作業科学協会を代表し，*作業科学研究* の 10 周年が記念すべきものであることを願っております．そして，皆さんの雑誌が，私たちの学問の成長に貢献するような批判的で思慮深い考えを発展させ続けていくこと，そしてすべての地域やこれから開拓する新しい領域において，私たちの専門性を広げて続けていくことを祈っております．

科学論文を書くことは，専門職の発展のために無償でしかも利他的であることを意味し，しばしば，個人的な時間などは「存在しない」かのように時間を使う，大変な仕事です．皆さんにとってもこれは同じでしょう．しかし，すでに皆さんが，その努力を実りあるものとして受け止めているだろうことも信じております．

Rodolfo Morrison, OT, PhD
チリ作業科学協会理事
チリ大学作業療法学部

皆さん

私は，チリのサンチアゴで教育をうけた作業療法士として，人生の意味に対する哲学的省察として，ならびに，作業療法介入の構築と実践の基盤として，作業の研究に興味を持ち始めました．

全ての知識は，ある歴史的な現実の中に位置づけられています．それゆえ，私は，世界中の作業研究の成長に興味を持っています．特に，私は，正式に誕生した国から離れた地域で出現している学問の発展に興味を持ち，これを必要不可欠だと考えています．日本は，作業科学の考えを取り込み，熱意と真摯な姿勢をもって研究を進めるそのような国の一つとして挙げられます．

アイデアの多彩な表出と発展から，作業の研究に興味をもつ世界中の人々の作るコミュニティが利益をうけることができます．日本の作業科学者が，作業科学の知識を*作業科学研究*に発表することで世界に広く知らしめようとする望みが，このような興味に応じる素晴らしい例です．私は世界作業療法士連盟の理事であり，後にその役員の一人となりましたが，その際に日本を訪ね，作業科学に対する皆さんの熱心な取り組みを見ることができました．

この場所を借り，作業科学の 10 周年記念のお祝いを申し上げます．

Enrique Henny
作業療法士
前世界作業療法連盟チリ代表 Occupational Therapist
前世界作業療法連盟副会長

Sociedad Chilena de Ciencia de la Ocupación

Dear colleagues of Japan

On behalf of the Chilean Society of Occupational Science, we would like to wish you all a beautiful celebration on the tenth anniversary of the Japanese Journal of Occupation Science. We hope your journal continue to develop a critical and reflective thinking that contributes to the growth of the discipline and continue to expand our profession in all the different and emerging areas in which we perform.

We know that sometimes the work of a scientific journal is difficult because it involves allocating personal time that sometimes "does not exist" which denotes a selfless and altruistic work for the development of a profession. I imagine that this has happened in your case and I am sure you have already received the fruits of your efforts.

Rodolfo Morrison, OT, PhD
Chilean Society of Occupational Science Board member
Occupational Therapy and Occupational Therapy Department, Universidad de Chile

Dear Colleagues,

As an occupational therapist trained in Santiago de Chile, I became interested in the study of the occupation, as philosophical reflection on the meaning of human life and as a basis for the construction and practice of occupational therapy interventions.

It is known that all knowledge is located in a particular historical reality and therefore I am interested in the growing number of occupation studies around the world. In particular I find interesting and essential those developments that appear in parts of the world away from the ones that formally give birth to the discipline. Japan is an example in the world to embrace the idea of Occupational Science and pursue this study with enthusiasm and seriousness.

I think the world community of people interested in occupation studies, benefit from the diverse expressions and developments of ideas. A beautiful example of this interest is the wish of occupational scientists in Japan to universalize the knowledge of occupational science, publishing the Japanese Journal of Occupation Science (JJOS). While I was representative of Chile and later a member of the World Federation of Occupational Therapists executive committee, I had the pleasant opportunity to visit Japan, and perceive your commitment to Occupational Science.

On this occasion I greet with affection the JJOS on its tenth anniversary.

Enrique Henny
Occupational Therapist
Former Chilean Delegate to WFOT
Former WFOT Vice President

作業科学ヨーロッパ

作業科学ヨーロッパは *作業科学研究* 10 周年記念にお祝い申し上げます

作業科学（OSE）ヨーロッパは，作業科学に興味を持つ人々が，考えを交換し，知識を発展させ，連絡を取り合うためのネットワークです．作業科学は「人間作業についての知識を生み出し，日々の生活において人がすること，そしてこれらの作業が健康，ウェルビーング，自らの環境にどのような影響を及ぼすかを研究するものです」（世界作業療法士連盟，2012. 作業科学に関する声明文）．

***OSE* の目的**

ヨーロッパの作業科学の発展を支援します．作業科学に興味をもつ全ての人々に対し対応するコミュニティであることを目的とします．多くの学術背景を積極的に包含します．オープンメンバーシップであり，無料で，正式な登録過程を踏む必要はありません．
ニュース，情報，研究，機会，他のサイトへのリンク，討論を共有するために，無料でオンライン資料を提供します．また，ヨーロッパにまたがる作業科学学会を 2 年に一度開催します．

***OSE* の目標**

●作業科学の学問をヨーロッパに広めます
●作業科学に興味を持つヨーロッパの全ての人を代表します
●作業科学に興味をもつ研究者，学生，実践者，その他の人々の成長を促進します
●作業療法実践の土台となる作業の治療的可能性の知識と理解を増加します

作業科学学会

第 1 回目は，2011 年にイリギリスの Plymouth 大学で，2013 年にはアイルランドの Cork 大学で，2015 年はイギリスの Bournemouth 大学で開催されました．次回は，2017 年にドイツの Hildesheim にある HAWK 大学で開催を予定しています（Hildesheim/Holzminden/Göttingen）

開催日：2017 年 8 月 9 日
下記のメールリストに登録すると情報をアップデートできます．
ose-conference2017.elp@hawk-hhg.de

OSE 代表

Dr Anne Roberts，作業科学ヨーロッパ会長

OSC 広報活動

E-mail - occupationalscienceeurope@gmail.com
Blog - http://occupationalscienceeurope.wordpress.com/
Twitter - @OSeurope https://twitter.com/oseurope
Facebook - http://www.facebook.com/OSEurope
LinkedIN – Occupational Science Europe https://www.linkedin.com/groups/4119167

Occupational Science Europe extends greetings to the Japanese Journal of Occupational Science on the celebration of your 10th anniversary.

Occupational Science Europe *is a network for people interested in exchanging ideas, developing the knowledge base and keeping in touch with colleagues with an interest in occupational science. Occupational science "generates knowledge about human occupation. It studies the things that people do in their everyday lives and how those occupations influence and are influenced by health, wellbeing and their environments" (World Federation of Occupational Therapists, 2012. Position statement on occupational science).*

Aims of OSE

To support the development of occupational science throughout Europe. It aims to be a vibrant community for all people with an interest in occupational science. It actively encourages the involvement of many disciplines. It has open membership, is free of charge and has no formal registration process.

To provide freely available on-line resources for sharing news, information, research opportunities, links to other sites and discussion. It also holds an occupational science conference once every two years in venues across Europe.

Objectives of OSE

- Promote the discipline of occupational science throughout Europe
- Represent all persons interested in occupational science from throughout Europe
- Promote the development of researchers, students, and practitioners and others who are interested in occupational science
- Further knowledge and understanding of the therapeutic potential of occupation, to underpin occupational therapy practice.

Occupational Science conferences

The inaugural conference was held at Plymouth University, UK in 2011. The 2013 conference was held at the University College Cork, Ireland. The 2015 conference was held at Bournemouth University, UK and the next conference will be held in Germany in 2017, in Hildesheim at HAWK University of Applied Sciences and Arts Hildesheim/Holzminden/Göttingen in cooperation with Alice Salomon Hochschule Berlin

Save the Date: 8/9 September 2017:

Keep yourself updated by subscribing to our mailing list:

ose-conference2017.elp@hawk-hhg.de

We have regular virtual meetings of the Executive Board and a developing Research Committee, as well as a Conference committee. The Linked-In group provides a forum for discussion. We would love to maintain ongoing contact with you and would welcome any discussion around this.

On behalf of OSE:

Dr Anne Roberts, Chair of Occupational Science Europe.

Media activity of OSE

E-mail - occupationalscienceeurope@gmail.com

Blog - http://occupationalscienceeurope.wordpress.com/

Twitter - @OSeurope https://twitter.com/oseurope

Facebook - http://www.facebook.com/OSEurope

LinkedIN – Occupational Science Europe https://www.linkedin.com/groups/4119167

作業科学セミナー 20 年の振り返り

ボンジェ・ペイター

作業科学研究編集部

機関誌「作業科学研究」は，日本作業科学研究会の設立なしに存在していないだろう．また，作業科学セミナー（以下，OS セミナー）の諸講演に基づいた論文，及びシンポジウム・ワークショップ・演題の諸発表の抄録は，「作業科学研究」に不可欠な一部となっている．したがって，「作業科学研究」の 10 周年の記念には OS セミナーの 20 年の振り返りなしでは語れない．本文の目的は，これまで行われた 20 回 OS セミナーに関する情報のリソースを提供することである．また，日本で作業科学の導入と普及のための見識を提案することを目的とする．最後に，第 1 回から第 20 回までの OS セミナーの史実的記録は，将来の作業科学と作業科学的な研究の進展の参考になるだろう．

第 1 回 OS セミナーは，1995 年に作業科学を導入した目的で開催された．3 年後に開催された第 2 回 OS セミナー以来，OS セミナーは毎年開催されていた．当初の OS セミナーは，新しく設立された札幌医科大学大学院作業療法学分野大学院課程の一部として（故）佐藤剛先生によって準備された．ただし，佐藤剛先生の衝撃的な早死の後に，常時参加していた者が日本への作業科学の振興を促進し，OS セミナーに参加する人々をより多くするために，OS セミナーを全国で開催すべきであると決定した（参考：表 1）．第 8 回から現在まで OS セミナーは日本各地で開催された．しかし，未だに日本海側，福島を除く東北地方，四国では開催されていない．

参加者は札幌医科大学時代の OS セミナーの最大約 50 名から，現在は約 200～250 名まで増加した．初めて演題発表が行われた第 5 回 OS セミナーでは，5 演題であったが，その後は約 15 演題まで徐々に増加した（参考：表 1）．佐藤先生が（2002，pi）指示した通りに，第 4 回までは作業の科学的，学問的発展に向けての研究理念・分野及び研究法についての講義を中心として進められた．第 5 回からは 作業科学関連研究者の発表や講演に重点をおき，さらなる発展に向けて船出することとなったと言えるだろう．

次は，諸講演，シンポジウム，ワークショップの内容からOSセミナーを検討する（参考：表2-3）．まず，OSセミナーの諸講演とその他のプレゼンテーションでは，OS が公正なインクルーシブ社会，人間の発達，健康・幸福と作業の関係性を理解したり促進したりしようとする学問であること，作業療法の実践に密接な関係があることを反映している．第 2 に，科学的議論に不可欠な国際的な文脈であるため，各 OS セミナーでは，1 つ以上海外の学者のプレゼンテーションを提供している．第3に，各OSセミナーは，作業科学が複数の科学分野から構築されていることを反映したり，枠にとらわれない考え方を促進したり，それらを刺激するため，革新的な視点をもつ作業療法士以外・作業科学者以外から一人以上のプレゼンテーションを提供している．最後に，第11回OSセミナーから設定されたテーマ，

表1. OSセミナー：開催概要

	開催地	開催年月日	世話人代表	主な内容	演題の数	参加者の数
第1回	札幌市	1995年12月13-15日	佐藤剛	作業科学の紹介	該当なし	不明
第2回	札幌市	1998年7月19-21日	佐藤剛	日本作業療法のための作業科学の開発	該当なし	約25名
第3回	札幌市	1999年7月17-19日	佐藤剛	作業：作業科学と作業療法の芯	該当なし	約40名
第4回	札幌市	2000年7月20-22日	佐藤剛	健康の作業的な視点	該当なし	約47名
第5回	札幌市	2001年7月20-21日	佐藤剛	USCにおける動向と日本の将来展望，医療人類学の立場からみた作業科学	8	46名
第6回	札幌市	2002年7月26-28日	佐藤剛	人類学と作業科学，国試的作業科学	7	約47名
第7回	札幌市	2003年8月22-24日	青山宏	日本と国際の作業科学の展望	5	約37名
	開催地	開催年月日	実行委員長	テーマ		
第8回	三原市	2004年11月19，20日	吉川ひろみ	該当なし	6	約80名
第9回	浜松市	2005年12月3，4日	宮前珠子	該当なし	5	103名
第10回	茨木市	2006年12月2，3日	ボンジェペイター	作業と可能性	8	約150名
第11回	倉敷市	2007年12月1，2日	港　美雪	“作業”を世の中へ　作業を捉え，深め，生かし，見えるものへ	11	約160名
第12回	東京都	2008年11月22，23日	西野歩	作業を考える第一歩	11	334名
第13回	福岡市	2009年11月22，23日	村井真由美	作業科学の和と話と輪　～作業がつなぐ人・明日・可能性～	9	236名
第14回	那覇市	2010年12月11，12日	村上典子	結ーゆいー　～作業の花を吹かせましょう～	6	約240名
第15回	三原市	2011年9月24，25日	吉川ひろみ	作業科学と社会	7	183名
第16回	札幌市	2012年7月15，16日	坂上真里	作業科学からの架け橋　～作業療法へ，学際領域へ，そして未来へ～	14	202名
第17回	郡山市	2013年11月30日，12月1日	齋藤佑樹	作業科学からのメッセージ	11	245名
第18回	宇部市	2014年11月15，16日	渡辺慎介	作業科学とリーダーシップ	15	約180名
第19回	浜松市	2015年11月28，29日	小田原悦子	Transition：人々の生活・人生における移行と作業	12	214名
第20回	東海市	2016年12月3-4日	堀部恭代	社会の課題を作業のレンズで捉える	16	230名（メド）

諸講演や諸プレゼンテーションのタイトルは，作業科学の導入と開発から，公正なインクルーシブ社会や作業療法における作業の力，及び作業と人間の健康・幸福の関係性など，実質的な課題への変更にまで広がり，OS セミナーが変わり続けていることを示唆している．よって，これは成熟した学問分野に発展している作業科学の現状を反映しているといえるだろう．

表2．各OSセミナーの講演者，講演のタイトルなど

	ファシリテーター	主な内容	
第1回	Florence Clark	作業科学の紹介	
第2回	Ruth Zemke	日本作業療法のための作業科学の開発	
第3回	Florence Clark	作業：作業科学と作業療法の芯	
第4回	Ann Wilcock & Ruth Zemke	健康の作業的な視点	
	講演者	タイトル	講演の種類
第5回	Ruth Zemke	USCにおける作業科学研究の動向と日本における作業科学研究の将来展望	講演
	波平恵美子	医療人類学の立場からみた作業科学への提言ー質的研究をめぐってー	特別講演
第6回	Ruth Zemke	国際的な作業科学	講演
	松岡悦子	文化人類学と作業科学	講演
	道信良子	医療人類学と作業科学	講演
第7回	Ruth Zemke	国際的な作業科学の開発	特別講演
第8回	Ruth Zemke	時間と場所と作業	佐藤剛記念講演
	山田孝	日本作業行動研究会が作業療法に与えている影響	講演
	岡本珠代	インフォームド・コンセントと作業療法	講演
	ピーターハウエル他	国際的ネットワーク構築における翻訳の問題ー翻訳についての一般的な三つの指摘ー	講演
第9回	吉川ひろみ	作業とは，何で(form)，何の役に立ち(function)，とのような意味があるのか(meaning)？	佐藤剛記念講演
	Ruth Zemke	作業科学の過去，現在，未来	基調講演
	鷲田孝保	作業療法のナラティブとドラマ性	特別講演
第10回	小田原悦子	佐藤先生とともに出発した日本の作業科学：将来に向かって我々はどう引き断ぐか？	佐藤剛記念講演
	近藤知子	作業科学とは何か	教育講演
第11回	宮前珠子	作業科学の系譜と今後の発展	佐藤剛記念講演
	Alison Wicks	メインストリームへ：作業科学を見えるようにすること	招待講演
	中谷文美	仕事もみえない仕事～仕事への文化人類学的アプローチ～	テーマ講演
	浅羽エリック	ナラティブを通しての作業の探究	テーマ講演
	Ruth Zemke	健康高齢者研究は続く	テーマ講演
第12回	中村春基	作業を行っている患者さまは元気ーそのためには，作業療法士は何をすべきかー	佐藤剛記念講演
	Staffan Josephsson	Astridと桜の木：作業がもつ変化を起こす力（transformative）についての考察	特別講演
	齋藤さわ子	生活や健康を作業科学の視点で考えてみる	教育講演
	岡本株代	なぜ私たちはクライエントに説明するのか	特別講演
	西野歩	作業を考える第一歩	総括
第13回	港美雪	どのように働くことが健康を促進するのかー作業に関する社会的問題解決に向けた提案と実践ー	佐藤剛記念講演
	Jin-Ling Lo	作業科学のプロモーション	特別講演
	松谷久徳，福田久徳	はじめての作業科学～初心者向けへ～	教育講演
第14回	村井真由美	作業の知識を活かすこと，産み出すこと～1人の作業療法士の経験から～	佐藤剛記念講演
	Clare Hocking	作業科学における現状と未来	招待講演
	津波高志	文化を捉える視点ー沖縄・済州島の事例を中心にー	特別講演
	高木雅之	作業に焦点をあてた地域プログラムと教育の実現に向かて	研修伝達講演
	吉川ひろみ	私の作業科学	教育講演
第15回	近藤敏	我，作業する，ゆえに我あり	佐藤剛記念講演
	Gail Whiteford	作業と参加とソーシャルインクルーション	基調講演
	岡本三夫	平和学ーその成立と展望	特別講演
	高木雅之，つくろう三原のメンバー	自分と社会のためにできること	市民公開講座
第16回	近藤知子	作業がつなぐ過去・現在・未来：障害を超えて生きるということ	佐藤剛記念講演
	Doris Pierce	作業科学の構築	基調講演
	道信良子	ヘルス・エスノグラフィ	特別講演
第17回	齋藤さわ子	作業を通して人を理解すること	佐藤剛記念講演
	Helen J Polatajko	作業の理解：作業療法に不可欠なこと	基調講演
	木田佳和	災害から現在，そして未来へ～作業的存在としての姿を取り戻すための支援～	特別講演
第18回	坂上真理	作業科学における場所の再考：トランザクションの視点から	佐藤剛記念講演
	John A. White，Jr	リーダーシップという作業：作業科学と作業療法にとっての契機	基調講演
	坂本俊久	住まい手の心と身体のための住まいづくり	特別講演
	高木雅之	作業的に豊かな環境を作る	教育講演
第19回	浅羽エリック	Transition：移住，教育，就労を通しての考察	佐藤剛記念講演
	Jeanne Jackson	高齢期に意味のある存在を生きる	基調講演
第20回	酒井ひとみ	生きているシステム「複雑系」としての作業―作業を受け止める前提ー	佐藤剛記念講演
	Elizabeth Townsend	作業のレンズを通して見る社会の課題	基調講演
	倉持香苗	人の交わりから生まれる地域づくり―コミュニティカフェの視点から―	特別講演
	吉川ひろみ	日本の作業科学研の歴史と私の作業	20周年記念講演

表3. OSセミナーのシンポジウムやワークショップなど

	ファシリテーター	主な内容	イベントの形式
第1回	Florence Clark	作業科学の紹介	ワークショップなど
第2回	Ruth Zemke	日本作業療法のための作業科学の開発	ワークショップなど
第3回	Florence Clark	作業：作業科学と作業療法の芯	ワークショップなど
第4回	Ann Wilcock & Ruth Zemke	健康の作業的な視点	ワークショップなど
	発表者	タイトル	イベントの形式
第5回	Michael Iwama，山田孝，佐藤剛	日本における作業科学研究の方向性と課題	テーマ演題
第6回	札幌医大の作業科学分野院生	作業科学の概要	作業科学入門セミナー
	宮前珠子，吉川ひろみ，齋藤さわ子	WFOT学会報告と討論：世界の動向と作業科学	シンポジウム
第7回	若井亜矢子，向井聖子，坂上真理，齋藤さわ子，港美雪，村井真由美	作業科学の概要	作業科学入門セミナー
	坂上真理，吉川ひろみ，ボンジェペイター，港美雪，近藤知子	日本における作業科学の歩みー故佐藤剛教授の足跡を踏まえてー	パネルディスカッション
	宮前珠子，小田原悦子，Ruth Zemke	日本における作業科学の展望	パネルディスカッション
第8回	原田千佳子，村井真由美，近藤知子	作業科学が作業療法へ与える影響	シンポジウム
第9回	里見のぞみ	身体表現をするということ：身体表現ー作業療法ー作業科学	ワークショップ
	小林法一，近藤敏，齋藤さわ子，ボンジェペイター	作業科学が作業療法に与える影響	シンポジウム
第10回	浅羽エリック，ボンジェペイタ，古山千佳子他	作業と可能性	ワークショップ
	Ruth Zemke，吉川ひろみ，飯田英晴	教育と科学：作業の可能性の探究	ミニシンポジウム
	宮前珠子他	日本作業科学研究会	設立総会
第11回	岡千晴，港美雪，難波悦子	作業科学を目標設定に生かすということー作業を捉え，深め，生かし，見えるものへー	ワークショップ
第12回			
第13回	Moses N Ikiugu，他	自然環境と作業科学	パネルディスカッション
	花山友隆，上江洲聖，近藤昭彦，浅羽エリック，Jing-Ling Lo	作業科学のネットワーク構築～小さな勉強会から世界的組織まで～	シンポジウム
	畑間英一，葉山靖明	作業と私～私が私であるために～	ワークショップ
第14回			
第15回	Gail Whiteford	東日本震災基金講演	基金講演
	福田久徳	テーマ別小グループディスカッション	ワークショップ
第16回	Ruth Zemke	日本における作業療法のための作業科学の将来	シンポジウム
	小田原悦子	日常生活における作業的存在の写真：身近な作業を理解するため	ワークショップ
第17回	第17回作業科学セミナー実行委員	作業を捉え方を考える	ワークショップ
第18回	吉川ひろみ，長谷川利夫，宮崎宏興，港美雪	病棟転換問題を考える	特別セミナー
	池尻奈美，第18回作業科学セミナー実行委員	リーダーシップという作業を考える	ワークショップ
第19回	Mark J Hudson，Kyle Matias，濱畑章子	Transition：人々の生活・人生における移行と作業	シンポジウム
	西方浩一	作業的写真	ワークショップ
第20回	堀部恭代，倉田香苗	社会の課題を作業のレンズで捉える	ワークショップ

結論として，OS セミナーでは，日本で作業科学研究者として成長してきた方々が，自分の研究に関して講演や演題，シンポジウム発表などを通して研究報告することだけではなく，作業科学の国際的及び学際的な発展を促すための議論も行っており，作業科学の更なる発展が期待される．

引用文献

佐藤剛（2002）．作業科学セミナー講義録 1995−2000 Occupational Science Seminar．札幌医科大学大学院保健医療学研究科作業療法学分野，i.

10 周年記念特集

『作業科学研究』10 年の振り返り

青山　真美

作業科学研究編集部

2016 年 12 月，日本作業科学研究会の機関誌『作業科学研究』は第 10 巻を発刊することとなった．そこで，本稿では，『作業科学研究』第1巻（2007 年 12 月）から第 10 巻（2016 年 12 月）の 10 年間に掲載された投稿論文等を整理することとした．

本誌への投稿原稿は，「作業および作業的存在に焦点を当てたものであり，作業科学の研究推進，学問的発展に寄与するもので，未刊行のものに限る」と規定され，論文は次の種類が定められている．

(1) 総説：研究や調査論文の総括および解説
(2) 研究論文：明確な構想に基づいた作業科学研究
(3) 実践報告：作業科学の視点に基づいた報告と考察
(4) 短報：萌芽的又は独創的な作業科学研究・プロジェクト
(5) 資料：作業科学に関連する事柄の紹介，資料を含む
(6) 書評：単行本や学術論文の紹介，抄録，評論を含む
(7) その他：編集委員が適当と認めたもの

第1巻から第 10 巻に掲載された，投稿論文，依頼原稿等，作業科学セミナー講演録の数を表1に示した．

表1　『作業科学研究』掲載論文数等一覧

掲載巻	発刊年月	査読付き投稿論文				依頼原稿等			作業科学セミナー講演録				（　）内はセミナーの回
		総説	研究論文	実践報告	短報	資料	書評	その他	佐藤剛記念講演	特別講演	基調講演	教育講演	抄録
第1巻	2007年12月					1		9	1(10)				
第2巻	2008年11月		2			1		1	1(11)	1(11)			(8) (11)
第3巻	2009年11月		2			2		1	2(12)	1(12)			(9) (12)
第4巻	2010年11月					2		1	3(8) (9) (13)	1(13)			(10) (13)
第5巻	2011年12月		2					1	1(14)		1(14)	1(14)	(14)
第6巻	2012年12月		2			1	1	1	1(15)	1(16)		1(16)	(15) (16)
第7巻	2013年12月		1	1				2			2(16) (17)		(17)
第8巻	2014年12月		1	1			2	2	1(17)	1(17)		1(18)	(18)
第9巻	2015年12月							2	1(18)		1(18)		(19)
第10巻	2016年12月		2		2			6	1(19)		1(19)		(20)
		0	12	2	2	7	3	26	12	5	5	3	
					16			36					
								52				25	
計												77	

これらの原稿のうち，一定の質を確保することを目的に査読が行われた論文は，研究論文，実践報告および短報である．これらの査読を経て掲載された投稿論文は，10 年間で計 16 編であり，研究論文 12 編，実践報告 2 編，短報 2 編であった．なお，短報は，萌芽的研究の投稿を促進するため，第 10 巻より新設され，2 編の短報が掲載された．編集委員会が依頼した原稿等は，資料 7 編，書評 3 編であり，その他については，巻頭言 10 編，1巻の寄稿 8 編，コラム「作業的存在」4 編，10 周年記念特集 4 編で，依頼原稿等の合計は 36 編であった．また，日本作業科学研究会は，毎年「日本作業科学セミナー」を開催し，作業科学に造詣の深い講師による講演から学びを得ているが，さらに，繰り返し学ぶ機会を提供するために，その講演録もできる限り本誌に掲載している．また，英文原稿には和訳原稿もつけて，幅広い読者に作業科学の知識が提供できるよう努めている．これらの講演録の掲載は 10 年間に 25 編となり，投稿論文，依頼原稿等，セミナー講演録を合わせて，本誌に掲載されたものは合計 77 編であった．

研究論文（表 2），短報（表 3），実践報告（表 4）については，論文の種類ごとに①掲載巻 ②著者 ③論文タイトル ④キーワード ⑤目的 ⑥対象 ⑦データ収集法 ⑧研究種類 ⑨作業の視点を示した．一覧で投稿論文全体を概観すると，全てが「作業および作業的存在に焦点を当てた」論文でありながら，一つ一つの論文が，異なる対象に対して，異なる視点から研究が行われて「作業」の知識の蓄積に貢献してきたことが伺える．

表2 研究論文

掲載巻	著者名	論文タイトル	キーワード	目的	対象	データ収集法	研究種類	作業の視点
第2巻	齋藤さわ子他	ケアハウス居住者の今後新たにしたい作業の意味とその作業が開始されない理由	作業選択，虚弱高齢者，健康増進プログラム，ケアハウス	新たにしたい作業の意味と現在していない理由を探索し，それらの相互関係を理解する．	ケアハウスに住む高齢者 21名	半構造化面接	質的	作業のニード 作業の意味
第2巻	福田久徳	価値は作業形態を超える ～Potentialityの実践～	Potentiality，Interaction，意味のある作業	生活背景に沿った作業を作業療法として提供し，事例の変化をPotentialityという概念で捉える．	非ホジキンリンパ腫に伴う対麻痺による自身の生活に悲観的な事例	事例研究	質的	作業と個人の相互作用（Potentiality）
第3巻	吉川ひろみ	作業の意味を考えるための枠組みの開発	作業，意味，文献レビュー	作業科学において，作業の意味がどのように表現されているかを明らかにする．	1993年ー2008年 Journal of Occupational Science：該当論文50編	文献レビュー	質的	作業の意味のカテゴリー化
第3巻	岡千晴他	自分らしい人生を作業で描くプロセス	自分らしい生活，存在価値，自己表現，質的研究	自分らしい生活に繋がる作業について理解を深める．	デイケア通所高齢者：3名	半構造化面接	質的	作業の行い方（形態）と自己表現
第5巻	小田原悦子他	ある脳卒中者が経験した作業の変化 ～指向性～	作業従事，現象学，可能性，気づき	障害によってもたらされたライフクライシスの中で，作業従事がどのように変化し，個人が作業従事の変化をどのように経験するかを理解する．	脳卒中後遺症，女性：59歳 主婦	半構造化面接．フィールドノート	質的	作業従事と可能性（作業従事と個人との相互作用による可能性の変化）
第5巻	仲間知穂他	幼児の作業の可能化を目指す幼稚園教員との協働的アプローチ ～作業療法士が提供する情報の扱い方に焦点をあてて～	エンパワーメント，情報共有，クライエント中心，協働	幼稚園教員との協働的アプローチがおこなえたケースについて，OTの情報の扱い方に焦点を当てて紹介し，考察を深める．	パートナーである幼稚園教員，幼児,OT	事例研究	質的	意味ある作業の選択・作業の可能化・情報提供（作業）
第6巻	福田久徳他	作業科学を学んだ作業療法士の主観的変化	作業科学，作業療法，作業に基づいた実践，専門職アイデンティティ	作業科学を学んだ作業療法士がどのような変化を感じているかを調査する．	OSセミナー参加者112名	インタビュー結果に基づく質問紙	量的	学習（作業）による認識の変化
第6巻	西方浩一他	障害児の母親が経験する社会とは-母親の手記の分析から-	障害児，母親,作業，社会	障害児の母親が経験する社会を理解する．	障害児の母：1名	手記	質的	人ー作業ー社会の相互作用による社会認識の変化
第7巻	永吉美香他	少年院における作業経験に関する作業公正/不公正の観点からの探索	少年院，作業，作業的公正	日本の少年院における作業経験を作業的公正/不公正の観点から探索する．	少年院への被収容経験のある情報提供者8名	半構造化面接	質的	作業的公正/不公正
第8巻	山根伸吾他	日本学生と韓国学生の役割に伴う作業に関する探索的検討 ー文化の観点からー	文化，作業，役割	自身の作業と役割の認識と感情に関して，両者の異同を確認し，文化の観点から説明が可能であるかを検討する．	日本学生34名，韓国学生42名	質問紙	量的	文化と作業 作業バランス（願望的，義務的）
第10巻	今井忠則	作業療法学生における作業的公正／不公正の統計的実態とQOLとの関連 ー質問紙による統計的調査の試みー	作業的公正，QOL，質問紙，社会的公正	①質問紙による統計的調査の実現可能性を検討すること，②集団における統計的実態（不公正状態を感じている人の割合）を明らかにすること，③他の健康指標（WHO QOL）との関連を明らかにすること．	作業療法学生142名	質問紙	量的	作業的公正／不公正
第10巻	伊藤文香他	作業を中心とした教育プログラムの活用プロセス ―地域在住高齢女性の事例研究―	作業，教育プログラム，行動変容，活用プロセス	作業を中心とした教育プログラムに参加後,得た知識や技能を自身の作業に活用した1人の高齢女性を情報提供者とし,その活用プロセスを探索する．	作業を中心とした教育プログラムに参加後の高齢女性1名	参与観察および半構造化面接	質的	学習（作業）と行動（作業）の変容

表3　短報

掲載巻	著者名	論文タイトル	キーワード	目的	対象	データ収集法	研究種類	作業の視点
第10巻	小森亜紀他	プレイバックシアターのストーリーにおけるテラー経験	プレイバックシアター，語り手，主観的経験	「PBTのテラーをする」という作業をした人々の主観的経験を明らかにすること	テラー経験者7名，ワークショップ参加者によるテラー54名	半構造的インタビュー・質問紙	質的・量的	作業と主観的経験
第10巻	鴨藤菜奈子他	青年期・成人期高機能自閉症スペクトラム障害者の生活の工夫とそれにいたる経過	適応，生活上の工夫，作業，高機能自閉症スペクトラム障害	青年期・成人期高機能自閉症スペクトラム障害者の，社会参加に際し行っている生活上の工夫，そのきっかけとそれにいたるまでの問題について理解する	就労し社会生活を送る高機能自閉症スペクトラム障害者：3名	半構造的インタビュー	質的	生活（作業）の工夫

表4　実践報告

掲載巻	著者名	論文タイトル	キーワード	目的	対象	データ収集法	研究種類	作業の視点
第7巻	高木雅之他	地域住民に対するものづくり講座ーものづくりを通して健康になれる地域を目指してー	ものづくり，健康増進，地域づくり，公開講座	地域住民を対象に健康増進のためのものづくり講座を開催した．その概要と成果を報告する．	「ものづくりと健康づくり」講座に参加した地域住民（延べ50名：60～70代）	「ものづくりと健康づくり」講座の実施・質問紙と観察	実践報告・量的	作業と健康
第8巻	石井愛美他	妊婦に対する作業を中心とした生活支援プログラムの開発の試み	妊婦，作業，生活支援，健康促進	出産前後の女性の作業を中心とした生活支援プログラムの開発プロセスと実施内容を提示し，実施結果をスタッフ側の視点から報告する	出産前後の女性を対象とした講習会2回（参加者計6名）	アンケート調査・観察記録，専門家の意見	実践報告	作業と健康

依頼原稿である資料（表 5），書評（表 6）およびその他（表 7–1～表 7–4）は①掲載巻，②著者，③タイトルのみを示した．

表5　資料

掲載巻	著者名	タイトル
第1巻	吉川ひろみ	作業科学シンクタンクの報告
第2巻	吉川ひろみ	「ウィラード&スパックマンの作業療法」における作業科学
第3巻	吉川ひろみ	アリソン・ウィックス講義録 「私にぴったり：作業科学がいかに見方を変えたか」
第3巻	近藤知子	Occupational presenceを考える：作業従事が導く心理的な変化
第4巻	葉山靖明	神楽と旅と2010年（エッセイ）
第4巻	高木雅之	オーストララジアン作業科学センター研修報告：オーストラリアにおける作業に焦点を当てた地域プログラム・研究・教育
第6巻	吉川ひろみ	世界作業療法士連盟 作業科学に関する声明書

表6　書評（研究論文紹介）

掲載巻	書評者	紹介論文
第6巻	吉川ひろみ	作業の研究 Polatajko, H.J. (2000). The study of occupation. In Townsend EA & Christiansen CH, (Eds.)Introduction to Occupation: the Art and Science of Living 2nd ed. Upper Saddle River, NJ, Pearson, pp.57-79.
第8巻	吉川ひろみ	作業科学：作業の研究 Wright-St Clair, V. A. & Hocking C. (2014). Occupational science: The study of occupation. In B. A. B. Schell, G. Gillen, M. E. Scaffa (Eds). Willard & Spackman's occupational therapy (12th ed, pp. 82-94). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.
第8巻	吉川ひろみ	作業的公正 Wilcock W. A. & Townsend E. A. (2014). Occupational justice. In B. A. B. Schell, G. Gillen, M. E. Scaffa (Eds). Willard & Spackman's occupational therapy (12th ed, pp. 541-552). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.

表7–1　その他（巻頭言）

掲載巻	著者	紹介論文
第1巻	Ruth Zemke	創刊に寄せて
第2巻	吉川ひろみ	「作業」って何だろう
第3巻	村井真由美	作業のメガネ
第4巻	西野歩	消えても生き続けるもの
第5巻	港美雪	作業を強調した時代からの飛躍
第6巻	近藤知子	生活の達人
第7巻	青山真美	当たり前にあるものを守ること
第8巻	西野歩	こころと上手に付き合い本分を達成したい
第9巻	酒井ひとみ	ワクワクする作業が蘇るとき
第10巻	近藤知子	発刊10周年によせて

表7–2　その他（寄稿：私と作業科学）

掲載巻	著者名	テーマ・タイトル
第1巻	宮前珠子	私と作業科学
第1巻	港美雪	私と作業科学 –作業科学を学ぶことで広がる作業療法の可能性–
第1巻	吉川ひろみ	私と作業科学
第1巻	浅羽エリック	私と作業科学（I and Occupational Science）
第1巻	坂上真理	私と作業科学 「自分の作業を語り，考え，行うことの意味 –作業の自己分析とライフスタイル再構築プログラムの経験から–」
第1巻	西野歩	私と作業科学 –過去，現在，未来–
第1巻	ボンジェ・ペイター	私と作業科学 –ひとの現実世界や実際の生活状況の探求–
第1巻	村井真由美	私と作業科学

表7–3　その他（コラム：作業的存在）

掲載巻	著者名	タイトル
第7巻	吉川ひろみ	プレイバックシアター ジョナサン・フォックス氏へのインタビュー 宗像佳代さんへのインタビュー
第8巻	青山真美	有田焼きの伝統を進化させる作家の技 坂本義弘先生へのインタビュー
第9巻	向井聖子	静かな提案「何気ない毎日こそ美しい」 写真家　渡邊真弓さんへのインタビュー
第10巻	村井真由美	書画はその人を想う発信のツール 作業療法アーティストkoshikiさんへの　インタビュー

表7–4その他（10周年記念特集）

掲載巻	著者名	タイトル
第10巻	初代・現日本作業科学研究会会長のことば	
	宮前珠子 吉川ひろみ	作業科学の振り返りと今後の展望 作業科学：振り返りと展望
第10巻	各組織代表	世界の作業科学組織からの祝辞
第10巻	ボンジェ・ペイター	作業科学セミナー20年の振り返り
第10巻	青山真美	『作業科学研究』10年の振り返り

作業科学セミナーの講演録は，佐藤剛記念講演，特別講演，基調講演，教育講演の順に①掲載巻，②セミナーの回，③講師名，④講演タイトルを資料1―資料4に示した．これらの講演録を「作業科学」理解のための学習に役立てていただきたい．

資料1　佐藤剛記念講演

掲載巻	セミナー	講師名	講演タイトル
第1巻	第10回	小田原悦子	作業科学:佐藤剛が手渡したかったもの
第2巻	第11回	宮前 珠子	作業科学の系譜と今後の発展
第3巻	第12回	中村春基	作業を行っている患者さまは元気 ～そのためには作業療法士はなにをすべきか～
第3巻	第12回	小田原悦子	作業の力：作業療法士の反省を作業科学の視点で分析する
第4巻	第8回	Ruth Zemke	時間と場所と作業：私たちの生活の捉え方を形作るもの
第4巻	第9回	吉川ひろみ	作業とは何で，何の役に立ち，どのような意味があるのか
第4巻	第13回	港美雪	どのように働くことが健康を促進するか ー作業に関する社会的課題解決に向けた提案と実践ー
第5巻	第14回	村井真由美	作業の知識を活かすこと，生み出すこと ～1人の作業療法士の経験から～
第6巻	第15回	近藤敏	我作業する,ゆえに我あり
第8巻	第17回	齋藤さわ子	作業を通して人を理解すること ～東日本大震災を経験してその重要さを改めて考える～
第9巻	第18回	坂上真理	作業科学における場所の再考：トランザクションの視点から
第10巻	第19回	浅羽 エリック	トランジション：移住，教育，就労を通しての考察

資料2　特別講演

掲載巻	セミナー	講師名	講演タイトル
第2巻	第11回	Alison Wicks	メインストリームへ：作業科学を見えるように
第3巻	第12回	Staffan Josephsson	Astrid と桜の木：作業がもつ変化を起こす力の考察
第4巻	第13回	Jin-Ling Lo	作業科学のプロモーション
第6巻	第16回	道信良子	ヘルス・エスノグラフィ―子どものフォトボイスを事例として
第8巻	第17回	木田佳和	震災から現在，そして未来へ ～作業的存在としての姿を取り戻すための支援～

資料3　基調講演

掲載巻	セミナー	講師名	講演タイトル
第5巻	第14回	Clare Hocking	作業科学研究の現在と未来
第7巻	第16回	Doris Pierce	作業科学の構築
第7巻	第17回	Helene.J. Polatajko	作業の理解:作業療法に不可欠なこと
第9巻	第18回	John A.White	作業としてのリーダーシップ
第10巻	第19回	Jeanne Jackson	高齢期に意味のある存在を生きる

資料4　教育講演

掲載巻	セミナー	講師名	講演タイトル
第5巻	第14回	吉川ひろみ	私の作業科学
第6巻	第16回	Ruth Zemke	作業療法のための作業科学の未来
第8巻	第18回	高木雅之	作業的に豊かな環境を創る

このように，一覧にまとめて全体を眺めてみると，投稿者，寄稿者の「作業」に対する熱い思が感じられると共に，本誌が，本誌の志である「作業および作業的存在に焦点を当て」作業の知識を増やし，日本の作業科学の研究推進，学問的発展に寄与してきたと実感できる．本誌に掲載された投稿論文等の一覧を眺めていただき，もし，心にとまる研究テーマが見つかれば，ぜひ，原本に戻っていただきたい．そこで，アイディアを得て，研究意欲が掻き立てられ，新たな研究に繋がることを心より願う．次号第 11 巻では，日本作業科学研究会の本年度の「第 20 回日本作業科学セミナー」のテーマであった「作業的公正」の特集を企画している．ふるって投稿していただきたい．

第 19 回作業科学セミナー　佐藤剛記念講演

トランジション：移住，教育，就労を通しての考察

浅羽　エリック

カロリンスカ研究所，スウェーデン

本論文の目的は，異なる文脈や視点で行われた3つの研究と作業科学の文献を引用しながら，トランジションについて批判的に探求することである．第一に，高齢者における海外移住と場所作り（placemaking）の研究を紹介する．二つ目は，作業療法の学部生が，作業を学ぶことに関する研究である．最後は，中途障害者の職場復帰の研究についてである．これらの研究をトランジション理論の概念を用いて探る．トランジションとは，視点を変えるような知識を獲得し，人々がプロフェッショナルアイデンティティを身につけ，“成っていく”さまと言えるかもしれない．トランジションはまた，期待がかなわなかった経験に端を発するアイデンティティの剥奪や破壊とも言える．さらなる考察は本講演で議論される．

作業科学研究，10，24-40，2016.

はじめに

本論文では，口頭で述べたことを書面にすることでより明確にするという意図のもとに修正を加えている．しかし内容そのものは，2015 年に浜松で開かれた日本作業科学研究会 (JSSO) 第 19 回セミナーの佐藤剛記念講演で話したものと一致している．読者の方々が，私を信頼し，ここに提示する考えを共有して下さることを光栄に思っていることを再度お伝えしたい．私はまた，過去 12 年間に行われてきた記念講演の伝統に連なること，そしてその文脈の中で現れたアイデアの発展の一部になることを謙虚に受け止め，また，誇りに思う．

作業科学を背景としてトランジションの概念を理論的・実践的に扱ってきた学者は少なくない (Blair, 2000; Crider, Calder, Bunting, & Forwell, 2015; Heuchemer & Josephsson, 2006; Hon, Sun, Suto, & Forwell, 2011; Jonsson, Josephsson, & Kielhofner, 2001). 最近では，Crider ら (2015) が作業の視点から特別な興味をもってトランジションに焦点をあてた文献レビューを行っている．彼らの結論から一つ言えることは，トランジションの理論を発展する出発点として使える作業の視点の研究基盤が十分にあるということである．Crider らは，この領域における研究の将来に対し，方法論的発展，環境や倫理 / 文化的多様性との関係に焦点をあてた研究，そして概念的な発展などを例とする幾つかの示唆を読者に残している．次の紙面では私は，トランジションについて探求することを目的に，三つの例を紹介する．

出発のポイント－移住

移住とは，人がある場所からもう一つの場所へと動くことと定義づけられている．人々はかつてないほど旅行する．人々はまた，ある部分では，自国を出て / 他国に入る自分自身の経験として，別の部分では，人が出入りするという近隣の変化を見ることとして，かつてないほど移住を経験している．この傾向と並走して，特定の場所でも世界的にも，高齢化と移住とを経験している人が増えている．場所への出入りというこのような多様なトランジションにあたっては，継続的な意味の付与や，日常的に親しみのある場所と見知らぬ場所を再結合することが必要になる (Farias and Asaba, 2013; Johansson et al., 2012; Phillipsson, 2007).

移住傾向の増加と並行し，高齢者ができるだけ長く自宅で生活することを支援する動きもある．高齢者の地域居住（aging in place）は，理想的な政策であるとして展開されており，人が高齢になってもできるだけ長く自宅や近隣にいることを支援することを目標としている(Wiles, 2012). 誤解のないように言うと，移住の傾向と高齢者の地域居住の考えは，私の知る限り，明白なつながりがあったわけではない．高齢者を自宅で継続的に支援することを強調する背景には，おそらく労働状況の変化の結果があるであろう．数十年前，高齢者はかなりの部分において家族からの世話を受けていたが，ここ数十年は介護施設が発達し，自分の家から介護施設に移ることが普通になってきた．介護施設は，特殊な看護とリハビリテーションサービスを一カ所で提供する必要性から発達した．高齢における地域在住の理想は，様々な意味で肯定的なものであるだろうが，他国で年をとっていく移住者にとって高齢者の地域居住はどのような意味を持つものなのだろう．家から介護施設に移るにせよ，ある国から別の国に移るにせよ，引っ越しは，様々な意味でトランジションを含む．

文化人類学者で作家のある人の言葉を引用してみよう．「私は旅行が好きだ．しかし同時に私は旅行することにひどく怯える．次の旅に乗り出すとき，私はいろいろな願掛けの儀式を注意深く行う….」(Behar, 2013, p. 3). この文は，「トラベリングヘビー：旅の回想」という本からの抜粋だが，これを使うのには二つの理由がある．一つは，Behar が見出した何かがトランジションを考える時に適切だと考えるからである．トランジションに本質的に含まれる変化の要素は，愛と恐れが混じりあった感覚に違いないが…Behar はそれと同じように自分の移住経験を，興奮（愛）と恐れ（怯え）の両方をもつ旅であると形容している．Behar の言葉から始めたもう一つの理由は，移住そのものにある．私見ではあるが，Behar は，読者が移住についてその意味の全ての層から考えさせるようと試みる優れた作家である．私は移住の経験について作業の視点から理解することに興味をもっており，研究の一環として，移住した人（自国から出た人，他国に入った人）に関わってきた．仮に今ここで，移住経験はトランジションを含むとするならば，それは広い意味において，変化を含んでいる．少なく見積もっても，それは，一つの場所からもう一つの場所に移り住むことである．別の言い方をすれば，家と呼ぶ場所から去り，再構築するものである．

home や場所のような概念は，移住の文脈において妥当なものとなっている．日常会話的に言うと，home はしばしば人が帰る場所に関連している．しかし，移住経験を念頭に置くと，home の感覚は静的な感覚は少なく，むしろ，柔軟で，流れ込むものというような理解の方がしっくりするかもしれない．Jackson(1995) は，home とは私たちが住むところなのか，それとも，私たちの想像（或いは Jakson が言う夢）の場所なのか，という疑問を投げかけている．ここで私が興味深く感じ，同時に現状にも即していると思うことは，home と呼ぶ時の連続性と物理的な場所の必要性への問いである．Jackson (1995) は，次のように記す．

> 「長い目でみると，厳密に連続性を強調するようなポイントはひとつもない．信じることの移行を言葉にすることは避けた方が良いし，機能しないアイデンティティは忘れた方が良い．あなたの出身地とあなたが home を作る場所との間にギャップがあるならば，それは問題として取り上げない方が良い」（p.35）．

この記述は，国際的な移住や老年学的な高齢者の地域居住の視点からみて興味深いものがある．なぜならば，高齢者の地域居住に対し，連続性と物理的場所は考慮されるべき妥当なニーズなのかということを問う批判的考えが内に含まれているからである．この意味で，私は，移住高齢者の経験に関して高齢者の地域居住の概念の妥当性を問いかけている．老年学では高齢者の地域居住の概念は，しばしば，社会が何をすべきかということを伴うものであり，この含みの中で，home とは何か肯定的なものである．

しかし，この感傷的考えは，たとえ家が心地よさに満たされる場所になり得るとしても，同時に，単なる協和の空間ではなく，緊張や恐怖にもなり得る空間であることから，問題を持つものとして取り組まれてきた．国際的移住では，場所，作業，アイデンティティの再交渉が，自国の移住に比べはるかに複雑に繰り返される．なぜならば，そこでは多くの場合，異なる生活習慣や言葉，年をとることに関する考え方や社会における高齢者の役割の違い，福祉や社会的資源の使い方や移行する人間関係，そして，混淆または移行するアイデンティティの新しい形への対応を含んでいるからである (Bozic, 2006; Jackson, 2013; Lewis, 2009; Patterson, 2006)..

作業科学への妥当性

移住について探ることは，世界的な文脈において，人が日常作業を通じて世界中の異なる場所と，関わりつながる方法を理解することであり，作業科学に関連するもの

である．作業科学の文献は，例えば，高齢者の地域居住ではなく場所作りとして考える (Johansson et al) ように，場所の流動的概念を移住の研究に取り込んでいく必要性を支持している．Ruth Zemke (2004) もこれについて「作業的 - 空間性」(p. 612) の論点から言及したかもしれない．トランジションは，多分，高齢者の地域居住というよりは，場所作りの分野の概念に，はるかに自然に結びつくようにみえる．この考えの妥当性は，高齢者の地域居住に吹き込まれている場所の連続性の考え方が，移住を経験した人が用いる言葉と単純には調和しないことからも現れている (Henning, Ahnby, & Osterstrom, 2009; Hwang, Cummings, Sixsmith, & Sixsmith, 2011; Wiles, Leibing, Guberman, Reeve, & Allen, 2012) (Cristoforetti, Gennai, & Rodeschini, 2011; Cutchin, Dickie, & Humphrey, 2006).

作業を通じ作業を学ぶ

次の例は，作業を通じ，作業を学ぶ事である．ここでは，カロリンスカ研究所の作業療法の学部生教育プログラムを例にあげる．このカリキュラムの中に「作業科学と作業療法の基礎」という科目がある．この科目は，私が他の教員と一緒に，4 年以上の期間を通して作り上げてきたものである．この例の中心を成す問いは，「学生はどのように作業のエクスパートになるのか，学生をどのように作業について『知らない』から『知っている』状態へとトランジションさせていくのか？」というものである．

私は，これらの問いは，作業科学や作業療法プログラムの学術・臨床教員が議論しなければならないものであるという意見を持っている．私たちが出発点において，なぜこれが重要であるかということを明確に理解しているならば，これらの疑問をどのように解いていくかという議論は最大限の可能性をもつことになる．作業の構造と仕組みについて理解することが，日常生活の可能性を開く鍵となる (Asaba & Wicks, 2010). 私たちは，学生が私たちのプログラムを終えるときに，作業とは何かについて十分に理解していることを保証する必要がある – それは同時に，作業療法士または作業科学者であること，または，作業療法士かつ作業科学者であることへの専門職アイデンティティへのトランジションを促進することでもある．この例におけるトランジションは，知識の獲得とその応用から生じる．言い換えれば，作業についてより知識を持ち，作業に関して生まれる知識を熟考することができ，様々な文脈で知識を適用することができるということである．私は，これは作業について学び続けることや，臨床・研究・リーダーシップの点で作業を使用するために重要であると考える．

学ぶという文脈において，作業は様々な視点から探求されてきた (Sutton & Griffin, 2000). しかし，教育の領域では，作業の概念を使って作業を学ぶことはほとんど行われていない．この教育的プロジェクトの目的は，作業を通して作業を学ぶという作業を基盤とした学習活動を開発すること，作業を通して作業を学ぶ事に対する学生の経験を探求することであった．このプロジェクトには，作業科学や教育学からの価値観や概念に基づいて科目を構築するという明確な意図があった．

ここで学習とはどのようなものかを考えてみたい．伝統的には，そして今日の複数の大学では，学習の文脈は，教室の前方にいる先生と，先生が立つ前方から離れて徐々に数を増して座っている生徒という形で描かれる．時間的な例をみると，第 1 週は数多くの学生がいる絵図から，次第にクラスに来ることを優先する学生が少なくなる絵図へと変化する．この図では，学生が，教室における自分の存在や参加が，自分の学習に貢献していることを見出せないという文脈を表している．これに試験の状況を加えたらどうなるだろう．伝統的な講義の文脈では，多くの場合，学生はある決まった問いに答えられることを示さなければならないような，座って書く試験で終了する．誤解のないように言えば，伝統的な学習文脈と呼ばれるものが常に効果的でないと言っているわけではない．私が言いたいのは，この種の方法は，作業を学ぶのには最適ではないかもしれないということであり，また，経験的学習方法を使うものでもないということである．私たちの計画したコースは，反転授業，オンライン学習，仲間からのフィードバック，アクティブラーニングのような考えを基盤にし，学生が，作業を経験し，作業が何かという考えが生じるような情報を探し，循環的に知識を深めていくために他者と考えを共有する必要がある積極的な過程としての学びを可能にする．

学習活動

学習活動は，次のように作成された．学生は，今までやったことがないか，少なくとも何年もやっていない作業で，してみたいと思う作業を選択するという課題を与えられる．作業は，授業期間の間は，一週間のうち少なくとも 2 回実施できるものを選ぶ必要がある．学生は，1 グループ 8 人からなるプロジェクトグループに割り振られる．ここでのプロジェクトグループとは，考えや，授業課題，読み課題について話し合えるような小グループとしての役割を担っている．プロジェクトグループは，閉鎖的ブログにアクセスでき，コミュニケーションを取る．授業の第 1 週目，

学生は作業を選択し，作業の活動分析を行い，なぜ自分がその作業を選んだか，何を期待するかをブログに書いた．次の数週間，学生は一週間に一度プログをつけた．それぞれのブログには，a) 作業に関わるその週の振り返りと b) その週に読んだ読み物の振り返りを自身の作業に関連付けて行い，また，各学生は，別の学生のブログにフィードバックを提供した．読み課題は，人間作業モデル，「作業科学」ジャーナルやその他の雑誌からの選出した論文などが含まれていた．毎週，話題提供の講義，スパービジョン面接，そして，読み物への洞察を得る・経験のある教員と討論するなどのための教員とのセミナーが行われた．

最後に，自分の経験を共有する現実の聞き手がいるという感覚をもつために，また，他の学生グループとの橋渡しのために，内見会が計画された．内見会は，学生が，他学科や他学年，キャンパス内の教員やスタッフを招待する場でもあった．内見会の準備にあたっては，参加者に自分が科目履修中に従事した作業の結果を見てもらったり，その作業を試してもらったりできるようなイベントにするため，学生は，内見会のテーマを選び，招待状を作り，視覚的でストーリー性のあるテクニックを使った．

方法

開発した新しい科目を評価するために 3 つの側面が選ばれた．我々はまず，学生にインタビューし，学生の経験について聞く事が妥当だと考えた．二つ目は，もともとあった科目に対し，新しい科目にかかる費用を見ることである．三つ目として，新しい科目ともともとの科目との間の学生の成績の違いをみたいと考えた．

結果

学生の経験

学生の経験を評価するために，3 つのフォーカスグループが実施された．フォーカスグループは 3 つの学期にまたがって行われ，合計12名の異なる学生が参加した．そこから，1）期待していたよりずっとたくさん，2）他の方法で考え始めた，3）自分で何かをし始める，4）フィードバックをうけることがとても良いという 4 つのテーマが見出された．

最初のテーマは，新しい作業を行うことへ実際の挑戦から得た気づきに基づいていた．学生は，ジョギング，ヨガ，楽器の演奏，料理，サイクリングなどというような作業を選んだ．当初学生は，時間を見つけ出すこと以外はそれほど難しいことはないと考えていた．しかし，一旦，作業を行いはじめると，時間を見つけること以外にも難しいことがあることにしばしば気づいた．ある学生は，この点について次のようにうまくまとめている．

「ええと，作業についてより洞察を深めることができて，全く新しい作業に従事するということは，思った以上に大変なことがたくさんあるってことも分かるようになる．いつもそんなに簡単にいくわけではないということ．」

学生はまた，作業の実施を理論的な読み課題に統合することが，学習に貢献することに賛同している．学生はさらに，実際に自分自身で経験しなければ，経験したのと同じレベルまで，作業についての理解を得ることは難しいだろうと感じていた．

二つ目のテーマは，別の見方で考えるということである．学生は，ルーティンを変えるという経験は，ルーティンの良い点と悪い点への気づきを高めることだったと感じていた．学生はさらに，自己分析をした結果，同時に友人や家族を作業バランスや作業のレパートリーという視点で分析を始めたと感じていた．

三つ目のテーマは，ある意味で二つ目のものに関連しているが，新しい作業に積極的に従事する必要性によって，一連の問題解決に従事したという感覚から来たと思われる．学生はこれを，思ったより大変なことだったと感じたにもかかわらず肯定的に受け止めていた．

最後の 4 番目のテーマは，フィードバックの経験である．学生は，ブログを使うのは難しく，複数の技術的困難があったと感じていたが，ブログから得られる毎週のフィードバックは，この科目において貴重な存在だったと見ていた．

費用と成績

科目を作り直すとき，しばしば指摘される点は，費用がかかりすぎる，または代わりとなるものに十分な資金を受けられないということがある．このため，私たちは教員の時間ベースの科目の費用に注目した．この方法には様々なやり方があるだろうが，ここでは，クラスにいる時間に，準備に使われる時間を掛けあわせるというモデルを使った（表 1）

表1.

科目活動	時間	準備時間（ 因数）
講義	1	3-5
セミナー	1	1-2
ワークショップ	1	1
試験	1	1

以下に示すものが，このモデルの例である．ここでは準備時間が因数となる．もし，ある教員が毎学期 3 時間の講義をするならば，3（講義）×3（因数）となり，9時間の時間費用がかかる．この 3 時間の間には，15 分間の休憩が含まれる．教員が新採用であれば，しばしば因数が加算され 3（講義）×5（因数）となり 15 時間となる．講義を多くもてば，試験も多くなり，教員が成績をつける時間も 40-50 時間ととなる．教育理念を変えれば，講義時間を減らし，他の学習形態が優先されるようになる．例えば，1 時間のセミナーは，1（セミナー）×2（因数）となり，2 時間である．この方法をとると，私たちは学生と教員が考えや読み課題を論じあえる 4 つの小セミナーグループを持つことができ，それでも，3 時間の講義に比べ，予算的には 1 時間少なくて済む．

表 2 に記すように，教員が率いる形の科目時間の数は，大きく減じた．これは，学生に接している時間は 3 時間の講義に比べ 1 時間長いが，成果はより効果的で，セミナーを通して積極的に参加することで学生はより長く情報を覚え，かつ，より科目内容に満足するという肯定的なものとして捉えることができる．このような変化は，最終成績では捉えることはできないものである．

表2.

年度	学生数	時間あたり費用（平均）	成績（学生数）		
			優	合格	不合格
2010/2011	86	530	-	75	11
2012/2013	82	428	26	52	4
2014/2015	89	410	31	50	8

作業科学への妥当性

まとめると，作業に焦点があたり作業経験を基盤とするような作業療法や作業科学の早期教育カリキュラムで行う学習活動における積極的参加は，学生が実際に試すことができる生きた概念的枠組みを提供するものであり，作業の理解をより深いものとすることができると考える．これは，重要なことであり，トランジションという言葉にも値する．つまり，作業療法士 / 科学者への専門職アイデンティへとトランジションが起こるいうことは，この領域の核の完全な理解に基づくものであるからである．この事例から得られた結果は完璧とは言い難いが，カリキュラムの早期における経験にもとづくこのような作業の学習は，作業療法士の専門職のアイデンティティへの早期のトランジションに役に立つものであることを示唆していると考える．さらに言うならば，より多くの異なる種類の学習活動をすることは，究極には，より多くの時間を必要とするわけではないことも示している．最後に，フィードバックは，学生が作業についてフィードバックを得る場所というだけでなく，作業療法士が治療的状況で出会う人々にとっても重要であった．この点には，教育者がさらに論議を進め，修正していくべきことが含まれていると信じる．

脊髄損傷の後に仕事に戻る（RTW）

最後に示すのは，障害を持ったのちに仕事にもどるという現在進行中の研究に基づくものである．私は現在，研究者や博士課程の学生たちとともに，何らかの形で職業リハビリテーション，または，仕事への復帰に関連するようなプロジェクトを行っているが，ここで示す内容はこのプロジェクトから引き出している．

ちょっとした話に耳を傾けてほしい．今日若者が仕事につくとき，その人はたぶん，一生において，何度か仕事を変えるだろう．今，卒業する人たちは，10 年後に今はまだ存在しないような仕事についている可能性がある．これは，仕事につく若者は，仕事という意味において大きなトランジションを経験する可能性があるということであり，そのトランジションの幾つかは，今はまだ名前さえついていないような未来を含んでいるかもしれないのである．一歩引いて，仕事に含まれているものについて考えてみよう．簡単に言うと，「仕事」とは作業の種類の一つであり，それゆえ作業科学にとって妥当なものであると考える．さらに，作業の視点から見ると，仕事は単なる雇用以上のものがある．これは，仕事は単なる雇用だけではないという国際労働組織のような他組織の定義と一致している．彼らは次のように記す．

> 私たちは毎日，仕事は，全ての人にとって人の存在のあり方を表すものであることに気づかされる．それは，生活を維持し，最低限のニーズをみたす手段である．しかし，それはまた，個人がそれを通し，自分自身に対し，そしてその人を取り巻く人に対し，その人自身のアイデンティティを確かめる活動でもある．それは個人の選択として，家族の福祉のために，そして社会の安定のためになくてはならないものである (ILO, 2001, p. 1.2).

さらに，作業的な視点を持ち込んだ臨床実践でも，仕事は作業科学に妥当な話題である．世界作業療法連盟（WFOT）は，職業リハビリテーションに関する声明書に

おいて次のように主張している.

> この声明文で，職業リハビリテーションとは，人が仕事につく，再び仕事を始める，復職する，仕事に残るということを支援する様々なサービスの提供を意味する広いものである．職業リハビリテーションは，様々な程度や形態において，人の仕事歴の有無に関わらず公・私の分野や非政府組織によって，様々な専門職・非専門職の領域において雇用者と被雇用者のために，世界中で行われている (WFOT, 2012, p. 1).

この研究の枠組みをまとめると，ここで指摘するのは，仕事とは作業の一つの種類あり，雇用以上のものを含むということである．しかし，報酬がほとんどの成人にとって重要な側面であることや，仕事がこれ以上できなかったり，人が仕事に戻る必要性があるというプロセスについて理解することは非常に重要なことである.

スウェーデンでは，脊髄損傷のある人は相対的に少ないが，仕事に戻ること（return to work: RTW）を支援する目的の職業リハビリテーション実践の改革に大きな利益を得る人々である．新しく SCI になった人の約 50%が，受傷後に仕事をしていないという報告が出されている (Valtonen, Karlsson, Alaranta, & Viikari-Juntura, 2006). 仕事に就くことは，仕事をする年齢のほとんどの人にとって個人の重要な目標であり，それは，リハビリテーション初期のプロセスにいる脊髄損傷をもつ若い年齢の人にとっても同じであることが研究で示されている (Bergmark, Westgren, & Asaba, 2011). RTW の概念は，広く復職という意味で捉えることができるが，新しい職場で働き始めたり，職場で異なる役割を取るという意味も含まれている (Wasiak et al., 2007, p. 767). 脊損の人々には，国のガイドラインがなく，また RTW を支援するための資源を整理するような知識がないことなどから，仕事にもどることは非常に重要なことである．社会保険局のような行政部門は，仕事に戻ることに関しては，包括的な視点を持つことが重要であることを強調し，受傷，疾患，疾病後に支援を必要とする人に対する職業的リハビリテーションをより効果的にするためには，様々な利害関係を持つ人々が一層共同するよう呼びかけている.

私は，RTW プロジェクトで二つの種類のデータを扱っている．一つは SCI をもつ成人に対する個人インタビューを基にしたものである．これらのインタビューは，受傷後 1-5 年を経た 8 人の成人に対して行った．また，個々のグループメンバーには，6 年後に追跡調査として，参与観察を含むインタビューを行った．データは全て，私の博士課程にいる Lisa Bergmark が収集した．もう一つのデータは，SCI をもつ6名によるフォトボイスグループセッションを通して集めた．この6名は，前述の 2 つの研究で個人インタビューを行った人々とは異なる．Lisa と私は，8 回のフォトボイスグループを開き，さらに展示会を計画する参照グループとして 3 回の追加セッションを行った (Holmlund & Asaba, 未発表原稿).

私たちの研究の結果は総合的に，仕事に対する期待，実際に起こったことに注目すること，うまくいった状況を探ること，に関する経験を示していた．この結果はたぶん，日常生活上で継続的におこる優先順位の調整，教育を RTW 過程へと統合する必要性，仕事に関連する希望と失望の間を揺れ動く経験の中にある不確かさの程度，そしてまた，場合によっては，意味のある「仕事」として，報酬を得る仕事ではなく報酬のない雇用を選ぶことにも触れるものとしてまとめることができる．これらの研究の完全版は，別に記している (Holmlund & Asaba, In manuscript; Holmlund, Guidetti, Eriksson, & Asaba, In Manuscript; Bergmark et al., 2011).

脊髄損傷後の RTW に関わる研究は，はっきりと，トランジションの概念に焦点を当ててきたわけではない．しかし，この論文の目的のために，Crider ら（2015）の文献研究に戻り，私たちの研究結果が Crider らの文献研究で記されたことに沿っているかどうか注目してみよう．SCI の後の RTW における明らかなトランジションの側面は，生活が断絶するような出来事からの変化，つまり，障害とともにある日常生活に折り合いをつける（トランジションする）ということが含まれる．私たちの研究で見出されたことは，Crider らが作業の視点でのべたことと一致しているようだ．即ち私たちが日常生活で行うことに焦点をあてたているということである．研究の中から興味深いと思われる例をここにあげる．ある参加者は，仕事（報酬のある雇用）に対し大きな期待を抱き，支援を受けるために長期間にわたり行政機関と雇用者と交渉をしていたが，最終的に一般的な方法で仕事に就くのを辞めようと決意した．Crider らが理論的視点と呼ぶようなトランジションの視点から見ると，参加者が経験したことがらは，トランジションを逆行する負のスパイラルとして例示されるかもしれない．しかし，心理的イデオロギーの視点ではなく作業的側面からみると，その人がこれを作業従事として見つめ，その人の価値感・習慣・ルーティンに貢献するものであれば，報酬のない

雇用へのトランジションは，予想外に肯定的なトランジションとして見ることができるかもしれない．

トランジションについての省察のまとめ

私は自分が関わる研究と教育から 3 つの例を挙げた．これらのプロジェクトの焦点が，明確には，そして意図的なものとしてトランジションにあるわけではなかったにもかかわらず，これらの例の全てにおいて，複雑さ，経験の多様性，環境，そして危機や挑戦に折り合いをつけるというトランジションの側面が述べられていた．これらの例は全て堅固に作業科学を基盤としているが，振り返ってみると，トランジションは積極的に「行うこと (doing)」という性質があるように見える．高齢移住者の研究プロジェクトで，私たちは高齢者の地域居住の考えに，場所作りなどの代案で挑戦している．なぜならばこの考えは，高齢移住者の私たちの理解を受動的なものから，場所を「作る」という肯定的なものへと移行させるからである．同様に，「作業について学ぶプロジェクト」や「仕事に戻るプロジェクト」では，参加者は，専門職のアイデンティティや仕事生活の可能性を，可能にしたり妨げたりするトランジションを作り出すための積極的方法について話してくれた．作業科学の共通語の中で，トランジションの概念がどう位置付くかに関してはまだ未知な部分ではあるが，作業科学の貢献の可能性は，トランジション課程における作業，そしてトランジションを通した作業の適応にあり得る．

謝意

本論の執筆で取り上げたトピックに関し，思慮深く，かつ刺激的な討論をしてくださった世界中の私の同僚に感謝する．特に，本論の私の考えに討論を通して多くの影響を与えて下さった Margarita Mondaca 氏，Debbie Rudman 氏，Karin Johansson 氏，Melissa Park 氏，Staffan Josephsson 氏，Mark Luborsky 氏，Lena Rosenberg 氏，and Lisa Holmlund (旧姓 Bergmark) 氏に，そして，講演や本論の日本語訳に関わって下さった近藤知子氏，中村美緒氏，浅羽明恵氏に感謝したい．

本論文は，トヨタ財団 2010 研究助成，2014-2018 ニューロ財団研究助成，国立高齢研究助成 2015 からの助成を基盤に実施したプロジェクトを基盤としている．

引用文献

Asaba, E., & Wicks, A. (2010). Occupational Potential. *Journal of Occupational Science, 17*(2), 120-124.

Becker, G. (2003). Meanings of place and displacement in three groups of older immigrants. *Journal of Aging Studies, 17*(2), 129-149.

Behar, R. (2013). *Traveling heavy: a memoir in between journeys*. Durham: Duke University Press.

Bergmark, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.

Bergmark, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.

Bergmark, L., Westgren, N., & Asaba, E. (2011). Returning to work after spinal cord injury: Exploring young adults' early expectations and experience. *Disability & Rehabilitation, 33*(25-26), 2553-2558.

Blair, S. E. E. (2000). The centrality of occupation during life transitions. *British Journal of Occupational Therapy, 63*(5), 231-237.

Bozic, S. (2006). The achievement and potential of international retirement migration research: The need for disciplinary exchange. *Journal of Ethnic and Migration Studies, 32* (8), 1415-1427.

Crider, C., Calder, R., Bunting, K. L., & Forwell, S. (2015). An integrative review of occupational science and theoretical literature exploring transition. *Journal of Occupational Science, 22*(3), 304-319.

Cristoforetti, A., Gennai, F., & Rodeschini, G. (2011). Home sweet home: The emotional construction of places. *Journal of Aging Studies, 25*(3), 225-232.

Cutchin, M. P., Dickie, V., & Humphrey, R. (2006). Transaction versus Interpretation, or Transaction and Interpretation? A Response to Michael Barber. *Journal of Occupational Science, 13*(1), 97-99.

Farias, L., & Asaba, E. (2013). “The Family knot” : Negotiating identities and cultural values enacted through everyday occupations of a migrant family in Sweden. *Journal of Occupational Science. 20*(1), 36-47.

Försäkringskassan. (2013). *Svar på uppdrag i regleringsbrev: Samlad redovisning avseende Utvecklat samspel mellan Försäkringskassan och hälso- och sjukvården samt andra aktörer i sjukskrivningsprocessen, Dnr 005437-2012-FPS.* Retrieved from

Hellman, T., Bergström, G., Bonnevier, H., Busch, H., & Jensen, I. (2013). *Fördjupad utvärdering av rehabiliteringsgarantin. Erfarenheter av att arbeta med multimodal rehabilitering utifrån rehabiliteringsgarantins syfte och riktlinjer – Delrapport.* Retrieved from Stockholm:

Henning, C., Ahnby, U., & Osterstrom, S. (2009). Senior

housing in Sweden: A new concept for aging in place. *Social Work in Public Health, 24*(3), 235-254.

Heuchemer, B., & Josephsson, S. (2006). Leaving homelessness and addiction: Narratives of an occupational transition. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy, 13*(3), 160-169. doi:doi:10.1080/11038120500360648

Holmlund, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.

Holmlund, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.

Hon, C., Sun, P., Suto, M., & Forwell, S. J. (2011). Moving from China to Canada: Occupational transitions of immigrant mothers of children with special needs. *Journal of Occupational Science, 18*(3), 223-236. doi:doi:10.1080/14427591.2011.581627

Hwang, E., Cummings, L., Sixsmith, A., & Sixsmith, J. (2011). Impacts of home modifications on aging-in-place. *Journal of Housing for the Elderly, 25*(3), 246-257.

ILO. (2001). ILO *Report of the Director-General: Reducing the decent work deficit - a global challenge* (ISBN 92-2-111949-1). Retrieved from Geneva: http://www.ilo.org/public/english/standards/relm/ilc/ilc89/rep-i-a.htm

Jackson, M. (1995). *At home in the world*. Durham: Duke University Press.

Jackson, M. (2013). *The Wherewithal of Life: Ethics, Migration, and the Question of Well-being*. Berkeley: University of California Press.

Johansson, K., Laliberte Rudman, D., Mondaca, M. A., Park, M., Luborsky, M., Josephsson, S., & Asaba, A. (2012). Moving beyond 'aging in place' to understand migration and aging: Place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science, iFirst,* 1-12.

Jonsson, H., Josephsson, S., & Kielhofner, G. (2001). Narratives and experience in an occupational transition: A longitudinal study of the retirement process. *American Journal of Occupational Therapy, 55*(4), 424–432. doi:doi:10.5014/ajot.55.4.424

Lewis, D. C. (2009). Aging out of place: Cambodian refugee elders in the United States. *Family and Consumer Sciences Research Journal, 37*(3), 376-393.

Patterson, F. M. (2006). Policy and practice implications from the lives of aging international migrant women. *International Social Work, 47*(1), 25-37.

Phillipsson, C. (2007). The ‘elected’ and the ‘excluded’ : sociological perspectives on the experience of place and community in old age. *Ageing & society, 27*, 321-342.

Ricketts, T. C., & Fraher, E. P. (2013). Reconfiguring health workforce policy so that education, training, and actual delivery of care are closely connected. *Health Affairs, 32* (11), 1874-1880.

Sutton, G., & Griffin, M. A. (2000). Transition from student to practitioner: The role of expectations, values and personality. *British Journal of Occupational Therapy, 63* (8), 380-388.

Valtonen, K., Karlsson, A., Alaranta, H., & Viikari-Juntura, E. (2006). Work participation among persons with traumatic spinal cord injury ang meningomyecele. *Journal of Rehabilitation Medicine, 38*(3), 192-200.

Wasiak, R., Young, A. E., Roessler, R. T., McPherson, K. M., van Poppel, M. N. M., & Anema, J. R. (2007). Measuring return to work. *Journal of Occupational Rehabilitation, 17*, 766-781.

WFOT. (2012). *Position statement: Vocational rehabilitation*. Retrieved from Taiwan:

Wiles, J. L., Leibing, A., Guberman, N., Reeve, J., & Allen, R. E. S. (2012). The meaning of "aging in place" to older people. *The Gerontologist, 52*(3), 357-366.

Zemke, R. (2004). The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture - Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy, 58*, 608-620.

Transition: contemplations through illustrations of migration, education, and work

Asaba, Eric

Karolinska Institutet, Sweden

English Abstract

In this presentation I will aim to critically explore transition, drawing on literature within occupational science as well as three empirical research projects conducted in different contexts and with different perspectives. In the first illustration, I draw on a study about international mobility and placemaking among older adults. In the second illustration, I draw on a study about learning occupation among undergraduate occupational therapy students. Finally, I draw on a study about return to work after disability. I will use the idea of transition in exploring these studies. Transitions can be about how people grow into and assume professional identities through the acquisition of knowledge that changes perspectives. Transitions can also be about disenfranchisement and disruption of identities rooted in experiences of anticipation not met. Contemplations will be discussed.

Japanese Journal of Occupational Sience, 10, 24-40, 2016.

Introduction

This manuscript has been modified from the keynote lecture for the purpose of clarity in its written form. However, the content of the manuscript is in keeping with what was presented during the 2015 Tsuyoshi Sato Memorial Lecture at the 19th conference held by the Japanese Society for the Study of Occupation (JSSO) in Hamamatsu. Again, thank you for entrusting me with the honor of sharing these ideas with you. I feel humbled and at the same time proud to be part of a tradition and the development of ideas that have emerged during the past 12 years within the context of this series of memorial lectures.

There are many scholars with a background in occupational science who have engaged theoretically and practically with the concept of transition (Blair, 2000; Crider, Calder, Bunting, & Forwell, 2015; Heuchemer & Josephsson, 2006; Hon, Sun, Suto, & Forwell, 2011; Jonsson, Josephsson, & Kielhofner, 2001). Crider et al (2015) recently reviewed literature focusing on transition with a particular interest in looking at an occupational perspective. One can, from their conclusions, assert that there appears to be a sufficient base of studies that can be used as a departure point in developing theories of transition from an occupational perspective. Crider et al leave the reader with some suggestions for future research in this area, i.e. methodological development and studies focusing on transition in relation to environment or ethnic/cultural diversity, as well as conceptual development. In the following paper I will draw on three illustrations in order to explore transition.

Point of departure - Migration

Migration is by definition about people moving from one place to another. People are today travelling more than ever. People are also experiencing migration more than ever before, partly by own experiences of emigration/immigration and partly by seeing their neighborhood transformed as people move in and out of the area. In tandem with these trends, there are a growing number of people who are growing older and who have experienced migration, either locally or internationally. These various transitions in and out of place require continuous sense making and reconnections with familiar

and unfamilar places in everyday life (Farias and Asaba, 2013; Johansson et al., 2012; Phillipsson, 2007).

In tandem with increasing migration trends there have also been a movement to support older people in their homes for as long as possible. Aging in place has been held as a policy ideal and refers to an ambition to support people in their homes and neighborhoods for as long as possible as they grow older (Wiles, 2012). To be clear, migration trends and the emergence of ideas around aging in place have not to my knowledge had any explicit connections. The need to explicitly raise issues of working for continuity and supporting older persons in their home can perhaps be traced back to changes in working life for families. Whereas older persons were to a greater extent cared for by family members several decades ago, as of recent decades it has been more common to develop nursing facilities to which older persons are moved from their home. The development of nursning facilities emerged from a need to organize specialized nursing and rehabilitation services in one place. The aging in place ideal might in many ways be positive, however what does aging in place mean for older immigrants who are aging in another place? Moreover, a move, whether it is from ones home to a nursing home, or from one country to another, it in different ways involves transitions.

Let me draw from the words of an anthropologist and writer. "I love to travel. But I'm also terrified of travelling. As I embark on yet another trip, I carefully enact my various good luck rituals …" (Behar, 2013, p. 3). This text is taken from Travling Heavy: a memoir in between journeys, and I use this for two reasons. First, I think that Behar identifies something that is relevant when considering transition, because the change element that is inherent in transition, can come with a mixed sense of love and fear … in the same way that Behar describes her own migration experiences as a journey of both excitement (love) and fear (being terrified). Migration in itself is the other reason for why I begin with a quote from Behar. Behar in my opinion is a brilliant writer who challenges her reader to think about such things as migration with all its layers of meaning. I have an interest in understanding migration experiences from an occupational perspective, and in part of my research I have worked with persons who have migrated (emigrated / immigrated). If for a moment we can agree that the experience of migration involves transition; in a broad sense it involves change. At the very least it involves a change in dwelling from one place to another, in other words leaving and rebuilding a place to call home.

Concepts such as home and place become relevant in the context of migration. In a colloquial sense, home is often associated with a particular place to which one returns. However, in considering migration experiences a less static sense of home might be replaced with the relevance of a more flexible understanding of home as something in flux. Jackson (1995) poses the question, is home the place where we live, or is it a place in our imagination (or dreaming as Jackson put it)? What I find interesting, which is relevant also today, is the question about the neccessity for continuity and a physical place when considering what we refer to as home. Jackson (1995) writes,

> "There is no point insisting upon strict continuity over time. Better to avoid mention of the way allegiences shift. Better to forget defunct identities. If there is a discrepancy between the place you hail from and the place you make your home, better not to make an issue of it" (p. 35).

This is interesting from the perspective of international migration and the gerontological concept of aging in place, because inherent in thinking critically about aging in place, the question about whether continuity and a physical place is of relevance needs to be given consideration. It is in this way that I question the relevance of the concept aging-in-place in relation to experiences among older migrants. In gerontolgy the concept of aging in place is often associated with what society should strive for and home in this connotes something positive.

However, this sentiment has been challenged, even though home can be a place inbued with comfort, it can also be a space of tension or terror and not simply a harmonious space. International migration involves a complex re-negotiation of place, occupation, and identity to a greater extent than migration within one's country. This is because it often involves dealing with different customs and languages, altered beliefs regarding ageing and the roles of ageing people in society, changed access to welfare and

social resources, transnational relationships, and new forms of mixed or transnational identities (Bozic, 2006; Jackson, 2013; Lewis, 2009; Patterson, 2006).

Relevance for occupational science

Exploring migration is relevant for occupational science in order to understand how people, in global contexts, relate and connect to different places around the world through daily occupations. The occupational science literature supports the need to incorporate a dynamic conceptualization of place in the study of migration, i.e. placemaking rather than aging in place (Johansson et al, 2012). Perhaps something Ruth Zemke would have (2004) referred to as issues of "occupatio-spaciality" (p. 612). Transitions would appear to be a natural conceptual link within discourses of placemaking to greater extent than perhaps aging in place. This is relevant because the continuity of place that imbues an aging in place idea might simply not resonate on similar terms for those who have experienced migration (Henning, Ahnby, & Osterstrom, 2009; Hwang, Cummings, Sixsmith, & Sixsmith, 2011; Wiles, Leibing, Guberman, Reeve, & Allen, 2012) (Cristoforetti, Gennai, & Rodeschini, 2011; Cutchin, Dickie, & Humphrey, 2006).

Learning about occupation through occupation

The next example has to do with learning about occupation through occupation. I draw from an example from the undergraduate occupational therapy curriculum at Karolinska Institutet. The course within the curriculum from which I draw is called, Foundations in Occupational Science and Occupational Therapy. It is a course that I have redesigned together with other faculty members over a 4-year period. The central question in this case has to do with the following how do students become experts in occupation and how do students make the transition from being "unknowing" to "knowing" about occupation?

I am of the opinion that these are questions that academic and clinical faculty within occupational science and occupational therapy programs must discuss. Discussing how we can address these questions will have greatest potential if the departure points are clearly grounded in an understanding of why this is important. Understanding the architecture and mechanisms of occupation is part of the key to potentiality in everyday life (Asaba & Wicks, 2010). We need to assure that our students leave our programs with a sufficient understanding about what occupation is - which usually also means facilitating a transition into professional identities as occupational therapist and/or occupational scientist. Transitions in this case are dependent on applications of knowledge acquisition, in other words becoming more knowledgeable about occupation, being able to reflect upon the evolving knowledge about occupation, and being able to apply the knowledge in different contexts. I believe that this is important in order to continue learning about occupation and to use occupation in clinical, research, or leadership practices.

Occupation has been explored in learning contexts from various perspectives (Sutton & Griffin, 2000). However, the use of occupation within education to facilitate learning about occupation is rare. The aim of this educational project was to develop a learning activity based on occupation through which to learn occupation, and to explore student experiences about learning occupation through occupation. There was an explicit intention in this project to build the course on values and concepts from occupational science as well as pedagogy.

Let us consider what learning looks like. Traditionally, and in some university contexts today, learning contexts could be characterized with an illustration of a teacher at the front of a classroom and students sitting in rows increasingly more removed from the front where the teacher is standing. Over time the illustration transforms from one with many students during the first week of class, to one where few students prioritize coming to class. The illustration represents a context where students don't find that their presence or participation in the classroom situation contributes to their learning. If we add to this an idea about examination. The traditional lecture context is often concluded with a sit-down written examination where the student should demonstrate that they can answer a set of questions. To be clear, I do not mean that the so called traditional learning context necessarily is ineffective. What I mean is that this particular method might not be most appropriate when learning occupation, without also having experiential learning methods. Based on ideas such as

flipped classrooms, online learning, peer feedback, and active learning, the course design here makes learning an active process where students need to experience occupation, seek information to support their emerging ideas about what occupation is, and share ideas with each other in order to deepen knowledge in a cyclical way.

The learning activity

The learning activity was structured as follows students were given the task to choose an occupation that they wanted to do, but had never done or at least not done for a few years. The occupation that students chose needed to be something that they felt would be feasible to carry out at least 2x/week during the course. Students were also assigned into project groups consisting of about 8 students per group. The project groups served as a smaller forum in which students met to discuss ideas, class assignments, or readings. The project group also had access to a closed blogg through which to commmunicate. During the first week of the course, students choose an occupation, conducted an activity analysis of the occupation, wrote a blogg about why they chose the occupation and what they anticipated. During the following weeks students blogged 1x/week. Each blogg included a) a reflection about that weeks experiences related to the occupation, and b) a reflection about the readings from that week in relation to the occupation. Each student provided feedback on another students blogg. Readings included the Model of Human Occupation as well as selected other readings from journals such as the journal of occupational science. Each week there were short trigger lectures, supervision meetings, and seminars given by different faculty members in order to provide inspiration for the readings and in order to have discussions with experienced faculty.

Finally, in order to provide students with a feeling that there would be real audience with which to share their experiences as well as to bridge different student groups, a vernissage was planned for the last day. The vernissage was an opportunity to invite students from other programs or years, as well as faculty and staff from campus. In preparation for the vernissage, students planned a theme for the vernissage, created an invitation, and used visual and storied techniques to organize the event so that the audience could see the result of or try occupations that the students had engaged in during the course.

Method

In order to evaluate the new course development 3 aspects where identified. We reasoned that it would be of relevance to interview students about their experiences. Second we thought that it would be of relevance to look at the cost of the new course design in relation to the original course. Finally we wanted to look at student grades to see if there were any changes in this aspect between the new and original course.

Findings

Student experiences

Three focus groups were conducted to evaluate student experiences. Focus groups were conducted during 3 different semesters with different students. A total of 12 students participated in the focus groups. Four themes were identified. 1) it was a lot more than I expected, 2) I have begun to think in other ways, 3) getting to do something on one's own, and 4) receiving feedback was nice.

The first theme had to do with a realization rooted in actually struggling with a new occupation. Students chose occupations such as jogging, yoga, playing an instrument, cooking, cycling, among more. Students for the most part anticipated no difficulties, except for perhaps finding time. However, once they began performing the occupations they realized that it often included more challenges than just finding time. One participant summarizes the point well:

> "Well one got more insight about occupation and that it is a lot more encompassing than one thought, to engage in a totally new occupation. It isn't always so easy."

Students also agreed that integrating the doing of the occupation with theoretical readings contributed to learning. Moreover students felt that it would have been difficult to gain the same level of understanding without their own experience of doing the occupation.

The second theme had to do with thinking differently. Students felt that the experience of changing a routine meant that they had a heightened awareness of the good and bad about the routine. Moreover, students felt that they at times began to analyze friends and family in terms of their balance and repertoire of occupations as a result of doing a self-analysis. The third theme relates to the second in a

way, but had to do with that students felt engaged in a problem-solution spectrum by needing to actively engage in a new occupation. This was seen as something positive although students felt that it was a lot of work.

Finally, the fourth theme had to do with the experience of feedback. Students felt that the blogg was difficult to use and that it came with several technical challenges, however the weekly feedback that came with the blogging was seen as an asset in the course.

Cost of course and grades

A critique that often is discussed with redesigning a course is that it will be too costly or alternatively not receive enough funding. Therefore we looked at the cost of the course based on faculty hours. This can be done in different ways but in this case a model with hours in class multiplied by preparation time was used (se table 1).

Table 1.

Course activity	Hours	Preparation time (factor)
Lecture	1	3-5
Seminar	1	1-2
Workshop	1	1
Examination	1	1

To exemplify the model, consider the following. In this illustration prepation time is called a factor. If a faculty member has a 3-hour lecture, which is held by the same person each semester, it generates a time cost of 3 (lecture) x 3 (factor), 9 hours. Within this 3 hour period there is a 15 minute break. If the faculty member is new, there is often an extra factor, i.e. 3 (lecture) x 5 (factor), 15 hours. When there are many lectures, there are also usually examinations, that can generate 40-50 hours of correction time for faculty. By changing an educational philosophy, lectures decrease and other forms for learning are prioritized. For instance, 1 hour seminar is 1 (seminar) x 2 (factor), 2 hours. This means that we could have 4 smaller seminar groups with students and faculty to discuss ideas and readings and still have 1 hour less course budget time as compared to a 3-hour lecture.

If we look at table 2, the number of faculty led course hours have been reduced dramatically. This has been seen as positive because although it takes the teacher 1 extra hour of live time with students, as compared to a 3-hour lecture, it tends to give a more effective result and students appear to remember information for longer as well as be more satisfied with a course, when they have been active through seminars. This is something that is not captured in a grade.

Table 2.

Academic year	*# of students*	*Cost in hours (mean)*	*Grade (# of students)*		
			Honors	*Pass*	*Fail*
2010/2011	*86*	*530*	-	*75*	*11*
2012/2013	*82*	*428*	*26*	*52*	*4*
2014/2015	*89*	*410*	*31*	*50*	*8*

Relevance for occupational science

In summary, I believe that active participation in learning activitites where occupation is in focus and where occupation is part of experience-based learning early in an occupational therapy or occupational science educational curriculum, can lead to a deeper understanding about occupation by giving students a living conceptual framework in which to test ideas. This is important, and relevant in terms of transitions, because transititioning into professional identities as occupational therapist/scientist rests on a solid understanding of the disciplines core. The results from this case are far from complete, but I believe that it provides an indication that this type of experience-based learning of occupation early in the curriculum contributes to the early phases of transitioning into professional identities as occupational therapist. Furthermore, more and different kinds of learning activities does not neccesarily mean that it ultimately requires more time. Finally, feedback is important and I believe that it is not only for students where feedback about occupation is important, it is also important for the people that occupational therapists meet in therapeutic situations. I believe that this is something of relevance for educators to continue discussing and revising.

Return To Work (RTW) after spinal cord injury

The final illustration is grounded in ongoing work having to do with return to work after disability. I am part of a group of researchers and doctoral students working with projects that in one way or another relate to vocational rehabilitation or return to work, and it is on this work upon which I draw here.

Consider a few points of trivia. A young person entering the job market today will likely change career a few times during the working lifetime. Ten years from now, graduates from today will be working in jobs that don't yet exist today. This means that young people entering the job market today are likely to make major transitions in terms of work and in fact, some of the transitions involve futures that have not yet been named. Let us stake a step back and consider what work entails. Put simply, I would argue that "work" is a type of occupation, and it can therefore be relevant for occupational science. Moreover, work, from an occupational perspective is more than just paid employment. This is in agreement with other definitions such as the international labor organization, which describes work as involving more than mere paid employment. They write,

> Every day we are reminded that, for everybody, work is a defining feature of human existence. It is the means of sustaining life and of meeting basic needs. But it is also the activity through which individuals affirm their own identity, both to themselves and to those around them. It is crucial to individual choice, to the welfare of families and to the stability of societies (ILO, 2001, p. 1.2).

Furthermore, in clinical practice imbued with an occupational perspective work is of relevance. The world federation of occupational therapists (WFOT) asserts in a position paper on vocational rehabilitation that,

> In this statement vocational rehabilitation refers broadly to the provision of various services to assist people to enter, re-enter, return to and/or remain in work. Around the world vocational rehabilitation is available to varying degrees and in various forms, for the public and private sectors and within non-governmental organisations for people with and without a work history, and for employees and employers in diverse professional and non-professional fields (WFOT, 2012, p. 1).

To summarize the framework for this study, my point here is that work is a type of occupation and that it encompasses more than paid employment. Remuneration is however a vital aspect of work for most adults and understanding processes where work is no longer possible or where people need to return to work is of critical importance.

Persons with spinal cord injury in Sweden constitute a relatively small group of people, but who can greatly benefit from innovations in vocational rehabilitation practices aimed at supporting return to work (RTW). It has been reported that approximately 50% of persons with a new SCI do not work post-injury (Valtonen, Karlsson, Alaranta, & Viikari-Juntura, 2006). Being able to work is an important personal goal for most adults in working age, and research has shown this to also be true among young adults with spinal cord injury early in a rehabilitation process (Bergmark, Westgren, & Asaba, 2011). The concept of RTW is broad and can mean returning to a workplace, but can also include beginning at a new workplace or taking on a different worker role (Wasiak et al., 2007). Return to work in this group is important because national guidelines do not exist and there is a lack of knowledge about how to organize resources to support RTW (Hellman, Bergström, Bonnevier, Busch, & Jensen, 2013). The importance of having a holistic view regarding return to work has been underlined by government agencies such as the Social Insurance Office, which calls for increased collaboration between different stakeholders to make vocational rehabilitation more effective for the person needing support after injury, disease, or illness (Försäkringskassan, 2013; Ricketts & Fraher, 2013).

In the RTW project I am drawing on two sets of data. One set of data is based on individual interviews with adults living with SCI. These interviews were carried out with 8 adults who were 1to5 years post-injury. The same group was individually followed up and interviewed 6 years later including participant observations. All of this data gathering has been completed by Lisa Holmlund (previously Bergmark) who is a doctoral student working with me. The other set of data has been generated through photovoice sessions with a group of 6 persons with SCI. These individuals were not included in the individual interviews in the first two studies. Lisa and I have conducted the photovoice groups consisting of 8 sessions plus 3 additional sessions with a reference group to plan an exhibition (Holmlund & Asaba, in manuscript).

The results from our studies collectively address experiences relating to expectations for work, looking at what actually happened, and exploring situations where it worked. The results can perhaps be summarized as touching upon a continous negotiation of priorities in everyday life, a need to integrate education into the RTW process, a degree of uncertainty in experiencing moving between hope and despair in relation to work, and finally at times also chosing non-paid employment as meaningful "work" over paid work. A complete report of these studies can be found elsewhere (Holmlund & Asaba, in manuscript; Holmlund, Guidetti, Eriksson, & Asaba, in Manuscript; Bergmark et al., 2011).

Our research on RTW after SCI does not have an explicit focus on the concept of transitions. However for the purpose of this paper it is interesting to return to the literature review by Crider et al (2015) and look at how the results from our studies are in agreement or not, with the literature review presented by Crider et al. The immediately apparent aspects of transition that inform RTW after SCI include the changes from a life disrupting event, i.e. coming to terms with (transitioning) an everyday life with disability. In our studies the findings would seem to be in agreement with what Crider et al put forth in terms of an occupational perspective, namely that we focused on the doing in everyday life. An example from one of the studies that can be of interest here. One participant who had high expectations for work (paid employment) and who had during an extended period of time struggled with government agencies and employers to recieve support, finally decided to stop persuing work via regular channels. From a transition perspective grounded in what Crider et al call the theoretical perspective, the participants journey might exemplify a negative spiral of making counterproductive transitions. However, from an occupational perspective the lens is shifted from the psychological ideologies, and where a transition to unpaid employment might unexpectadly be seen as a positive transition if this contributes to values, habits, and routines in line with what the person sees as engaging occupation.

Concluding reflections about transition

I have put forth three illustrations from my work in research and education. In all of these illustrations, aspects of transition such as: complexity, diversity of experience, environment, and coming to terms with a crisis or challenge have been pronounced even though the focus of these projects were not explicitly or intentionally on transition. As I reflect on these examples, which are all firmly rooted in occupational science, I can see that transitions are characterized by a proactive doing. In the research project with older migrants, we challenge aging in place with an alternative such as placemaking because it shifts our understanding of the older migrant from passive to active in "making" place. Similarly in the "learning about occupation project" and the "return to work project," participants shared stories of active strategies that allowed them to make transitions that enabled or hindered their professional identities and possibilities for working life. What place the concept of transition will have in the lingua franca of occupational science remains to be seen, but I think that the contribution from occupational science can be in the application of occupation on, and through, transition.

Acknowledgements

I would like to express gratitude to all my colleagues around the world for thoughtful and stimulating discussions concerning topics taken up in this paper. An extra thank you to Margarita Mondaca, Debbie Rudman, Karin Johansson, Melissa Park, Staffan Josephsson, Mark Luborsky, Lena Rosenberg, and Lisa Holmlund (previously Bergmark) for discussions that have informed my thinking in this paper, and to Tomoko Kondo, Mio Nakamura, and Akie Asaba for translation relating to the talk and this paper. This article is based on projects made possible with funding from The Toyota Foundation 2010 Research Grant, 2014-2018 National Research School Grant in Healthcare Sciences, Norrbacka Eugenia Foundation Research Grants 2013-2018, Neuro Foundation Research Grant 2015, and National Foundation for Aging Research Grant 2015.

References

Asaba, E., & Wicks, A. (2010). Occupational Potential. *Journal of Occupational Science, 17*(2), 120-124.

Becker, G. (2003). Meanings of place and displacement in three groups of older immigrants. *Journal of Aging Studies, 17*(2), 129-149.

Behar, R. (2013). *Traveling heavy: a memoir in between journeys*. Durham: Duke University Press.

Bergmark, L., Westgren, N., & Asaba, E. (2011). Returning to work after spinal cord injury: Exploring young adults' early expectations and experience. *Disability & Rehabilitation, 33*(25-26), 2553-2558.

Blair, S. E. E. (2000). The centrality of occupation during life transitions. *British Journal of Occupational Therapy, 63*(5), 231-237.

Bozic, S. (2006). The achievement and potential of international retirement migration research: The need for disciplinary exchange. *Journal of Ethnic and Migration Studies, 32* (8), 1415-1427.

Crider, C., Calder, R., Bunting, K. L., & Forwell, S. (2015). An integrative review of occupational science and theoretical literature exploring transition. *Journal of Occupational Science, 22*(3), 304-319.

Cristoforetti, A., Gennai, F., & Rodeschini, G. (2011). Home sweet home: The emotional construction of places. *Journal of Aging Studies, 25*(3), 225-232.

Cutchin, M. P., Dickie, V., & Humphrey, R. (2006). Transaction versus Interpretation, or Transaction and Interpretation? A Response to Michael Barber. *Journal of Occupational Science, 13*(1), 97-99.

Farias, L., & Asaba, E. (2013). "The Family knot": Negotiating identities and cultural values enacted through everyday occupations of a migrant family in Sweden. *Journal of Occupational Science. 20*(1), 36-47.

Försäkringskassan. (2013). *Svar på uppdrag i regleringsbrev: Samlad redovisning avseende Utvecklat samspel mellan Försäkringskassan och hälso- och sjukvården samt andra aktörer i sjukskrivningsprocessen, Dnr 005437-2012-FPS.* Retrieved from

Hellman, T., Bergström, G., Bonnevier, H., Busch, H., & Jensen, I. (2013). *Fördjupad utvärdering av rehabiliteringsgarantin. Erfarenheter av att arbeta med multimodal rehabilitering utifrån rehabiliteringsgarantins syfte och riktlinjer - Delrapport.* Retrieved from Stockholm:

Henning, C., Ahnby, U., & Osterstrom, S. (2009). Senior housing in Sweden: A new concept for aging in place. Social *Work in Public Health, 24*(3), 235-254.

Heuchemer, B., & Josephsson, S. (2006). Leaving homelessness and addiction: Narratives of an occupational transition. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy, 13*(3), 160-169. doi:doi:10.1080/11038120500360648

Holmlund, L., & Asaba, E. (In manuscript). Focus on return to work after spinal cord injury through photovoice.

Holmlund, L., Guidetti, S., Eriksson, G., & Asaba, E. (In Manuscript). Return to work as situated in everyday life 7-11 years after spinal cord injury.

Hon, C., Sun, P., Suto, M., & Forwell, S. J. (2011). Moving from China to Canada: Occupational transitions of immigrant mothers of children with special needs. *Journal of Occupational Science, 18*(3), 223-236. doi:doi:10.1080/14427591.2011.581627

Hwang, E., Cummings, L., Sixsmith, A., & Sixsmith, J. (2011). Impacts of home modifications on aging-in-place. *Journal of Housing for the Elderly, 25*(3), 246-257.

ILO. (2001). *ILO Report of the Director-General: Reducing the decent work deficit - a global challenge* (ISBN 92-2-111949-1). Retrieved from Geneva: http://www.ilo.org/public/english/standards/relm/ilc/ilc89/rep-i-a.htm

Jackson, M. (1995). *At home in the world*. Durham: Duke University Press.

Jackson, M. (2013). *The Wherewithal of Life: Ethics, Migration, and the Question of Well-being*. Berkeley: University of California Press.

Johansson, K., Laliberte Rudman, D., Mondaca, M. A., Park, M., Luborsky, M., Josephsson, S., & Asaba, A. (2012). Moving beyond 'aging in place' to understand migration and aging: Place making and the centrality of occupation. *Journal of Occupational Science, iFirst,* 1-12.

Jonsson, H., Josephsson, S., & Kielhofner, G. (2001). Narratives and experience in an occupational transition: A longitudinal study of the retirement process. *American Journal of Occupational Therapy, 55*(4), 424-432. doi:doi:10.5014/ajot.55.4.424

Lewis, D. C. (2009). Aging out of place: Cambodian refugee elders in the United States. *Family and Consumer Sciences Research Journal, 37*(3), 376-393.

Patterson, F. M. (2006). Policy and practice implications from the lives of aging international migrant women. *International Social Work, 47*(1), 25-37.

Phillipsson, C. (2007). The 'elected' and the 'excluded': sociological perspectives on the experience of place and community in old age. *Ageing & society, 27*, 321-342.

Ricketts, T. C., & Fraher, E. P. (2013). Reconfiguring health workforce policy so that education, training, and actual delivery of care are closely connected. *Health Affairs, 32*(11), 1874-1880.

Sutton, G., & Griffin, M. A. (2000). Transition from student to practitioner: The role of expectations, values and

personality. *British Journal of Occupational Therapy, 63*(8), 380-388.

Valtonen, K., Karlsson, A., Alaranta, H., & Viikari-Juntura, E. (2006). Work participation among persons with traumatic spinal cord injury ang meningomyecele. *Journal of Rehabilitation Medicine, 38*(3), 192-200.

Wasiak, R., Young, A. E., Roessler, R. T., McPherson, K. M., van Poppel, M. N. M., & Anema, J. R. (2007). Measuring return to work. *Journal of Occupational Rehabilitation, 17*, 766-781.

WFOT. (2012). *Position statement: Vocational rehabilitation*. Retrieved from Taiwan:

Wiles, J. L., Leibing, A., Guberman, N., Reeve, J., & Allen, R. E. S. (2012). The meaning of "aging in place" to older people. *The Gerontologist, 52*(3), 357-366.

Zemke, R. (2004). The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture - Time, space, and the kaleidoscopes of occupation. *American Journal of Occupational Therapy, 58*, 608-620.

第 19 回作業科学セミナー基調講演

「高齢期に意味ある存在を生きる」
Living a Meaningful Existence in Old Age

Jeanne Jackson[1)]，小田原悦子[2)]

1）University College Cork, Ireland

2）聖隷クリストファー大学

はじめに

この研究プロジェクトの目的は，「ヘルスケア代弁者」という障害のある高齢者グループが地域でうまく生活するために工夫した適応戦略を発見することである．作業療法士が適応のために使う道具や家屋改修の技術ではなく，老人たちが日常生活の困難を越えて意味のある生活を送るために，どのように作業を使って戦略にしているのかを探索した．そのため，作業的存在としての人間についての Elizabeth Yarxa が述べた 5 つの前提を使う．

作業科学研究, 10, 41-45, 2016.

本研究の理論的前提

1．個人は作業に従事しているときが最も本当の人間である（Yerxa, 1990）
2．作業科学は人間をその人の人生の作者・語り手として尊重する
3．人々は物語のある行為に従事する（Reilly, 1962）
4．人は心から活性化するとき，手を動かして，自分の健康状態に影響を与える
5．作業は環境との関係で起こる

1．　人間には生まれつき occupy（占拠）されたいという，進化的，心理的，社会的，象徴的ルーツがある要求がある．

2．　我々の毎日の生活をつくる作業は，我々個人が選択している．作業を選択しながら，作業的存在として自分自身をつくる．しかし，作業科学は，人間の主体性も，個人の選択に影響する社会文化的，歴史的状況も同じように尊重する．人々が行為を選択する情熱や信念も，その人が生活する社会や歴史的コミュニティーが持つ信念に組み込まれている．つまり，人は，他の人々と切り離してものごとを決めることはないし，自分が生まれた文化の伝統を当たり前のことと捕らえている．現実には，我々は自分にとってのよい生活と社会にとっての善の間で交渉しながら生き，その結果が日常生活と人生でおこる作業となる．

3．　人々は，ストーリーのある行為に従事しながら生きている．Yerxa は，「人間は象徴的な原因によって生き，それを求めて生きる」と述べ，作業の象徴的な意義の重要性を知らせる．つまり，人々は理由があって「作業をする」．することと同じように，理由は作業の一部なので，作業に従事するときの主観的な経験がこの研究では重要になる．

4．　Reilly の「人は心から活性化するとき，手を動かして，自分の健康状態に影響を与える．」は，人間は，人生で出会う挑戦に対峙し，自分と社会にとって健康的で意味のある生活をつくる能力があるという信念を伝える．

5．　作業は，我々の物理的，政治的，社会的，歴史的環境との関わりで起こる．環境は，ある作業への参加を可能にすることも，阻害することもあるし，個人・グループの行為を通して，環境や社会的伝統を変えることもある．

研究参加者

本研究の研究参加者は，ヘルスケア代弁者（HCA）と

呼ばれるグループメンバー，女性 7 名と男性1名である．HCA は，高齢者のヘルスケアの改善を目的に週に 1 回会合を開き活動する，種々の程度の身体的，認知的，情緒的障害のある 20 名の高齢者のグループである．彼らはヘルスケアの専門職者から予約を取るために苦労すること，専門職者が彼らの訴えに時間を取って耳を傾けないこと，治療について説明しないことを問題にした．このグループのメンバーであることは彼らには意味のあることである．

研究方法

修正版エスノグラフィーアプローチを使用し，3 か月間の間に，会合や昼食に同行し，8 名の参加者に非構造的インタビューを実施した．

データ収集と分析

インタビューは2～2.5時間で，研究参加者の自宅で行った．自宅でインタビューを実施したのは，参加者にとって居心地がよく，老いの問題も喜びも話しやすくなることを意図したためだった．インタビューデーターから逐語録を作成し，グランディドセオリーを使って，コーディングした．

所見

最重要なテーマとして適応戦略，その下に 7 つのサブテーマが確認された．
以下に，二重下線を付した3つのサブテーマを中心に述べる．

テーマ：適応戦略	
サブテーマ：	意味のテーマ
	活動パターンと時間的リズム
	コントロール
	空間的，社会的，文化的つながりによる連続性の維持

意味のテーマ

老いは，我々に時の経過とその間の生活経験の多様性を気づかせる．文化人類学者の Kaufman によると，過去の出来事を意味のあるライフストーリーの一部として語ることは，老化の適応戦略である．そのようなストーリーは人生経験に統一感を与え，我々を現在につなげる．話すことによって，我々は，父親，自立，寛大さなどのテーマを発展させて，自己アイデンティティーを構築する．

本研究でインタビューした老人たちは，ライフストーリーを繋ぎ続けていた．障害のために彼らが従事してきた日常の作業は損なわれ，意味のある活動を失ったので，ライフストーリーを解釈し直すだけでは不十分だった．老人たちは，新しく日々の作業や週ごとの作業に，自分の個人的なテーマを表現する機会を探し，意味の糸を過去から現在へ紡いだ．

老人たちの意味のテーマには，次世代を育てる能力，創造的表現，世話，自立，生産性，寛容，コントロールが確認された．すべての活動を個人的テーマで話しているわけではないが，彼らが日課について話すときに，多くの作業に意味の個人的テーマが象徴的に表現された．以下に，意味のテーマが日常の作業にどのように影響しているかについて例を挙げる．

Bertha の物語

Bertha の主な人生のテーマは，生産性と寛容であり，彼女が従事した仕事，母親，ボランティアがこれらのアイデンティティーに貢献していた．彼女は勤務した工場の製品，家族や友人のために作った夕食，ボランティアの思い出を「恐ろしく大きな食事を料理したものだわ．ずっと 17 人分作ってたの．」，「私は 87 枚のアフガン編みの毛布をそこの回復ホームのために作ったわ．」と達成感を持って話した．

現在の彼女は腰痛と関節炎のために，室内の椅子に座って日々を過ごすが，生産性と寛容のテーマが彼女を HCA 活動に導き続ける．ヘルスケア提供者の高齢者支援を援助する活動について，「私が今も HCA を続けているのは，若い時に，多数の人たちを助けてきたからだと思うわ．」と語った．このボランティア活動は象徴的に意味のある作業であり，Bertha の過去のアイデンティティーである生産性と寛容から持続している．

Edith の物語

Edith は，インタビューの中で，11 人の里子たちを懸命に世話し，よい学校に入れ，栄養のある食事を与え続けたことを話した．現在の彼女にとって，自宅で部屋を貸している「養女にした成人の娘」との生活は，夫の亡くなった暮らしの寂しさを和らげるだけでなく，母親としての過去のイメージが再構築するという意味がある．

Charlie の物語

宗教は老人たちにもっとも共通したテーマだった．妻の死を深く悼む Charlie の場合は，妻との永遠にあるという約束が，この世に残された彼を支えていた．彼は，神を信じるだけでなく，世界をよりよくするために，よい仕事を遂行しなければならないと信じ，教会と地域のコミュニティーのために自分の時間を捧げる．Charlie にとって，宗教のテーマは，深い象徴的な重要性を含み，彼の存在に意味を与えている．

活動パターンと時間的リズム

HCA メンバーたちは作業時間性（活動の流れに定義づけられる時間の秩序のこと）と社会時間性（社会的に構造化された時間枠のこと）の戦略を使っていた．病院の予約や教会活動のような作業では，社会的規則と合わせることが必要だが，老人たちはほとんど，自分の作業的時間性で動き，社会時間性が見られなかったが，退職者ホームに住んでいる Liz だけが，食事がスケジュールにより決まった時刻に提供され，社会的な時間の秩序に従って生活した．社会学者の Zerubavel は，社会的時間秩序はスケジュールによって効率的に管理されると指摘した．退職者ホームのような，集団の時間的秩序が守らなければならない場合には，時計，カレンダー，スケジュール帳などの社会的に構成された時間枠を使うことが大切になる．

コントロール

自立の精神は，西洋文明の社会的規範に流れるアメリカの価値あり，このメンバーにも存在する．日常生活の身だしなみ，トイレ，家庭内の用事，近所の移動に介助が必要な5人は依存の課題があるが，独自のやり方でコントロールを続けるための4つの戦略があった．

第一の戦略は，意味のあるものを生活空間に置くことによって，環境をコントロールし続ける．例えば，Rosa は同居の娘に日常の食事と交通手段は依存するが，象徴的に意味のある，亡くなった夫の思い出の品，家具，贈り物を手放さず生活することで，生活環境のコントロールを維持していた．

第二の戦略は，雇用人や介助者である．通常，障害のある人は必要なセルフケアや家事のために，「介助者」を雇用するが，Edith と Bertha は，創造的な方法で依存的状況にならないように，自律感を維持するために雇用していた．セルフケアよりも重要な作業をするために，使用人を雇った．Edith にとって，キルトつくりの創造的な表現は人生を通して大切だったが，両手の関節痛と変形のために作ることができなかった．Edith は芸術的能力を利用して，デザインと生地選びを自分で担当し，使用人の Susie に切り縫うを言葉で指導して，一緒に作品を完成した．

Bertha は料理が大好きだが，食事の準備をするための身体的力や耐久性がないので，使用人の Kathryn にその工程を言葉で指導して，コントロールを自分が維持した．Bertha は，身体的には依存しているが，自分の好みとやり方でコントロールを維持した．Bertha と Edith は，身体的な障害のために活動は制限されているが，彼女たちの意図通りに参加していると認識することで，自律している．

結局，個々人は，作業に従事することによって，個人になり，自分の考え通りにコントロールを維持する．Liza は制限の多い退職者ホームに暮らし，決められたルームメートと同居し，スケジュールの時間通りに食事をするが，庭の手入れや，ピアノを弾くことで，自分の世界を作った．

自立とは個人が自分の身体で社会的な課題をやり遂げ，経済的にも安定した能力があるという西洋の考えは，障害のある人の状況とは合わないことがある．援助を必要とする障害のある人々は，社会的に受身的，依存的位置で扱われ，コミュニティーに意味のある貢献をすることはできないと見なされてきた．この自立の概念に挑戦し，自立とは援助なしに遂行できる量でなく，自分で行為の過程を選択する自由の程度で測れると代弁するべきである．どのように身体を扱われるかの自己決定と決定への参加が，依存と自律の重要な区別であり，個人的価値や社会的価値に導く．HCA メンバーたちのストーリーから，彼らが身体的な行為よりもメンタルな選択を含む自立の定義を支持することは明らかである．身体的には依存しても，自己決定とコントロールを適応戦略にすることで，日常の作業の著作権を維持することができるかもしれない．

空間的，社会的，文化的つながりによる連続性の維持

これらの連続性を維持するために4つの戦略が確認された．

1．家族の絆

親と子あるいは孫の絆は，社会的関係の中で最強の支えであり，過去の世代と将来の世代をつなぐ．メンバーたちは話の中で，繰り返し子どもや孫を尊重し，「この娘のことは本当に自慢なのよね．彼女は本当にアーティストなのよ．」と語り，「私の孫娘に赤ちゃんが生まれるの．私は大ばあちゃんになるのよ．なんて幸せなことかしら．」と喜んだ．子どもからの手紙は価値があり，他の人たちに話しては，「9 頁もあるの，本みたいね．」と大喜びした．家族の世代間には時間の連続性があり，人を過去と未来の間に位置づける．人生の最後に近づきつつある人々に，子どもは死後までも続く連続感を与える．遺伝子を介した生物学的レベルや思い出を介した象徴的レベルで，子どもたちと密接につながっている．子供たちを介して，高齢者は時間の連続性を経験する．

2．意味のある物

メンバーたちは自宅に溢れた「もの」についての作業的ストーリーの中で，深く象徴的な意味を語った．Bertha は，自分のボランティア仕事を自慢しながら額入りの感謝状に書かれた年号を誇らしげに読んだ．壁にかけられたボラン

ティアの感謝状は彼女のアイデンティティーの印となっていた.

Rosa は, 亡くなった大切な人たちにまつわる「もの」を日常的に使いながら生活していた. 古い椅子やダイニングルームセットや揺り椅子を, 大切な人や特別な出来事と関連付けて話題にした. これらの意味ある家具やものは, 彼女の経験が積み重なった個人史を表現する. 家具は彼女を現在から過去へと運び, 昔の感情を味わわせる. 意味のある物は, 高齢者に時を越えて人とのつながりを経験させるかもしれない.

3. 折々の知り合い

Margaret は, 重度の運動障害があるので一人暮らしのアパートに孤立する危険があるが, 環境を創造的に操作して, 日常的に世界と繋がり続ける. 彼女は座り続けたいすから, 半開きにしたドア越しに, アパートや近所の人々と暖かく親しいあいさつを交わすことで, 社会的つながりを維持した.

Liza は, コミュニティーの中で社会的に孤立しないように, 「手紙を投函するために」郵便局に出かけ, 「ちょっとした買い物のために」食料品店に頻繁に出かけ, 窓口係りやレジ係と近況や個人的な出来事を話して, 繋がる機会を作った. これらの作業は友達や新しい知り合いとの社会的な出会いを促がす手段となる.

比較的孤立している高齢者たちは折々の知り合いとの短い接触を使って, 現在の日常の世界と繋ぐ. 地理学者の Graham Rowel は, このような接触は「自己の再確認とアイデンティティー」の源になり, 人々は他の人とのつながりや, 認識されることによる喜びを経験すると述べる. Margaret と Liza は, 他の人たちを自分の作業の世界に引き込んで日常的に自分を確認している.

4. ファンタジー

地理学者の Rowel によると, ファンタジーは自分の身体的能力を超えて, 地理的空間を経験する方法となる. 本研究では, ファンタジーは, 現在を越えて, 連続感を作る強力な戦略となることが確認された. Bertha は以前していたガーデニング作業を思い描いて, 同じ楽しさを味わったことを, 「ある年になったら, 自然に身体は弱くなって, 庭に花を植えたくなるわ. でも, 私はそれを心の中でするの.」と表現した. 昔のガーデニング経験のファンタジーが, 感情的視覚的イメージや身体的感受性までも喚起して, Bertha の生活の中でガーデニング活動を続かせる.

結語

本稿で述べた老化への適応戦略は以下のようにまとめられる.

・人を作業的存在として尊重する
・その人たちの過去の意味のテーマを現在の活動に織り込む
・自己決定のスキルを育てる
・作業は“心の中で行われる”可能性がある
・個人的, 環境的変化

本研究は, あるグループの老人たちが生活を強化するために採用してきた工夫に富むが, あまり注意されなかった老化への適応戦略を明らかにした. 作業療法士, 作業科学者は, 彼らのメッセージと, 適応についての重要な気づきを受け取る必要がある.

第一に, 作業療法士は患者を作業的存在として尊敬し, 彼らが意味ある作業を生活に持つことによって, 彼ら自身をつくるように支える必要がある. 簡単な作業でも, 複雑な作業でも, 患者の見出す象徴的な意味を適切に理解する必要がある. 彼らの意味の世界に我々が介入し, 彼らの過去の意味のテーマを現在の活動に織り込むように援助する必要がある.

第二に, そうすることによって, 我々の患者が, 時間的な連続性と, 家族や友人やコミュニティーや周囲の世界との社会的つながりを維持する革新的な方法を探索するように力づける.

第三に, 患者が生活のどこでどのように自分のストーリーをつむぎ続けたいのか意識を集中して耳を傾け, 自己決定のスキルを促し, コントロールを続ける方法を探すように援助しなければならない. つまり, コントロールは身体的行為と同義語であるという誤りに落ちることがないように, コントロールと著作権の定義を拡大することが大切である.

第四に, 外来患者の援助では, 作業の広義の定義を, 「すること」だけでなく, 物思いやファンタジーの持つ豊かさを尊重しなければならない, というのは, 作業は「その人の心の中で行われる」ことがあるのだから. 最後に, 我々は, 適応を個人のスキルの発達とだけ考えるだけでなく, 我々の患者が自分の環境を変えて, 彼らの社会的政治的状況を変革させる能力について考える必要がある.

References

Jackson, J. (1996). Living a meaningful existence in old age. In Zemke, R. & Clark, F. (eds): Occupational Science: The Evolving Discipline. FA Davis, Philadelphia, PA, pp.339-361.

Kaufman, S. (1986). The Ageless Self. University of Wisconsin, Madison WI.

Reilly, M. (1962). Occupational therapy can be one of the great ideas of the 20th century medicine. American Journal of Occupational Therapy, 26, 87.

Rowel, G. (1978). Prisoners of Space? Exploring the Geographical Experience of Older People. Westview Press, Boulder, CO.

Yerxa, E.J., Clark, F., Frank, G., Jackson, J., Pierce, D., Stein, C. & Zemke, R. (1990). Occupational therapy in the twentieth century: A great idea whose time has come. Occupational Therapy Health Care, 6, 1, 7.

Zerubavel, E. (1981). Hidden Rhythms: Schedules and Calendars in Social Life. University of California Press, Berkeley.

著者より

本稿は，2015 年 11 月 29 日に浜松市で開催された第 19 回作業科学セミナーにおける基調講演として Jeanne Jackson が講演した内容を，本人の許可を得て，スライドの翻訳と講演の通訳を務めた小田原悦子が要約し，若干追加し掲載した．

研究論文

作業を中心とした教育プログラムの活用プロセス
―地域在住高齢女性の事例研究―

伊藤文香[1)]，齋藤さわ子[1)]，岩井和子[2)]

1) 茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科，2) 関西医療大学保健医療学部作業療法学科

要旨:本研究の目的は，作業を中心とした教育プログラムに参加後，得た知識や技能を自身の作業に活用した 1 人の高齢女性を情報提供者とし，その活用プロセスを探索することであった．参与観察および半構造化面接よりデータを収集した．分析の結果，《作業に関する負担感》をプロセスの起点とし，《今後の参考》，《作業遂行の質向上》，《作業遂行の質変化なし》，《作業再開》，《作業開始保留》を帰結とする5つの活用プロセスが浮かび上がった．作業を中心とした教育プログラムから得た知識と技能を活用し，行動を変容させており，従来の行動変容モデルとは異なっているプロセスもあることが理解された．教育プログラムで得た作業の知識や技能を活用していくプロセスには，プログラム中の体験と資源（人的支援，制度，サービス）の実用性が関わっていることが示唆された．

作業科学研究, 10, 46-55, 2016.

キーワード：作業，教育プログラム，行動変容 , 活用プロセス

Research Articles

The process of utilizing an occupation-centered education program
- A case study of a community-dwelling elderly woman-

Ayaka Ito[1)], Sawako Saito[1)], Kazuko Iwai[2)]

1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Department of Occupational Therapy,
2)Kansai University of Health Sciences Department of Occupational

Abstract: The purpose of this qualitative study was to explore the process of knowledge and skill utilization in daily occupations by a participant in an occupation-centered education program. The participant was an 80-years old woman who lived with her husband in the community. Data were gathered through participant observations and semi-structured interviews. Through analysis “feeling a burden because of the occupation” was extracted as the starting point of the process. The following five processes followed: “for future reference”, “improvement of occupational performance quality” , “nochange of occupational performance quality,” “restarting occupations,” and “holding off on starting a new occupation.” The informant changed her daily life occupations; for this purpose she utilized the gained knowledge and skills. These findings differ from existing models of behavior modifications. Finally, these results suggest that the utility of practical experience with the program and its resources (human support, system, service) are associated with the knowledge and skills gained in regards to occupations.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 46-55, 2016.

Keywords: occupation, education program, behavior modification, utilization process

はじめに

ヘルスプロモーションとは，人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし，改善することができるようにするプロセスであると定義づけられている（世界保健機関，2005）．このプロセスの成功には，行動変容が必要であると述べられている（日本健康教育学会，2003）．

国内外において，作業を中心とした教育プログラムの取り組みが，地域在宅高齢者に対するヘルスプロモーションとして報告されている．そのプログラム内容は，作業の知識と作業を通した体験を提供しているものが多く，また，それらが高齢者のヘルスプロモーションに貢献できることは多くの研究で示唆されている(Clark 他，1997, Fisher 他，2007, Zingmark 他，2014, Matuska 他，2003)．作業中心の教育プログラムの具体的な効果として，作業遂行技能の向上や作業との結び付きを維持・促進することや（Fisher 他，2007, Zingmark 他，2014），生活の質の向上，主観的健康観の維持・向上が示されており (Jackson 他，2009, Yamada 他，2010, 川俣他，2012)，参加者の作業への行動変容や肯定的な心理的変化を生じているといえる．しかし，これらの作業を中心とした教育プログラムのどの知識や体験がどのようにして行動変容につながったのか，なぜ行動変容に活用ができたのかについて具体的に明示した研究は少ない．

プログラムと参加者の行動変容の関係について，高木 (2011) らは，受講者がプログラムで得た知識を活用し，自身の行動・意識を変化させ，生活の中に活かしていたことを示した．この成果が得られた要因として，高齢者自身の経験に基づいて，作業の知識を理解できるようにし，作業の知識の活用を考え実施できるようにしたことであると考察している．しかし，作業の知識や作業を通した体験を得た人がどのように自分の作業に活用していくのかについての先行研究はない．どのように知識や体験が活用されていくのかのプロセスが理解されれば，作業に焦点を当てた介入の精度を高めることに役に立ち，より効果的な作業を中心とした教育プログラムの改善や開発が可能となると考えられる．

本研究の目的は，作業を中心とした教育プログラム (以下，プログラム) に参加後，プログラムで得た作業の知識や作業を通した体験を自身の作業に活用した 1 人の高齢者を情報提供者とし，どのように活用したかそのプロセスを探索することである．

本研究は，作業科学の以下の前提により分析を行った．1つ目は，人は，どのような作業で毎日を構成するかを選び，それを実行して，作業的存在としての自分を作り上げる (Yerxa,1990)．2つ目は，人は一連の作業と結びつくだけでなく，自分が行った作業に象徴的意味を創造的に物語る (Clark 他，1991)．

方法

1）プログラムの概要

プログラムは，約3ヶ月の期間で全 10 回，2時間のセッションで構成され，ある市の二次予防事業として行われたものであり，参加人数は，19 名であった（表 1）．その目的は，参加者が，自己の日常を作業的視点から捉えなおし，たとえ加齢による心身機能低下があっても地域の中で作業参加，作業との結び付きを維持，促進できることを支援することであった．プログラムの内容は，これまでの作業を中心としたヘルスプロモーションの研究を参考にし（Jackson, 1998, Fisher 他，2007），作業の知識の講義の他，作業を通した体験やグループデスカッションを取り入れたプログラムであった．プログラムは，作業療法士3名と保健師1名で運営した．プログラムの企画・司会・進行は作業療法士3名が協働して施行した．保健師は，対象者との連絡や出欠確認，体調確認やプログラムの補助，対象者の送迎の管理といった役割であった．

2) 情報提供者

作業の知識や作業を通した体験を自身の生活や作業に活用したプロセスを探求するために，①プログラムに参加し，②情報提供の同意が得られ，③プログラム参加中または，プログラム最終日に，プログラムで得た知識や作業の体験を活用していると肯定的に表出した地域在住高齢者であることを選定条件とした．

情報提供者の募集は，9回目のプログラム終了時に参加者全員に研究目的や手段を説明し行い，情報提供の同意を6名から得た．うち，選定条件に当てはまり，明確にプログラム参加中にプログラムで得た知識と体験を活用していると積極的に語っていた 80 歳前半の女性，晴子さん (仮名) を，本研究の情報提供者とした．晴子さんは，夫と1軒家に2人暮らしで，住宅の密集した市街地に住んでいた．子供は娘と息子の2人で，娘は近隣の市町村に在住で時々訪ねてくる関係であった．友人の誘いをきっかけに自ら市に問い合わせてプログラムに申し込みをしており，10 回のプログラムのうち，8回参加した．

なお，本研究は茨城県立医療大学倫理審査委員会にて承認され実施した (茨城県立医療大学倫理審査委員承認第 529)．

表1 晴子さんが参加したプログラム内容と目的

回	プログラム	目的
1	1）自己紹介と名札づくり 2）社交的活動・生産活動と健康の関係の講義 「人と関わるのに作業が必要」	・塾の目的を知る　・互いに知り合う ・社交的活動・生産活動と健康との関係を理解する ・生活で工夫していくことを考える
2	1）今している作業を継続する重要性の講義とグループワーク 2）「作業をしなくなったら」を考える．今している作業を個人で考え，グループで共有 3）作業の中で楽に立ち座り　体験と演習	・今の自分の生活を認識し，その意味と価値を学ぶ ・起居動作の一般的な効率の良いとされる方法を学ぶ
3	1）新しいことに挑戦することの意味の講義 2）趣味や家事を楽にするグッズ体験 3）作業の中での腰痛対策　講義と演習	・新しく作業を始めることと健康への影響について学ぶ ・新しく何かを取り入れるタイミングを学ぶ ・趣味や家事に関する便利グッズを知る ・腰痛を予防する・付き合うコツを学ぶ
4	1）料理・セルフケアに関するグッズ体験 2）料理は脳を活性化することについての講義	・料理とセルフケアに関するグッズを知る ・馴染のある作業である「料理」をすることと脳の活性化について学ぶ，料理体験の準備
5	電子レンジ料理体験と会食 簡単に安全に料理をする，電子レンジ料理の関連グッズを試みる	・紹介したグッズを使っての料理体験とその有用性を考える　・交流を深める ・新たなことを自分の生活に取り入れることについて考える
6	1）地域にあるサービスの講義と演習　地域の保健師からの情報提供 2）地域サービスを利用して暮らす事例紹介	・身近にある資源について学習する ・利用することの意義と効果について学習する
7	1）リハビリテーション職の紹介，講義とグループディスカッション 2）障害体験と作業ができるための解決法を考える演習（片麻痺でもできる更衣・包丁操作・車いす体験）	・リハビリテーションに関わる職種とその役割を知る ・具体的にどの職種に自分の要望を伝えたら良いのかを学ぶ ・障害があっても作業ができるための解決方法を見つける・アドバイスできるようになる
8	タブレット端末　講義と体験：タブレット端末でできること，入手方法の紹介と体験（ネットスーパーやインターネットでの買い物，地域サービスや情報の検索，脳トレゲームや便利な高齢者向けアプリケーションの体験）	・IT（携帯・タブレット・パソコン）の操作方法を知る ・IT 機器は自らの生活をどのように豊かにするかを考える ・新しいことへの挑戦を体験する
9	1）講義：作業バランスと幸福感 2）自分で健康に良い作業を考える・したい作業を見つける演習とグループディスカッション	・過去，現在，未来につながる作業について考える ・年を重ねても楽しめる活動の情報交換をし，新たに挑戦する活動の選択肢を増やす ・他者へアドバイスをすることで，自分自身への振り返りもする． ・参加者同士で支え合う体験をする
10	1）これまで提供された知識と体験の復習 2）茶話会をしながら，取り入れたいこと，取り入れることを話し合う	・このプログラムでの経験を整理してもらう（感想，自身の生活を振り返る等） ・交流を楽しむ ・塾で学んだ作業と健康に関する知識を，日常生活の中で必要な時に活かせるように復習する

3) 手段とデータ収集

データは，参与観察および半構造化インタビューを実施し収集した．参与観察は，筆頭研究者がプログラムを運営し，情報提供者とプログラム中や休憩中に話をするなどのかかわりを持ち，観察者としての参加者という立場で行った．やり取りや出来事を観察し，観察メモを取り，フィールドノートにまとめデータとした．

半構造化インタビューの質問は，プログラム参加前後の作業参加・作業との結び付きの状況，プログラムで得たことは何か，得られたことがあるとすれば，以前から認識されていたものか，新たに得たものかの確認，プログラムから得たことをどのように活用しているか，活用している作業の意味や形態，参加後に作業参加・作業との結び付きが促進されていた場合，どのような過程で活用したか，であった．インタビューは，臨床経験 18 年の作業療法士であり，プログラムの企画・運営に携わっていた筆頭研究者 1 名が行い，IC レコーダーにて録音した．

4）手順

なんらかの行動変容があることを考慮し，プログラム終了3ヶ月後に 1 回目のインタビューを行った．1 回目のインタビューの前に，改めて，インタビューによる情報提供の依頼を電話にて行い承諾を得て，1 回目のインタビュー当日，書面による同意を得た．晴子さんが馴染んだ環境でリラックスして話せるよう，晴子さんの自宅に研究者が出向いてインタビューを行った．1回目のインタビューの分析を行い，知識や体験を活用した作業を同定し，さらに作業の形態や意味を2回目以降のインタビューで語ってもらった．1，2回目のインタビューから作業に結び付こうとする試みの途中である語りが聞かれ，また行動変容の理論よると (Prochaska，1979)，6か月以上期間が継続していることが明確な行動変容と定義されていることから，3回目のインタビューはプログラム参加後6か月経過後に行った．インタビューは，合計 162 時間であった．データ分析後，晴子さん本人に分析した内容を説明し，結果に関して相違がないことを確認した．

5）データ分析

録音したデータから逐語録を作成し，自然なまとまりの切れ目で切片化し，1つの切片に1つコードを付けるコーディングを行った．次に，コードを分類し，共通したものを集め，サブカテゴリーを作成した．本研究は，作業への活用プロセスに着目した研究であるので，晴子さんから語られた作業別に分析を進め，活用のプロセスに関するカテゴリー関係図を作成した．その際，晴子さんの作業の複雑さを整理する糸口として3つの問いかけを用いた．

- 晴子さんが活用したのは，なぜか？
- 活用プロセス中の作業の形態の変化はあるか？
- 活用プロセス中の作業の意味の変化はあるか？

晴子さんの作業別にカテゴリー関係図を作成したのち，作業間で比較するために佐藤（2008）の事例 - コード・マトリックスを参考に作業 - コード・マトリックス (表2) を作成し，さらに分析を進めた．作業―コード・マトリックスは，晴子さんの各作業を縦軸，分析で浮かび上がってきたカテゴリー (例 活用の結果，作業への負担感，作業に対する有能性，作業の意味など) を横軸とした表であり，各作業間で共通するプロセスのパターンや条件を見出していくことに活用した．晴子さんの作業別のプロセスを 1 つに統合し，活用プロセスの概念図を構築した．分析は，インタビューを施行した筆頭著者とプログラムを一緒に運営し，質的研究の分析の経験のある作業療法士と一緒に行った．

表2　晴子さんの作業―コードマトリックス

晴子さんの作業	作業の知識や体験の活用	プロセスの帰結	作業の負担感の高低	作業有能性	作業の意味（人との交流）	作業の意味（学ぶ意味）	作業体験の有無	代償法の有無	経済的な問題	社会的支援	家族や友人の支援
短歌会の参加	活用あり	作業再開	高い	あり	あり	あり	なし	あり	なし	なし	あり
料理		今後の参考	低い	あり	なし	なし	あり	あり	なし	なし	なし
食事を作る回数		作業遂行の質変化なし	高い	あり	なし	なし	なし	あり	なし	不十分	なし
上着の更衣		作業遂行の質向上	低い	なし	なし	なし	あり	あり	なし	なし	なし
タブレット端末の利用		作業開始保留	―	あり	なし	あり	あり	なし	あり?	なし	なし
書道	活用なし	作業停止の継続	あり	あり	なし	あり	なし	なし	なし	なし	なし
車の運転		作業停止の継続	あり	なし	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし
旅行		作業停止の継続	あり	あり	あり	あり	なし	あり	なし	なし	不十分

6）研究の質の確保

質的研究の質を確保するため，以下の方法を取った．①インタビューで得られた逐語録とフィールドノートの記録データから，語りや行動の矛盾点を吟味し，語りの真実性について確認した．②インタビューデータの分析を作業科学の質的研究，作業療法の経験のある専門家とともに行い，分析の偏りを修正した．③分析結果を情報提供者に提示し，結果に語りとの違いがないかを確認した．

結果

晴子さんの分析の結果，それらの活用には5つのプロセスが浮かび上がった(図)．なお，得られたカテゴリーは《》，サブカテゴリーは〈〉で示した．得られたプロセスの内容を示す情報提供者の語りの例は，斜体太字で示し，下線は，語りの前後の文脈から筆者が補足説明を示した．

帰結のカテゴリー名から，《作業再開》プロセス，《作業遂行の質変化なし》プロセス，《作業開始保留》プロセス，《今後の参考》プロセス，《作業遂行の質向上》プロセス，と命名した．プロセスの起点は，《作業に関する負担感》であった．晴子さんがプログラムで得た知識や体験の内容と各プロセス名および，関連する作業名と活用の帰結は，表3に示した．

表3　晴子さんが参加したプログラムと活用された作業名と関連するプロセス名

回	プログラム	晴子さんの作業との関連	関連するプロセス名
1	1）自己紹介と名札づくり 2）社交的活動・生産活動と健康の関係の講義 「人と関わるのに作業が必要」	短歌会の参加	作業再開
2	1）今している作業を継続する重要性の講義とグループワーク 2）「作業をしなくなったら」を考える．今している作業を個人で考え，グループで共有 3）作業の中で楽に立ち座り　体験と演習	短歌会の参加	作業再開
3	1）新しいことに挑戦することの意味の講義 2）趣味や家事を楽にするグッズ体験 3）作業の中での腰痛対策　講義と演習	晴子さん欠席	
4	1）料理・セルフケアに関するグッズ体験 2）料理は脳を活性化することについての講義	晴子さん欠席	
5	電子レンジ料理体験と会食 簡単に安全に料理をする，電子レンジ料理の関連グッズを試みる	料理	今後の参考
6	1）地域にあるサービスの講義と演習　地域の保健師からの情報提供 2）地域サービスを利用して暮らす事例紹介	食事を作る回数	作業遂行の質変化なし
7	1）リハビリテーション職の紹介，講義とグループディスカッション 2）障害体験と作業ができるための解決法を考える演習 （片麻痺でもできる更衣・包丁操作・車いす体験）	料理 上着の更衣	今後の参考 作業遂行の質向上
8	タブレット端末　講義と体験：タブレット端末でできること，入手方法の紹介と体験（ネットスーパーやインターネットでの買い物，地域サービスや情報の検索，脳トレゲームや便利な高齢者向けアプリケーションの体験）	タブレット端末の利用	作業開始保留
9	1）講義：作業バランスと幸福感 2）自分で健康に良い作業を考える・したい作業を見つける演習とグループディスカッション	短歌会の参加	作業再開
10	1）これまで提供された知識と体験の復習 2）茶話会をしながら，取り入れたいこと，取り入れることを話し合う		

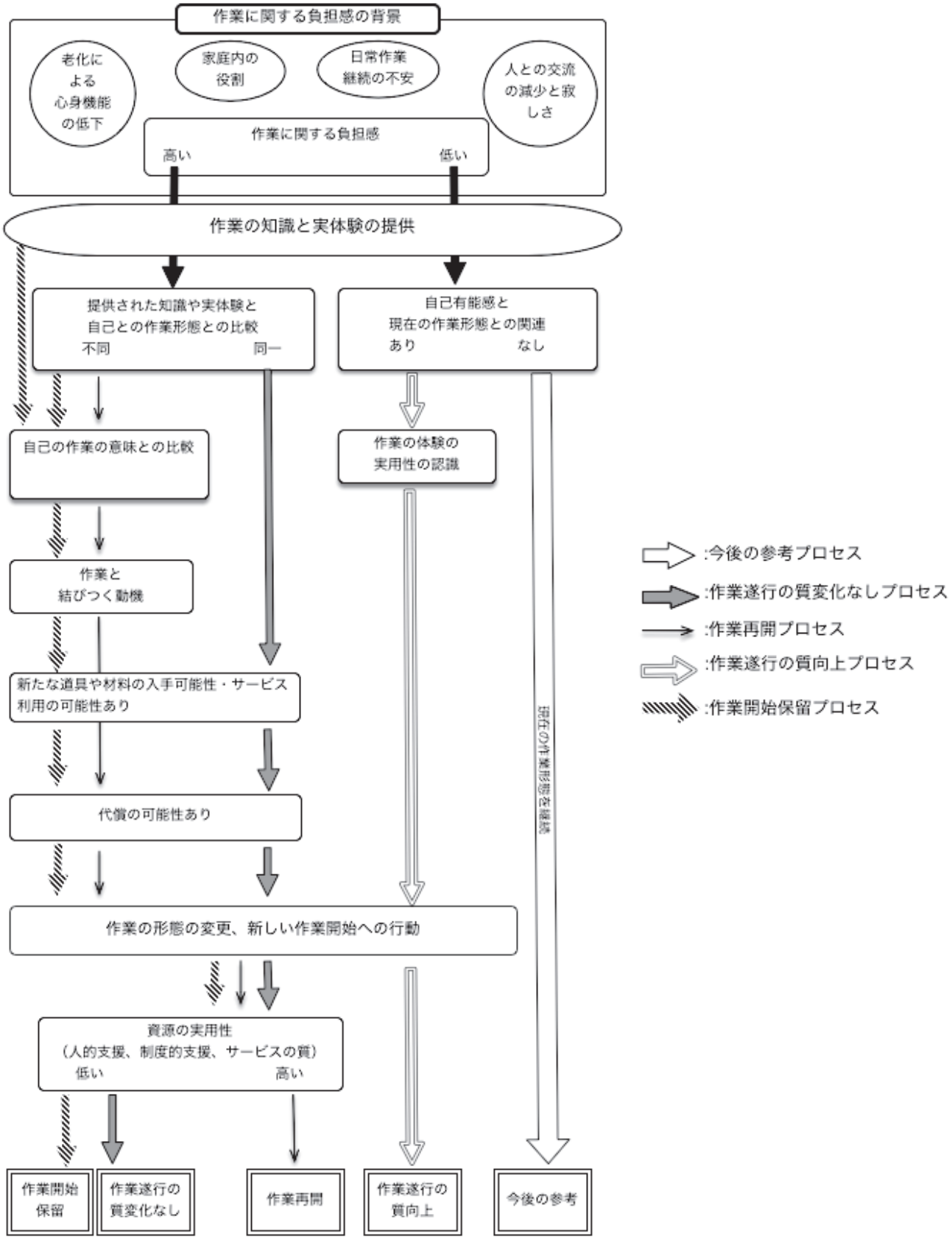


図　晴子さんの作業における作業の知識と体験の活用プロセス

1) 作業に関する負担感が高い場合の活用プロセス

作業に関する負担感が高い場合の活用プロセスでは，《提供された知識や体験と現在遂行している作業形態との比較》により，活用プロセスが異なっていた．

(1) 作業再開プロセス

一方，《提供された知識や体験と自己との作業形態の比較》により，講義で紹介された例と作業の形態が不同である場合，《自己の作業の意味と比較》し，《作業と結びつく動機》となるプロセスが語られた．このプロセスの例は，中断していた短歌会と再び結びつくプロセスであった．作業と健康との関連や社交的活動との関連といった講義を聞き，晴子さんは，「人と関わるためには作業が必要」という認識が高まり，〈人との関わりが大事〉という晴子さんの《信念と価値観》が《作業と結びつく動機》となり，再び作業と結びつくことを後押ししたプロセスを語っていた．

「短歌会を抜けて，たいへんだから抜けたいなあって・・・十項目，十項目歌わないと行けないのですよ．まあ，そのひと人によって，自分のことばかりを書く人もいれば，景色，草花とか散歩しているときのことを書いている人もいていろいろだけど抜けないで，いたほうがいたほうがいいなって・・・」

再び短歌会と結びつくにあたり，代筆によって《代償の可能性》があることに気づき，代筆を家族に頼んだ．家族の協力体制も良く《資源の実用性》が高く，《作業再開》に至った．

<u>短歌の書き取りについて</u>「どんなに下手でもね，あまり書けなくなったので，（短歌を）作るのは作って主人に代筆してもらってするようにしている．」「升目に一つずつ入れれば書けるなとも思っているんですけど．右がほとんど見えないから．左だけだし．そんなに無理してもね．・・・誰も代筆嫌がらないし・・・」

(2) 作業遂行の質変化なしプロセス

知識や体験の内容やその時に説明される作業例が，晴子さんの作業の形態と類似している場合，即時に取り込もうとし，《代償の可能性》があると判断し，《作業形態の変更への行動》につながる活用プロセスであった．このプロセスの例として，頻回に繰り返される毎日，毎食の食事作りに負担感を感じており，プログラムで紹介された配食サービスや宅配弁当の利用に《代償の可能性》があると吟味し，配食サービスの申請準備やコンビニエンスストアの宅配弁当利用のために店に出向くといった行動が語られた．

「食事のことも困る（食事を作る回数）といったんですよ･･･医師の診断書をもらって 福祉のどこか申請すると週に一回とか二回とか食事とれるんだとよって．それも新しく知りました．ああそうかと思ってね．あの申請しようかなって･･･」

《作業形態の変更への行動》を起こしたが，専門家の支援不足や宅配弁当のサービスエリア範囲外であるという《資源の実用性》が低かったため，《作業継続，遂行の質変化なし》となり，作業に対する負担感は高いままとなった．

「食事が大変だったら，なんか医師の診断書があったら有効に配達可能だよって聞いてたんで，診察に行った時に聞いたんですね．そしたら，それは市役所の方から用紙が来るんじゃないかなって先生言って，結局まだできてない･･･」

(3) 作業開始保留プロセス

晴子さんのインタビュー分析から，現在遂行している作業だけでなく，新しい作業との結び付きに関する語りがあった．プログラム8回目（表1）に，外とつながる1つの手段として紹介することを目的に，タブレット端末の操作や機能，アプリケーションの体験（例：テレビ電話，ネットでの買い物，ゲームなど）があった．旅行に行くことは《作業の負担感》が高いが，《作業の意味の比較》により，したい作業（旅行）の代償となることを意味づけた．

<u>タブレット端末でしたいことについて</u>「頭使うんでね，前頭葉ね・・・ぜひ欲しいなあと思って．・・・日本の国は温泉の数が一番多いそうなんで・・・そんなの行けないけど，あまり歩けないから・・・ついていけないからね，だから（老人会の旅行に）行けなかったけど，・・・そういう温泉の数とかこういうところにどうだったてね・・・そういうのを調べてみたいなと・・」

《新たな道具や材料の入手可能性，サービス実用性》と《代償の可能性》を吟味し，《新しい作業開始への行動》としてタブレット入手について，家族に相談していた．しかし，家族からタブレット入手を支援してもらえず，《資源の実用性》が低いことで《作業開始保留》という帰結になった．

<u>タブレット端末に対する支援</u>「息子が来たから，どうだろうねっていったら「直接必要でないのなら，いいんじゃないの？」なんて言ってますけどね，・・・ほしいと思っています．」

2) 作業に関する負担感が低い場合の活用プロセス

作業に関する負担感が低い場合，《現在の作業形態と自己有能感との関連》により，活用プロセスが異なっていた．

(1) 今後の参考プロセス

現在の作業の形態と自己有能感と関連がある場合は，現在の作業の形態を継続することを語った．しかし，プログラムの知識や体験は，《今後の参考》になると語っ

た．このプロセスの具体的な作業として，料理についての語りがあった．

電子レンジ料理について「レンジで焼きそばとかやるのもよかったですよね，ただ，まだフライパンでやれるので．教えていただいたことは，覚えておいて・・・．あのー，参考になるなって・・・知っていれば，応用できていいなと思っています．」

片手での包丁操作の体験について「自分よりもこういう不自由な人も他にたくさん，あの，おられるんだなあって，そういう方は大変だろうなあと思いながら，うん，なかなかうまくできなかったですけどね，でも，一つの参考になりますよね・・」

(2) 作業遂行の質向上プロセス

プログラムで学んだ知識や体験の内容が《現在の作業形態と自己有能感との関連》がない場合であっても，作業の形態の変更により簡単で今まで以上に遂行が向上することを体験し，《体験の実用性の認識》が高い場合は，即生活の中に取り入れていることが語られた．《新たな道具や材料の入手可能性，サービス実用性》と《代償の可能性》の吟味を経て，《作業形態の変更への行動》となっており，《作業継続，遂行の質向上》に至っていた．晴子さんは上着の更衣方法について，このプロセスを語っていた．

片手での上着の更衣について「洋服の着方ね，よかったですよね，ああ，そうかそうかと思ってね，毎日の即つながりますよね，その不自由になったんじゃなくても，簡単に着られるなと思って，教わってきたのは早速使っています．こう，寄せてね(袖を寄せながら話す)・・・不自由じゃなくても，そうやったら早く着替えられる」

3）作業に関する負担感の背景

作業に関する負担感に影響する背景には，《老化による心身機能の低下》，《家庭内での役割》と《日常作業継続の心配》，《人との交流減少と寂しさ》の4つのカテゴリーが語られた．《老化による心身機能の低下》のサブカテゴリーは，〈視力・視野の低下〉，〈体力の低下〉であった．食器洗いへの影響や短歌会への参加を一部の作業工程（短歌を紙に書く）が困難で作業中断したことを語っていた．

「右の視力が悪くって，だから白いものが見づらいので，ちょっとあのー，食器を洗って，白いものを置いたのに，そこに置いていってね，かちゃん，かちゃんて，音させているって，言われるんですけどね・・・」

家事全般を担っている晴子さんは《家庭内での役割》，食事準備の頻度に負担感を感じ〈家事の負担〉，同居人からの協力も期待できなかった〈家族の家事協力体制〉．

「家事一切やっているんです．」「困ったことがないですかと聞かれて朝，昼晩の食事大変なんですよ，大変なの．」

作業中断や休止に伴う《日常作業継続の心配》と《人との交流減少と寂しさ》を語っていた．

日常作業継続の心配「なんていうのかな，料理のことだとか，あの一料理のこととあとは，なんとか・・・まあ年取ってきて，生活していくのに，だんだんと心細くなりますよね」

人との交流減少と寂しさ「退職したらね，・・・ご近所との付き合いもあんまりできなかったですしね，どんなにさみしいだろうかーて，思っていたんです．」

考察

活用プロセスの起点は，《作業に関する負担感（身体的・精神的）》であり，負担感の高低によってプロセスが異なっていた．ヘルスプロモーションの1つの理論である健康信念モデル (Becker,1974, Rosenstock,1974) は，危機感が行動変容の起点であるとされている．さらに，脆弱性 (健康を損なう危険性に対する個人の主観的な認識) と重大性のレベルが高ければ，行動への力となり，利益を認識することで，望ましい行動をとる方法が明らかになるとされている．晴子さんは，作業に関する負担感，言い換えれば作業に対しての脆弱性や負担に思う重大性が活用の起点となっており，健康信念モデルの行動変容の起点と同様であったと考えられる．

作業に対する負担感が低い場合でも，片手での更衣の方法のように，作業の形態を変更し，簡単に遂行が向上することを体験した場合は，即生活の中に取り入れていることが語られていた（作業の質向上プロセス）．作業に対する負担感がなくても体験が活用され，行動変容していたことが晴子さんの語りから新たに理解された．作業を通した体験の中で，実用性を認識することが活用につながっていたと考えられる．このように，作業の知識だけでなく，作業を通した体験を提供することが活用のきっかけとして有効であることが理解された．さらに，現在の晴子さんにとって更衣は，作業の形態を変更しても作業として意味が変更されるものではないことも活用につながったと考えられる．

作業に関する負担感は低い場合で，自己有能感と現在の作業の形態の関連がある場合は，体験で実用性を認識していても，現在の作業の形態を継続し，行動変容にはつながらないプロセスがあることが理解された（今後の参考プロセス）．このことから，すぐには知識や体験を行動化しない場合があるが，作業継続への備えに活用されていると考えられる．

《作業に関する負担感》が高い場合，《提供された知識や体験と自己との作業形態の比較》で作業の形態が同

一の場合は，直に活用する行動につながっていた（作業遂行の質変化なしプロセス）．手本となるものがある程度，自分の状況に似ている場合，他者から最も学ぶといわれており (Bandura,1986), 作業の形態が同一であったことが，直ちに活用するという行動につながったと考えられる．

《提供された知識や体験と自己との作業形態の比較》により，プログラムで紹介された作業例と作業の形態が不同の場合のプロセスがあることも理解された（作業再開プロセス）．晴子さんは，プログラム (表 1, プログラムの2回目，9回目) で提供された知識において，野菜作りをしている人が野菜作りをやめた際に，社会的交流が途絶えがちになったという例から，自分の作業の形態とは不同であるが，短歌会を休止したことで，社会的交流が途絶えがちになったという共通性を認識していた．さらに，プログラム中に紹介した事例が，作業（野菜作り）を通して，人とかかわっている意味があったように，晴子さんも短歌会を通して人とかかわるという共通した作業の意味があることを認識していた．認識できた背景として，晴子さんの人とかかわるのは大事という信念や価値観が関与していることが考えられる．Dubouloz 他 (2010) は，真の作業的変化を起こすのは意味の捉え方を変容させることであると述べ，変容させる必要性に気づくように省察を支援することが重要であるとしている．提供された作業の知識や省察を促すプログラムは，晴子さんの短歌会に対する新しい意味の捉え方をガイドしたと考えられた．活用のプロセスに意味の捉え方の変容が関与したことが示唆された．

晴子さんの新しい作業（タブレット端末使用）に結びつこうとするプロセスも語られた（作業開始保留プロセス）．新しい作業を開始する動機には，旅行というしたい作業の代償となるという意味づけがなされていた．このことから，タブレット端末の機能は多岐にわたるため，高齢者が難しくなる作業の形態をバーチャルな視点からも補う可能性が考えられた．晴子さんは実際に体験したことが動機になったことを語っていることより，新しい作業としてのタブレット端末の使用には，実際の体験が特に重要であることが考えられた．

作業の形態を変更する行動につながったとしても，《資源の実用性》により，行動が促進，または阻害されていることが語られた．行動の実行の促進と促成には，利用できる資源，支援的政策，援助，サービスといった実現要因が関与していることが示唆されている (Green 他，2005)．本研究の分析からも，高齢者の作業再開や新たな作業の開始には，豊かな資源や援助の必要性が示唆された．

作業を中心とした教育プログラムへの示唆

晴子さんの分析結果から，作業を中心とした教育プログラムの立案や運営の際に，以下の6つの配慮が考えられた．①参加者の作業負担感のある作業など作業ニーズをあらかじめ調査しておき，その作業に関連する知識や体験を提供すること，②直に知識や体験が活用されなくとも，《今後の参考》となることもあるので，高齢期の作業移行を支援する代償法などを紹介し，作業ニーズが満たされる状況を継続するようにすること，③講義の際は具体的な作業の例を提示し，イメージしやすくすること，④参加者が自分の作業を認識し，検討する機会を設けること，⑤自分の作業を検討する際には，作業の形態の代償法の提案だけでなく，個人的価値や信念といった作業の意味も考えさせる機会を設けること，⑥資源の実用性や支援もできる体制やネットワークを構築しておくことであった．

本研究の制限と課題

本研究は，作業の知識と作業を通した体験がどのように活用されるか晴子さんそのもののプロセスを探索することに主眼を置いた事例の固有プロセスを理解したものである．しかし，高齢者が作業の知識や体験を自己の生活に活用するモデルケースとして参考になるであろう．プロセスの一般化や理論構築をするためには，今後，様々な作業中心の教育プログラムの参加者から多くの情報提供者を得て研究を進める必要がある．今回の分析では，価値観や信念が自己との作業の意味と比較し，作業と結びつく動機となる活用プロセスが語られた．本研究は，価値観や信念が活用プロセスにどのようにかかわるかに焦点を当てた研究ではないが，他のカテゴリーや背景に関係している可能性がある．今後，価値観・信念と活用プロセスの関連について理解を深めることは課題である．

引用文献

Bandura, A.(1986). *Social foundations of thought and action : a social cognitive theory*, New Jersey: Prentice-Hall.

Becker, M. H.,(1974). The Health Belief Model and Personal Health Behavior. *Health Education Monographs,* (2), 324-473.

Clark,F.,Parham,D.& Carlson,M. E.,et al.(1991). Occupational science: academic innovation in the service of occupational therapy's future. *The American Journal of Occupational Therapy*, 45(4), 300-310.

Clark,F., Azen,S.& Zemke,R.,et al.(1997). Occupational therapy for independent-living older adults: A randomized

controlled trial. *Journal of the American Medical Association*, 16, 1321-1326.

Dubouloz,C.,King,J.& Ashe,B.(2010). The process of transformation in rehabilitation: what does it look like? *International Journal of Therapy and Rehabilitation*,17 (11),604-612.

Fisher,A., Atler, K., & Potts, A.(2007). Effectiveness of occupational therapy with frail community living older adults. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 14(4), 240-249.

Green,L.,Kreuter,M.(神馬征峰・訳)(2005). *実践 ヘルスプロモーション* . 医学書院 .

Jackson,J.,Carlson,M.& Deborah,M.,et al.(1998). Occupation in lifestyle redesign: the Well Elderly Study Occupational Therapy Program. *The American Journal of Occupational Therapy* :52(5), 326-336.

Jackson, J., Mandel, D., & Blanchard, J.,et al.(2009). Confronting challenges in intervention research with ethnically diverse older adults: the USC Well Elderly II Trial. *Clinical Trials*, 6(1), 90-101.

Matuska, K., Giles-Heinz, A., & Flinn, N.,et al.(2003). Outcomes of a pilot occupational therapy wellness program for older adults. *The American Journal of Occupational Therapy* , 57(2), 220-224.

Prochaska, J. O., DiClemente, C. C., & Norcross, J. C.(1992). In search of how people change: Applications to addictive behaviors. *American Psychologist*, 47(9), 1102-1114.

Rosenstock, I. M. (1974). The Health Belief Model and preventive health behavior. *Health Education Monographs*, 2(4), 328-335.

Yamada, T., Kawamata, H., & Kobayashi, N.,et al.(2010). A randomised clinical trial of a wellness programme for healthy older people. *The British Journal of Occupational Therapy*, 73(11), 540-548.

Yerxa, E. J.(1990). An introduction to occupational science, a foundation for occupational therapy in the 21st century. *Occupational Therapy in Health Care*, 6(4), 1-17.

Zingmark, M., Fisher, A. G.,& Rocklöv, J., et al.(2014). Occupation-focused interventions for well older people: An exploratory randomized controlled trial. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 21(6), 447-457.

高木雅之， 吉川ひろみ， 近藤敏． (2011). 作業に焦点をあてた公開講座を通しての ヘルスプロモーション*人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌* , 11(1), 71-77.

佐藤郁哉 .(2008). *質的データ分析法―原理・方法・実践―* . 新曜社 .

世界保健機関 .(2005). *Bangkok charter for health promotion*. Geneva.

川又寛徳， 山田孝， 小林法一． (2012). 健康高齢者に対する予防的・健康増進作業療法プログラムの効果 ランダム化比較試験. *日本公衆衛生雑誌*, 59(2), 73-81.

日本健康教育学会編 .(2003). *健康教育 ヘルスプロモーションの展開* . 保健同人社 .

研究論文

作業療法学生における作業的公正／不公正の統計的実態とQOLとの関連
－質問紙による統計的調査の試み－

今井　忠則

群馬大学大学院保健学研究科リハビリテーション学講座

要旨:作業的公正／不公正に関する研究は，概念的理解の観点から探索的（質的）に検討された研究はあるが，一般の人々（集団）を対象とした定量的・実証的研究はその重要性にかかわらず研究されたものはほとんどない．本研究では①質問紙による統計的調査の実現可能性を検討すること，及び②集団における統計的実態（不公正状態を感じている人の割合）を明らかにすること，③他の健康指標（WHO QOL）との関連を明らかにすることの 3 つを目的とした．先行文献を基に，作業的公正（全般），作業剥奪，作業疎外，作業不均衡，作業周縁化（日常的選択，自律的選択）に関する質問を作成し，学生 151 名を対象に質問紙調査を実施した．調査の結果 142 名（94%）の回答があった．以下の割合（率）の学生が否定的認識（不公正 43.7%，剥奪 37.3%，疎外 16.2%，不均衡 56.3%，周縁化 22.5%，29.6%）を報告した．また，WHO/QOL-26 総得点との弱い～中程度の相関（全般;rs=.35，剥奪;-.26，疎外;-.41，不均衡;-.20，周縁化;-.34，-.23）（p<.05）が明らかとなった．

作業科学研究，10，56-67，2016.

キーワード：作業的公正，QOL，質問紙，社会的公正

Occupational Justice and Quality of Life in Occupational Therapy Students: A Questionnaire-based Survey

Tadanori Imai, OTR, Ph.D.

Department of Rehabilitation Science, Graduate School of Health Sciences, Gunma University

Abstract: The relationship between perceived occupational justice or injustice and other health indicators, such as quality of life (QOL), is an important issue in occupational science; however, very little research has been reported on this theme. This study aimed to investigate (in a sample of occupational therapy students) the percentage of respondents who feel that they are experiencing injustice in their daily lives and to explore the relationship between perceived occupational justice or injustice and scores on the World Health Organization QOL instrument (WHO/QOL-26). Based on a literature review, questions on occupational justice, occupational deprivation, occupational alienation, occupational imbalance, and occupational marginalization were developed, and a questionnaire comprising these questions was distributed to 151 students. Descriptive statistics and Spearman's correlation were used to characterize and evaluate the data. Completed questionnaires were received from 142 (94%) students. The following are the percentages of students who reported each of the negative feeling: occupational injustice, 43.7%; occupational deprivation, 37.3%; occupational alienation, 16.2%; occupational imbalance, 56.3%; and occupational marginalization, 22.5% and 29.6% on the two questions, respectively. The responses to these questions had the following correlations with the total score on the WHO/QOL-26: occupational justice, $r = 0.35$, $p < 0.001$; occupational deprivation, $r = -0.26$, $p < 0.01$; occupational alienation, $r = -0.41$, $p < 0.001$; occupational imbalance, $r = -0.20$, $p < 0.05$; occupational marginalization, $r = -0.34$, $p < 0.001$ and $r = -0.23$, $p < 0.01$, respectively. These results suggest that occupational injustice is a common health-related issue in daily life and indicate a positive correlation between occupational justice and QOL. These findings encourage the development of further relational studies on occupational justice and injustice in occupational science.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 56-67, 2016.

Keywords: occupational justice, quality of life, questionnaire, social justice

はじめに

作業的公正（occupational justice）とは，作業療法が潜在的に持っていた社会的見方であり（Townsend 他，2004），人々が意味のある作業に従事することができるための平等な機会と資源を記述する概念である（Townsend 他，2004，2007，Arnold 他，2010，吉川，2008）．社会学における社会的公正（social justice）は，社会的存在である人の社会的関係性に関心があり，平等な機会と資源の所有の公正さを問題としているのに対して，作業的公正は，作業的存在である人の健康や Quality of Life（QOL）に関心があり，個別の機会と資源の実現可能性を問題としていること等が相違点として挙げられている（Arnold 他，2010）．すべての人々の作業をする権利（occupational rights）が侵害されている状態（吉川，2008 , Wilcock 他 , 2014）や，日々の生活において意味のある作業が欠けている経験（Arnold 他，2010）を，作業的不公正（occupational injustice）という．不公正に含まれる概念は，現在も拡大・発展中であるが（エリザベス・タウンゼント他，2011），作業剥奪（occupational deprivation），作業疎外（occupational alienation），作業不均衡（occupational imbalance），作業周縁化（occupational marginalization）の 4 つが代表的である（Townsend 他，2004，2007，Arnold 他，2010，吉川，2008，Nilsson 他，2010）．

作業的公正／不公正に関する研究は，質的・理論的研究を中心に概念の創出と記述が行われてきた（Arnold 他，2010，Pierce，2013）．Townsend（1993）は，作業療法における公正という視点を提唱し，Wilcock と共に作業的公正の枠組みを提案した（Wilcock 他，2000）．そして，文献検討とワークショップを経て，作業的不公正の 4 つの状態を報告した（Townsend 他，2004）．その後，作業的公正／不公正の視点・概念は，世界中の作業療法士達の関心を引きつけ，カナダ作業療法士協会は作業的公正を作業療法の中核的概念の一つに位置づけるに至った（Townsend 他，2007）．また，世界作業療法士連盟（WFOT）は，人権に関する声明において，作業的に丁度良い社会（occupationally just society）を表明している（WFOT，2006）．以上のように，作業的公正／不公正は作業科学及び作業療法の主要なテーマの一つとなった．しかし，作業的公正及び関連用語の概念の明確性の欠如と，その実証的証拠の不足が指摘されている（Durocher 他 , 2014）．Pierce（2013）は，作業的公正／不公正を定量的に把握する方法を開発し，QOL 等の他の健康指標との関連を明らかにしていくことが，今後の作業科学の重要な研究課題の一つと指摘している．

作業的不公正の問題は，制約の多い特別な環境下（例えば，刑務所や少年院）における探索的（質的）検討がなされてきた（Whiteford, 1997, 永吉他 , 2013）．概念的理解を目的とした研究においては，その状態を特に経験していると想定される対象者を，意図的に選ぶことが重要であり，その意味で妥当な選択であった．しかし，作業的不公正は当初から，障害の有無や貧富の格差を超えたすべての人々に関連する問題であると想定されている（Wilcock 他 , 2014）．作業的不公正の適用範囲を一般の人々に拡大し，その健康への影響を実証的に示すには，様々な人間集団を対象とした疫学的研究の蓄積が求められる．

ところで，人々の意識や行動といった社会的事象を定量的に研究する方法として，社会学では質問紙による統計的調査がよく利用されている．この形式の調査は，対象者が記憶や意識をしているある程度の一般性のある意識や認識に適用できるとされる（盛山他，1992）．そして，作業的公正／不公正も，対象者が意識をしているある程度の一般性のある意識や認識と考えられ，質問紙による統計的調査が適用可能と考えられる．作業的公正／不公正に関する質問紙として，Occupational Justice and Health Questionnaire (OJHQ)（Wilcock 他 , 2014）が提案されている．しかし，OJHQ は実践的なチェックリスト又はガイドラインとしての使用を意図して開発されたものであり，定量的調査における使用を想定しておらず，その試みもなされていない．その他，これまでに作業的公正／不公正に関する統計的データに基づいた検討はほとんどなされていない．著者らは第 16 回作業科学セミナー（札幌，2012 年 7 月）にて，質問紙による定量的調査を報告した．本論はこの内容を一部含み，さらに分析を進めたものである．

以上のように，作業的公正／不公正に関する研究は，概念的理解の観点から探索的（質的）に検討された研究はあるが，一般の人々（集団）を対象とした定量的・実証的研究は，その重要性にかかわらず研究されたものはほとんどない．そのため，本研究では以下の 3 つの目的に対して検討を行った．①作業的公正／不公正に関する質問紙による統計的調査の実現可能性を検討すること，②集団（作業療法学生）における統計的実態（不公正状態を感じている人の割合）を明らかにすること，③他の健康指標（WHO QOL）との関連を明らかにすること．なお，QOL との関連の仮説は，「作業的公正は QOL と肯定的（不公正とは否定的）な関連がある」とし，その検証を行った．

方法

1．対象者と調査方法，倫理的配慮

医療系公立 A 大学の作業療法学専攻に所属する 1～4 年次学生 151 名を対象に，2011 年 11 月（長期の臨地実習中ではない通常の学期中）に，質問用紙を各学年の授業終了後に集合配布し，後日に所定の回収箱に投函する方法で，調査を実施した（回収数 142 部，回収率94.0%）．有効回答142名（男性39名，女性103名，平均年齢20.4±1.4歳，範囲18-26歳）を分析対象とした．倫理的配慮として，研究目的及び任意の無記名式調査であること，不参加による不利益が全くないことを，配布時に書面及び口頭にて説明した．そして，回収箱への任意の投函によって同意とみなした．

本研究において調査対象を作業療法学生の集団とした理由は以下の二点である．まず，目的①を踏まえ，作業の視点から生活を考えることに比較的馴染みのある対象者において，その回答率や分布を確認することが，統計的調査の実現可能性を検討するのに有効と考えられたからである．本対象において調査の実現可能性が確認できれば，一定の根拠を持って，今後，調査対象範囲を拡大することができるだろう．次に，目的②と③を踏まえ，作業療法学生という社会集団は，不公正状態をある程度経験しやすい構造（背景）を持っており，調査対象として適していると考えられたからである．一般に青年期は，職業選択やアイデンティティの形成において困難を経験しやすい年代であり，特に医療系学生は，特定の資格取得という明確な目標の下，自由度の低い相当量のカリキュラムが日々の義務的作業として課されている．そのため，学生の一定割合は不公正を感じていると推測される．中でも，作業療法学生は職業的アイデンティティの形成に困難を感じやすい傾向が報告されている（藤井他，2002）．

2．作業的公正／不公正の質問項目

質問紙の一般的な作成手順は，1）測定対象（操作的定義）を明確にする，2）項目の候補を収集する，3）予備データを収集する，4）項目を決定する，5）本調査を行なう，6）信頼性の検討，7）妥当性の検討である（鎌原他，1998）．合計得点を算出するような心理尺度の開発を目的とした場合は，項目プールを作成し，項目分析等の計量心理学的検討を経て，複数項目から構成される尺度を作成することが一般的である．一方で，ある意識の統計的実態（頻度や分布）を把握する目的の社会調査で使用する質問紙であれば，手順 4）までで十分とされる（鎌原他，1998，p.p.22-23）．本研究では，目的①，②を達成するために，各概念を単一の項目にて尋ねる質問紙の作成を試みた．また，目的③を達成するために，順序尺度（ordinal scale）レベルの回答方法を選択した．

まず，作業的公正（全般）及び，作業剥奪，作業疎外，作業不均衡，作業周縁化を先行文献の記述を基に操作的に定義した．そして，ワーディング等の質問紙作成における留意点（盛山他，1992，鎌原他，1998）を考慮しつつ，可能な限り定義の表現に沿うように質問文を作成した（表 1）．

表1. 作業的公正／不公正の操作的定義と質問項目

項目	操作的定義	質問文	回答選択肢
作業的公正（全般） occupational justice	「意味のある作業に人が従事できるための平等な機会と資源が満たされている状態」（吉川，2008／Arnold他，2010を参考に）	現在の生活を全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うための**平等な機会**（チャンス）**や資源**（物質や労働力などの総称）**がある**（一つに○）。	1.ない／2.どちらかというとない／3.どちらかというとある／4.ある
作業剥奪 occupational deprivation	「個人の意向とは関係のないところで，自分以外の要因により必要で意味のある作業を行うことが長期的に妨害されている状態」（Whiteford，2000/ Townsend他，2011を参考に）	全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うことが，**自分以外の要因**（周囲の影響など）**により，長期的**（一時的な中断でなく）**に妨害されている**（一つに○）。	4.当てはまる（妨害されている）／3.やや当てはまる／2.あまり当てはまらない／1.当てはまらない
作業疎外 occupational alienation	「本人にとって意味や価値のある作業の経験ができる権利が失われている状態」（Townsend他，2004／Arnold他，2010／Nilsson他，2010を参考に）	全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うことを，**自分で決定する権利**（自由）**がない**（一つに○）。	4.当てはまる（権利がない）／（3～1.上記同様）
作業不均衡 occupational imbalance	「行うべき作業が多過ぎたり，少な過ぎたり，特定の作業に偏っていたりする状態」（吉川，2008/ Stadnyk他，2010/ Durocher他，2014を参考に）	全般的にみて，自分が行うべき活動が，**多すぎたり，少なすぎたり，特定の活動に偏っていたりする**（一つに○）。	（4～2.同様）／1.当てはまらない（ちょうどよい）
作業周縁化 occupational marginalization	「作業に参加する日常的選択や意思決定をすることができない状態」（Townsend他，2004を参考に）	＜周縁化（日常的選択）＞ 自分にとって大切な多くの活動を，**自分では決められない状況ですか**（一つに○）。	4.当てはまる（決められない）／（3～1.同様）
		＜周縁化（自律的選択）＞ 自分にとって大事な活動が，**自分自身では分からない**（一つに○）。	4.当てはまる（分からない）／（3～1.同様）

次に，内容的妥当性を担保するため（鎌原他，1998），これらの操作的定義と質問項目の原案は，作業科学の学会にて公表され（今井他，2012），他研究者の意見を踏まえて一部修正された．回答選択肢は，各 4 件法の順序尺度とし，形容詞は織田（1970）を参考に等距離性に配慮して設定した．

作業的公正（全般）は，“occupational justice can be described as the equitable opportunity and resources to enable people’s engagement in meaningful occupations”（Arnold 他，2010，p.143），及び「理不尽な不当な差別を受けることなく，すべての人が自分と社会にとって意味のある作業ができるような状態」（吉川，2008，p.92）を参考に，本研究では，「意味のある作業に人が従事できるための平等な機会と資源が満たされている状態」と操作的に定義した．そして，質問文を「現在の生活を全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うための平等な機会（チャンス）や資源（物質や労働力などの総称）がある」とし，回答を「1. ない，2. どちらかというとない，3. どちらかというとある，4. ある」で求めた．

作業剥奪（occupational deprivation）は，“a state of prolonged preclusion from engagement in occupations of necessity, and/or meaning due to factors that stand outside the control of the individual”（Whiteford, 2000, p.201），及び「個人の意向とは関係ないところで，自分以外の要因により必要で意味のある作業を行うことが長期的に妨害されている状態である」（Townsend 他，2007，p.447）を参考に，「個人の意向とは関係のないところで，自分以外の要因により必要で意味のある作業を行うことが長期的に妨害されている状態」と操作的に定義した．そして，質問文を「全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うことが，自分以外の要因（周囲の影響など）により，長期的（一時的な中断でなく）に妨害されている」とし，回答を「4. 当てはまる（妨害されている），3. やや当てはまる，2. あまり当てはまらない，1. 当てはまらない」で求めた．

作業疎外（occupational alienation）は，“occupational alienation focuses on the right of populations as well asindividuals to experience meaningful, enriching occupations”（Townsend 他，2004，p.80），及び“Occupational alienation may occur when one’s right to experience occupation as meaningful and enriching is lost”（Arnold 他，2010，p.145），“social exclusion by restricting a population from experiencing meaningful and enriching occupations”（Nilsson 他，2010，p.58）を参考に，「本人にとって意味や価値のある作業の経験ができる権利が失われている状態」と操作的に定義した．そして，質問文を「全般的にみて，自分にとって大切な多くの活動を行うことを，自分で決定する権利（自由）がない」とし，回答を「4. 当てはまる（権利がない），3. やや当てはまる，2. あまり当てはまらない，1. 当てはまらない」で求めた．

作業不均衡（occupational imbalance）は，“At the individual level, occupational imbalance refers to excessive time spent occupied in one area of life at the expense of other areas.”（Stadnyk 他，2010, Durocher 他，2014, p.422），及び「行うべき作業がない，十分な作業がない，行うべき作業が過剰にあるといった不均衡がある状態」（吉川，2008，p.93）を参考に，「行うべき作業が多過ぎたり，少な過ぎたり，特定の作業に偏っていたりする状態」と操作的に定義した．そして，質問文を「全般的にみて，自分が行うべき活動が，多すぎたり，少なすぎたり，特定の活動に偏っていたりする」とし，回答を「4. 当てはまる，3. やや当てはまる，2. あまり当てはまらない，1. 当てはまらない（ちょうどよい）」で求めた．

作業周縁化（occupational marginalization）は，“Occupational marginalization speaks to the need for human to exert micro, everyday choices and decision making power as we participate in occupations”（Townsend 他，2004，p.81）を参考に，「作業に参加する日常的選択や意思決定をすることができない状態」と操作的に定義した．周縁化は，意味のある作業を日常的に選択し，決定するという側面（周縁化（日常的選択）と命名）と，その様な状態が続いた結果として，意味のある作業を自分自身で見出すこと自体が，難しくなった状態（周縁化（自律的選択）と命名）といった，時間感覚の異なる 2 側面が考えられた．そのため，周縁化は 2 つの質問文を作成した．質問 1)「周縁化（日常的選択）」は，質問文を「自分にとって大切な多くの活動を，自分では決められない状況ですか」とし，回答を「4. 当てはまる（決められない），3. やや当てはまる，2. あまり当てはまらない，1. 当てはまらない」で求めた．質問 2)「周縁化（自律的選択）」は，質問文を「自分にとって大事な活動が，自分自身では分からない」とし，回答を「4. 当てはまる（分からない），3 ～ 1 は同様」で求めた．

3. 基本属性及び活動・環境要因の質問項目

基本属性及び活動・環境要因（表 2）として，性別（0. 男性，1. 女性），年齢，学年（1，2，3，4 年），一人暮らし（1. はい，0. いいえ），課外活動の忙しさ；質問文「現在，アルバイトやサークル・部活動は，忙しいですか」（4. とても忙しい～ 1. 忙しくない），学業の忙しさ；

質問文「現在，学業（授業やグループワーク，実習）はどの程度，忙しいですか」（4. とても忙しい～ 1. 忙しくない），友人関係；質問文「現在の友人関係（友達づきあい）に満足していますか」（4. とても満足～ 1. 満足していない），経済状況；質問文「あなたの経済状況（仕送り・アルバイトを含む）はどの程度ですか」（4. とても余裕がある～ 1. 余裕がない）を質問した．

4. QOL指標

日本語版 WHO QOL 26（以下，WHO/QOL-26）を使用した．この尺度は国際的に使用されている包括的 QOL 評価尺度の一つであり，十分な信頼性と妥当性が報告されている（田崎他，1997）．WHO/QOL-26 は，4 領域（身体的領域，心理的領域，社会的関係，環境領域）の 24 項目と，全体を問う 2 項目の計 26 項目から構成されている．得点は，総合点（QOL 平均値），身体的領域，心理的領域，社会的関係，環境領域，全体が設定されている．本研究では，総合点及び 4 つの領域得点を使用した．回答は 5 件法で求め，各素点を合計したものを項目数で割り，平均点を算出する（各得点範囲 1-5 点）．得点が高いほど，QOL が良好であることを意味する．

5. データ分析

1）基礎的集計（記述統計）

質問項目の回答率（無答率）及び回答分布，不公正状態を感じている人の割合（統計的実態）を確認するために，各質問項目の記述統計量を算出した．

2）基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正の関連

基本属性及び活動・環境要因と，作業的公正／不公正の各質問との関連を検討するため，Spearman の順位相関係数による相関分析を行った．なお，2 値の変数である「性別」，「一人暮らし」は 0-1 のダミー変数として分析に投入した．

3）作業的公正／不公正と WHO/QOL-26 の関連

作業的公正／不公正の各質問と，WHO/QOL-26 の相関を検討するため，Spearman の順位相関係数による相関分析を行った．以上の分析は，統計ソフト IBM SPSS Statistics ver.19 を使用し，統計学的有意性は両側検定で $p<0.05$ を基準とした．

結果

1. 基礎的集計（記述統計）（図 1）

作業的公正／不公正の全ての質問項目に，無回答はなかった（回答率100%）．各項目の中央値（四分位範囲）は，作業的公正（全般）3.0（2.0-3.0），作業剥奪 2.0（2.0-3.0），作業疎外 2.0（1.0-2.0），作業不均衡 3.0（2.0-3.0），周縁化（日常的選択）2.0（1.0-2.0），周縁化（自律的選択）2.0（1.0-3.0）であった．また，一つの回答選択肢に 60%以上の回答が集中する項目はなく，順序尺度として良好な回答分布が確認された．

作業的公正（全般）の回答（度数；%）は，1. ない（5; 3.5%），2. どちらかというとない（57; 40.1%），3. どちらかというとある（70; 49.3%），4. ある（10; 7.0%）であった．否定的回答（1 と 2）の合計は 43.7% で，4 割強の学生が不公正状態を感じていた．

作業剥奪の回答（度数；%）は，4. 当てはまる（妨害されている）（7; 4.9%），3. やや当てはまる（46; 32.4%），2. あまり当てはまらない（73; 51.4%），1. 当てはまらない（16; 11.3%）で，否定的回答（3 と 4）の計 37.3%が不公正状態を感じていた．同様に，作業疎外の回答は，4. 当てはまる（権利がない）（1; 0.7%），3. やや当てはまる（22; 15.5%），2. あまり当てはまらない（82; 57.7%），1. 当てはまらない（37; 26.1%）で，計 16.2%が不公正状態を感じていた．作業不均衡の回答は，4. 当てはまる（14; 9.9%），3. やや当てはまる（66; 46.5%），2. あまり当てはまらない（45; 31.7%），1. 当てはまらない（ちょうどよい）（17; 12.0%）で，計 56.3%が不公正状態を感じていた．周縁化（日常的選択）の回答は，4. 当てはまる（決められない）（1; 0.7%），3. やや当てはまる（31; 21.8%），2. あまり当てはまらない（72; 50.7%），1. 当てはまらない（38; 26.8%）で，計 22.5%が不公正状態を感じていた．周縁化（自律的選択）の回答は，4. 当てはまる（分からない）（9; 6.3%），3. やや当てはまる（33; 23.2%），2. あまり当てはまらない（62; 43.7%），1. 当てはまらない（38; 26.8%）で，計 29.6%が不公正状態を感じていた．

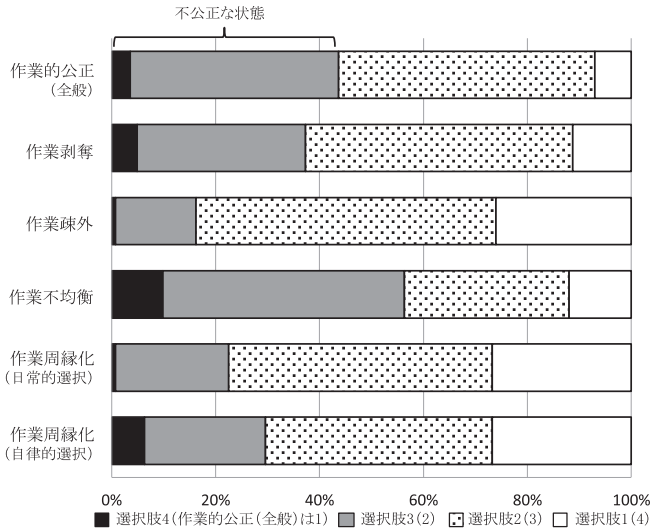


図1 作業的公正/不公正の回答分布と割合（n=142）

2. 基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正の関連（表 2）

順位相関分析の結果，性別と周縁化（日常的選択）に，わずかな負の相関（rs=-.17）が，同様に，年齢と周縁化（自律的選択）に弱い負の相関（rs=-.23），学年と周縁化（自律的選択）にわずかな負の相関（rs=-.17），課外活動の忙しさと作業不均衡に弱い正の相関（rs=.31），学業の忙しさと作業不均衡に弱い正の相関（rs=.20），友人関係と作業剥奪に弱い負の相関（rs=-.20），友人関係と作業疎外に弱い負の相関（rs=-.21）が認められた．

表2 基本属性・活動・環境要因，及び作業的公正/不公正との関連

基本属性，活動・環境要因[注1]		作業的公正/不公正との関連[注2]
性別(n=142)		周縁化(日常的選択)(rs=−.17)*
0. 男性	39(27.5%)	
1. 女性	103(72.5%)	
年齢(n=142)：平均±SD	20.4±1.4歳	周縁化(自律的選択)(rs=−.23)**
学年(n=142)		周縁化(自律的選択)(rs=−.17)*
1. 一年	36(25.4%)	
2. 二年	34(23.9%)	
3. 三年	38(26.8%)	
4. 四年	34(23.9%)	
一人暮らし(n=142)		n.s.
0. いいえ	104(73.2%)	
1. はい	38(26.8%)	
課外活動の忙しさ(n=133)		作業不均衡(rs=.31)***
4. とても忙しい	15(10.6%)	
3. やや忙しい	62(43.7%)	
2. あまり忙しくない	47(33.1%)	
1. 忙しくない	9(6.3%)	
学業の忙しさ(n=142)		作業不均衡(rs=.20)*
4. とても忙しい	22(15.6%)	
3. やや忙しい	83(58.9%)	
2. あまり忙しくない	31(22.0%)	
1. 忙しくない	5(3.5%)	
友人関係(n=142)		作業剥奪(rs=−.20)*
4. とても満足	51(35.9%)	作業疎外(rs=−.21)*
3. やや満足	81(57.0%)	
2. あまり満足していない	9(6.3%)	
1. 満足していない	1(0.7%)	
経済状況(n=142)		n.s.
4. とても余裕がある	5(3.5%)	
3. やや余裕がある	49(34.5%)	
2. あまり余裕がない	66(46.5%)	
1. 余裕がない	22(15.5%)	

注1）年齢を除き度数（有効%）
注2）Spearmanの順位相関係数，有意（p<.05）な関連のみ示した．
n.s.=not significant，*p<.05，**p<.01，***p<.001

3．作業的公正／不公正とWHO/QOL-26の関連（表3）

作業的公正（全般）と，WHO/QOL-26の総合点（rs=.35）及び身体的領域（rs=.23），心理的領域（rs=.30），環境領域（rs=.32）に，弱い正の相関が認められた．また，作業剥奪と，WHO/QOL-26の総合点（rs=-.26）及び環境領域（rs=-.25）に，弱い負の相関が認められた．同様に，作業疎外と，総合点（rs=-.41）及び身体的領域（rs=-.34），心理的領域（rs=-.20），社会的関係（rs=-.22），環境領域（rs=-.36）に，弱い～中程度の負の相関が認められた．作業不均衡と，総合点（rs=-.20）及び身体的領域（rs=-.30）に，弱い負の相関が認められた．周縁化（日常的選択）と，総合点（rs=-.34）及び身体的領域（rs=-.26），心理的領域（rs=-.23），社会的関係（rs=-.19），環境領域（rs=-.28）に，わずか～弱い負の相関が認められた．周縁化（自律的選択）と，総合点（rs=-.23）及び心理的領域（rs=-.34），社会的関係（rs=-.18）に，わずか～弱い負の相関が認められた．

表3　作業的公正／不公正とWHO/QOL-26の関連

	WHO/QOL-26				
	総合点 (n=129)	身体的領域 (n=138)	心理的領域 (n=134)	社会的関係 (n=139)	環境領域 (n=138)
作業的公正（全般）	0.35***	0.23**	0.30**	0.16	0.32***
作業剥奪	-0.26**	-0.16	-0.12	-0.15	-0.25**
作業疎外	-0.41***	-0.34***	-0.20*	-0.22**	-0.36***
作業不均衡	-0.20*	-0.30***	-0.12	0.02	-0.09
作業周縁化；					
日常的選択	-0.34***	-0.26**	-0.23**	-0.19*	-0.28**
自律的選択	-0.23**	-0.12	-0.34***	-0.18*	-0.14

Spearmanの順位相関係数　＊ $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$

考察

1．作業的公正／不公正に関する質問紙による統計的調査の実行可能性

本研究で作成した質問項目は，順序尺度（ordinal scale）として良好な回答の分散が確認され（結果1，図1），ある意識の統計的実態を把握する目的の社会調査（鎌原他，1998）での使用は，十分に可能と考えられる．内容的（表面的）妥当性に関しては，表1に示したとおり，先行研究に基づき可能な限り忠実に質問化しているので，本研究における操作的定義を採用するのであれば十分と考えられる．なお，研究の限界において後述するが，各概念については別の解釈もありうる．また，他の指標との関連に基づく妥当性（構成概念妥当性）は，後述の基本属性・活動・環境要因及び，WHO/QOL-26との関連において，おおむね論理的に想定されるような関連が認められたことから，一定程度は確認されたといえる．以上から，作業療法学生を対象に，本研究で作成した質問項目を使用して，作業的公正／不公正に関する質問紙による統計的調査の実行は可能と考えられる．今後は，他の集団への適用の検討及び，信頼性と妥当性のさらなる検討が必要である．本質問紙で測定できる変数の尺度水準は，順序尺度レベルであり，基礎的集計に加えクロス表分析や順位相関分析といったノンパラメトリック（nonparametric）の統計分析法を使用することができる．ただし，合計得点を算出することや，パラメトリックな統計分析法を使用することは，現時点では想定していないことに留意する必要がある．間隔尺度レベルに準じたいわゆる心理尺度の開発には，計量心理学的検討が別途必要である（鎌原他，1998）．

2．作業療法学生集団における統計的実態（不公正状態を感じている人の割合）

調査結果から，「どちらかというと」や「やや」といった軽い程度まで含めると，一定割合（作業的公正（全般）4割強，作業剥奪4割弱，作業疎外2割弱，作業不均衡6割弱，周縁化（日常的選択）2割強，周縁化（自律的選択）約3割）の人が，不公正状態を感じていることが明らかとなった（図1）．作業療法学生は，自由度の低い相当量のカリキュラムが日々の義務的作業として課されており，一定割合の学生が不公正状態を感じているこ

とが推測された．実際，作業不均衡の割合が比較的高いことは，この意味で妥当な結果といえる．これらの不公正状態を感じている人の割合が，本対象集団の特異的傾向なのか，それとも一般的傾向なのかは，比較可能な統計的データがない現時点では不明である．今後，社会的背景の異なる他の集団の統計的調査が求められる．また，軽くない程度（選択肢1又は4）を報告している人が，1割未満（0.7%～9.9%）ながら存在していることにも注意をはらう必要がある．今後，質的調査によって（調査の記名化の課題はあるが），不公正状態の個別・具体的内容を検討することが教育的対応を考える上で求められる．本調査結果は，不公正状態は，日々の生活状況下において誰もが経験する一般的な問題である可能性を示唆している．その意味で，本研究結果は，作業的不公正はすべての人々に関連する問題（Wilcock 他，2014）という前提を支持する．本結果を踏まえると，健康状態や経済的・環境的要因に，より重大な制約がある集団（例えば，長期入院患者や被災者）の場合には，不公正を感じている人の割合がより高いことが予測される．

3．基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正の関連について

基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正の間で，統計学的に有意な程の関連が認められた組み合わせは以下の7つであった（表2）．1）性別と周縁化（日常的選択）に，負のわずかな相関が認められた．この関連は，男性の方が周縁化（つまり，大切な活動を自分では決められない状況）を感じている程度が強いことを意味している．対象集団において男性が性的に少数派であること（男女比3:7）や，性格傾向の違いといった要因が影響しているのかもしれない．また，2）年齢及び3）学年と，周縁化（自律的選択）に，負のわずか～弱い相関が認められ，年齢・学年が高くなるにつれて，「大事な活動が自分自身では分からない」と感じている程度が低くなる傾向が示された．この傾向は，加齢による成熟や医療系学生として高学年になるに従って，専門科目の修得や臨床実習の遂行を自身の大事な活動として位置づける者が増えるためではないかと考えられる．4）課外活動及び5）学業の忙しさと，作業不均衡には，わずか～弱い正の相関が認められた．つまり，課外活動や学業が忙しいと感じている人ほど，作業不均衡を強く感じている傾向が見出された．この関係性は，作業不均衡の定義（表1）と照らし合わせて容易に了解できる結果である．6,7）友人関係と作業剥奪及び作業疎外で，わずかな負の相関が認めたれた．つまり，友人関係に十分に満足していない人ほど，作業剥奪及び作業疎外の状態を感じている程度が強い傾向を意味する．このことは大学生という青年期の若者にとって，友人関係の重要性を示唆しているといえるだろう．と同時に，作業剥奪及び作業疎外の状態に置かれているために，その結果として，満足な友人関係を持つことができていないという相互関係も考えられる．

以上のように，基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正は，いくつかの関連が認められ，かつ，その関係性は概ね論理的に妥当であった．しかし，全体的に眺めると，関連が認められない組み合わせの方が多いことに，より注意を向けるべきである．例えば，作業的公正（全般）に関しては，取り上げた全ての要因で関連が認められず，また，環境要因の「一人暮らし」と「経済状況」とは，いずれの不公正状態とも関連が認められなかった．これらの全体的な傾向を考慮すると，基本属性及び活動・環境要因と作業的公正／不公正との関連は，限定的であると考えた方が妥当である．

4．作業的公正／不公正とWHO/QOL-26の関連について

WHO/QOL-26総合点と，作業的公正（全般）に弱い正の相関が，作業剥奪，作業疎外，作業不均衡，周縁化（日常的選択，自律的選択）とは弱い～中程度の負の相関が認められた（表3）．従って，本研究におけるQOLとの関連の仮説，「作業的公正はQOLと肯定的（不公正とは否定的）な関連がある」は支持されたといえる．以下，各不公正の概念と4つのQOL領域との関連を中心にその関連の妥当性を考察する．

作業剥奪は，QOL環境領域と弱い負の相関が認められた（表3）．Townsend他（2007）は，作業剥奪について，個人ではなく環境からの制限の影響で生じる（p.109）と述べている．Whiteford（2010）は，個人の制御できない外的要因として社会的・経済的・環境的・地理的・歴史的・文化的・政治的を含む可能性を，また，Arnold他（2010）は，就業・交通機関・社会サービス・貧困との関連を説明している．一方，QOL環境領域は，安全や治安に対する感覚を問う「自由・安全と治安」や，人が自分の環境に抱いている見解を問う「生活圏の環境（公害・騒音・気候）」といった項目で構成されており，主に外的な要因に関連する領域とされる（田崎他，1997）．以上のように，外的要因によって生じると想定される作業剥奪と，QOL環境領域に関連が認められたことは，妥当な結果と考えられる．

作業疎外は，QOLの4領域すべてと弱い負の相関が認められ，かつ，総合点と中程度の負の相関が認められ

た（表 3）．WHO の QOL 概念は，「個人が生活する文化や価値観の中で，目標や期待，基準および関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識」と定義され，身体的・精神的な自立のレベルや，社会関係・信念・環境などの側面との関わりを取り入れた広範囲な概念であると説明されている（田崎他，1997）．他方，作業疎外は，「自分の生活をコントロールできず，意味のなさや目的のなさを経験すること」や「個人の能力やひらめきに合うやり方ができない場合」（Townsend 他，2007，p.108）と説明されており，内的及び外的要因に関わらず，自分自身の作業的権利についての広範囲な認識と考えられている．従って，作業的権利についての広範囲な認識である作業疎外が，QOL の全領域と関連が認められたことは，妥当な結果と考えていいだろう．

作業不均衡は，QOL 身体的領域のみに弱い負の相関が認められた（表 3）．作業不均衡は，個人レベルでは，一つの領域に占められる過度な時間の費やし（例えば，家族の時間を犠牲にして仕事時間に過度に費やすこと）や，作業のタイミングが個人的又は生理的ニーズやルーティンとずれている場合（例えば，夜勤の仕事）に生じ得るとされる（Durocher 他 , 2014）．また，作業不均衡は，セルフケア・遊び・仕事・休息のバランスが健康的生活には必要という，作業バランスの視点を含んでいる（Townsend 他，2007）．他方，QOL 身体的領域は，日常活動を行う能力を問う「日常生活動作」や，十分な睡眠と休養を問う「睡眠と休養」といった項目で構成されている（田崎他，1997）．この具体的な活動の遂行状況を尋ねている QOL 身体的領域と，作業不均衡に関連が認められたことは，了解できる結果といえよう．しかし同時に，QOL の社会的領域及び環境領域との関連が，ほぼ無相関であったことも特徴的である．つまり，作業不均衡の状態には，外的要因の影響が小さいことが示唆される．なお，作業不均衡には，機会や雇用の均等といった社会的レベルでの見方もあり（Townsend & Wilcock, 2004），今回の社会的領域及び環境領域との関係性のなさは，個人レベルの見方を採用した本質問項目に起因する傾向の可能性もある．

作業周縁化は，意味のある作業を日常的に選択し，決定するという側面を問う（日常的選択）と，その様な状態が続いた結果として，意味ある作業を自分自身で見出すこと自体が難しくなった側面を問う（自律的選択）の，2 側面で質問項目化した．時間感覚の異なるこの 2 側面は，心理学的には状態（state）と特性（trait）の視点（肥田他，2000）から説明できる．つまり，日常的選択は，環境下における今現在の自己選択（決定）の状態（state）を問うているのに対して，自律的選択は，ある程度固定された心理的な特性（trait）を問うていると考えられる．この意味で，状態（state）を問うている周縁化（日常的選択）が，現時点での人生についての認識である QOL の全領域と関連が認められ，一方で，特性（trait）を問うている周縁化（自律的選択）が，QOL 心理的領域と特に強い関連が認められたことは，妥当な結果と考えられる．なお，QOL 心理的領域は，自己の能力や自己に対する満足感・制御能力を問う「自己評価」や，自分の生活をどのくらい意味のあるものと感じているかを問う「精神性・宗教・信念」といった項目で構成されている（田崎他，1997）．本研究では，作業周縁化を 2 つの側面に分けたが，単一の概念として取り扱う方がより適切との意見もあるかもしれない．また，作業周縁化は，慣習や伝統といった非公式の規範や期待から生じる作業への参加の制限という見方（Durocher 他 , 2014）もあり，別の表現での質問化もありうる．作業周縁化は，他の不公正の概念と比べても定義が不明瞭な印象があり，今後の概念的な検討が待たれる．

5．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として，まず，操作的定義及び質問文の内容的（表面的）妥当性の限界が挙げられる．作業的公正／不公正の各概念の定義は明確には定まっておらず（Durocher 他 , 2014），本研究における操作的定義とそれに基づく質問文（表 1）は，現時点における解釈の一つであり，別の解釈もありうる．例えば，作業疎外については，本研究では「作業の経験ができる権利（自由）」の意味合いを重視した解釈を採用したが，「無意味または無目的とみなす作業への制限された（または強制された）参加」（Stadnyk 他，2010）といった，作業への参加の意味合いをより重視した解釈も可能である．また一方で，作業不均衡や作業周縁化については，本研究では作業への参加の意味合いを重視した解釈を採用したが，別に，社会レベルでの権利や機会の制限（Townsend 他，2004，Durocher 他，2014）の観点からの解釈もありうる．今後，別の解釈に基づく質問項目も作成し，定量的な観点からも構成概念妥当性を比較検討することが，定義の明確化に有用と考えられる．また，作業的公正／不公正の概念は現在も拡大・発展中であり（エリザベス・タウンゼント他，2011），新しく提唱された不公正の概念を加えていく必要が生じる可能性もある．

次に，本研究の対象は，限定的な集団であり，得られた知見の直接的一般化の範囲には限界がある．本研究で示された統計的調査の実現可能性や，関連要因及び

QOL との関係性は，本研究対象（集団）に限定される．しかし，同じような相当量のカリキュラムが義務的作業として課されている医療系学生といった，類似した対象に当てはめて考える際には有効性を発揮しうる．さらに，より制約の大きい環境下の対象（例えば，施設入所者や被災避難者）を想定した場合，本研究結果を踏まえると，より多くの人々が不公正状態にあることが予測される．その他，作業的不公正の問題は，様々な年齢・社会集団で存在すると考えられ，今後，本研究を踏まえて，様々な社会集団を対象に統計的調査を行なうことが必要と考えられる．

最後に，本研究では WHO QOL との関連を検証したが，他の健康指標や環境要因との関連を検証していくことも，今後の重要な課題である．例えば，抑うつ等の精神健康との関連を検証することで，自殺の問題等に作業的不公正の視点から提言をすることが可能になるかもしれない．また，新入社員の離職率（定着率）や，大学生の退学率等との関連，長期入所施設の環境要因との関連なども興味深い課題である．

以上のような研究の限界が存在するが，これらは本研究の意義を損なうものではなく，作業的公正／不公正に関する調査法の開発，及び，定量的・実証的研究をさらに深める必要性を示唆するものである．本研究は，作業的公正／不公正の定量的研究の予備研究（pilot study）に位置づけられ，今後，方法論も含めてより洗練させていくことが期待される．そして，作業的公正／不公正に関する今後の関係的な研究（relational research）と，予測的研究（predictive research）（Pierce, 2013）に繋がることが期待される．

まとめ

本研究では，以下の 3 つの目的に対して検討を行った．①作業的公正／不公正に関する質問紙による統計的調査の実現可能性を検討すること，②集団（作業療法学生）における統計的実態（不公正状態を感じている人の割合）を明らかにすること，③他の健康指標（WHO QOL）との関連を明らかにすること．先行文献を基に，作業的公正（全般），作業剥奪，作業疎外，作業不均衡，作業周縁化（日常的選択，自律的選択）に関する質問項目を作成し，作業療法学生 151 名を対象に質問紙調査を実施した．その結果，目的①に対しては，作成した質問項目は良好な回答率と順序尺度として十分な分散を示し，また，内容的妥当性と構成概念妥当性が一定程度確認され，質問紙による統計的調査は可能と結論した．目的②に対しては，軽い程度まで含めると一定の割合（作業的構成（全般）4 割強，作業剥奪 4 割弱，作業疎外 2 割弱，作業不均衡 6 割弱，周縁化（日常的選択）2 割強，周縁化（自律的選択）約 3 割）の学生が不公正状態を感じていることが明らかとなった．目的③に対しては，WHO/QOL-26 総合点と作業的公正（全般）に弱い正の相関が，作業剥奪，作業疎外，作業不均衡，周縁化（日常的選択，自律的選択）とは弱い〜中程度の負の相関が認められ，「作業的公正は QOL と肯定的（不公正とは否定的）な関連がある」ことが明らかとなった．本研究の限界として，各概念の操作的定義及び質問文の内容的妥当性，知見の直接的一般化の範囲が挙げられた．今後の課題として，作業的公正／不公正に関する調査法のさらなる開発，調査対象の拡大，他の指標・要因との関連の検討が挙げられた．

文献

Arnold, M.J. & Rydski, D. (2010). Occupational Justice. In Scaffa, M.E. (Eds.), *Occupational therapy in the promotion of health and wellness*. Philadelphia: F. A. Davis. pp.135-156.

エリザベス・タウンゼント，吉川ひろみ（2011）．作業的公正の可能性－病院での実践．*作業療法*, 30, 671-681.

Durocher, E., Gibson, B.E. & Rappolt, S. (2014). Occupational justice: A conceptual review. *Journal of Occupational Science, 21*, 418-430.

藤井恭子 , 野々村典子 , 鈴木純恵 , 澤田雄二 , 石川演美 , 他 (2002). 医療系学生における職業的アイデンティティの分析 . *茨城県立医療大学紀要* , 7, 131-142.

肥田野直，福原眞知子，岩脇三良，曽我祥子，C.D. Spielberger（2000）. *新版 STAI マニュアル* . 実務教育出版.

今井忠則，下条真穂（2012）．作業療法学生における作業的公正－質問紙による定量的調査の試み．*第 16 回作業科学セミナープログラム抄録集*, 52-53.

鎌原雅彦，宮下一博，大野木裕明，中澤 潤（1998）．*心理学マニュアル質問紙法*．北大路書房.

盛山和夫，近藤博之，岩永雅也（1992）. *社会調査法*. 放送大学教育振興会.

永吉美香 , 土田玲子 (2013). 少年院における作業経験に関する作業公正／不公正の観点からの探索 . *作業科学研究*, 7, 7-18.

Nilsson, I. & Townsend, E.A. (2010). Occupational justice: Bridging theory and practice. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 17, 57-63.

織田揮準 (1970). 日本語の程度量表現用語に関する研

究 . *教育心理学研究* , 18(3), 166-176.

Pierce, D. (坂上真理・訳) (2013). Building occupational science. (作業科学の構築) . *作業科学研究* , 7, 2-6.

Stadnyk, R.L., Townsend, E.A. & Wilcock, A.A. (2010). Occupational justice. In Townsend, E.A. & Christiansen, C.H. (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living 2nd ed*. Upper Saddle River, NJ, Pearson. pp. 329-358.

田崎美弥子， 中根よし文（1997）. *WHOQOL26 手引改訂版* . 金子書房.

Townsend, E.A. (1993). Occupational therapy’s social vision. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 60 (4), 174-184.

Townsend, E.A. & Polatajko, H.J. (2007). *Enabling occupation* Ⅱ*: Advancing an occupational therapy vision for health, well-being and justice through occupation.* CAOT Publications ACE, Ottawa.

Townsend, E.A. & Polatajko, H.J. (吉川ひろみ， 吉野英子・監訳) (2011). *続・作業療法の視点－作業を通しての健康と公正* . 大学教育出版. pp.107-113.

Townsend, E.A. & Wilcock, A.A. (2004). Occupational justice and client-centered practice: A dialogue in progress. *Canadian Journal of Occupational Therapy, 71*, 75-87.

Whiteford, G. (1997). Occupational deprivation and incarceration. *Journal of Occupational Science, 4*, 126-130.

Whiteford, G. (2000). Occupational deprivation: Global challenge in the new millennium. *British journal of occupational therapy, 63*(5), 200-204.

Whiteford, G. (2010). Occupational deprivation: Understanding living participation. In Townsend, E.A. & Christiansen, C.H. (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living 2nd ed*. Upper Saddle River, NJ, Pearson. pp. 303-327.

Wilcock, A.A. & Townsend, E.A. (2000). Occupational justice. *Journal of Occupational Science, 7*, 84-86.

Wilcock, A.A. & Townsend, E.A. (2014). Occupational justice. In B. A. B. Schell, G. Gillen, M. E. Scaffa (Eds). *Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed*. Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins. pp. 541-552.

World Federation of Occupational Therapists. (2006). Position statement human rights. ＜http://www. wfot. Org/ ResourceCentre. aspx＞参照日 2016.07.12.

吉川ひろみ (2008).*「作業」って何だろう－作業科学入門* . 医歯薬出版. pp.91-94.

短報

プレイバックシアターのストーリーにおけるテラー経験

小森亜紀[1)]，吉川ひろみ[2)]

1) 劇団プレイバッカーズ，2) 県立広島大学保健福祉学部

要旨：プレイバックシアター（PBT）は，観客の中の有志がテラー（語り手）として自分自身の体験を語り，それをアクターが打ち合わせなしに演じる即興劇である．テラーはコンダクター（進行役）のインタビューを受け，自身の体験を語る．このように，プレイバックシアターは，テラー，コンダクター，アクターなど異なる役割の人々が協働することによって成り立つ．本研究の目的は，「PBT のテラーをする」という作業をした人々の主観的経験を明らかにすることである．PBT 公演またはワークショップでのテラー経験者 7 名に，インタビューを行い，質的に分析した．その結果をもとに質問紙を作成し，ワークショップでストーリーのテラーとなった参加者 54 名から回答を得た．回答者の 90％以上が，コンダクターからのインタビュー時に過去の場面が蘇り，感情が高まり，話しながら気づくことがあった．上演中には，再び過去の場面が蘇り，感情が高まっていた．さらに，自分の思いをアクターや観客と共有できたと感じていた．上演後は，自らの経験を再確認でき，気持ちがすっきりし，未来に向かう力がわいたと回答した．テラーをすることは，カタルシスのような心理的効果があると共に，PBT の場を共有する他者との連帯感を経験する機会になると考えられた．

作業科学研究，10，68-72，2016.

キーワード：プレイバックシアター，語り手，主観的経験

Short Report

The experience of being a teller in a story of Playback Theatre

Aki KOMORI[1)], Hiromi YOSHIKAWA[2)]

1) Playback AZ, 2) Prefectural University of Hiroshima

Abstract：Playback Theatre (PBT) is an improvisational theatre. A conductor (master of ceremonies) interviews one of the audience members, then actors enact the story on the spot. The effectiveness of PBT is based on the collaboration of teller, conductor and performers. The purpose of this study is to explore the teller's subjective experience in PBT. We took two steps to investigate tellers' experiences. As a first step, seven persons were interviewed about their experience after being a teller. Data were analyzed qualitatively. As a second step, we investigated tellers' subjective experience using a questionnaire. 54 persons who attended PBT workshops and became tellers responded to the questionnaire. The results showed that over 90% of the tellers experienced a feeling of vividly recalling the past. When interviewed by the conductor, they experienced deep emotion and new awareness. During the enactment of their story, they once again experienced a feeling of recalling their past, as well as deep emotion, and empathy from performers and audiences. After the enactment, they felt refreshed and empowered to step forward into their future. Being a teller will have psychological effects, such as catalysis, recognition and a sense of solidarity.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 68-72, 2016.

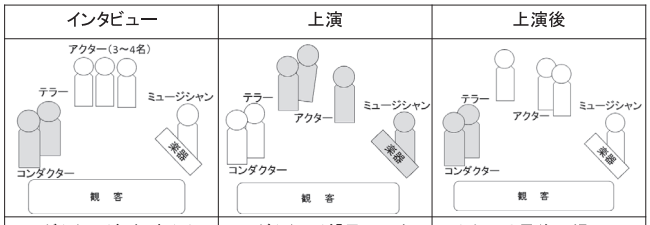
Keywords: Playback Theatre, teller, subjective experience

はじめに

プレイバックシアター（Playback Theatre，以下 PBT）は，1970 年代に Jonathan Fox が創出した即興劇である．Fox が目指したのは「コミュニティーの回復」を行う演劇であり（宗像，2006），人々のストーリーを通して，社会の対話をひろげていくことが PBT の重要な目的である（吉川，2013）．PBT の全体像を表1に示した．PBT には，動く彫刻やペアズなど多様な手法があるが，主な手法はストーリーである．ストーリーの概要を図1に示した．ストーリーでは，進行役であるコンダクターが，観客の中から自身の個人的経験を舞台上で語るテラーを募る．コンダクターは舞台上で，テラーのストーリー（経験）をインタビューする．その後，テラーの語りをもとに，アクターが即興劇としてストーリーを演じ，ミュージシャンが楽器を使って音楽を添える．テラーが語るストーリーには，テラーが，いつ，どこで，何をしたかが含まれており，テラーの人生にとって意味深い作業が語られることが多い．Rowe（2004）は，PBT がもつ「今ここで」という特性が，行うこと（doing）に注目する作業と深く関連があると述べ，PBT についての考察をしているが，考察の対象となっているのは，アクターとコンダクターである．本研究は，テラーに焦点を当て，「PBT のテラーをする」という作業に含まれる，ストーリーを語る活動，ストーリーの上演を観る活動によって得られるテラーの主観的経験を明らかにすることを目的とした．

表1 プレイバックシアターの全体像

役割	コンダクター		進行役．テラーにインタビューする
	アクター		テラーの気持ちやストーリーを演じる
	ミュージシャン		ストーリーに音楽を付ける
	テラー		気持ちや経験を語る
	観客		上演やインタビューを観る
手法	ショートフォーム（主なもの）	動く彫刻	気持ちを，繰り返す動きと声で表現する
		ペアズ	同時に起こる異なる気持ちを，アクターが二人一組で演じる
		タブロー	いくつかの場面を静止画のようにアクターが表現する
	ストーリー		テラーがストーリーを語りアクターが演じ，ミュージシャンが音楽を奏でる
開催形態	公演		観客の有志がテラーになって語り，劇団員のアクターが演じる
	ワークショップ		参加者がテラー，アクター，ミュージシャンを経験する



インタビュー	上演	上演後
コンダクターが，観客からテラーとなる人を募り，インタビューする．テラーは自分の経験を語る．	コンダクターが「見てみましょう」と言った後，ミュージシャンが音楽を奏で，アクターが，テラーのストーリーを演じる．	アクターは最後の場面で静止した後，リラックスしてテラーを見る．コンダクターがテラーの感想を聞き，観客席へ戻す．

図1 プレイバックシアターの主な手法であるストーリーの概要

方法

テラーの主観的経験を明らかにするために，質的研究と質問紙による調査の二つの研究を行った．

1．質的研究

テラーの主観的経験を深く理解し整理するために，質的記述的研究法を採用した．対象は，テラー経験が 3 回以内で PBT 公演またはワークショップでテラーになった男性 2 名，女性 5 名の7名である．データ収集は，半構造化インタビューで行い，「今回のテラー体験で一番印象的だったこと」，「語った出来事に対する捉え方の変化」「テラーになる意味」を聞いた．必要に応じて適宜質問を追加した．インタビュー時間は 9 ～ 28 分であった．

インタビューは，PBT 実践者の養成校であるスクール・オブ・プレイバックシアター日本校を卒業した後，同校にて 2 年間の講師経験をもち，13 年間劇団に在籍し公演や指導を行うなど，PBT について熟知する筆頭研究者が行った．また，インタビュアーはインタビューに先立ち，対象者がテラーとなった PBT にコンダクターまたは企画者として参加しており，対象者のストーリーやその上演内容についての知識を有していた．

インタビュー中の会話を録音し，逐語録を作成し，これをデータとした．データ分析は，グラウンデッドセオリーアプローチを指針とした（戈木，2005）．インタビューが終了するごとに，一人ひとりの参加者の逐語録を研究者が各自読み，研究者の一人が一つの意味ごとにデータを切片化し，切片ごとにプロパティとディメンションを付けた後にラベル名を付けた．ラベル名を付けた研究者以外の研究者がデータとラベルを照合し，異論がある場合は合意に達するまで協議した．最初の 3 名が終了した時点で，ラベルの類似性に基づき，大カテゴリーとサブカテゴリーを抽出した．

倫理的配慮として，インタビュー前に，研究の目的，データの匿名性を確保すること，知り得た情報を研究目的以外に使用しないこと，いつでも研究を辞退できることを，口頭と書面にて説明し，研究参加の同意を口頭と書面で得た．

2．ワークショップでのテラー経験者への質問紙調査

上記の質的記述的研究法で明らかになったテーマが他の者にも同様に現れるかを確認するため，2014 年 8 月から

2016 年 7 月に，筆者がコンダクターを務めた 13 回の PBT ワークショップに参加し，ストーリーのテラーを経験した者を対象とし質問紙を配布した．質問紙は，質的研究の結果で抽出されたカテゴリーに対し，自分の経験を照らし合わせ，「とてもそう思う」，「まあそう思う」，「あまり思わない」，「全く思わない」のうちの該当するものを記すよう依頼した．回答は匿名とし，質問紙には結果を関連分野の学会や学術誌で発表する旨を記載した．

結果および考察

1．テラーの経験の枠組み

分析の結果，大カテゴリーとして，【過去への接近】，【過去の再来】，【共有】，【過去の捉え直し】の 4 カテゴリーが抽出された（表2）．以下，大カテゴリーを【　】，サブカテゴリーを＜　＞，対象者の言葉を「　」を用いて記す．

1）【過去への接近】：本カテゴリーは，テラーが自分の体験を語るという活動に関わる主観的経験である．サブカテゴリーとして，＜語りの焦点を絞るタスク＞，＜過去の場面の想起＞，＜（インタビュー中の）感情の高まり＞，＜気づき＞が抽出された．テラーは，コンダクターのインタビューに答えることを通して自分のストーリーを語る．これにより，自分の経験の*「凝縮をテラーが自分の手でする」*過程が生じ，語りの焦点を絞る必要があった．また，過去に起きたことを*「絵のように」*思いだし，*「泣く」*など感情の高まりを経験していた．

また，テラーは語りを通し，*「まだそんなに感情が残っていた」*というように新たな気づきを得ていた．

2）【過去の再来】：本カテゴリーは，自分が語ったストーリーをアクターが演じるのを観る活動に関わる主観的経験である．サブカテゴリーとして，＜場面や人との再会＞，＜（上演中の）感情の高まり＞，＜離れた視点＞が抽出された．

テラーは上演中，*「人の顔とか言葉のやりとりとか自分の記憶より鮮明に目の前に出てくる」*と感じ，場面や人との再会をしていた．また，アクターの言葉や演じる様子に感情の高まりを経験していた．

一方，感情の高まりを覚えながらも，テラーは上演を観ることで*「自分と切り離して物語を見れる」*と感じた．自分のストーリーを，自分以外の登場人物を含めた再現劇として外から観ることで，離れた視点で捉える体験をした．

3）【共有】：テラーの主観的経験の第 3 のカテゴリーは，【共有】である．サブカテゴリーとしては，＜上演内容の評価＞，＜アクターへの思い＞，＜経験や思いの共有＞が抽出された．テラーは，アクターによる上演について，

表2　テラーの主観的経験についての質的研究の結果

大カテゴリ	サブカテゴリ	語りの例
過去への接近	語りの焦点を絞るタスク	*どこで起こったことですか？ひとことで言うとなんですか？っていう，その凝縮をテラーが自分の手でする必要がある*
	過去の場面の想起	*場面を話しながら絵が浮かんだというか，あのときの自分の体験した場面や状況や人が，それこそプレイバックじゃないけど，思い起こされました*
	（インタビュー中の）感情の高まり	*自分がとても，そのときに泣いていたんですけど，そのピントがシュって合ったときにすごい自分が反応したなって思ったんですね*
	気づき	*自分にそのことに関してまだそんなに沢山の感情が残っていたんだということが印象的だった*
過去の再来	場面や人との再会	*ずいぶん前の話なのに，再現している人の顔とか言葉のやりとりとか，自分の記憶よりずっと鮮明に目の前にでてきた*
	（上演中の）感情の高まり	*今思い起こすと，特に最後の部分の僕を演じていた方の言葉だったり，演じるさまそのものにはすごく感情移入したというか，あのときの自分と重ね合わせるものがあって*
	離れた視点	*普通は自分の経験は主観でしか見れないのに自分の経験を客観の位置から見れるっていうのがなんか違う経験だったので，ちょっと自分と切り離して物語を見れるっていう気持ち*
共有	上演内容の評価	*全くの再現ではないので，私と彼のやったやりとりとは，見ようによっては違うんです．－中略－微妙に違ったんだけど，お互い真剣にやっていた部分は共通*
	アクターへの想い	*一生懸命演じてくれてありがたいなと思いました*
	経験や思いの共有	*あの場で場所を借りて話をできて，いろんな人に聴いてもらえた，共有してもらえたというところも意味があるだろうし*
過去の捉え直し	確認と再解釈	*過去の自分の経験を話したんですけど，その時にその状況を納得していたつもりだったのに，こうだったのではないか，とまとめ直すというか，解釈し直すことができた*
	すっきりとした気持ち	*その時（経験した時）は違和感があったことが，違和感が少なくなったりとか，穏やかな気持ちになった*
	未来への志向	*向かい合うことができたことによって，より少し次に向かう力になったというか－中略－色んなことがありながら前に行くんだっていうようなことをそのとき考えられたので*

自分の実際の経験と*「微妙に違う」*部分や*「共通」*の部分があると上演内容の評価をしていた．また，アクターが自分の思いを汲みとり，*「一生懸命演じてくれる」*ことに感謝の思い抱いていた．各務（2012）は，企業内で行った PBT ワークショップ後のアンケートに「自分の大切な思い出をアクターの人達が必死に演じようとしてくれている姿が，思い出を共有してくれているようで，とても嬉しかった」という記載があったと報告した．羽地（2005）は，小学校で校長先生のストーリーを小学生のアクターが演じた後，校長先生が「嬉しい，この通りだった．あの子は僕の気持ちをよくわかってくれた」と目を潤ませていたと紹介している．PBT の非日常性が，先生と生徒という関係とは違う人としての対等な関係を作り上げたという．本研究でもこれらと同様に，真剣に演じるアクターへの肯定的感情が語られた．

さらにテラーは，*「あの場で，場所を借りて話をできて，いろんな人に聴いてもらえた，共有してもらえた」*というように，自分の経験を観客と共有したという経験をしていた．宗像（2006）は，テラーである自分と共に涙している観客を見た経験を記し，その経験は，味方を得ること，他人の暖かい支援を受けること，周囲とのつながりを確認することであったと述べている．このように，共に過ごす人々

が， PBT を通じてコミュニティの一員としてつながり合う効果があると考えられる．

4）【過去の捉え直し】:【過去の捉え直し】では，＜確認と再解釈＞，＜すっきりとした気持ち＞，＜未来への志向＞という3つのサブカテゴリーが抽出された． テラーは，自分の過去について再確認をしたり，*「その時にその状況を納得していたつもりだったのに， こうだったのではないか，とまとめ直すというか， 解釈し直すことができた」*と， これまでとは異なる新たな解釈を獲得したりしていた． ストーリーを語る活動を通しての気づきや， 上演を観る活動による離れた視点の獲得も影響し， 両活動を通して，＜確認と再解釈＞が行われたと考えられる． このような経験は， リフレーミングとしてとらえられるかもしれない． リフレーミングとは， 事実を事実として認めるが， 事実を背後から支える枠組みを変えることで， 全体としての意味を変えることであり，家族療法の中で面接技法として使われている（長谷川， 2011）． テラー経験の結果， 出来事をより広い背景を含めて見る事になり，リフレームの機会を得ていると考えられる．

また， 上演後のテラーはすっきりとした気持ちになった． このような爽快感はカタルシスとしてとらえられる． 抑えられていた感情を， 言葉を通して表現しつくすことにカタルシスの意味があると考えられている（増野，1989）．Fox は，PBT では語るよりも演じることを重視すると述べ，演技を見ているテラーに起こるカタルシスを受動的なカタルシスと表現している（宗像， 2006）．

さらに， テラー経験の後，*「前に進んでいく」*というように自身の生活についての＜未来への志向＞が生まれていた．

2. 質問紙から得られたテラーの経験

テラー経験者は 54 名で， 全員から回答を得た． 回答の結果を図 2 に示した．14 項目すべてにおいて 70%以上が肯定的な回答だった． 90% 以上が肯定的回答をした 10 項目は， インタビュー中の「過去の場面が蘇ってきた（100%）」「感情の高まりがあった（100%）」「話しながら気づくことがあった（100%）」， 上演中の「過去の場面や人が蘇ってきた（98%）」「感情の高まりがあった（96%）」「経験や思いをアクターと共有できた（98%）」「経験や思いを観客と共有できた（96%）」， 上演後の「自分の体験を再確認できたと感じた（98%）」「気持ちがすっきりした（92%）」「未来に向かう力がわいた (94%)」であった． つまり， コンダクターからのインタビュー時に過去の場面が蘇り，感情が高まり，話しながら気づくことがあった． 上演中には， 再び過去の場面が蘇り， 感情が高まり，自分の思いをアクターや観客と共有できた． 上演後は，自らの経験を再確認でき， 気持ちがすっきりし， 未来に向かう力がわいたという経験をした回答者が 90%以上であった． このように， 7名のテラーの経験の質的研究により抽出されたカテゴリーは， 他の多くのテラーの経験と一致していた．

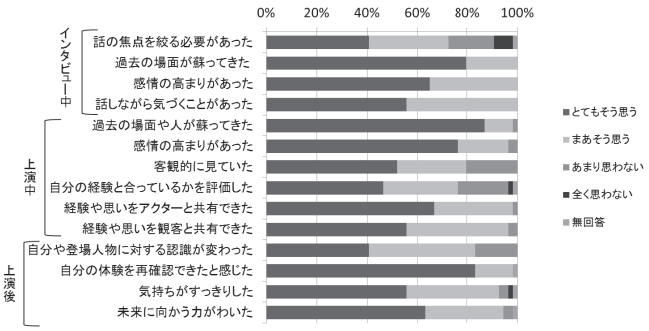


図2 ワークショップのストーリーにおけるテラーの主観的経験（N=54）

まとめ

7 名のテラーへのインタビューを行った質的研究により，テラーはインタビュー中に自らの過去に接近し， 上演中に過去の再来を体験していることが分かった． さらに，テラー経験を通して自身の体験をアクターや観客と共有し， 過去の捉え直しを行っていた． また， 54 名のテラーへの 14 項目の質問紙調査では， これらの体験が 70 %のテラーにおいても同様にみられた． このことから，「PBT のテラーをする」という作業を経験した者の多くに共通して体験される過程である可能性が示唆された．

文献

Clark, F.（1993）. Occupation embedded in a real life: interweaving occupational science and occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy, 47*, 1067-1077.

羽地朝和（2005）． プレイバック・シアター－語るなかで育まれるもの．*現代のエスプリ 459 サイコドラマの現在*，至文堂， pp. 174-188.

長谷川啓三（2011）． 基本技法． 大熊保彦編．*現代のエスプリ 523 リフレーミング：その理論と実際*，至文堂，pp. 41-53.

各務勝博（2012）． プレイバックシアターの活用―日本の企業内研修におけるその位置―． *Core Ethics 立命館大学大学院先端総合学術研究科紀要*, 8, 461-472.

増野肇（1989）．*心理劇とその世界*． 金剛出版．

宗像佳代（2006）．*プレイバックシアター入門：脚本のない即興劇*． 明石書店．

Rowe N. (2004). The drama of doing: Occupation and the

here-and-now. *Journal of Occupational Science, 11*, 75-79.

戈木クレイグヒル茂子（2005）. *質的研究方法ゼミナール：グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ*. 医学書院.

吉川ひろみ（2009）. 作業の意味を考えるための枠組みの開発. *作業科学研究* , 3,20 -28

吉川ひろみ（2013）. ジョナサン・フォックス氏へのインタビュー. *作業科学研究* , 7, 28-32.

短報

青年期・成人期高機能自閉症スペクトラム障害者の生活の工夫とそれにいたる経過

鴨藤 菜奈子[1)], 小田原 悦子[2)]

1) ぴあクリニック　2) 聖隷クリストファー大学

要旨:青年期・成人期高機能自閉症スペクトラム障害者の，社会参加に際し行っている生活上の工夫，そのきっかけとそれにいたるまでの問題について理解するために，就労し社会生活を送る 3 名の高機能自閉症スペクトラム障害者を対象にインタビューを行った．結果，社会生活を続けながら環境に関わることによって，作業パターンに気付き，日常の作業を工夫することによって，社会生活に適応しようとしていることがわかった．特に，日常の作業のバランスをとることと，日常生活を俯瞰して見ることが共通点として現れた．

作業科学研究, 10, 73-77, 2016.

キーワード：適応，生活上の工夫，作業，高機能自閉症スペクトラム障害

Short Report

Adaptive strategies in everyday life and the process to aquire them for juveniles and young adults with high functioning autistic spectrum disorder.

Nanako KAMOTO[1)]，Etsuko ODAWARA[2)]

1) Peer Clinic, 2) Seirei Christopher University

Abstract：To understand how adults with high functioning autistic spectrum disorder experience everyday life and to learn their adaptive strategies and the process, I conducted interviews of three participants with high functioning autism who were living their independent lives and had careers. Findings are, through engaging the environment in their social life, the participants became aware of their own occupational pattern in their daily life. Through devising their daily occupational patterns, they came to adapt to their environment. To create adaptive strategies, it is important to balance their everyday occupations and to acquire a big picture of their everyday life.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 73-77, 2016.

Keywords: adaptation, strategies, occupation, high-functioning autistic spectrum disorder

はじめに

いわゆる自閉症は，社会性の障害，コミュニケーションの障害，想像力の障害を特徴とすると言われ (Wing, 1981)，その概念と呼称は時代とともに変化した．2013 年以降は，社会的コミュニケーション及び相互関係における持続的障害，限定された反復する様式の行動，興味，活動を特徴とするが知的障害を伴わない場合は「高機能自閉症スペクトラム障害」(DSM-Ⅴ: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) と呼ばれるようになった．

近年，成人した当事者が幼少期から大人になるまでの社会生活における困難や葛藤，喜びを公表し始め (D. ウィリアムズ，1992 河野訳，1993，ニキ・リンコ，2004)，彼らに対する社会の意識も高まりつつある．これまで自閉症を有する人に関わる作業の研究は，自閉症を有する子どもの親の視点からの家族の作業の研究が主流であった (山崎せつ子，2000)．しかし，これらの人々が社会生活における困難や葛藤に対し，どのようなきっかけでどのような工夫をしているかを当事者の視点から捉えるものはない．高機能自閉症スペクトラム障害を持つ人は，自分の置かれている状況や状態などを説明することが困難である人も多く，さらに日常生活に不自由さを感じながらもその理由が明確でないため自分の抱える問題を明示することに難しさを抱える．今回筆者は，高機能自閉症スペクトラム障害を持つ人を作業的存在として捉え，それらの人が生活において工夫する方法や，そのやり方にいたるきっかけについて聞く機会を持った．これらの点を知ることは，高機能自閉症スペクトラム障害を持つ人のより良い形での社会参加を支援することに役立つと考える．

方法

1．研究手法およびデータ収集

本研究は，対象者の生活上の工夫とそれにいたる過程を整理し理解するため，質的記述的研究 (グレッグ，2007) を使用した．研究参加者の選定条件は，既に何らかの形で生活上の工夫を意識的に行っていると推測されるものとして，高機能自閉症スペクトラム障害の診断を受けており，就労している 18 歳以上の男女とした．A 地域の発達障害者自助グループの参加者から，自らの経験について語ることに同意する方を募った結果，30～40 代の高機能自閉症スペクトラム障害を持つ男女 3 名が研究参加者となった．研究参加者に対し，①個別の半構造的インタビュー (現在の生活と生活歴について)，②時間使用表の記入 (日常生活の作業パターンを知るために，平日と休日の作業を経時的に記入) を依頼した．時間使用表は，インタビューデータを理解する補完手段として使用した．インタビューは1回1～2時間，1 人につき 1～2 回実施した．本研究は，所属大学の倫理審査委員会により，研究参加の同意，プライバシーの保護についての承認を受けた．

2．分析方法

インタビューデータから生成した逐語録を何度も読み，また，時間使用表を参考として，日常生活で工夫している点，そのきっかけとなった出来事，社会生活で生じていた問題について表している部分を抽出・解釈し，時系列にまとめた．また，問題への対応方法について，作業の視点から考察した．研究の信憑性・妥当性を高めるため，質的研究の経験がある複数の研究者により，研究結果の確認を行った．また，メンバーチェッキングとして，分析内容を参加者に手渡し，解釈の妥当性を確認した．

結果および考察

研究参加者 3 名 (正人，哲也，ヒトミ) は，社会生活において，学生時代から困難や葛藤を経験していた．しかし，生活を続けながら自身の思考や行動の特徴に気付き，環境に働きかけたり，自らの作業を工夫することによって，生活に適応する経験をしていた．以下に，3 名に生じていた社会生活上の問題，問題に対処するためにきっかけとなった出来事，生活上の工夫について述べる．なお，仮名を使い，本人の語りは斜体で記載した．

1．研究参加者 3 名の生活上の工夫

(1) 正人

正人は，一人暮らしをしながらグループホームでヘルパーとして働く 30 代の男性であり，ADHD(注意欠陥多動性障害)，アスペルガー障害の診断名を持つ．

1) 社会生活上の困難

正人は幼少期から落ち着きがなく，小学校で学校生活に苦痛を感じ始め，中学や高校で周囲と自分との違いを漠然と自覚し，いじめも経験した．高校卒業後はアメリカの大学に進学するが，そこでも授業に集中できず受診したところ，ADHD の診断を受けた．担当医からは，衝動的な行動をコントロールする事，自身の置かれた状況を客観的にみる事，体調管理に気を付ける事について，具体的な方法を学んだ．しかし，アメリカで勉強を頑張りすぎたことで体調を崩し帰国すると，アルバイト等の仕事を経て，正職員として介護の仕事に就いた．

就職当初は多くの面で不適応が生じた．業務面では，洗濯物の干し方を何度注意されてもできない等，注意力に欠けるとの指摘を受けた．コミュニケーション面では，同僚の話を聞こうとせず一方的に自己主張したり，指導に納得できず上司と喧嘩になったりした．体調管理面では，趣味に没頭して夜更かしをし，翌日の仕事中に体調を崩す事もあった．

2) 問題対処のためのきっかけ

正人は，仕事で失敗を繰り返しながら，以前アメリカで「自身をコントロールする」ことを学んだ経験を思い出し，コントロール方法を模索するために自ら自助会を立ち上げた．同時期に，アスペルガー障害と ADHD の重複という診断を受けた．

正人は，自身の思考や行動の特徴を客観的に見つめなおし，失敗を重ねないような方法を考えるようになった．勤務中に同時進行で用事を行うことが苦手であったが，繰り返し努力することでできるようになることを知った．同僚とは衝突が多かったが，怒鳴りたい葛藤を抑え，一度相手の話を聞くことを意識し，自分の話は状況を考慮して話すことを学んだ．そうして自身の言動・行動をコントロールできるようになると，同僚から評価されるようになり，自信に繋がった．

自助会では，社会生活での悩みや経験を語り合った．その中で，世間に発達障害の理解を求めるだけではなく，当事者自身の気付きや工夫があって成功体験が得られる事をメンバー間で共通認識するようになった．

3) 現在の生活の工夫

現在正人は，様々な工夫をしながら社会生活を送っている．例えば，四六時中見ているスマートフォンと部屋の大きなカレンダーに勤務表を転記し，就寝時間や趣味に費やす時間をコントロールしている．また，以前は疲れた際には好きな事に没頭してストレス発散をしていたが，没頭し過ぎて身体に負担をかけないよう，時計を見て趣味に費やす時間をコントロールしている．

(2) 哲也

30 代前半の男性．一人暮らしをしながら工場の事務職に 8 年就く．アスペルガー障害の診断を持つ．

1) 社会生活上の困難

哲也は，小学校高学年頃から交友関係に苦手意識を持ち始め，中学・高校では徐々に人と関わらなくなっていった．学校では，「いい具合」という適度な力加減がわからず頑張り過ぎたり，複数の物事を同時にこなすことができなかった．地元を離れた大学では心機一転，人間関係のスキルを上げようと学生寮や部活動に入る挑戦をしたが，人間関係を作らなくてはいけないというプレッシャーと，実際にはうまくできない事で自己嫌悪に陥った．

2) 問題対処のためのきっかけ

大学卒業後，事務職に就いた．哲也が最初に担当した業務は，効率や人との調整を求められる業務であった．哲也は仕事での経験を通じ，自分は人との協調がうまくできない事，他の従業員と同じペースで要領よくこなす事が難しい事を知った．

ある日，偶然に図書館で発達障害について書かれたものを見つけ，自分には障害があるのではないかと思うようになった．哲也は，自ら上司に発達障害の影響について相談し，上司も，哲也が担当業務に不向きだと同意し，担当業務の変更に至った．哲也は，1 人でマイペースにできる業務の担当となり，それまでのプレッシャーから解放され，モチベーション高く業務を行うことができるようになった．

3) 現在の生活の工夫

哲也は日々の生活をうまくこなすために，食事の準備は料理による失敗を回避し，時間を効率的に使うために調理済みのものを購入すると決めている．日課はジムやヨガ教室に通い身体を動かすことで，仕事での過度な緊張と疲れた身体をほぐしていた．哲也にとってジムは，人と上手く付き合えなくても失敗することがない心地よい環境であり，社会生活を通じて自らそのような環境を見つけることができている．

(3) ヒトミ

両親と 3 人暮らしの 40 代女性．高校卒業後，2 か所のガソリンスタンドで計 7 年働き，その後ソーシャルワーカーとして 20 年勤務．ADHD とアスペルガー障害の診断を持つ．

1) 社会生活上の困難

ヒトミは幼少期，落ち着きがない反面，音楽の才能は秀でている等，親からは「言葉では言いようのない子」であった．小学校低学年の頃から周囲と自分との違いに気付き始め，他人と協調することへの苦手意識を持っていた．高校卒業後，ガソリンスタンドに就職したが，8 か月でクビになった．職場では，注意力の欠如や接客の仕方，業務態度について，よく注意を受けていた．老人保健施設のソーシャルワーカーに転職したヒトミは，真面目な勤務態度で一生懸命働いたが，女性従業員の輪の中に入れず孤立していた．業務マニュアルにはない独自の方法で仕事をし，その方法を同僚に押し付けて口論になったり，新人従業員に業務の速度を追い抜かれ，悔しい想いをした．また，時々うまくいかない事が積もっ

てパニックになり，職場のスリッパを投げて泣きわめくこともあった．それでもヒトミが働き続けることができたのは，毎回組むメンバーが変わるという勤務形態によりクールダウンできたことと，理解ある上司・同僚の存在によるところが多かった．

誰かが職場で私のことを「独り言がうるさい」って主任に愚痴を言ったら，主任が「あの人はああいって独り言を言うことでやることや仕事を整理してるんだから」ってわかってくれてた．その人にはすごい救われました．

2) 問題対処のためのきっかけ

ワーカーとして働き 10 年ほど経った頃，当時流行っていた発達障害の本を読み，自身も発達障害があるのではと思い受診し，アスペルガー障害と ADHD の重複という診断を受けた．その後スポーツジムに通い始めたヒトミは，仕事の悩みをジムのコーチに相談するようになり，ヒトミの言い分を肯定してくれるコーチの励ましやアドバイスは，素直に納得することができた．信頼できるコーチへの相談を通して，次第に独自のルールにこだわる必要がないことに気付き，自分以外の同僚の仕事のやり方を受け入れられるようになっていった．

同僚のヒトミに対する関わりも変化した．発達障害がメディアで聞かれるようになると，予定変更が苦手な事等を同僚が理解し，仕事をメモにして貼っておいてくれるようになった．次第に職場内の人間関係も良くなり，後輩はヒトミを尊敬して仕事のやり方を質問するようになった．

3) 現在の生活の工夫

ヒトミは現在，工夫を実行しながら社会生活を送っている．例えば，勤務を間違えないよう，勤務表を家族の目に届くリビングの窓に張り，声掛けをしてもらっている．余暇活動では，大好きなジムに毎日通い，自身の居場所として自助会に通っている．

2．共通した生活の工夫

現在の生活の工夫において、研究参加者 3 名に共通していた点についてまとめる．

(1) 作業のバランスをとる

3 名の現在の生活パターンには，意識的な休息が共通している．人が健康的な生活を送るためには，適切な作業バランスを保つ事が重要であり (Kielhofner，1977)，特に高機能自閉症スペクトラム障害者は，過緊張や過集中によって日々多大なエネルギーを使っているため，休息が大切であると指摘されている (田中・辻井，2006)．しかし，哲也が学生時代，「いい具合」がわからず部活動を頑張り過ぎた様に，「適当な休息」を取る事は実際には容易ではない場合もある．現在の 3 名の日常の作業を探ると，良い作業バランスを保つために，休息の他に楽しみの作業を持つことが重要であることがわかる．哲也は，仕事での緊張感をほぐす目的でジムやヨガ教室に通っていたが，これにはリラックスの効果があった．正人とヒトミは，仕事後や休日に好きなことに没頭する事でストレスを解消していた．作業のバランスをとる事は，社会参加を続けるため必要な生活上の工夫であるといえる．

(2) 状況を俯瞰して見る

研究参加者 3 名はいずれも，学生時代から社会生活において困難や葛藤を経験していたが，社会生活における経験を通じて自身の作業パターンに気付き，状況を俯瞰できるようになっていった．そのきっかけとして，診断に基づく生活指導を受けた事や，信頼できる人との出会いや助言を受け入れた事があった．哲也は入職当初，担当した業務に求められる作業パターンが自分には合わない事に気付き，自分の作業パターンに合った別の業務に変更するよう自ら上司に働きかけることで，職場に適応できた．正人は以前，趣味に没頭し過ぎて体調を崩し，仕事に支障が出るという失敗を経験した．しかし，状況の中で自分の行為を俯瞰して見られるようになったことで，時間を決めて行うという方法に至った．これにより，趣味活動はストレス解消のために機能し，適応的な作業に変化したといえる．

まとめ

本研究では，3 名の高機能自閉症スペクトラム障害者の生活歴や日常生活の過ごし方を聞き，社会参加における生活上の工夫，それにいたるきっかけについて明らかにした．今後は，異なるライフステージや状況に置かれた当事者を対象に，研究を発展させる必要がある．

文献

Williams, D.(1992).NOBODY NOWHERE,(河野真里子 (訳)(1993). 自閉症だったわたしへ . 新潮社 , 東京)

グレッグ美鈴 . 質的記述的研究 (2007). : グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江編，よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートを目指して . 医歯薬出版 , 東京 , 54-72

Kielhofner, G. (1977).Temporal adaptation: A conceptual framework for occupational therapy. American Journal of occupational therapy,31,238

ニキ・リンコ・藤家寛子 (2004). 自閉っ子、こういう風に

できてます！花風社 , 東京
田中尚樹・辻井正次 (2006). 青年期・成人期のアスペルガー症候群の人への生活支援. 教育と医学 ,54 (12),1127-1133
山崎せつ子 , 鎌倉矩子 (2000). 自閉症児 A の母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡. 作業療法 ,19, 434-444,

書画はその人を想う発信のツール

作業療法アーティスト koshiki さんへのインタビュー

“作業療法アーティスト”の koshiki さんは鹿児島在住の書画を専門としたアーティストである．平成 27 年 1 月 19 日付の南日本新聞（注 1）に紹介記事が掲載された．鹿児島県内のハンドメイドイベント，フリーマーケット，ショッピングセンター，雑貨店等で作品を展示販売し，活躍している．個別に作品の受注も行っている．その温かい，どこかほっこりする言葉と絵は人気があり，koshiki さんの作品を購入した一般人，歯科医院によるブログに掲載された感想から理解できる．インタビューにあたってインタビュアーに早速作品をプレゼントして下さった（図 1）．実際に作品を手にしながらインタビューが行われた．koshiki さんは，普段は一作業療法士としてデイサービスで勤務しているという別の顔を持っている．koshiki さんの作品に触れたい方は，ブログ＜～作業療法アーティスト koshiki ～のこころが病まない幸せなことば http://ameblo.jp/koshiki1029＞を参照されたい．

本誌：作業療法アーティストの koshiki さんにインタビューしたいと思います．また後でこのアーティスト名の由来を教えていただきたいと思います．この企画は作業をしている方にお話しを聞いて人生にとって作業がいかに大切かということですとか，その作業が他の人や社会にどのような影響を与えるかということを知るためにできたものでして，今年で 4 年目になります．

贈る相手を想って書（描）く書画

本　誌：koshiki さんがされているアート，書画について具体的にどういうものか教えていただけますか？

koshiki：最初は字を書き始めました．字だけだと色合いが少し足りなかったので絵を描き始めて，字を一体化しました．人に伝えるという書画ですね．

本　誌：書画は紙に墨で描いてらっしゃるのですか？

koshiki：そうです．筆ペンで．

本　誌：筆ペンで書いて．絵は？

koshiki：絵はサイズ的に大きいのを描いて．それを縮小して，コピーを使って．字は全部肉筆で描いています．

本　誌：この絵やメッセージはご自身で思い浮かんだものを書（描）くのですか？

koshiki：そうですね．贈る人を思いながら．

本　誌：贈る人を想いながら書（描）くんですね．

koshiki：いろいろな種類を，200 種類くらい絵を用意して．足りなければその都度書き足して，加えて，絵を増やしていっています．

本　誌：いつもは作業療法士として働かれていると思うのですが，アーティストとしていつ，どういう時に作成されているのですか？

koshiki：結構習慣的に描いていることが多くて．書こうかなあと思うときやイベント，母の日だったり，父の日だったり．次は敬老の日だったり，新年のメッセージだったりを随時書き溜めて，イベントごとに持っていったり，販売している感じですね．

本　誌：書（描）いている時はどんな気持ち，どんなことを考えていますか？

koshiki：作品依頼があった時は，その方の背景だったりをできるだけ考えたり，感じながら描くことが多くて．抽象的なものの時は漠然と，こういう言葉を手にとる人はどういう気持ちで取られるのかな，とかいう形だったりですね．まあ，メッセージはこういう人に贈りたいな，手に取って欲しいなと思って．その方に対したメッセージをいろいろイメージしながら書（描）いていますね．

本　誌：作品というのは自分が思いついて書（描）くというのではなく，相手があって，その方に伝えたい，

届けたいということが多いですか？

koshiki：そうですね.

本　誌：今回作品をいただいたのですが，これも私に対して考えてくださったのですね．ありがとうございます.

koshiki：そうですね.

本　誌：お話しする前だと私は koshiki さんが頭に浮かんだアイデアとか絵や言葉を書（描）いて，それを購入する方が選ぶのかなと思っていました．関係性というか，相手を考えてその方のために作るのですね.

後輩，クライエント，家族，社会へ向けた書画

本　誌：この書画を始めるきっかけと今までに至る経過を教えていただけますか？

koshiki：最初は高校の時に寮生活で，後輩とかが落ち込んだりする時に，こう言葉を直接かけるよりは何か書いてあげたりしました．それこそざら紙(し)の裏紙に書いてあげたりして，励ましたいなあとかちょっとそういうのがきっかけで．ずーっと 10 代，20 代，ちょっとかっこいいかなと思ったりしながら (笑)．やっぱりすごいって言われて嬉しかったですし (笑)．今は仕事を始めて，統合失調症の方が自分の好きな言葉とか拾って欲しかったり，表現するという形で始めて．現在は自分が発信源になって，一般の方に言葉っていうものの力を発信できたらいいかなと思った書画が現在の形に至っていますね.

本　誌：そうなんですね．高校の時に落ち込んでいる方へのメッセージから作業療法士としての仕事の中でクライエントに伝えたりして今に至るんですね.

koshiki：そうですね.

本　誌：ご自宅で依頼されたものを作られているそうなのですが，ご家族の反応は何かありますか？

koshiki：またやってるよ，って感じですかね (笑).

本　誌：ご家族にもプレゼントされるんですか？

koshiki：嫁さんの誕生日だったり，子供の欲しいタイミングとかにあげたりしますね.

本　誌：いいですね．お父さんがこういうの作ってくださると．私は母の日に偶然ショッピングセンターで koshiki さんをお見かけしました．それと今のお話と合わせて書画というものが後輩からご利用者，クライエント，家族，一般社会の人まで発信されているのだということがわかりました．その発信を受けている方の反応はいかがですか？

koshiki：作品展とか出店の時に近寄って来る方が興味を持っている方なんで，その方に発信をするだけなんです．誰でも声をかけて売るようなものではないのでそのやりとりはしやすいですね．来て下さった方に真摯に言葉を贈るという形なので.

本　誌：話は戻りますけど，後輩は koshiki さんがざら紙の裏に書いたメッセージを渡すとどんな感じでしたか？

koshiki：喜んでくれたけれど後輩だから先輩からもらったものだから・・・．まあ，その時はどうですかねえ (笑).

本　誌：まあ，お年頃もありますものね.

koshiki：そうそう.

本　誌：クライエント，ご利用者さんはどうですか？一緒に書いたりされたと思うんですけど.

koshiki：はい，まあ最初の書画は，働き始めた時にやった書画は字だけだったので，絵を描くと更に良かったのかなと今振り返るとそう思います．その時は好きな，いろんな言葉集とか自分で選んで表現してもらいました．この人はこういう言葉が好きなんだと僕らも受け止めて．なんかそこに治療的なニュアンスで伝えていけたらなあと思って始めたのがきっかけです.

本　誌：絵はもともとお得意だったんですか？

koshiki：いや，絵はまだ 2，3 年です．得意じゃありませんよ (笑).

本　誌：え，そうなんですか？絵をつけるようになったのはこの 2，3 年で．やはりこういうメッセージに絵を付けることで更にいいものになったという感じですか？

koshiki：タッチがいいですね．導入が，手に取る方の．結構リピーターで来て下さる方も絵は適当でいいけれども，言葉がもう少しこういうのが欲しいと逆に言われるのがおもしろいところで．文が先か，絵が先かというのがあります.

本　誌：今のこういう形，言葉と絵のセットになったんですね.

koshiki：そうですね.

本　誌：世の中にはいろんな書画の作家さんがいて，私の職場のいろんなところに作品のコピーなどを貼っているんですけど，何かほっとするというか一度は立ち止まりますよね．koshiki さんは言葉が豊富そうなのですが，元々国語が好きとかそういう点はあるんですか？

koshiki：国語は，偏差値 20 だったんですよ (笑)．本

を一切読まなかったんですけど．でも，仕事で得たものを発信する時に，言葉の種類が足りなくて．それからを本を読み始めたり，いい言葉を貯めるようにしてます．できるだけ自分の言葉で，今の形で発信しています．

本　誌：ではこういう作業を始めることによって，言葉に触れる機会が増えたということですか？

koshiki：そうですね．

本　誌：今の生活でもいろいろキャッチできるようにアンテナを張り巡らしている感じなのですか？

koshiki：そうです．

本　誌：絵の素材というのもですか？

koshiki：はい．魚とか野菜，花，雑貨とか目に留まったものを描いています．まあ，こういう言葉を贈りたいという方がいて，この言葉にはこの絵が欲しいというのがあれば画材を持ってきて，描いて，付け加えたりしますけど．だいたい似たような感じの作品が多いです．絵を選んで，それに字を書くという感じです．

本　誌：ちなみに私がいただいたこの絵はルービックキューブになっているのはどうしてでしょうか？

koshiki：組み合わせがたくさんあって，この面がやっと出揃うっていうのは何かのご縁．

本　誌：なるほど．このメッセージと一致するんですね．ありがとうございます．こうやっていろいろ作品が作りあがっていくのですね．わかりました．

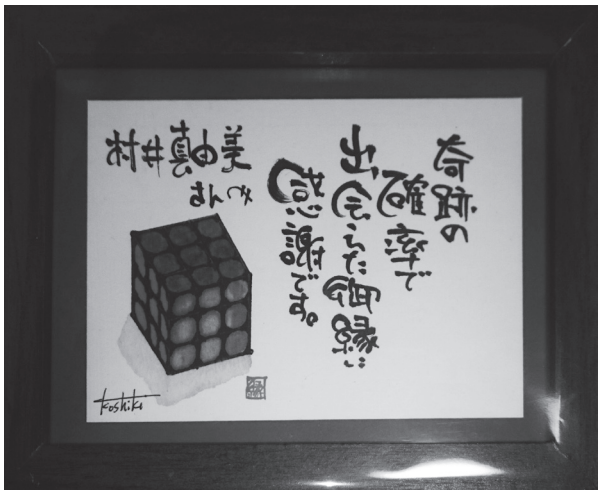


図1　koshikiさんからインタビュアーへのプレゼント

新聞取材後の作業の拡がり

本　誌：私がこのアートのことを知ったのは，去年の 1 月の南日本新聞の記事でした．あれは結構うちの家族も見ていましたし，作業療法士仲間も見ていて，話題になりました．取材を受けたきっかけは何だったんですか？

koshiki：その前の年の 12 月に天文館（注 2）でのイベントに出していて，その時にふらっと来た方が「何か雑誌とかに載ったことがありますか？」，って聞いてきたので，「いや，ないです」って答えたらその人が「わかりました」って．たぶん，その人が南日本新聞の知り合いの方にこういう人がいるってよ，って名刺を渡してくれたんですかね．そして南日本新聞社から電話をいただいて，「知り合いからあなたの紹介を受けました」，「で，どうですか？」，ってことで．「ありがとうございます (笑)」，と返事しました．

本　誌：取材を受けて．結構反響がありましたか？

koshiki：そうですね．ちょうど作品を発信するには，いいタイミングで．活動を始めて 1 年くらいの時で取材を受けたのでラッキーでした．

本　誌：取材を受ける前にフリーマーケットとかショッピングセンターや雑貨店での販売を始めていたんですね．

koshiki：フリマに出していたんですけどなかなか反響がなくて．作品もだいぶ雑な感じだったので．そこから新聞に載ってからですかね，店に置いたり．僕は実家が甑島（注 3）なので甑島で販売したり．イベントでやっていると，新聞記事を見て次のイベントの声が．それこそ村井さんが見てくださった店から声をかけてもらいました．それで呼んでくれて．

本　誌：どうしてあそこのブースに出展されたのかな，と思って．声をかけてもらう感じなのですか？何気なくのぞいたら koshiki さん，こんなに有名になったんだと思ったんです．その時，女の子とやりとりをしているところだったので声がかけられなかったんです．すごいと思って．これは結構自分から売り出していくじゃないですけれど，発信していきたいと思ったんですか？それともしてみない，と言われたんですか？

koshiki：「してみない？」って言われて．ちょうど出していたフリマで 3 人くらい同じ形で詩を書いたりしている方がいて，僕だけ呼ばれる時に「タダでいいです」，って言ったら「タダなら企画が通りやすいからって来てくれ」って言われて．ちょうど去年行って，今年も連続 2 年呼んでいただいて．母の日，父の日，連チャンで (笑).

本　誌：やはりそこで頼まれるんですか？例えばお母さん

にこういうの描いてくださいって.

koshiki：そうですね. 母の日は結構若い夫婦とかが義理のお母さんにって. そういう機会じゃないとなかなか若い方と一緒にやり取りをすることがないのでやっぱり楽しいですね.

本　誌：あの時も近くで見たかったんですけど, その場で描かれるんですか？

koshiki：その場で. 40 人くらいに書（描）きました. 1 日で.

本　誌：すごいですね.

koshiki：土曜は夜 7 時頃まで書(描)いて, 予約を受けて, 家に帰ってから作品作って, それから次の日に渡すって感じですかね.

本　誌：結構ハードでしたね.

koshiki：でしたね. スピードが命ですから (笑).

本　誌：ちなみにこういう作品ひとつを作るのにどれくらいお時間がかかるんですか？

koshiki：作品, 絵が描いてあれば字は 1 分あれば.

本　誌：ではいろんな絵が描いてあるカードを用意して, 選んでもらうという感じですか？

koshiki：そうですね.

本　誌：書く言葉は頼まれたものを書く, それともイメージして書くんですか？

koshiki：依頼があればその言葉を書きますし, 特に私に言葉を下さいというのであればもう少し話のやり取りをして, その場ですぐ書きます.

本　誌：そうやって作るんですね. 依頼があって作る方がメインですか？

koshiki：はい, その場で贈るのと注文があってお母さんにこういう言葉で, 生年月日を入れて欲しいと言われたら持ち帰って, 後からお渡しするような形ですね.

故郷・甑島とアーティスト名と書画

本　誌：アーティスト名が koshiki さんですが, 名前の由来を教えていただいていいですか？

koshiki：甑島の出身なので単純に. 甑島の名前が有名にならないかなって思ったんです. 新聞の依頼を受けて, 載ってから甑島の港とか作品を置いてもらって. 島の人が言葉で元気になってくれるといいな, と思ったりします. なかなか島は娯楽が少ないから.

本　誌：先ほど甑島でイベントをされたとのことですけど, 甑島を題材に描いたことはありますか？

koshiki：あります！甑島の長目の浜という景色と鹿の子百合ですね. 後は, 作品は甑島だからというよりは誰でも手に取りたいような温かい言葉を (笑). 島に対してはなかなか外から情報が入ってくることがないからですね. そこへ発信していけたらいいかなと.

本　誌：一時期甑島が国定公園に指定されてからすごく観光客が多くなったという話を聞いたのと, もう一つお土産が少ないので増えたらいいのになという話を聞いたので, そういうお土産に koshiki さんの書画はいいんじゃないかと思いました.

koshiki：はい, そうですね. 結構置いて下さってありがたいですね.

本　誌：地元の甑島のご家族ですとか, 友達の反響はありましたか？

koshiki：そうですね. 親は私が家で描いているのを知っていて,「島で手売りしてあげるよ」って感じだったんですけど. そこもまあ, 家に持っておくよりも実家に送ろうかなって感じで始まって. 新聞に載るまでは本当, ちょこちょこっと, 1 個 2 個売れたりするぐらいでした. でも, 新聞に載ってからは何かの時に使ってもらえるような機会が増えて「おみやげに渡したいから」って見に来て下さった方もいます. 5, 60 個の中から 1 個選んで買ってくださるような.

本　誌：そうやって一つの作業が広がっていっているんですね. 確かにメディアの力って大きいですね.

作業療法アーティスト koshiki と 作業療法士川添将太の関係

本　誌：作業療法アーティスト koshiki さんと本名川添将太さんの間に違いはありますか？作業をする存在として違いがありますか？

koshiki：川添将太は, うーん, 作業療法士として働いている時は結構理由だったり, 根拠だったり, しっかり考えながら働くことが多いんですけど, koshiki, 作業療法アーティストとして描くときは勘だったり, 直感で作品をずっと. やっぱりスピードが命だと思うんで, 贈る時に.

本　誌：スピードが命なんですね.

koshiki：考えて書かれるより, 共感性があるんじゃないですか？話の途中で「わかりました (笑)」と早々に話を中断しながら書（描）いています. その場で書（描）くというのにかなりこだわっていますね.

本　誌：それでは結構時間との勝負ではないですけれど.

たぶんいろんな作家さんがいて，じっくり考えるタイプとか即興タイプなどあると思うんですけれど，koshiki さんはその時の状況で書かれるんですね．

書画は人に発信するツール

本　誌：これからこの書画をどんな風に koshiki さんはしていきたい，発展していきたいな，というのがありますか？

koshiki：僕は社会人として作業療法士をしているんですけど，なかなか論文だったり，専門的な方への発信が僕はなかなかできなくて．それもコンプレックスがあるんでしょうけどね (笑)．でも，一般の方に向けてでも学んだことを発信していきたいというのがあって．普通の方が手に取って，自分で書いて，ほっこりしたりですね．人に贈って，またそこで連鎖したりしていって，そういう形で広がっていけばいいかなって思います．作業療法士の中にも仕事がうまくいかないけど，趣味を連動させて，二足の草鞋を履いて，相乗効果で何か生み出したい方がいれば僕も一緒に話をしたりして，やっていけたらいいなあというのもありますね．

本　誌：今の作業療法士の仕事の中でもこういう書画を利用者さんと一緒にしますか？

koshiki：ですね．言葉を書いたり，手紙を書いたりしていました．今はやってないんですけど (笑)．でも楽しいですよね．皆さん，喜んでくださるし．贈る相手がいらっしゃらなかったりするのがなかなか難しいんですけど (笑)．家に飾っていても，好きな言葉であれば，ずーっと見ておけばですね．

本　誌：そうですよね．こうやっていただいたのも世界で一つしかないのでもらったらすごく喜ばれると思います．ありがとうございます．それではこの書画は koshiki さんにとってずばり何でしょうか？どのようなものでしょうか？意味とかありましたら教えてください．難しいとは思いますけど．

koshiki：うーん．今，できる，人に伝える一番いいツールかな．僕にとっては．他の形だとうまく伝わらないんですけど．書画であればしっかりと伝えられるかな．気持ちとか，思いをですね．今の書画の形だと思います．今はデジタル中心の世の中だからこそアナログが最大限力を持ちますし (笑)．

本　誌：人とか伝える先があって，伝えるというツールとして書画があるんですね．私は世の中にいろんな書画があると知っていたけどそれ以外に何の知識もなく今回のインタビューに臨みました．こういう形があるということがわかって，koshiki さんがこういう思いを持って，作品を作っているんだと言うことがわかってすごく良かったです．世界で一つしかない作品をいただいて，今日は本当にありがとうございます．

koshiki：2 個目も作りましょうか (笑)？

本　誌：即興で！即興でできるというのがすごいですよね．

koshiki：即興でやれば結構何でも喜んでもらえますよ．逆に変な言葉でもすぐに書けば．

本　誌：感動しますよ，いただいたとき．名前も書いて下さっているし．今日は本当にありがとうございました．

（注 1）南日本新聞：南日本新聞社が編集・発行する鹿児島県の地方新聞．発行部数約 35 万 2000 部（2014 年 1~6 月現在）．（Wikipedia より引用．2016 年 9 月 21 日アクセス）

（注 2）天文館：鹿児島県鹿児島市にある中心繁華街・歓楽街の総称．（Wikipedia より引用．2016 年 9 月 21 日アクセス）

（注 3）甑島（こじきじま）：正式名称は甑島列島．東シナ海にあり，鹿児島県薩摩川内市に属する列島．甑列島ともいう．上甑島，中甑島，下甑島の有人 3 島と多数の小規模な無人島からなる．
（Wikipedia より引用．2016 年 9 月 21 日アクセス）

インタビューを終えて

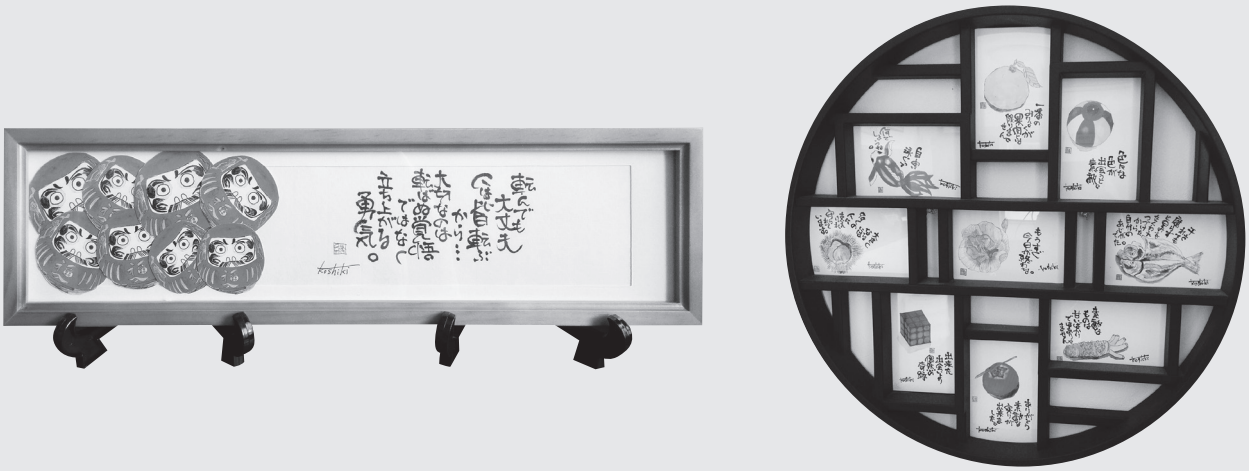
私はある人の作業についてインタビューする時に，頭を真っ白にして聴こうと思うが，片隅に先入観があることは否めない．インタビューの中で触れているが，話しながら「あれ？あれ？」と良い意味で自分の先入観と語り手の話の間にずれが生じて来る．今回の koshiki さんの語りから贈り手を想いながら，作品を即興で作るという形式が私の先入観とのずれだった．koshiki さんに関してはじっくり考えて生み出した言葉や絵を相手に選んでもらうのだと無意識に私は想像していた．だから人への作業に関するインタビューはおもしろい．作業を知ろうとし，知識を積み重ねなければ，人の作業

の多様性や核心が解明されていかないということを再認識させられた．今回は私のために作品を用意して下さった．話を聞きながら，「これが私を想いながら作った世界で一つしかないものなのだ」と思いながら見ると素直にとても感動した．koshiki さんの作業のキーワードは，相手を想う，発信，即興だと思った．近年，根拠やエビデンスの重要性を考えることが多い私には即興ということが新鮮だった．koshiki さんは書画の即興性にこだわり，即興が相手に喜ばれると言っていた．そして koshiki さんは書画がしっかりと人に伝えられる発信ツールだと語っていた．即興を構成しているのは何か？koshiki さんのインスピレーション，スピリチュアリティ，勘，直感，他にふさわしい言葉があるだろうか．私自身が贈り物に感動したように koshiki さんの作品に感銘を受ける人がおり，書画を手に入れるリピーターがいて，イベントのオファーが来る．これらの相関は何だろうか．作業についての疑問が沸々と沸いてきた．

koshiki さんは元々私の作業療法士の知人であったが，今回は作業療法アーティスト koshiki さんとしての作業について聞くことに努めた．それでも私があえて聞きたかったことがアーティスト名と本名では作業的存在として異なるか，ということであった．作業に名前があるように，人の名前によって作業的存在は異なるのか，あるいは単なる別名で変わらないのか．koshiki さんの場合は明らかに違っていた．

インタビュー後，koshiki さんの大切にしている作業のテーマについて新しく知ることができた．感動し，納得した．ここで紹介すると面白味がなくなってしまうので触れずにおく．koshiki さんの作品を手に入れる人にはきっとそれがわかるだろう．

（村井真由美）



koshiki さんの作品

第 20 回作業科学セミナー抄録

（2016 年 12 月 3 日 - 4 日， 東海市芸術劇場にて開催）

第 20 回記念講演

日本の作業科学の歴史と私の作業　吉川　ひろみ　85

佐藤剛記念講演

生きているシステム「複雑系」としての作業―作業を受け止める前提－　酒井　ひとみ　87

特別講演

人の交わりから生まれる地域づくり―コミュニティカフェの視点から―　倉持　香苗　89

基調講演

作業のレンズで社会の課題を捉える：作業的公正と作業権の継続的な対話への誘い　エリザベス タウンゼント　91

テーマ演題（口述発表）

元プロサッカー選手の作業的移行支援のための探索的研究　金野　達也，他　93

介護老人保健施設入所高齢者の施設環境と作業的公正の関係　真田　育依，他　94

～　要介護2の女性入所者の語りから理解できること　～
家のなかの「平和」を築く作業　～妻と暮らす脳卒中者のセルフ・コントロール～　藤原　瑞穂，他　96

一般演題（ポスター発表）

臨床実習における作業療法学生の主観的経験：最後まで生き残るということ　田中　義徳，他　98

作業形態の再考　髙島　理沙，他　99

Co-occupation としての作業療法におけるクライエントと担当作業療法士の相互理解のプロセス　坂根　勇輝，他　101

障がい者にとって活力ある社会とは　上村　麻美，他　102

ものづくりを通した地域の作業と場所の創造　高木　雅之，他　104

プレイバックシアターが大学生の自尊感情と自己効力感に与える効果の検討　黒瀬　亮太，他　106

南カリフォルニア大学での 4 週間が私に与えてくれたもの　新谷　眸　107

作業ストーリーを通じクライエントが主体的に作業に取り組めた事例　冨高　史裕，他　109

院内クリスマスコンサートにまつわる作業の意味
：作業的公正の可能化に向けた病院での実践　大下　琢也，他　110

作業中心の実践が有益だった急性期脳出血を有する個人クライエント　池内　克馬，他　112

ゴミ袋の名前書きにより作業的ウェルビーイングの経験を促せた事例
～認知症を呈したクライエントとの関わりを通して～　有賀　康大，他　114

身体障害者における退院後の調理の意味の変化　清田　直樹，他　115

急性期病院における在宅復帰予定クライアントが感じる作業遂行と「リハビリ」に対する作業的見解　-SOPI の評価から作業的不公正を考える -　安田　滋至，他　117

第 20 回記念講演

日本の作業科学の歴史と私の作業

吉川　ひろみ（県立広島大学）

Hiromi Yoshikawa (Prefectural University of Hiroshima)

1995 年 12 月，作業科学をテーマとした日本作業療法士協会全国研修会（札幌）とプレワークショップが開催され，1997 年からは毎年，作業科学セミナー（第 1 ～ 9 回）が開催された.

回（場所）	主なプログラムと講師 Main Programs in Occupational Science Seminars	
1～3（札幌）	Florence Clark と Ruth Zemke による講義	
4（札幌）	Ann Wilcock による講義	
5（札幌）	医療人類学の立場からみた作業科学への提言：質的研究をめぐって（波平恵美子）The suggestion for occupational science from medical anthropology USC における作業科学研究の動向と日本における作業科学研究の将来展望（Ruth Zemke）Occupational science research	
6（札幌）	文化人類学と作業科学（松岡悦子）Anthropology and occupational science 医療人類学と作業科学（道信良子）Medical anthropology and occupational science 国際的作業科学（Ruth Zemke）	
7（札幌）	テーマ：日本の作業科学を展望する 特別講演：国際的作業科学の発展（Ruth Zemke）The development of international occupational science	
8（三原）	第 1 回佐藤剛記念講演：時間と場所と作業：私たちの生活のとらえ方を形作るもの（Ruth Zemke）Time, Space and Occupation: Interactions Shaping our Perceptions of Life	
9（浜松）	第 2 回佐藤剛記念講演：作業とは何で，何の役に立ち，どのような意味があるのか？（吉川ひろみ）What is the form, function and meaning of occupation?	基調講演：作業科学の過去，現在，未来（Ruth Zemke）Occupational science: Past, present and future

2006 年に日本作業科学研究会が誕生し，作業科学セミナー（第 10 回～）が継続した.

回（場所） テーマ Theme	佐藤剛記念講演 Tuyoshi Sato Memorial Lectures	基調講演 Keynote Lectures
10（大阪） 作業と可能性 Occupation and possibility	作業科学：佐藤剛が手渡したかったもの（小田原悦子）Occupational science: Tsuyoshi Sato’s gift to Japanese occupational therapists	作業の研究はなぜ学際的なのか（Ruth Zemke）Why the study of occupation is interdisciplinary
11（岡山） 作業を世の中へ：作業を捉え，深め，生かし，見えるものへ Making occupation into the society	作業科学の系譜と今後の発展（宮前珠子）Genealogy and future development of occupational science	メインストリームへ：作業科学を見えるようにすること（Alison Wicks）Into the main stream: Making occupational science visible
12（東京） 作業を考える第一歩 The first step for thinking on occupation	作業を行っている患者さまは元気：そのためには，作業療法士は何をすべきか（中村春基） Clients who doing occupation are fine	アストリッドと日本の桜の木：変容と作業に関する省察（Josephsson Staffan）Astrid and the Japanese cherry tree: A reflection on transformation and occupation
13（福岡） 作業科学の和と話と輪：作業がつなぐ人・明日・可能性 Harmony, talk, and ring: link among people, future, and possibility	どのように働くことが健康を促進するのかー作業に関する社会的課題解決に向けた提案と実践（港美雪）How can we facilitate health through work	作業科学のプロモーション（Jin-Ling Lo）The promotion of the occupational science
14（沖縄） 結（ゆい）：作業の花を咲	作業の知識を活かすこと，産み出すこと：１人の作業療法士の経験	作業科学研究の現在と未来（Clare Hocking）Current and

かせましょう Join: Let's make bloom the flower of occupation	から（村井真由美）Using and producing knowledge of occupation	future research in occupational science
15（三原） 作業科学と社会 Occupational science and society	我，作業する，ゆえに我あり（近藤敏）I do occupation therefore I am	作業と参加とソーシャルインクルージョン（Gail Whiteford）Occupation, participation, and social inclusion
16（札幌） 作業科学からの架け橋：作業療法へ, 学際領域へ, 未来へ The bridges from occupational science	作業がつなぐ過去・現在・未来：障害を超えて生きるということ（近藤知子）Occupations connect the past, the present, and the future: The way of living beyond the disability	作業科学の構築（Doris Pierce）Building occupational science
17（福島） 作業科学からのメッセージ Messages from occupational science	作業を通して人を理解すること：東日本大震災を経験してその重要さを改めて考える（齋藤さわ子）Understanding people through occupation: Re-considering of its significance by the experiences of the Great East Japan Earthquake	作業の理解：作業療法に不可欠なこと（Helene Polatajko）Understanding of occupation: Imperative for occupational therapy
18（山口） 作業科学とリーダーシップ Occupational science and leadership	作業科学における場所の再考：トランザクションの視点から（坂上真理）Revisiting "Place" in Occupational Science: from a Transactional Perspective	リーダーシップという作業：作業科学と差にとっての契機（John White）Leadership as occupation
19（浜松） Transition：人々の生活・人生における移行と作業 Transition and occupation in human life	Transition：移住，教育，就労を通しての考察（浅羽エリック）Transition: Contemplations through illustration s of migration, education, and work	高齢期に意味ある存在を生きる（Jean Jackson）Living a meaningful existence in ole age
20（愛知） 社会の課題を作業のレンズで捉える Perceiving social problems through occupational lens	作業の複雑系（酒井ひとみ）Complex system of occupation	作業的公正（Elizabeth Townsend）Occupational justice

作業科学に関連して生まれた私の作業や皆さんの作業について，プレイバックシアターの手法を使って共有したい．

略歴：国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院作業療法学科卒業．1995 年より県立広島大学（当時広島県立保健福祉短大）に勤務．米国ウェスタンミシガン大学にて修士，吉備国際大学にて博士取得．担当科目は，作業科学，生命倫理学など．翻訳「COPM カナダ作業遂行測定」（大学教育出版）など，著書「『作業』って何だろう」（医歯薬出版）など．2006 ～ 2012 年日本作業科学研究会理事，2014 年より会長．2014 年よりプレイバックシアター劇団しましま代表．

Profile: Hiromi Yoshikawa graduated from the School of Rehabilitation. She has worked at Prefectural University of Hiroshima since 1995. She earned the Master of Science from Western Michigan University and the Doctor of Philosophy from Kibi International University. She is teaching the courses such as occupational science and bioethics. She translated the Canadian Occupational Performance Measure and wrote What is Occupation. She has been the president of the Japanese Society for Study of Occupation and the representative of Playback Theatre Company C-ma C-ma since 2014.

第 20 回作業科学セミナー　佐藤剛記念講演

生きているシステム「複雑系」としての作業
―作業を受け止める前提－

酒井　ひとみ

関西福祉科学大学

長年の作業科学ファンというだけで，佐藤剛記念講演という機会を頂戴したことを光栄に思います．

1979 年に作業療法士養成校を卒業し，2 年間地元の大学病院で急性期から亜急性期の身体障がいを経験後，国立身体障害者リハビリテーションセンターに 12 年間勤務，おかしく楽しく過ごしました．しかし，OT がわからなくて悩んでもいました．1990 年に恩師の矢谷令子氏を囲んだ「作業療法を考える会」という勉強会をしました．1 回目のテーマは，「なぜ，我々は OT の核は何かと悩んでいるのか？」でした．同時期に KJ 法研鑽会（KJ 法講習会参加者有志の勉強会）合宿でも「作業療法とはなにか？」をテーマにとりあげました．

1993 年地元で養成校を開設，作業療法を次世代につないでいく責任が生じてきました．1995 年 OT 協会主催の第 1 回指導者のための作業療法教育総論 4 泊 5 日の研修会（企画・運営・講師：山田孝氏・佐藤剛氏・宮前珠子氏）に参加し，作業療法の歴史を継時的に振り返ることで，OT には近隣職種と異なった哲学があり，作業療法士は独特の信念を持っていると分かりました．しかし，OT 実践に対する需要が急速に拡大しつつある中，OT らしさを辿る術が学問的に等閑にされている状態であることも知りました．

ちょうど OT の独自性や学問的背景を明快に説明できないもどかしさを抱えていた私は，1995 年全国研修会のプレワークショップ 2 泊 3 日（後に「第1回の作業科学セミナー」と位置付けられる）で「作業科学（佐藤剛氏は Occupational Science を作業学と訳して紹介，後に，作業科学とした）」と出会いました．講師は，作業科学（以下，OS）の第一人者の Florence Clark 氏（南カリフォルニア大学）であり，このワークショップには Ruth Zemke 氏も同行していました．OS は，OT の歴史的背景を踏襲する形で OT の統一した視点を持ち，｛作業が健康にとって重要であることが広く公に認知されて初めて専門職が評価される｝という考え方のもと誕生しました．1989 年に誕生したこの新しい科学は，OT の羅針盤的役割を果たすものと予感しました．

それ以来，OS 関連のセミナーや研修会に参加したり，同志に支えられながら勉強会など継続的に行っています．質的研究の興味が高じて職業生活を中断して文化人類学の大学院に進学したりもしました．OS を知るようになって，OT に対する不透明感は和らぎました．OS によって，作業療法士のアイデンティティが明確になり，作業療法は，作業を支援することであると明快になったからです．一方で，OT に対する焦燥感が増してきています．作業のレンズを通してみると，作業療法士以外の職種が作業療法をして社会に貢献しているのが見えてくるからです．作業療法の作業とは何かということに作業療法士は真摯に向き合っていくことがますます必要な気がしています．

近年作業療法関連の研修会等で「クライエントの作業や作業ニード評価」について講演依頼をよく受けます．実際に，評価法の背景にある理論不在で評価法が迷走している場面に遭遇することも多々あります．背景の理論を理解する仕方を試行しているところです．ここでは，「作業を受け止める」前提となる理論や概念について取り上げようと考えています．作業を複雑系から捉え，クライエントの作業の受け取り方や支援に向けての考え方について述べたいと思います．

作業科学研究, 10, 87-88, 2016.

Occupation as a Complex, Living System
- Prerequisites for Acceptance of Occupation -

Hitomi SAKAI, PhD, OTR

Department of Rehabilitation Sciences, Kansai University of Welfare Sciences

It is my honor to be invited to speak at the Tsuyoshi Sato Commemorative Lecture.
It was at the 1st Annual Japanese Occupational Science Seminar in 1995 that I first learned about occupational science (OS). It was right at that time when I was growing frustrated with being unable to clearly explain the identity and academic context of occupational therapy (OT).
By adopting a unified viewpoint in a form that follows the historical background of OT, in which it is widely recognized that occupation is an important aspect of one' s health, and for the first time putting it in context with evaluation as a specialist field, OS was born. I felt hope that this new field of study, which was created in 1989, could serve as a guidepost for building understanding of OT.
Since then, I have participated in OS-related seminars and workshops and carried out regular study sessions with the support of my peers. My interest in qualitative research continued to build, leading me to put my career on hold and enroll in graduate school to study cultural anthropology. By learning about OS, I was able to ease my uncertainties concerning OT. Through OS, the true identity of an occupational therapist became clear, and I came to understand that OT is meant to play a role of support with regard to a client' s occupation.
However, the current state of OT is showing increasing disarray. This is because, when looking at it through the lens of occupation, there are specialists other than occupational therapists contributing their own forms of OT to society. I feel that it is becoming more and more necessary for occupational therapists to more seriously consider exactly what the work of OT is.
In undertaking this lecture, I came face-to-face with the concept of "occupation." Here, I shall delve into the theories and concepts that form the prerequisites for evaluating a client' s occupation and that occupation' s needs, a topic which generates many requests at workshops and other academic gatherings. I would like to, in the context of viewing occupation as a complex system, describe the concept of how to accept and properly support a client' s occupation.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 87-88, 2016.

人の交わりから生まれる地域づくり―コミュニティカフェの視点から―

倉持　香苗

日本社会事業大学

本報告では，地域拠点としてのコミュニティカフェ注 1) に焦点を当て，地域に誰もが集える場所（例えば，高齢者・障がい者・児童というように利用者層を限定しない場所）を設置することの意義およびそこに常駐するスタッフのアプローチの重要性について論じる．そして，こうした場所が地域を基盤とした住民の主体的な活動の拠点として機能する可能性について述べる．

わが国の地域は希薄化し，これまで近隣で支え合ってきた関係が失われてしまった．例えば孤立死の問題は，地域において誰かと何らかの繋がりがあれば防ぐことができたのではないかと考えられる例が少なくない．また，複雑化・多様化した福祉課題を行政のみで解決することが困難になり，地域における住民の助け合いが求められている．さらに，定年退職を迎えた団塊の世代の自己実現の高まりと共に，彼らが地域で活躍することも期待されている．このように，希薄化した地域において人間関係を再構築することの重要性が指摘されている．

誰もが気軽に利用することができるコミュニティカフェは，子どもから高齢者まで，障がいの有無を問わず多様な人が交わることから，他者理解の場，情報交換の場，自己実現の場などの役割を果たしている．また，スタッフと利用者注 2) は，サービスを提供する側とサービスを受ける側という関係ではなく，共にその場を創り出すという関係であることが多い．すなわちコミュニティカフェは，利用者のみならずスタッフの自己実現の場になっていることも珍しくない．

これまでの研究において，利用者および地域に対するスタッフのアプローチの重要性が明らかになった．そして，地域を基盤としたコミュニティカフェは，コミュニティカフェ内部にとどまらず，コミュニティカフェの内部と外部すなわち利用者と地域を繋ぐ機能を果たしていると考えられた．

コミュニティカフェで出会った者同士がどのように知り合いになるのか．そして何故，誰もが利用できる場所が必要とされるのか．当日は，これらの点に関する報告を通じ，コミュニティカフェを拠点とした地域づくりの可能性について考えていきたい．

注 1）ここではコミュニティカフェを「飲食を共にすることを基本に，誰もがいつでも気軽に立ち寄り，自由に過ごすことができる場所」（倉持 2014）と定義する．

倉持香苗（2014）『コミュニティカフェと地域社会――支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店．

注 2）コミュニティカフェでは，「利用者」のほか，「利用客」，「参加者」などと呼ばれている．

作業科学研究, 10, 89-90, 2016.

Community development occurring through interpersonal interaction: From the perspective of community cafés

Kanae Kuramochi

Japan College of Social Welfare

This work focuses on community cafés1) as sites for community interaction. This work discusses the significance of creating places where various members of the community can congregate (places where visitors are not limited such as "the elderly", "the disabled", and "children") and the importance of approaches by permanent staff. This work also describes how these places can serve as springboards for independent community-based efforts by local residents.

Community bonds in Japan have weakened and mutual support among neighbors has ceased. One example of this is deaths alone. In many instances, these deaths could have been prevented if the deceased was in contact with other members of the community. In addition, welfare work has become more complex and more specialized, but this work cannot be undertaken by government agencies alone. Mutual cooperation among residents of the community is needed. Moreover, the generation that is approaching mandatory retirement age needs greater self-actualization and that generation needs to be active in the community. Since community bonds have weakened, interpersonal relationships must be re-established.

A community café is a place where visitors are welcome and where various people, be they children, the elderly, or the disabled, can interact, so a community café serves as a setting for emotional support, a forum for sharing information, and a setting for self-actualization. Moreover, staff and customers 2) often create the setting together, rather than simply acting as service providers and service recipients. In other words, a community café is often a setting for self-actualization of both customers and staff.

Previous studies have noted the importance of staff approaches for customers and the community. Efforts of a community café are not confined to the café itself. Instead, a community café serves to link its customers to the community at large.

How do the people who met in community cafe for the first time get to know? Why is the place that is available to anyone required? These questions will be addressed in this work, think about possibility of the community development based in the community cafés.

1) Here, a community café is defined as “a place where one can go to partake of food and drink or wile away the time and where one may be readily approached by others” (Kuramochi 2014).

Kuramochi, Kanae (2014) Community Cafés and Local Communities: Social Services to Encourage Cafés and Communities to Support One Another, Akashi Publishing.

2) Customers of a community café can be referred to as “customers,” “patrons,” “visitors,” or the like.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 89-90, 2016.

第 20 回作業科学セミナー　基調講演

作業のレンズで社会の課題を捉える：
作業的公正と作業権の継続的な対話への誘い

エリザベス　タウンゼント

ダルハウジー大学　名誉教授，プリンスエドワード島大学　外部教授

社会の課題は，世界のどこにおいても我々を苦しめ得る．特に否定的な結果をもたらす社会の課題において，我々が新しい見識を必要とすることは明らかに思える．我々はまた，社会の課題により日々の世界で参加が他者より制限されるのはいつなのかを示し，人の権利のために立ち上がる必要がある．日々の不公正と，社会の課題により引き起こされる制限された人の権利について，作業のレンズで捉えるこの基調講演は，第 20 回日本作業科学セミナーの参加者を作業的公正と作業権 (Townsend & Wilcock, 2004) における継続的な対話へと導びくであろう．

作業科学研究，10，91-92，2016.

The 20th Occupational Science Seminar, Keynote Lecture

Social Problems Through an Occupational Lens:
Bringing Occupational Justice and Occupational Rights into the Dialogue-in-Progress

Dr. Elizabeth Townsend

Professor Emerita at Dalhousie University, Adjunct Professor at the University of Prince Edward Island in Canada

Social problems can overwhelm us everywhere in the world. It seems clear that we need new insights on social problems that negatively effect some more than others. We also need to name and stand up for human rights when social problems restrict participation in the everyday world for some more than others. With an occupational lens on everyday injustice and restricted human rights resulting from social problems, Dr. Townsend’ s Keynote Lecture will draw the 20th Japanese Occupational Science Seminar audience into the dialogue-in-progress on occupational justice and occupational rights (Townsend & Wilcock, 2004).
g population. Key references for those interested are:

Townsend, E.A. (2015). The 2014 Ruth Zemke Lectureship in Occupational Science. Critical occupational literacy: Thinking about occupational justice, ecological sustainability, and aging in everyday life, Journal of Occupational Science, 22, 389-402, doi: 10.1080/14427591.2015.1071691
Townsend, E.A., & Polatajko, H.P. (2013). Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision of health, well-being and justice through occupation. (2nd ed). Ottawa, ON: CAOT Publications ACE.

Social problems can overwhelm us everywhere in the world. It seems clear that we need new insights on social problems that negatively effect some more than others. We also need to name and stand up for human rights when social problems restrict participation in the everyday world for some more than others. With an occupational lens on everyday injustice and restricted human rights resulting from social problems, Dr. Townsend’ s Keynote Lecture will draw the 20th Japanese Occupational Science Seminar audience into the dialogue-in-progress on occupational justice and occupational rights (Townsend & Wilcock, 2004).
g population. Key references for those interested are:

Townsend, E.A. (2015). The 2014 Ruth Zemke Lectureship in Occupational Science. Critical occupational literacy: Thinking about occupational justice, ecological sustainability, and aging in everyday life, Journal of Occupational Science, 22, 389-402, doi: 10.1080/14427591.2015.1071691
Townsend, E.A., & Polatajko, H.P. (2013). Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision of health, well-being and justice through occupation. (2nd ed). Ottawa, ON: CAOT Publications ACE.
Townsend, E.A. (2012). The 2012 Townsend & Polatajko Lectureship. Boundaries and bridges to adult mental health: Critical occupational and capabilities perspectives of justice: 2010 Townsend and Polatajko Lectureship. Journal of Occupational Science, 19(1), 8-24.
Stadnyk, R., Townsend, E.A., & Wilcock, A. (2010). Occupational justice, in C. Christiansen, C., & E.A. Townsend (Editors). Introduction to occupation: The art and science of living, 2nd Edition, pp. 329-358, Thorofare, NJ: Prentice Hall.
Nilsson, I., & Townsend, E.A. (2010). Occupational justice – bridging theory and practice. Scandinavian Journal of Occupational Therapy, 17, 57-63.
Townsend, E.A., & Wilcock, A.A. (2004). Occupational justice and client-centred practice: A dialogue in progress. Canadian Journal of Occupational Therapy, 71, 75-87.
Townsend, E.A. (2003). Power and justice in enabling occupation. Canadian Journal of Occupational Therapy, 70, 74-87.
Wilcock, A.A., & Townsend, E.A. (2000). Occupational terminology interactive dialogue. Occupational Justice. Journal of Occupational Science, 7, 84-86.
Townsend, E.A. (1996). Institutional ethnography: A method for analyzing practice. Occupational Therapy Journal of Research, 16, 179-199.
Townsend, E.A. (1993). Occupational Therapy's Social Vision/Notre Vision Sociale en Ergotherapie, Muriel Driver Memorial Lecture 1993. Canadian Journal of Occupational Therapy, 60, 174-184.

Japanese Journal of Occupational Seience, 10, 91-92, 2016.

≪口述発表≫

元プロサッカー選手の作業的移行支援のための探索的研究

金野　達也[1)]，齋藤さわ子[2)]
1) 目白大学作業療法学科，
2) 茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科

1．はじめに

プロサッカー選手が引退後セカンドキャリアを獲得する事は，サッカーの代わりとなる作業を獲得する作業的移行として捉える事ができる．スムーズな作業的移行には，過去と現在の作業に結びつきがあるという報告があり，過去と結びつきのある作業に移行するように支援する事（以下，作業的移行支援）で，セカンドキャリアへスムーズな作業的移行ができる可能性がある．しかし，セカンドキャリア獲得に成功した元プロサッカー選手において「プロでサッカーする」と「現在の仕事をする」という各作業の意味や機能に結びつきがある事を示す研究はなく，支援の有効性は未知である．そこで，本研究では，現在のキャリアに満足している元プロサッカー選手の「プロでサッカーをする」と，「現在（サッカー関連）の仕事をする」意味や機能の結びつきを理解する事を目的とした．

2．方法

研究協力者は元プロサッカー選手 7 名（年齢幅 29 ～ 44 歳）で，引退後 5 ～ 19 年経過しており，サッカー関連の仕事（監督・コーチ・強化部長等）をし，研究に同意が得られた人を対象とした．半構造化面接を実施し，IC レコーダーにて記録しデータを収集した（一人 1 回，時間は 30～96 分）．データ分析は，質的分析ソフト MAXQDA を用いて継続比較法で行った．①音声データから逐語録を作成し，②作業的移行・作業の意味・作業の機能に関連した表現にコード名をつけ，③類似したコードをカテゴリーにまとめ，④「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」意味や機能のカテゴリー間を比較しながらその結びつきを検討し，⑤コードとカテゴリーに類似例や反対例がないかを検討し，一人目の研究協力者のモデルを作成した．①～⑤と同様の手順で，2 人目以降もモデルを作成し，順次比較を繰り返しながら，全ての研究協力者の統合したモデルを作成した．分析は，部活動でサッカー経験があり半構造化面接を実施した作業療法士と，作業の意味や機能について理解しており，質的研究経験のある作業療法士1名で行った．本研究は茨城県立医療大学の倫理委員会の承認を得て行った（承認番号 620）

3．結果

「プロでサッカーする」意味は，**好きな事（語り例：好きな事をやってただけ）**であった．「サッカー関連の仕事をする」では，**好きなサッカーへの関与（語り例：サッカーに関わっていく仕事をやりたかった）**，または**好きな事（語り例：好きな事をやっている）**であればサッカー関連でなくても良いという意味もあり，意味の結びつきが語られていた．「プロでサッカーする」機能としては，サッカーのプレー技術の維持・向上に加え，**努力できる事（語り例：努力は普通，当たり前）や仕事への責任感（語り例：責任ある行動をとる）などのサッカーのプレー技術以外の能力も**得られていた．サッカー関連の仕事は，プロサッカーの経験は活かせるが，その仕事内容はプロサッカー選手とは**似て非なる仕事（語り例：元プロサッカー選手だからといって指導が上手いわけじゃない）**であると認識されていた．サッカー関連の仕事での成功は，サッカーのプレー技術以外の「プロでサッカーをする」で得られた能力も身につけていたからでもあり，また，その能力を「サッカー関連の仕事」に活かすことを通して，前職の「プロでサッカーする」とのつながりも感じていることが語られていた．

4．考察

一般的に，元プロサッカー選手は，サッカー関連の仕事であれば，サッカーの技術を活かせるという理由で，良い作業的移行として認識されている．しかし，本研究結果から，サッカー関連の仕事であっても，プロでサッカーをする事とは似て非なる仕事であると認識されていた．似て非なる仕事であるにも関わらず，移行がスムーズであったのは，「プロでサッカーをする」と「サッカー関連の仕事をする」の間の意味（例，好きな事）の結びつきや，「プロでサッカーする」機能である，サッカーのプレー技術以外で得た能力が活かせていると感じられた事が影響している事が理解された．つまり，現役中からその人の作業の意味や機能を理解し，それがセカンドキャリアに結びつきやすいよう支援する事が健康問題なくスムーズに作業的移行することに有効である可能性があるといえる．全てのプロサッカー選手が引退後に，サッカー関連職に就けるわけではないので，今後はサッカー関連以外で仕事している人を対象に，理解を深める必要がある．

作業科学研究 , 10, 93-94, 2016.

Exploration of occupational transition support for a former professional soccer player

Tatsuya Kaneno[1)], Sawako Saito[2)]
1)Department of Occupational Therapy, Mejiro University
2)Department of Occupational Therapy,
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

1. Introduction

The phenomenon of former professional soccer players acquiring a second career following retirement from sport is considered an occupational transition. Previous studies indicated that a connection between past occupation and present occupations encouraged occupational transition. Therefore, a support program that connects the new occupation to the past occupation has the potential to be very effective. However, the connection between playing soccer professionally and having a second career remains to be not elucidated. The purpose of this study was to examine the connection between playing soccer professionally and doing a second career, from the point of view of occupational transition.

2. Methods

Seven former professional soccer players were included in this study. Semi-structured interviews were carried out and the data were analyzed using constant comparative analysis by MAXQDA. The data analysis was performed by two occupational therapists. One of the occupational therapists had experience related to playing soccer. Another occupational therapist had knowledge of occupational meaning and function and had experience conducting qualitative studies. This study was approved by the Ethics Committee of the Ibaraki Prefectural University of Health Sciences (No. 497).

3. Results

The meaning of playing soccer for professional athletes is in being able to do some of their favorite activities. The meaning of doing a career related to soccer is in participating in soccer and their favorite activities. These statements demonstrate the connection between playing soccer professionally and doing a career related to soccer. There is an occupational function in playing soccer for professional athletes, such as in making an effort and having career-related responsibilities in addition to playing soccer. For careers related to soccer, the function is similar but not identical to that of a professional soccer player. Therefore, making an effort and having an understanding of work responsibilities are factors that should be used in order for a player to adapt to a career related to soccer.

4. Discussion

This study indicated that having a career related to soccer and playing soccer professionally are close but not the same. Despite this, the reason why the participants experienced a positive occupational transition was maintaining connections of occupational meaning and function between the career of a professional soccer player and a second career. Therefore, this study indicated that it is important to provide support based on analysis of occupational meaning and function.

介護老人保健施設入所高齢者の施設環境と作業的公正の関係～　要介護2の女性入所者の語りから理解できること　～

真田育依，　齋藤さわ子，　伊藤文香，　水野高昌
茨城県立医療大学

はじめに：作業的不公正な状態は人の健康に悪影響を及ぼすことは知られている．また，介護老人保健施設入所者は作業的不公正な状態にある可能性が指摘されている（小林ら，2002）．しかし，どのような入所者がどのような作業的不公正状態にあるのか，何故，作業的不公正状態が生じるのかに関する研究はほとんどなく，どのような対策が中間施設と位置づけられる施設入所者の作業的公正を促進・維持するかの手だてを検討できる知見がないのが現状である．

目的：老人保健施設に適応的に生活していると考えられる 2 名の女性入所者の作業的公正状態と施設環境との関係を理解すること．

研究方法：情報提供者は A 施設に 1 年 9 ヶ月間入所している 70 歳代後半の女性の安藤さん（仮名）と，B 施設に 2 年 1 ヶ月入所している 70 歳代後半の女性の猪俣さん（仮名）であった．2 名とも要介護 2 であった．手段は，半構造化面接を用い，面接は IC レコーダにて記録した．尚，施設に研究の協力の依頼を行い同意

を得た後，施設スタッフに情報を提供してくれそうな入所者に声をかけてもらい，研究説明を受けても良いと応えてくれた入所者に研究者から正式に研究説明を行い同意を得た．データ分析は，面接で収集したデータをもとに逐語録を作成し，セグメント化，コード化したのち，サブカテゴリー，カテゴリーを作成した．さらに，カテゴリー同士の関係性を概念化するといった流れで進めた．尚，全ての過程において作業療法士であり質的研究の経験がある作業科学研究者と共に検討した．本研究は所属機関の倫理審査で承認された．

結果と考察：施設での作業を遂行，希望するまでのプロセスの背景には，《以前の生活における作業の特徴》と《施設に対する認識》が関係していた．《以前の生活における作業の特徴》では，安藤さんは，「家事はやらなくてはいけないこと」と家事を義務的に捉え，自分のやる気の有無で作業を選択するような生活はしていなかった．一方猪俣さんは，「大好きな家事」「趣味を行う」など願望的作業を多く行う生活をしていた．また，両氏共に，《施設に対する認識》において，「施設は楽」「施設は安心するところ」という考えと「施設には制限があるがそれは当たり前」という認識を抱いていた．また，「少なすぎる施設での作業」と思いながらも「今の自分には適切な施設での作業」といった，作業的公正かどうかの判断を本人が認識できていない状態にある可能性が示された．

施設での作業を遂行，希望するまでのプロセスでは，共通して《実現しない自宅復帰》があり，「何もしなくてもよい」という施設生活の背景をもとに，「家事の困難さ」等の自宅復帰に必要な作業に対する困難さを感じながらも「練習のなさ」，猪俣さんの場合は更に「練習の禁止」「不十分な支援」といった環境にあるために「やらないことで低下する意欲」に関係していた．さらにはそのことが「自宅復帰への迷い」「自宅復帰への諦め」につながり，不安感や不全感を抱きながら生活することにつながっていた．また，《実現しない自宅復帰》により《施設内で充実して暮らすための作業》を模索していた．『施設生活での楽しみ的な希望』には，「イベントの回数増加」や「自由な外出や買い物への支援」「音楽的なレクの実施」などが語られた．また，それが『実現しない理由』として「スタッフの人数の限界」「スタッフの時間の余裕の限界」「行う場所がない」といった人的および物的環境の制限や「家族への遠慮」といった本人の周りへの気遣いが語られた．

結論：介護老人保険施設は自宅復帰を目指す中間施設として設けられているが，本研究の情報提供者にとっては，自宅復帰に必要な作業の練習ができない環境であり．その環境が継続することで，その作業に対する意欲が低下し自宅復帰に迷いが生じていた．このことは，自分の能力に適した作業選択が自分自身で行えているのかどうか判断しづらい状態に結びついていると考えられ，本人が望む作業が練習できる環境を整えることと作業的公正には関係があることが理解された．また，施設内では作業が少なすぎるという認識や施設内イベントやしたい作業の支援の希望は，現在の施設内生活では，自身を成長・維持するには作業が不十分という状態にあると同時に，現在あるイベントが楽しみだけでなく，自身の能力に見合った作業とはどんな作業であるかの検討ができる機会となっている可能性も考えられ，イベントの内容や頻度が入所者の作業的公正と関係があることも理解された．今後は，年齢や性別，日常生活能力などが異なる入所者からの情報を広く収集し理解することで，作業的公正を促進する施設環境への提言につなげたい．

文献：小林 法一 , 宮前 珠子（2002）．施設で生活している高齢者の作業と生活満足感の関係．作業療法，21 巻 5 号 472-481.

作業科学研究 , 10, 94-96, 2016.

The relationship between the facility environment and the occupational justice among female elderly living in geriatric health services facilities who were graded 2 on the care requirement in the insurance of the elderly care

Ikue Sanada, Sawako Saito, Ayaka Ito, Takamasa Mizuno
Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

Introduction: It is known that the occupational injustice state adversely affects human health. Kobayashi (2002) pointed out that elderly living in geriatric health services facilities tend to be occupationally in unfair states. There are few studies describing related to this problems.

Purpose: The purpose of this study was to understand the relationship between the facility environment and the occupational justice among female elderly living in geriatric health services facilities who were graded 2 on

the care requirement in the insurance of the elderly care.
Methods: The informants were two women in their late 70s living in geriatric health services facilities who were graded 2 on the care requirement in the insurance of the elderly care. We conducted a semi-structured interview recording it with an IC recorder after obtained consent. The interview data were analyzed by using a qualitative analysis. This research has the approval of the ethics committee of Ibaraki prefectural university.
Results and discussion: Hereinafter, the categories obtained were indicated by << >>. There were two categories founded as the background of their hoping to perform and their performing occupations in the facility: < characteristics of the occupations done in their previous life > and < image of living in the facility >. In < characteristic of the occupation done in in their previous life>, Mrs. Ando caught housework as her duty "Housework was a thing I had to do ". She felt that she had not chosen her occupations by her preference in her life. On the other hand, Mrs. Inomata had performed a lot of occupations which she desired doing it, "Housework was my favorite thing to do" "Doing housework was my hobby" . Both of them had a thought, "The institution was comfortable" "living in facility is to feel relieved" , whereas they felt "There are limitations to do many things here in facility, but it's inevitable" . They also felt "there is few amount of things to do here" while they felt " the amount of things to do may be appropriate for me" . They may not judge it whether oneself is in their occupational justice state. There was < I cannot return home > in the process of their hoping to perform and their performing occupations in the facility.
Adding to the facility life where they said, "Residents don't have to do anything" , they were also in an environment where "I don't have the opportunity to practice" , or "practicing was banned" . Due to this, they are in a situation where they "don't do the desired occupation, therefore they have little willpower" . The category <Activities to make the life in the facility complete> was connected to <they cannot go back to their home>.
Conclusion: It was understood that occupational justice was connected with fixing the environment of geriatric health services facilities which can practice occupations that the residents want to do.

家のなかの「平和」を築く作業　～妻と暮らす脳卒中者のセルフ・コントロール～

藤原瑞穂
神戸学院大学

【はじめに】日常をみたす作業は，複雑で重層的に絡み合っている．そこには人との関わりがあり，配慮がある．文脈から切りとられた作業から，クライアントの全体性を捉えることはできない．また作業が〈できる〉という認識は行為主体であるクライアントのものであり，医療者側の判断が取って代わるものではない．したがって，クライアントがどのように日常生活を経験しているのかを，立ち上がる事象の内面から描き出すことは，作業療法の重要な課題となっていく．
【目的】ある脳血管障害を発症したAさんの「家では平和に過ごさなければならない」という語りに注目し，家で「平和に過ごす」という作業がどのように立ち現れ，経験されているのかを探索する．
【研究協力者と方法】Aさんは70代後半の男性．4年前に脳血管障害による右片麻痺を発症し，週1回デイサービスを利用しながら妻と二人で暮らしている．分析は，Aさんへの非構造的インタビュー（発症から現在の生活についての語り）によって得られた音声データの逐語録ならびにフィールドノーツから，家で「平和に過ごす」作業について，現象学を手がかりに記述的に探索した1)．なお，本研究は大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学系倫理委員会によって審査をうけ，承認を経て実施した．
【結果と考察】Aさんは「残りの余生」を「平和に過ご」すために「根本的に変え」ようとしていることがあり，それは，「セルフ・コントロールする一番メンタルなところ」であった．「倒れてから，たとえばぼくは一人で行けるのに家族は介護しなきゃいけないと思っているこの思いの差だとか，前だったらバーンとお母ちゃんにゴーン言われたら，違うと思ったらかみついて反論」していたこと，「お互いに年をとって，今まで折り合っていた価値観がばらばら～っと散り出すこと」に対して，「自分をず～と少し引いて，少しあがった位置で」「ふわ～と見ながら行動して，ふわ～っと反省して，生きよう」としていた．

以下，家で「平和に過ごす」ための要素を具体的にAさんの語りから引用する．

妻が恐がることはしない Aさんと妻は，回復期リハ病院の退院前訪問で，「ここに手すりつけましょう」「ここはこうやって沈めて」と五右衛門風呂に入るための「手順」を提案される．自宅での生活は「その延長線上」にあった．「持ち方変えたらそれは手順が違う」と指摘することは，妻が作業療法士から受け取った〈役割〉である．Aさんが「もうできるんだよ」と言ってもそれは「危ない」ことで，妻の方が「怖がる」．そのような妻をみて「ああこれはもう，これはそういうあれなんだ」として，〈できる〉けど差し控えるという仕方で妻との共作業が生まれていた．

「見えている」が「動かない」 Aさんと妻は別の部屋で寝て「棲み分け」している．朝，妻が「ゆったりコーヒー飲んで…ほー」っとしている時間が「見えて」いるが，「こっち向いて布団かぶって．それはもう極端に言ったらコトリとも音をいわせんように，目が覚めとっても」動かない．この気遣いは，Aさんの日常に組み込まれていた．

生活のなかの構えと約束事 「『食事』ゆったら『はい！分かりました』，『お風呂』ゆうたら『はい！分かりました』」と，妻からの合図を感じる前から，Aさんの行為には構えができていた．また，夜11時に寝ることは，再発防止のための妻との約束事であったが，Aさんにはやりたいことがあり夜更かしをする．すると「怒られてから家内に電灯消されて」「ささいなけんか」になる．Aさんは，妻との約束事と自身の願望との間で戦っていた．

妻が管理する環境を変えるときは「絶対ばれんようにする」 毎日の着替えは妻が用意する．Aさんは「（シャツのボタンを）はずせんときはあらかじめはめといて手をこう小さくして入らんかな～とかいう試行錯誤して，…ああこれやったらこのボタンの位置5ミリこっちに，ね，縫い直したら入るな思うたら，家内がわからんように，…はさみで切って．ばれたいかんから，ここを一応みて，ここのところ何回くらいくるくると巻いているかな～と見て．事前観察して」ボタンを付け替えていた．

Aさんの家のなかの「平和」を築くという作業は，Aさんのセルフ・コントロールが基盤にあった．それは少し引いて事象を見て，「ふわ～」と感じて反省して生きることであり，妻との「思いの差」を受け止め，「かみついて」反論しないように，また妻に配慮するという形としてあらわれていた．具体的には，「〈もうできるんだよ〉と思っても〔妻が怖がることは〕一人ではやらない」こと，「〔妻の様子が〕見えているのに動かない」こと，「〔妻との〕約束を守る」こと，「妻が管理する環境を変えるときは絶対にばれんようにする」ことであった．

1）村上靖彦：仙人と妄想デートする 看護の現象学と自由の哲学．人文書院，京都，2016.

作業科学研究 , 10, 96-97, 2016.

Occupation of building “peace” in the house: self- control of the CVA survivor living with his wife.

Mizuho Fujiwara
Kobe Gakuin University

Background: Our daily occupations are complex and multifaceted endeavors, and there exist human relationships and concerns. Recognition of “enabling” occupations resides in a realm of a client as an agent of action. Therefore, delineating the client’s experiences from the inside of emerging phenomenon is an important task in the field of occupational therapy.

Purpose: The purpose of this study is to descriptively explore the realities of Mr. A (a CVA survivor) with a help of phenomenological analysis1).

Participant and Method: A research participant is Mr. A in his late 70s, right hemiplegia by CVA for 4 years and now living with his wife. Research methods are participatory observation and narrative interview in a day care center, and obtained field notes and transcript of the interview survey were analyzed. As for ethics of the study, the author has already accepted to the ethics committee in Osaka University.

Results and Discussion: In order to live peacefully in his latter life, what Mr. A is challenging to “radically change” now is “self-controlling mentally” and this became the “basics” in his “rehabilitation” and “family” life. This mentality has been founded “after 1 year and half have passed since his illness suffering.”

Mr. A’s self-control is to live with a feeling of reflectivity. In reality, this has been reflected in the care for his wife to create a family “peace.” More precisely, this has been portrayed in “doing things not by himself,” “not moving alone,” “keeping a promise with his wife,” a so on.

1)Yasuhiko Murakami: Sennin to Mousoude-to Suru. Jimbun Shoin, Kyoto, 2016.

≪ポスター発表≫

臨床実習における作業療法学生の主観的経験：最後まで生き残るということ

田中義徳[1)]，大森謙[1)]，長田敬和[1)]，
高見澤広太[1)]，宮沢輝樹[1)]，澤田有希[1)]，
近藤知子[2)]
1) 帝京科学大学，2) 杏林大学

【はじめに】臨床実習は医療職を目指す学生にとって重要な位置を占めるが，大きな不安やストレスの元ともなる作業である．特に，作業療法では，時期，対象，障害がその都度異なる施設に，1-2 人の学生で臨み，その施設の作業療法士である臨床実習指導者に指導を受ける形態を取り，強い緊張感の中実習を行う．臨床実習に関しては，作業療法だけでなく医師・看護・理学療法など様々な領域で研究や報告がなされており，学生の主観的経験の調査もある．しかし，これらはアンケートなどを通したもので，インタビューを通して学生の経験を深く分析したものはなく，また，学生自身が行ったものも無い．

本研究は，作業療法学生が臨床実習をどのように経験したかを，作業の視点を用いながら，主観的側面から理解・整理することを目的とする質的記述的研究である．本研究では，研究者の立場が対象者と同じ学生であることから，学生のもつ本音を明らかにすることができると考える．得られた結果は，これから臨床実習に行く学生の準備や，臨床実習を終えた学生の自分の経験の整理に役立てることが可能であり，また，教員や実習指導者が効果的な教育・実習指導するために活用できると考える．

【倫理審査】本研究は，本学「人を対象とする研究計画等審査委員会」の承認を得て実施した．

【方法】対象者は，少なくとも 2 ヶ所の実習地でそれぞれ 3 週間以上の臨床実習を経験した作業療法学科の 4 年生 3 名であった．これらの者に，教室または自宅で 60 分程度のインタビューを行い，その後必要に応じて追加の質問をした．質問内容は実習で大変だったこと，良かったこと，日常生活の過ごし方などである．得られたデータは，逐語録を作成した後，修正版グラウンデッドセオリーアプローチを基にし，概念化し，カテゴリー化した．

【結果と考察】対象者の臨床実習の経験は①「実習場面での生き残り」，②「追い詰められた生活の中でのやりくり」，③「実習を通じた変化」の 3 つのカテゴリーに分類することができた．①の「実習場面での生き残り」では，サブカテゴリーとして「人間関係の構築」，「課題をやり抜く」，「実習場面以外の人からのサポート」が挙がった．②の「追い詰められた生活の中でのやりくり」のサブカテゴリーは，「睡眠時間の確保」，「日常作業の効率化」「ストレスの軽減の作業」であった．③の「実習を通じた変化」のサブカテゴリーには「作業療法（作業療法士）への思い明確化」「技術・知識の進歩」「自分の問題点の把握」が含まれた．全体的にみると臨床実習とは対象者にとって，普段の大学生活とは全く異なる，「最後まで生き残る」作業であった．

【結論】対象者にとって臨床実習とは，生き残りをかけた作業であった．実習では，臨床場面で良い人間関係を作り，課題をやり抜くだけでなく，生活面でも時間に追われながら日常作業を工夫していた．同時に実習は，作業療法や自分に対する考え方に変化を与える作業であった．

【文献】木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリーアプローチの実践：質的研究への誘い．東京：弘文堂

作業科学研究 , 10, 98-99, 2016.

Subjective Experiences Occupational Therapy Students during the Fieldwork: Surviving until the End

Yoshinori Tanaka[1)], Ken Omori[1)],
Keiwa Osada[1)], Kota Takamisawa[1)],
Teruki Miyazawa[1)], Yuki Sawada[1)], Tomoko Kondo[2)]
1)Teikyo University of Science, 2) Kyorin University

Background: Field work (FW) is one of the most important and challenging curriculum for the students who aim to be health professions. In our school the occupational therapy (OT) students go at least four different facility individually for 3 to 8 weeks respectively, located in various part of the nation, sometime staying at the residential inn during the field work. It is very stressful for us as the students; we practice in unfamiliar environment, receive supervise from the OTs who are also unfamiliar, and constantly feel to be evaluated. Despite many studies of field works in various health professions, there was no study that

employed in depth interview and were conducted by OT students. In this study we try to understand OT students' subjective experiences of FW through descriptive qualitative approach. In this study, FW is considered as an occupation. The advantage of this study is that the interviews were conducted by the students who were their classmate of participants. Consequently, participants were able to disclose their honest feelings and thoughts through the interview.

Method: Participants were chosen by convenient sampling. Three 4th year students of our school were selected. They already experienced FW at least at 2 settings for more than 3 weeks. We interviewed each participant approximately 60 minutes at the classroom or their apartments. Additional questions were asked if necessary. The questions included the difficulty they felt, good things that happened, and their daily lives during FW. The interviews were tape recorded and transcribed word for word. Based on M-grounded theory approach (Kinoshita, 2003), the data was read thoroughly, conceptualized and categorized.

Findings and Discussions: As the participants experience, three major categories, 1) surviving at the FW site, 2) managing daily lives in the cornered situation, 3) transforming through FW were raised. Each category had three to four subcategories. The core category was appeared as "Surviving until the end". The students try to survive during FW in which they had completely different experience from the one they had at their ordinal lives as the university students.

Conclusion: For the participants, FW was experienced as survival. They struggled to construct the relationship with supervisor, staff, and clients, complete assignment, optimize their basic daily activities maximally. At the same time, FW was the place to transform themselves through strengthening the thoughts to be occupational therapists and reflecting their own problems.

Reference

Kojin, K. (2003). Gurandedo Seorii Apurouchi no Jissen: Shituteki Kenkyu heno Sasoi. Kobundo. Tokyo

作業形態の再考

髙島理沙[1)]，坂上真理[2)]
1) 北海道大学大学院保健科学研究院
2) 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

はじめに：作業科学では作業の形態，機能，意味を研究すると説明されている．本稿では，このうちの作業形態に着目した．作業形態とは，作業の観察可能な側面であり (Clark ら 1998)，ある文化の成員によって共有された作業の特定のやり方を表す (Kielhofner 2012)．作業形態を理解するための構成概念として，Nelson(1988) は①物理的環境，②人的環境，③時間的環境を含む物理的側面，および，④文化の構成員と⑤社会文化的意味を含む社会文化的側面に言及している．これらに加えて，Clark ら (1998) は，⑥作業の着想，⑦構成，⑧秩序立て，⑨その他の質的側面を含む質的側面にも言及している．このような作業科学の概念的な知識を実践で効果的に活用するためには，理論と実践を統合するプロセスが必要となる．本研究の目的は，先行研究で言及されていた作業形態の 9 つの下位概念について，作業療法実践のレベルで活用するための具体的な内容を「実践的な定義」として明らかにすることである．

研究方法：作業に焦点を当てた作業療法の実践事例を分析した．(1) 事例収集→日本作業療法士協会の事例報告登録システムを利用し，「意味ある作業」をキーワードに検索した結果，36 例がヒット．このうち，意味ある作業の構築・再構築を支援する内容ではなかった 2 例を除外した 34 例を分析対象とした．(2) 分析方法→作業形態の 9 つの下位概念について事例報告内の具体的な記述を抽出し，マトリックス表を作成．記述されていたそれらの内容を比較検討し，9 つの下位概念の実践的な定義をおこなった．

結果：9 つの下位概念について，作業療法事例の記述に即した実践的な定義が成された．一つのまとまりのある作業として成立するためには，複数の下位概念間の関係性を定めてまとめあげる必要がある．「秩序立て」は，作業形態を構成する複数の下位概念をまとまりのある一つの作業としてまとめあげる“やり方”を示すものであった．その人に特有の作業の“やり方”を理解する上で，特に重要な下位概念であった．作業の秩序立ては，最終的に，「作業の開始から完了に渡って，

人や物を場所や時間の中で順序よく，筋道を通して配置したり処理したりする一連のやり方のこと」と定義された．

考察：作業の一側面として作業形態という概念はこれまでも広く知られてきた．一方で，作業科学の概念的な知識を実践で効果的に活用するためには，理論と実践を統合するプロセスが必要となる．本研究では，先行研究で言及されていた作業形態の 9 つの下位概念について，事例分析を通した実践的な定義を試みた．本研究で明らかにされた実践的な定義は，人が作業に結びつくことを支援する際に，その人にとって重要な作業のユニークな“やり方”を理解することを促進すると期待できる．

文　献：Nelson DL. (1988). Occupation: form and performance. The American Journal of Occupational Therapy, 42(10): 633-41.

Clark F. & Larson EA. (1998). Developing an academic discipline: the science of occupation. In Schell BAB, Gllen G. & Scaffa ME. (eds), Willard & Spackman’s occupational therapy (9th ed). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.

Kielhofner G. (笹 田 哲・訳) (2012). 作 業 形 態 . Kielhofner G. (山田孝・監訳)：人間作業モデル―理論と応用―. 改訂第 4 版 , 東京：協同医書出版社 .

作業科学研究 , 10, 99-101, 2016.

Reconsideration of occupational form

Risa Takashima[1)], Mari Sakaue[2)]

1)Hokkaido University,　2)Sapporo Medical University

Introduction: Occupational science is the discipline that researches the meaning, function, and form of an occupation. This study focuses on occupational form, which is the visible side of an occupation (Clark et al. 1998), and it is a particular way that members of a particular culture have in common when they perform an occupation (Kielhofner 2012). To understand occupational form, Nelson’s (1988) description of the physical side includes 1) physical environment, 2) human environment, and 3) temporal environment, and the sociocultural side includes 4) members of a culture and 5) sociocultural meaning. In addition, the qualitative side, according to Clark et al. (1998), includes 6) conception of an occupation, 7) construction, 8) organization, and 9) the others. To practically utilize the concepts of occupational science, it is important to integrate theory with practice. The purpose of this study is to explore “practical definitions” of the nine subordinate concepts to employ them in a therapy.

Methods: We analyzed case reports of occupational therapies focusing on occupations. 1) Gathering the case reports: the system offered by the Japanese Association of Occupational Therapy was used. An online search using the keywords “meaningful occupation” resulted in 36 cases. 2) The method of analysis: we extracted descriptions from those reports based on the nine subordinate concepts and made a matrix table. When comparing those descriptions, practical definitions were given to the nine subordinate concepts.

Results: Practical definitions of the nine subordinate concepts were made in line with those case reports. It was necessary to determine the relationships between subordinate concepts and to combine them so that they could become a coherent occupation. “Organization” was particularly an important concept in understanding a person’s unique way to perform an occupation. “Organization” was defined as “a series of ways to locate and process persons and objects in a place and time, logically and in order, from start to completion”.

Discussion: Although the concepts of occupational form are widely known as one side of an occupation, implementing the conceptual knowledge of occupational science requires the integration of theory and practice. This study attempted to make practical definitions of the subordinate concepts of occupational form through the analysis of case reports. Those practical definitions could promote the understanding of people’s unique ways to perform their important occupations.

References: Nelson DL. (1988). Occupation: form and performance. The American Journal of Occupational Therapy, 42(10): 633-41.

Clark F. & Larson EA. (1998). Developing an academic discipline: the science of occupation. In Schell BAB, Gllen G. & Scaffa ME. (eds), Willard & Spackman’s occupational therapy (9th ed). Philadelphia: Lippincott

Williams & Wilkins.
Kielhofner G. (2012). A model of human occupation: Therapy and application (4th ed). Tokyo: Kyodoishiyakusyuppan.

Co-occupationとしての作業療法における クライエントと担当作業療法士の相互理解のプロセス

坂根勇輝[1,2]，ボンジェ・ペイター[2]
1) 公益財団法人丹後中央病院，
2) 首都大学東京大学院

【はじめに】作業療法はクライエントと作業療法士の‘Co-occupation’（Pierce，2003）としてとらえることができる．クライエント―作業療法士関係についてのこれまでの研究は，臨床現場のクライエントと作業療法士のそれぞれの立場から研究を行なっており，実際の臨床現場の二人の間でどんな相互作用が起こっているのか十分に解明されていない．実際の臨床現場でクライエントと作業療法士がお互いに『生活ができるようになること』をどのように理解しているのか，その相互理解のプロセスを明確にする必要がある．

【目的】回復期リハビリテーション病棟入院中のクライエントと担当作業療法士が『生活ができるようになること』をお互いがどのように理解しているのかというプロセスを探求し，理解すること．

【方法】Narrative in action（Josephsson 他，2015）を用いた質的研究で，回復期リハビリテーション病棟入院中のクライエントとその担当作業療法士 1 組を研究対象者とした．データ収集は作業療法場面の観察と非構造的インタビューを行なった．観察は，退院約 2 ヶ月前から 1 ヶ月毎に計 3 回実施した．非構造的インタビューは初回観察前と各観察後にクライエントと作業療法士別々に実施した．質問項目は「先ほどの作業療法の場面について振り返って話してください」等を用意したが，研究対象者の反応に応じて柔軟に実施した．データ分析は，テーマ的ナラティブ分析（Riessman，2014）を使用し，研究期間中，複数回実施した観察データからフィールド・ノートを，インタビューデータから逐語録を作成し，それを繰り返して読み込み，研究対象者の相互理解のプロセスを説明するために様々な小テーマを用いて 1 つのストーリーを作成した．研究実施については，平成 27 年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を受けている．

【結果と考察】研究対象者のクライエントと作業療法士の相互理解は，「車の事故」「入浴」「プランターの水やり」などの様々なストーリーラインから出来ていた．クライエントは作業療法士に「退院後の生活は未知数で，作業療法はまかせる」としていた．作業療法士はクライエントの心理面を考慮して言葉ではなく，「クライエントを待つ」としていた．作業療法士はただ待つのではなく，受傷前の生活を参考に作業療法を実施して，「入浴」などの ADL 訓練，「プランターの水やり」などの模擬練習，実際に「プランターの水やり」を行うと段階づけて，クライエントを「待った」．クライエントは『生活ができるようになること』について「退院後の生活はイメージできない」から「退院後の生活がうまくできるかどうかわからない」と変化した．作業療法士はクライエントの『生活ができるようになること』について，当初クライエントもわからず，「作業療法士自身もわからない」状態だったが，経過の中で「家の中で身の回りの事ができたらいい」から「車の運転や仕事もできるのではないか」に変化した．発表では，上記の結果について，作業科学の理論を用いて解釈を行う．

【文　献】Josephsson, S.,Alsaker, S.(2015). Narrative methodology: A tool to access unfolding and situated meaning in occupation. In S. Nayar & M. Stanley (Eds.), Qualitative research methodologies for occupational science and therapy. Routledge,New York. pp.70-83.
Pierce,D.E.(2003).Occupation by Design: Building Therapeutic Power. F. A. Davis, Philadelphia.
Riessman,C.K.(大久保功子・訳)(2014). 第 3 章テーマ分析 .(大久保功子・宮坂道夫監訳), *人間科学のためのナラティヴ研究法*. クオリティケア ,pp.99-145.

作業科学研究 , 10, 101-102, 2016.

The process of the mutual understanding between clients and occupational therapists in occupational therapy as co-occupation.

Yuki Sakane[1,2], Peter Bontje[2]
1)Tango Central Hospital, 2)Tokyo Metropolitan University

Introduction: Occupational therapy can be regarded as 'co-occupations' (Pierce, 2003) between clients and occupational therapists. Studies into the mutual

understanding between clients and occupational therapists have typically explored client and occupational therapist experiences separately and do not explain the kind of interactions going on between them. The aim of this study is to explore the process how clients and occupational therapists mutually understand the enablement of clients' daily life in convalescent rehabilitation.

Method: This qualitative research used a narrative-in-action method (Josephsson, Alsaker, 2015). One client and the occupational therapist were separately interviewed preceding and following observation of an occupational therapy session. Three date-gatherings were conducted, one month apart in the last two months until hospital discharge. The interview was unstructured and informed by an interview-guide with open-ended questions. Date-analysis was thematic narrative analysis (Riessman, 2014). One narrative composed of possible plots was then created to explain the process of creating mutual understanding between the client and occupational therapist. The Tokyo Metropolitan University Arakawa campus research safety ethics committee approved this research.

Findings and Discussion: The mutual understanding between client and occupational therapist was created along a variety of storylines, such as "car accident", "bath", "watering the plants". The client entrusted the therapist about the occupational therapy, because he could not imagine life after hospital discharge. The occupational therapist though "waited for the client" to start considering his daily life. Nevertheless, the occupational therapist implemented graded ADL training, such as "bathing", simulated followed by actual IADL training, such as "watering the plants" after consulting about his pre-injury life. The client' s thinking about the "enablement of the client' s daily life" changed from that he could not image his daily life after hospital discharge to that he could not image his daily life as successful. The occupational therapist thinking about the "enablement of the client' s daily life" changed from that the client could do his self-care in his home to that he could drive a car and work. I will discuss the findings by using the theory of occupational science in the presentation.

References: Josephsson, S., Alsaker, S. (2015). Narrative methodology: A tool to access unfolding and situated meaning in occupation. In: S. Nayar & M. Stanley (Eds.). *Qualitative research methodologies for occupational science and therapy*. Routledge, New York. pp.70-83.

Pierce, D.E. (2003). *Occupation by Design: Building Therapeutic Power*. F. A. Davis, Philadelphia.

Riessman, C.K. (2014). *Narrative Methods for the Human Sciences (First Japanese edition)*. Quality Care, Tokyo, pp.99-145.

障がい者にとって活力ある社会とは

上村麻美 1), 南山七瑚美 1), ボンジェペイター 2)
1) 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科 OTS
2) 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科 教員

【はじめに】障がいのある人々の社会的問題を作業の視点から考えることは，活力1）ある社会を実現するために重要である．そこで，彼らの日常に行っている作業（仕事，勉強，日常生活活動，遊び・余暇活動など）の問題とより良く社会参加できるための工夫・問題解決案を検討した．

【対象と方法】T 大学の教養教育における基礎ゼミナールでは，我々学生が「障がい者の活力とはなんだろうか」を課題として，少人数（7人のグループ）で，課題に関するインターネットなどから選んだ写真をもとに，フォト・ボイス法2）を用いたグループワーク（4 回）と NPO 施設を訪問してボランティア活動参加（1 回）を行った．グループワークは，PHOTO 法ワークシートへ記述し，フィールドでの体験学習の経験を記述した．「活力ある社会」に関する記述に焦点を当て，フレーズを抽出し，同じ意味内容のものに分類・整理した．倫理は，自由参加，身体的または精神的な負荷やプライバシーの保護などを実施した．

【結果と考察】障がいを持つ人の活力ある日常生活を阻害されている3つの『カテゴリー』が抽出された．1つ目は，端に向かって低くなっていたり，タイル調になっていて車椅子に乗る人にとって危険な道路やエレベーターのない駅，入店拒否をするレストランなど，『公共の場での物理的障壁』であった．2つ目は，障がいを持つ人に対して，何かに挑戦する前からできないだろう

と決めつける，自分より弱者であると思った人に徹底的な無視や排除をしようとする，などの『人間関係の中で生まれる精神的障壁』であった．3 つ目は，例えば，駅の切符売り場は，車いすのまま購入できるように配慮しているが，実は車椅子からでは文字盤が反射してよく見えず購入が難しい，というような『健常者の一方的判断による改善：善意の障壁』のである．

抽出された 3 つの障壁を地域的，社会的に取り除くことが活力ある社会に向かう方略であると考える．そのためには，健常者と障がい者が本当の意味での対等な付き合いをして，互いが互いを認め合い，支え合う心の壁を低くするあるいは壊すことが重要になる．また，物理的障壁や善意の障壁を少なくするには，障がい者と関わり，実際にその目線を経験しなければわからない．つまり，健常者と障がい者が共に問題解決に関わることこそが真の解決につながると考える．ここでいう活力とは自由であると考えることができる．つまり，彼らが自由にでかけ，自由に意思決定をし，自分に役割や仕事があるなどの社会参加をするなど，他人から管理されずに自分の人生を自由に作っていくべきであると言える．またその上で自由に挑戦することもできるはずだ．一方で，健常者であれ障がい者であれ，自由な暮らしというのは同時に責任や他人との衝突から生まれる制限があることも考えなければならない．したがって，その越えられる壁をそれぞれ自分（達）で越えていくこともまた，活力ある社会の実現につながるのではないかと考える．

【引用資料】

1) ボンジェ，Asaba, 田村，Josephsson（2010）作業を再び始めることと「活力」．第14回作業科学セミナー，三原，ポスター演題

2) Amos S, et al (2012). Facilitating a Photovoice Project. Downloaded on April 8 from: http://foodarc.ca/makefoodmatter/wp-content/uploads/sites/3/VOICES_PhotovoiceManual.pdf

作業科学研究 , 10, 102-104, 2016.

What is a vigorous society for persons with disabilities?

Uemura Asami[1)], Minamiyama Nagomi[1)], Bontje Peter[2)]
1)OTS, Tokyo Metropolitan University,
2)Prof, PhD, OT, Tokyo Metropolitan University

【Introduction】In order to realize vigorous societies1 it is important to consider the occupations of persons with disabilities as a societal problem. We investigated problems of daily occupations (work, study, leisure, etc.) of persons with disabilities and ideas and plans to enhance their social participation.

【Methods】As part of the basic seminar at TM University we, a group of seven 1st year students, investigated what ‘vigor’ might mean for persons with disabilities. Investigation consisted of a photo-voice approach2) using pictures taken from the internet (4 sessions), a visit to an NPO facility to participate in volunteer work for supporting disabled persons independent living (once). We analyzed the completed photo-voice worksheets and records of the fieldwork experiences by coding and then categorizing and organizing data that were related to ‘vigorous society’. Ethics of voluntary participation, preventing physical or mental harm and protection of privacy were adhered too.

【Results and Discussion】Three categories emerged that expressed constraints to vigor in disabled persons’ daily lives: physical obstacles and other problems of access to public places, mental barriers emerging between people, and barriers caused by insufficient designing, in spite of good intentions, for disabled persons by abled-bodied persons.

Next we considered strategies towards eliminating these barriers for realizing a vigorous society. First, it is important to eliminate or reduce ‘barriers of the heart’ through mutual support and mutual recognition in order to achieve truly meaningful social relationship between able-bodied persons and persons with disabilities. Also, to reduce barriers in the physical environment able-bodied persons should engage with persons with disabilities and experience the world from their viewpoints. Specifically, investigating solutions to problems together might facilitate true solutions.

Consequently, vigor can be considered as a form of freedom, namely disabled persons' social participation is based on them being free to go out, to make decisions, fulfill their roles and work. In turn, they will be free from other persons' managing them and be able to freely shape their own lives. Moreover, they should be able and free to take on challenges. Conversely, like able-bodied persons, persons with disabilities too will have to live with the constraints of considering conflicting interests with other persons and carrying responsibilities. Accordingly, overcoming these barriers requires all individuals' growth in order to realize vigorous societies for disabled persons too.

References

1) ボンジェ，Asaba, 田村，Josephsson（2010）作業を再び始めることと「活力」．第14回作業科学セミナー，三原，ポスター演題

2) Amos S, et al (2012). Facilitating a Photovoice Project. Downloaded on April 8 from: http://foodarc.ca/makefoodmatter/wp-content/uploads/sites/3/VOICES_PhotovoiceManual.pdf

ものづくりを通した地域の作業と場所の創造

高木雅之[1,2)]，玉利嘉子[1)]，室田省二[1)]，
吉川ひろみ[1,2)]，古山千佳子[1,2)], ウィックス・アリソン[3)]
1) ものづくり工房作ら，2) 県立広島大学，
3) キャンベラ大学

はじめに：地域の資源や作業機会の豊かさが，人々の作業との結びつきと健康状態を左右する（Wilcock 他，2014）．ものづくりは多くの住民にとって馴染みのある作業であり，人の身体的，精神的，社会的健康を促進するとされている（高木他，2013）．本発表では，地域におけるものづくりの資源や機会を増やす取り組みとその成果を報告する．

ものづくり教室の概要：住民が集いものづくりを楽しめる場所を地域に創造することを目的に，2012 年から旧三原市の 4 地域においてものづくり教室を開催した．各地域において 1 ～ 2 週間に 1 回 2 時間，計 5 ～ 10 回のものづくり教室を実施した．教室には，年齢・性別・障害の有無を問わず誰でも参加できるようにした．参加者は自分の作りたいものを作る，自分の知っていることを他者に教える，自分たちで道具や材料を準備することを教室の基本とした．

経過：2012 年に最初のものづくり教室を県立広島大学にて開催した．教室終了後，10 名の参加者とものづくりグループ「作ら（さくら）」を発足させ，ものづくりを継続した．その後，参加者は増え続け，2016 年現在では毎回約 40 名程度が参加している．参加者の 50% は 60 代で，85%は女性である．2014 ～ 2015 年には，三原市の 3 ヵ所のサロンや集会所においてものづくり教室を開催した．3 ヵ所のものづくり教室の合計参加者数は約 50 名で，60 代の参加者が 40%，70 代が 30%で，98%が女性であった．教室終了後にすべての地域でものづくりグループが立ち上げられ，現在も各地域で 10 ～ 20 名の住民が集まって活動を続けている．それぞれのグループによってものづくりの種類は異なるが，エコクラフト，陶芸，編物，裁縫，革細工，籐細工などが行われている．

成果：【①個人の変化】大学を除く 3 ヵ所でのものづくり教室後の質問紙において，80%以上の参加者が楽しみや外出の機会，知人・友人との交流が増え，ものづくりの興味，知識，技能が向上し，生活意欲が高まったと回答した（n=46）．ものづくりグループや参加者個人の作業はものを作ることだけでなく，地域のイベントで作品を展示・販売したり，他のものづくり教室で作り方を教えることにも広がった．地域での展示・販売・指導を通して，参加者はやりがいや収入を得ることができ，ものづくりとの結びつきを強くした．【②地域の変化】住民が気軽にものづくりを楽しめる場所が地域に増えた．参加者が地域のイベントにおいて作品の展示・販売を行ったことでサロンや自治会の収入が増え，イベントが活性化した．地元の新聞やテレビでグループの活動が取り上げられ，ものづくりが健康増進や地域づくりに貢献することを住民に知らせる機会となった．

考察：住民がものづくりと結びつくことで，彼らの興味，楽しみ，技能が増し，人間関係や作業は広がった．作業との結びつきを促進する新しい場所も地域にできた．住民が地域の中で意味のある作業に結びつく資源や機会を増やすことで，人々の健康を促進し，作業的に丁度良い地域を創造できると考える．

文　献：Wilcock, A. A. & Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Boyt Schell, B. A., Gillen, G. & Scaffa, M. E. (Eds.), Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed. Lippincott Williams & Wilkins,

Philadelphia, pp.541-552.
高木雅之， 吉川ひろみ， 古山千佳子（2013）． 地域住民に対するものづくり講座ーものづくりを通して健康になれる地域を目指してー． 作業科学研究， 7， 19-26.

作業科学研究 , 10, 104-105, 2016.

Creating occupations and places through crafts in the community

Masayuki Takagi[1,2], Yoshiko Tamari[1], Syoji Murota[1], Hiromi Yoshikawa[1,2], Chikako Koyama[1,2], Alison Wicks[3]
1) Mono-Zukuri Kobo Sakura,
2) Prefectural University of Hiroshima,
3) University of Canberra

Introduction: Resources and opportunities for occupation influence occupational engagement in the community and health of people (Wilcock et al, 2014). Crafts is one of the occupations that people are familiar with and promotes physical, mental and social well-being (Takagi et al, 2013). The aim of the presentation is to report the outcomes of our workshop program designed to create resources and opportunities for participating in crafts in the community.

Outline of workshops: The workshops have been held in since 2012. They create a place where residents come together and engage in craft. The workshops were conducted for 2 hours, once a week or twice a month, 5-10 times in each community. All residents could participate in the workshops, regardless of age, gender and disability. The basic principles of the workshops are that participants make things they want to make, teach others what they know and prepare the materials and tools by themselves.

Progress: First workshop was held at the Prefectural University of Hiroshima in 2012. After the workshop the 10 participants formed a craft group "Mono-Zukuri Kobo Sakura". The number of group members has continually increased. As of 2016, about 40 residents participate each time. About 50% of the participants are aged in their 60s and 85% are female. From 2014 to 2015 workshops were held at three community centers in Mihara. The total number of participants in these three community-based workshops was approximately 50. About 40% of participants were in their 60s and 30% were in their 70s. 98% were female. After the workshops the participants in all three communities formed their own craft group and have continued making things. Participants engage in a range of crafts such as weaving paper bands, pottery, sewing, knitting, and leatherwork.

Outcome: 【①Changes within individuals】 In the questionnaire sent to participants in the three community-based workshops, more than 80% of participants (n=46) responded that their opportunities for taking pleasure, going out and meeting friends had increased; their interest, knowledge and skills related to crafts were improved; and their will to live was enhanced. Participants are now making things to sell, are displaying their products at community events, and are teaching craft skills at other community workshops. 【②Changes within communities】 Places where residents can easily engage in craft were created in the communities. The residents' associations have benefitted from the funds raised and the sale and display of products have enlivened community events. The local newspaper and television have run stories on the group activities. These stories have made other residents aware that engagement in craft can contribute to health promotion and community development.

Conclusion: When residents engaged in community-based craft groups, their interests, pleasure, socialization, range of occupations and skills increased. Also new places to promote occupational engagement were created within communities. Providing resources and opportunities for residents to engage in meaningful occupations in the community may promote healthy people and occupationally just communities.

プレイバックシアターが大学生の自尊感情と自己効力感に与える効果の検討

黒瀬亮太[1)]，津田絵美子[1)]，吉川ひろみ[2)]
1) 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科学生，
2) 県立広島大学保健福祉学部教授

はじめに：コミュニケーションスキルの基盤には，適度な自尊感情と自己効力感が必要と言われている．プレイバックシアター（以下，PBT）とは，参加者が自分の体験したできごとを語り，それをその場ですぐに即興劇として演じる独創的な即興演劇である．PBT では“doing”に焦点を当てる．これは，作業の理解を助けると考えられる．

目的：本研究は，PBT ワークショップ参加が大学生の自己効力感，自尊感情，個人課題への遂行度，満足度に与える影響を検討することを目的に行った．

方法：「人前に出るのが苦手な人」を口頭説明と質問紙で募り，集まった 15 名の大学生を対象に 1 ～ 3 日間の PBT ワークショップを開催した．演習では，ゲームや歌，リテルを経験し，ストーリーでは全参加者がテラー，アクター，観客を最低 1 回は務めるように構成した．PBT の前後に質問紙にて特性的自己効力感尺度（GSES），ローゼンバーグ自尊感情尺度（RSES），個人課題への遂行度と満足度を調査した．倫理的配慮として，参加者に書面および口頭でインフォームドコンセントを実施した．

研究方法：単一コホート前後研究．GSES，RSES，個人課題の遂行スコア，満足スコアの平均を PBT 参加前後で比較した．

結果と考察：全ての指標で介入後に平均値が向上した．平均値は GSES 介入前 61.3，介入後 81.0，RSES 介入前 23.6，介入後 29.2，個人課題遂行スコア介入前 3.38，介入後 5.58，満足スコア介入前 2.79，介入後 6.12（全て $p<0.05$）であった．以上の結果より PBT ワークショップは大学生の自尊感情と自己効力感を向上させることがわかった．参加日数や務めた役割によって自尊感情と自己効力感に与える効果に有意差は確認されなかった．PBT 後の自由記述に「難しかったけど楽しかった」，「思い切って挑戦してよかった」というコメントがあった．それより，困難を克服する経験が自己効力感，自尊感情を向上させたと考えられた．また，「どんな事でも他人に受け入れてもらえる」「雰囲気が良く，行動や勇気が出る」という記載から，コミュニティが形成されたことが考えられた．

結論：大学生にとって PBT ワークショップに参加することは，実際にコミュニケーションスキルの重要な要素である自己効力感と自尊感情を実際に他者と関わりながら向上させることができる，実践的な手段の一つであることが示唆された．

文献：

Rowe. N: The Drama of Doing: Occupation and the Here-and-Now. Journal of Occupational Science, Vol 4, No 2, pp 75-79, 2004

Salas. R: Playback Theatre as a tool to enhance communication in medical education. Medical education online, Vol 18, 22622, 2013

作業科学研究 , 10, 106-107, 2016.

Examination of the effect of playback theaters on self esteem and self efficacy of university students.

Kurose R[1)], Tsuda E[1)], Yoshikawa H[2)]
1) Prefectural University of Hiroshima, Faculty of Health and Welfare, Department of Occupational Therapy, Student.
2) Prefectural University of Hiroshima, Faculty of Health and Welfare, Department of Occupational Therapy, Professor.

Introduction: The foundation of appropriate communication skills are based on self esteem and self efficacy. Playback Theater (PBT) is a creative and improvisational form of theatre which a group of actors "play back" real life stories told by participants. Focusing on “Doing” in PBT helps understanding of occupation.

Purpose: This study examines the PBT workshop’s effect on self esteem, self efficacy, satisfaction, and degree of personal problems resolution of university students.

Methods: Fifteen university students who reported their problems of social interaction participated in this survey. They attended the PBT workshop for 1 to 3 days. In the workshop, they played games, sang songs, and played the roles of Teller, Actor, and Audience in the stories of PBT. They answered a questionnaire before and after the workshop about the Generalized Self Efficacy Scale (GSES), Rosenberg Self Esteem Scale (RSES), and

performance of resolving personal problems and satisfaction of it (Personal Goals). The average scores of the GSES, RSES, and Personal Goals were compared before and after the PBT. Participants provided written informed consent after explanation about this study.

Results and discussion: The mean of all scores improved after intervention. The average scores for GSES were 61.3 and 81.0 respectively the investigation. The scores for RSES were 23.6 and 29.2, the performance scores were 3.38 and 5.58, and the satisfaction scores were 2.79 and 6.12 ($p < 0.05$). The results showed the PBT workshop can enhance the communication skills of university students. Comments from participants were: "It was fun, though it was difficult", "It was a big challenge for me". The results of this survey proved that overcoming difficulties can improve their own self esteem and efficacy. The reason for forming the community was suspected by their comments: "I felt other members could accept anything from me", "The atmosphere was good, so it was easy to express my feeling".

Conclusions: The PBT workshop is a practical way of enhancing university students' self esteem and self efficacy which are the elements of communication skills.

References:

Rowe. N: The Drama of Doing: Occupation and the Here-and-Now. Journal of Occupational Science, Vol 4, No 2, pp 75-79, 2004

Salas. R: Playback Theatre as a tool to enhance communication in medical education. Medical education online, Vol 18, 22622, 2013

南カリフォルニア大学での 4 週間が私に与えてくれたもの

新谷眸
所属なし

【はじめに】いまから約 2 年前の 2014 年の夏，アメリカ南カリフォルニア大学にて 4 週間の作業科学サマープログラムに参加した．その経験が今の自分にどのような意味を持つのか，改めて振り返ってみたいと思う．このプログラムは，南カリフォルニア大学の大学院進学を目指す人への導入，アメリカの作業療法及び作業科学についての紹介，英語を磨き発信する力をつけること，そして他国の作業療法士との交流を持つことを目的としている．私は直感的に行ってみたいと感じ，応募した．第 1 回目の今回，メキシコ，ベネズエラ，コロンビア，ノルウェー，韓国，台湾，日本から計 7 カ国 11 名の作業療法士，作業療法学生，臨床心理士が集まり，彼らとは大学内の学生寮で寝食を共にした．1 週間のスケジュールとして，月曜から木曜までの午前は，各分野のエキスパートによる講義を受ける．午後はプレゼンテーションについての講義と実践，またはひとつの文献を元に意見を交え，理解を深めるワークショップ，それ以外にも Site visit と称した実際の病院や施設が見学できる機会が設けられた．そして毎週金曜日はアクティビティの日として，BBQ をしたり美術館を訪れたりした．また共同生活の中では，課題を一緒に取り組んだり，夕食にそれぞれの国の料理を作るなどして交流を深めていった．

【出来ない自分との対面】英語に関しては，日常会話に不安はなかった．しかし授業となると，全くと言っていいほどついていけなかった．やっとの思いで 1 日目が終わり，頭を抱えていたのも束の間，明日までに読む論文を宿題として渡された．想像以上の自分の出来なさに，場違いな所に来てしまったと感じた．逃げたい気持ちでいっぱいになり，この 4 週間のプログラムを担当する Danny 先生に宿題が出来ないと相談すると，論文の中の重要なポイントに印をつけ，「まずはここだけ読んでみて」と論文の読み方を教えてくださった．授業が終われば毎回必ず，Do you have any question? と聞いてくださった．出来ない自分のことを認めて，手を差し伸べてくれる人がいることが嬉しかった．クラスメイトも共に学び，支えてくれていた．異国の者同士の生活は，はっきりと口にしなければ分かり合えない部分も多いが，同じ作業を共有する中で見えてきたこともあった．なんでもできるように見えた彼女も，様々な思いを抱え懸命に課題に取り組んでいた．私が心が折れそうな時，そっとメモを渡してくれた．自分はひとりで課題と向き合っているつもりでいたが，ひとりではないと気がついたとき，元気がでた．

【恵まれた環境で学べたことへの感謝】出来ないことの方が圧倒的に多い毎日であったが，気持ちが折れることなく 4 週間取り組むことができた．元々，自分の勉強の出来なさにコンプレックスがあったが，小さな達成感と自信が少しづつ積み重なっていくのを感じた．それは

何より恵まれた環境のおかげであったと感じる．たくさんの出来なかったことより，少しの出来たことに焦点を当てることが出来た．共に時間を過ごし，日々の振り返りを共有してくれる人がいたことは，自分の進んでいる方向への安心感，一歩先を見たいと思える推進力を与えてくれた．そして，その思いは日本に帰国してから日本作業科学研究会に入会し，勉強会を通して魅力的な先生方に出会うきっかけへとつながりを持つことができた．

【この経験が与えてくれたもの】自身を取り囲む場所や人やものやタイミングなど，人が環境から受ける影響力はとても大きいのだと感じた．そういったことは作業療法の中で学んで理解していたつもりであった．しかし今回の経験を通して，改めて気づいたというよりも，今までの自分の想像を超えた新しい発見であった．自分が心に響く経験をしたとき，いつも素敵だと感じる人の存在があった．作業療法が素敵だと感じていた思いは，作業療法をしている人が素敵だということでもあるのだと感じた．この経験は，作業療法士という仕事と私自身との関係をより強く繋げてくれた．

作業科学研究 , 10, 107-108, 2016.

What I got in Summer Occupational Therapy Immersion

Hitomi Shintani

【Introduction】In 2014, I had joined the Summer Occupational Therapy Immersion (SOTI) program at the University of Southern California (USC). I am going to explain what I got from these. This program designed for international occupational therapists who are interested in studying in the United States. It will serve as an introduction to occupational science and occupational therapy in the United States. And you will also have a network with other international occupational therapy professionals. I immediately decided to join. From Mexico, Venezuela, Colombia, Norway, South Korea, Taiwan and Japan total seven countries eleven people gathered at USC. We had stayed together in the USC's apartments. As a One-week schedule, From Monday to Thursday, we had lectures from USC’ s renowned faculty of each field. From afternoon, we were provided a lecture and practice of the presentation skills, workshops for deep understanding. Also, there were opportunities to be able to tour at an actual hospital, which is called Site visit. And every Friday, we had a variety of fun activities. The classmate and I did homework together and cooked together in the share apartments.

【Break through my weakness】Except daily conversation, I could not understand any lectures. On the first day, we got an article have to read until tomorrow. There were too many things which I am not be able to. I felt down. I thought I am not the right person who is being here. I asked Dr, Danny who is managed this program. He marked the part of article and said, "Don't worries, Hitomi. Let's start to read important part." Everyday, the faculty asked me, "Do you have any question?" after each lecture. I felt they are happy to support us. All of classmate also helped each other. Sometimes, It is difficult to understand without conversation if they come from different countries. However, I saw clear that a classmate also try her best even struggle in hard environment. When I felt giving up, she gave me lovely message. I realized that I was always helped by many people. It made me stronger.

【How effective environment is 】I knew I have had many things not be able to do. Nevertheless, I was able to do my best. I felt that I built the confidence little by little. It is because of an environment I got. Those who spent time together show me the way where I go. They led me forward. I registered Japanese society for study of occupation when I came back. It gave me wider community with wonderful occupational therapists.

【What I got in there】I thought how big environment effect people. I had known how it is through the occupational therapy. However, I found the real into my experiences. There were always wonderful people, when I had wonderful experiences. Not only occupational therapy is nice, but also those who have occupational therapy. Occupational therapist means me a lot.

作業ストーリーを通じクライエントが主体的に作業に取り組めた事例

冨高史裕[1)]，安部美和[2)]
1) 半田市立半田病院
2) あいち福祉医療専門学校

【はじめに】人工股関節置換術 (以下 THA) 後の事例は，自宅に帰るために杖が必要であると思い込んでいた．しかし，杖を使わずに生活をしたい自己の作業への迷いが生じていた．本事例では，作業に対するエンパワメントが行えず，退院後の自宅での生活がイメージ出来ていなかったと考えられた．今回，退院のイメージを構築する際に Clark らが提唱する「ストーリーテリング・メイキング」という作業科学の知識を用い，事例が退院後の生活イメージを再構築できたので報告する．尚，報告は書面を用いて同意を得た．

【事例】入院初日～ 4 病日 (困惑期)：事例は 70 代前半女性で，夫は数年前に他界し一人暮らししていた．入院当初より作業について質問すると「杖持った生活では，一人暮らしはできない！」という発言が聞かれていた．作業をすることに不安を抱いている姿が見られた，退院後の作業についてイメージができなかった．このため作業療法士 (以下 OTR) は，ストーリーテリングを心がけ事例の言葉に耳を傾けたところ，事例が夫と過ごした思い出の詰まった場所で花を作り，隣人との交流・息子夫婦・孫と過ごす時間を楽しみながら一人暮らしを継続したいとの思いが聞かれた．しかし，痛みが出てからは屋内での家事に時間をかけて行うようになり，庭で花を作ること・散歩に出ることが出来なくなったと語った．また，下肢の痛みから杖を手放すことが出来ず，杖をついて何かを行う今までの作業遂行の形を変更する事は出来ないとの思いが強くうかがえた．5 病日～ 13 病日 (模索期)：カナダ作業遂行測定を通し，事例は家事・料理を行い，息子夫婦・孫と一緒に楽しい食卓・応援を行いたいと述べた．そのために日常生活活動の拡大について問題を話し合い，杖の必要性について一緒に考え，事例は歩くときに右足に痛みが出るから左足で庇わないといけないと語った．そこで作業コーチとして，右足へ体重を乗せた時にどんな気持ちがあるのか聞き一緒に考えていく事にした．「杖があれば右足に体重かけても大丈夫」と肯定的な発言し，OTR は術前より上手く歩けることを賞賛した．14 病日～ 17 病日 (創造期)：作業コーチにより気づきと，行動を続けてきたことで，事例から「病棟でも杖なしで歩いてみるわ」と発言が聞かれるようになった．OTR は，さらに日常生活活動の拡大をしていくために，家事の練習を取り入れた．家事を入れていく事でより退院後の生活イメージを再構築することが出来るようになった．そのことで，「杖があるなしに関らず私のやりたいことができた．私らしく新しい作業に取り掛かれることができるようになった」という発言が聞かれ，事例の作業が杖の有無に関らず行える様に変容があった．

【考察】Clark1) らは共同作業とは，概して，平等な立場で共に働くという意味だと考えられる．共同作業は，セラピストが会話やその過程をコントロールする力を放棄し，生存者が完全に同等の立場をとるときに生じていると述べた．ストーリーテリング・メイキングという知識を用いたことで，OTR は事例の言葉に傾聴する機会が増え，OTR 主導から事例の支援者として関った．事例は，自己決定し作業の意味を再確認することが出来，古い自分を新しい作業的存在である自分に再生することができたと考えられた．今後も作業科学の知見を深め，クライエントの作業遂行を支援出来るよう取り組みたい．

文献：Clark，F．Zemke，R．編者；佐藤剛監訳 (1999)．作業科学―作業的存在としての人間の研究．三輪書店，pp407-430

作業科学研究 , 10, 109-110, 2016.

Cases where client through the work story was tackled to proactively work

Fumihiro Tomitaka[1)], Miwa Abe[2)]
1)Handa City Hospital
2)Aichi College of Well-being and Rehabilitation

[Introduction] Total Hip Arthroplasty after client, cane in order to return home was not convinced that there is need. They lost to the self of the work you want to live without the cane has occurred. In the client, can’t be performed empowerment is for the work, life at home after hospital discharge is believed to have not been able to image. Clark. Advocated at the time to build a hospital in the image "Occupational Storytelling, Story Making" using the knowledge of the OS we report a case can rebuild the living image of the post-discharge.

[Case] 1 to 4 disease Date (puzzle): The client is a 70s woman,

It was the question at the time of work start "In a life that has a cane, I can't live alone!" remark has been heard. I had been concerned about the work, I could not image for work after hospital discharge. OTR, was listening to the words of the case try to storytelling, client to make a flower in places where cases are full of memories spent with her husband, Client is to make a flower in a place of memories of living with her husband, want to live alone I look forward to spending time with my son a couple-grandson. Do only housework in pain, I do not go to the flower beds, walk. In addition, it is not possible to let go of the stick from the pain of the lower extremities, think that it can’t be changed for going to the occupational performance with a cane was strong. 5 to 13 day (groping)：Through the COPM, Do the housework and cooking, he said want a fun table with son couple and grandson. Discuss the issue for expansion of the ADL for that, thinking together about the need of a cane, it said the necessary follow-up because the right foot hurts when you walk. As a occupational coach, thought to how questions happens when put weight to the right foot. Positive remarks as "be over body weight the right foot if there is a cane all right", and praised that OTR is that walk well. 14 to 17 day (creative)：There was a remark as "I try to walk without a cane" by have been aware behavior by the occupational coach. OTR is, because of the expansion of the ADL, incorporating the practice of housework. It has become to be able to rebuild a life after hospital discharge in making the housework. By that, I am saying that "no matter without there is a cane was able to do what you want of me" is heard, occupation regardless of the presence or absence of the cane was done.

[Discussion] Clark1) is a joint work, in general, it is considered that it is the sense of working together in equal footing. Collaboration, to give up power to the therapist to control the conversation and the process, survivors said that occur when taking a completely equal footing. By using the knowledge storytelling making, OTR has increased the opportunity to listen, accustomed as supporters from the initiative. Client, check the meaning of the work from self-determination, was believed to have found a new work existence.

Literature：Clark, F. Zemke, R. Editor; Tsuyoshi Sato translation supervisor (1999). Work science - human research as a work existence. Miwa bookstore, pp407-430

院内クリスマスコンサートにまつわる作業の意味：作業的公正の可能化に向けた病院での実践

大下琢也[1,2]，田中美穂[1]，大出春香[1]，
篠塚仁蘭[1]，山根伸吾[3]
1) 西広島リハビリテーション病院，
2) 広島大学医歯薬保健学研究科博士課程前期，
3) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院

【はじめに】入院患者は，入院環境に伴う様々な制約に「病院だから当たり前，仕方がない」という意識を持っており（畑中ら，2003），基本的に決められた生活の中で作業の選択の機会に乏しいといえる．今回，当院の作業科学勉強会で，回復期リハビリテーション病棟における入院患者にとっての「作業的に丁度良い社会」について検討した．その一環として，入院患者を巻き込みながらクリスマスコンサートを企画し参加を促した．本研究の目的は，コンサートの準備から役割を持って参加した入院患者 2 名の経験を作業の意味の観点から明らかにすること，作業的公正の枠組みから今回のコンサート企画の意義について検討することである．

【方法】回復期リハビリテーション病棟入院中に，役割を持ってコンサート企画に参加した 2 名 (A 氏，B 氏) を対象とした事例研究である．コンサートにおける役割は，事前に聴取した各々にとって意味のある作業と関連が深いものとし，A 氏は「写真撮影」と「パソコンでの文書作成」の作業から当日の写真撮影と案内状・掲示物作成，B 氏は「書道」の作業からステージ看板作りに携わった．コンサートより 6 カ月後に，コンサートを時系列に振り返る形で半構造化面接を実施し，面接時間は各々約 30 分間であった．インタビューは録音して逐語録を作成し，意味のあるまとまりでコード化を行なった．コードを分類するためのカテゴリとして，作業の意味を考えるための枠組み（吉川，2009) を参考にし，分類した意味の解釈の妥当性については対象者に確認した．なお，本研究は当院倫理委員会で承認され，対象者から書面で同意を得ている．

【結果】インタビューにより，2 名ともコンサートにまつわる作業を「プラス作業」として捉えていたが，その意味はポジティブなものばかりでなく，ネガティブなものも含まれていることが明らかになった．A 氏は写真撮影について「果たして私に上手い具合に務まるんだろうか」という当初の不安について語り，「回数を重ねさせてもらっ

てどうにか撮れるようになった」ことで，作業の分類としては，仕事・義務であったものが遊びの要素を含むものに変化したことが伺えた．写真撮影とパソコンでの文書作成に関して，退院後も意味はそのままに作業を継続できていた．B 氏は書道について，「字がね，これよりももう少し本当は綺麗に書くことができるんでしょうけど，現状はね，努力の経過を見ていただくのが一番かなと」「また一年後に更にもうちょっとね，少しでも良くなれば，自分としても良かったかなと思うんでね」と人や時間のつながりについて語り，自身との関わり・アイデンティティとしては自己表現に該当すると考えられた．また，「大きな字を書くこと自体はなかなかできないですからね」「そういう意味で，本当にいい経験をさせてもらった」と，今回の入院生活において作業選択の機会があったことについて語った．

【考察】今回のコンサート企画により，入院生活という特殊な環境の中においても，対象者 2 名の作業を自然な文脈で取り入れられたことで，結果的にこれらが「プラス作業」としてのポジティブな意味を多く含んでいたと考えられる．作業的に丁度良いといえるためには，病院においても「人をリスクから守る必要性と，人が丁度よいチャレンジをすることのバランスをとっていく必要がある」(タウンゼント，2011) と，選択とリスクの重要性が指摘されている．A 氏の不安を乗り越える過程はリスクに向き合って役割の責任を負ったチャレンジであり，B 氏の看板作りは自己表現としての本来の作業を経験できる貴重な選択肢の 1 つであったと考えられる．今回の企画は，作業的公正の枠組みにおける構造的要因に対して，病院での実践としてはたらきかけるものであった．これにより対象者が意味のある作業に結びつくことを可能にし，作業的公正を導くものであったと考えられる．入院患者・病院全体としての作業的公正につながったかは今後更なる検討が必要だと考える．

【文献】畑中祐子，杉田聡：入院環境における準拠枠の変化―「仕方がない」という諦めの気持ちの考察を通じて―．保健医療社会学論集 14(1)：49-58，2003

吉川ひろみ：作業の意味を考えるための枠組みの開発．作業科学研究 3：20-28，2009

エリザベス・タウンゼント，吉川ひろみ：作業的公正の可能化―病院での実践．作業療法 30：671-681，2011

作業科学研究 , 10, 110-112, 2016.

Meaning of the occupational experiences through the Christmas concert
: Enabling occupational justice in hospital practices

Takuya Ojimo[1,2], Miho Tanaka[1], Haruka Ode[1],
Kimika Shinozuka[1], Shingo Yamane[2]
1)Nishi-Hiroshima Rehabilitation Hospital,
2)Hiroshima University

Introduction: Inpatients have to obey many rules during hospitalization even if they have a feeling of opposition. They are separated from their daily lives, and there is a lack of occupation choice for decision making. At the internal study group on occupational science, our group discussed creating an occupationally just society in a convalescent rehabilitation ward. As part of our action plans, we organized a Christmas concert involving patients.

The purpose of this case study was to describe the meaning of the occupational experiences of two patients who had specific roles in the concert, and to confirm the significance of the event through a framework of occupational justice.

Method: Two patients (A, B) participated in this study during their hospitalization. They had some roles in the concert. These roles were intimately related to each patient’ s meaningful occupation identified by interviews conducted beforehand.

Case A: He performed the roles of “photography during the event” and “creating a poster and invitation cards using a computer” which is related to his occupation: photography and word processing.

Case B: He performed the role of “producing a signboard to decorate the stage” which is related to his occupation: calligraphy.

We conducted semi-structured one-on-one interviews, which took 30-minutes, with each of them about the concert just six months after the event. With their consent, the interview was recorded and verbatim transcription was made. The data was separated and coded based on the meaning, and categorized by using a “frame of meaning of occupations” (Yoshikawa, 2009). This study was approved by our hospitals’ ethics review board.

Result: The interviews revealed that their occupational experiences through the Christmas concert was identified as positive occupation in and of itself by both patients. However,

the experiences contained both positive and negative items of a "frame of meaning of occupations." Participant A referred to his initial anxiety and mentioned, "Would I be able to fulfill the role?" It can be seen from his comment, "Through repeated shooting, I managed to meet a basic level of quality of photography" , that his activity categories changed from work to play. He continues to engage in photography and word processing after being discharged. Regarding calligraphy, B said, "Although it could be done more nicely, I want others to feel my effort" and "If it would improve after one year, I would find a sense of contentment." His comments indicated that there are meanings of connection to others and time, and relation to his identity and self-expression through the experience.

Discussion: Townsend (2011) indicates that it is important for the occupationally just society to facilitate individual, group or community choice, involvement in just- right risk-taking. It could be said that A' s process of overcoming his initial anxiety corresponded to a challenge despite risks. B' s producing a signboard led to his occupation choice and meaningful occupation that was related to his self-expression. In sum, this event contributed to our practices in the hospital, in terms of structural factors of the framework of occupational justice.

作業中心の実践が有益だった急性期脳出血を有する個人クライエント

池内克馬[1)]，西田征治[2)]，竹内一裕[1)]
1) 岡山医療センター，2) 県立広島大学

【はじめに】急性期脳血管障害者に対して作業を用いた実践に関する文献をレビューした結果，作業を用いた実践よりも不動・廃用症候群を予防するための介入が優先的に行われていた．軽度な左視床出血を有する個人クライエント（以下，CL）に対して，筆者は作業療法開始日から作業療法介入プロセスモデルに基づいた作業中心の実践を展開し，有益な効果が得られたので報告する．なお，CL に対して本報告趣旨を口頭と書面で説明した後に同意を得ており，かつ当院倫理委員会の承認を得ている．

【CL 中心の遂行文脈】CL は妻と二人暮らしをしていた 70 歳代の男性で，成人期には水道工事に従事していた．左視床出血のために入院し，翌日から作業療法が開始された．頚椎疾患に由来する右肩と肘に筋力低下があり，発症 3 か月前に手術を受けた．頚椎の手術後から活動性が低下し，役割を有していなかった．現在は，右上肢，両下肢の筋力が更に低下したと感じ，安定した歩行の獲得を望んでいる．妻から介助を受ければ入院前の生活に復帰できると考えている．

【評価】カナダ作業遂行測定（以下，COPM）の結果は，「風呂の掃除をする」，「庭木の剪定をする」などであった（遂行スコア 3.2，満足スコア 2.4）．運動とプロセス技能の評価（以下，AMPS）では，安全に遂行できないため継続的な介助を要し，運動ロジットは 0.4，プロセスロジットは 0.4 であった．

【原因の解釈と目標設定】頚椎の手術を受けた後に活動性が低下したこと，遂行する作業の難易度が高いことが主たる原因だと捉えた．また，CL が報告した作業を安全に遂行できないと推測されたため，目標を「活動性が向上するための回復作業を退院後に自宅で遂行する」に再定義した．

【介入モデルの選択と介入】回復モデルを選択し，①病棟の散歩，②洗面台の掃除という回復作業を事例と協業しながら行った．①では，自宅と病棟で散歩をするための練習を実施した．散歩に関するリッカートスケール（1：自宅で全くできないと思う～ 10：自宅でとてもうまくできると思う）は 1 点であった．CL と妻に対して自宅で散歩する方法について退院前に教示した．②では，CL が椅子を準備するなど，AMPS における 1 点の技能項目に着目して作業と環境を調整した．CL は「足が良くなっている」という感想を述べた．妻が行うため，CL が退院後に洗面台の掃除を行うことはなかった．

【結果】COPM の遂行スコアは 3.0，満足度は 2.0 であり，AMPS の運動ロジットは 0.4，プロセスロジットは 0.7 であった．プロセスロジットは統計学的に有意ではないが臨床上意味のある改善が得られた．リッカートスケールは 7 点に改善し，協業的に取り組んだ散歩が可能となった．8 回の作業療法を行い，介入から 14 日目に自宅へ退院した．

【考察】Bigelius らは，入院前の PADL が自立し，認知機能障害がない入院 2 ～ 60 日目の脳血管障害者を対象に AMPS を実施したところ，実施した作業に対して CL 自身が意味と価値を認めたと報告している．軽度な脳血管障害者を対象とした本研究においても，CL と協業した「散歩」に関するリッカートスケールと

AMPS のプロセスロジットが改善し，退院も可能になった．つまり，CL にとって有益な効果が得られた．以上より，脳血管障害由来の症状が軽度な CL に対しては，発症直後から作業中心の実践を行うことが有益だと考えられる．ただし，対象が 1 事例であるため，本報告の結果を一般化するこができない．特に，重度な急性期脳血管障害者に対する作業中心の実践の効果は不明確である．対象者数を増やした検討や，重度な脳血管障害者に対する作業中心の実践の蓄積を希求する．

【文　献】Bigelius, U., Eklund, M. & Erlandsson, L.K. (2010). The value and meaning of an instrumental occupation performed in a clinical setting. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 17, 4-9.

作業科学研究 , 10, 112-113, 2016.

An effective practice for a client with acute thalamic hemorrhage

Katsuma Ikeuchi[1)], Seiji Nishida[2)], Kazuhiro Takeuchi[1)]
1)Okayama medical center
2)Prefectural University of Hiroshima

Introduction: We reviewed literatures about practices on occupations for clients with acute stroke. As a result, occupational therapists' priorities for the clients were to prevent disuse syndrome. The purpose of this paper was to report an effective occupation-centred occupational therapy for a client with acute thalamic hemorrhage.

Client-centred performance and context: A client was septuagenarian and had a wife. He was admitted to the hospital because of left thalamus hemorrhage. He could not flex the right shoulder and elbow because he had undergone a surgery on his cervical spine in the 3 months before the admission. He has not had anything to do and roles since he underwent the surgery.

Evaluation: In the Canadian Occupational Performance Measure (COPM), he reported cleaning the bathroom, pruning plants and so on as occupations he wants to. The performance score was 3.2, the satisfaction score was 2.4. In the Assessment of Motor and Process Skills (AMPS), the motor logit and the process logit were 0.4 and 0.4 respectively.

Clarify the reason for client' s problem of occupational performance and redefine a goal: The reason might be that he got to be inactive after the surgery, and his occupations were so difficult that he could not perform. We set his goals he could perform restorative occupations to develop his body functions at his house.

A model and implementation: We selected a model for enhancement of body functions. Then, we performed two occupations: (a) taking a walk and (b) scrubbing a sink. In the (a), he practiced taking a walk the ward in the hospital. His 10-value likert scale: one means he could not do at all, 10 means he could well for taking a walk was one. In the (b), we applied the occupation and environment to his abilities. As a result, he told me that he felt like enhancing the muscular strength. I collaborated with him throughout the process of occupational therapy.

Results: In the COPM, the performance score was 3.0, the satisfaction score was 2.0. In the AMPS, motor logit was 0.4 and process logit was 0.7. This development represented a clinical improvement. The likert scale was 7 and he got to be able to take a walk after discharge.

Discussion: Bigelius et al. investigated that patients with acute stroke perceived the value and meaning attached to an occupation. Participants had been independent of personal ADL before the onset of stroke, and not being diagnosed with dementia or other pre-morbid cognitive dysfunction. This study also targeted at the client with mild stroke, and the process logit in the AMPS and the likert scale were advanced. Therefore, this evaluation and intervention were effective in him. In other words, it is beneficial for clients with mild acute stroke that occupational therapists provide occupation-centred practices. However, our insistence cannot be generalized because this approach was practiced only one case. Specifically, it is not unclear whether occupation-centred practices are effective in persons with moderate or severe stroke. It is necessary that we develop occupation-centred practice to many of the samples especially moderate or severe stroke.

ゴミ袋の名前書きにより作業的ウェルビーイングの経験を促せた事例～認知症を呈したクライエントとの関わりを通して～

有賀康大，倉田勲
上伊那生協病院

【はじめに】Townsend[1] は，「クライエントが作業的ウェルビーイングを経験した時，健康が深まると考える．」と述べている．本事例において，作業療法士（以下 OT）とクライエント（以下 CL）の妻との偶発的な情報提供から作業が展開したことで，作業の価値を見出す語りが聞かれ作業的ウェルビーイングの経験を促せた．また役割作業の意味や形態についても捉えるきっかけとなった為，その経過を報告する．本報告による作業的ウェルビーイングの定義は「人が自分の作業的生活で行う中でそのやり方から満足感や意味を感じるという経験」[1] とする．尚，発表に際し倫理的配慮に基づき書面にて同意を得ている．

【事例紹介】80 代・男性．若年時は会社の事務，結婚後は農業を行っていた．性格は物静かで無口であった．妻と 2 人暮らしで，他県に娘が在住し月に数回帰省していた．最近では屋内での生活が主であったが，妻と田畑を見に行くことも行っていた．自宅での家事などは殆ど妻が行っていた．数年前よりアルツハイマー型認知症の診断を受けていたが，日常生活に支障はなく過ごしていた．脳梗塞発症後，急性期・回復期病院を経て療養病棟に入院し，退院後は在宅生活とショートステイを繰り返し利用されていた．

【作業療法評価（役割作業の再獲得前）】無口な性格や発話が乏しい為，観察評価を中心に行った．日中は，排泄介助や徒手的治療による介入では特に強い拒否行動が見られ，「あんたに用はない！」と易怒的で職員の腕をつねったり，暴言様の発言も多くみられ複数人でのケアとなっていた．また，昼食時以外臥床傾向であった．病前は新聞を読んだり外を散歩したりしていたと妻から語られ実施したが，継続的な作業従事には至らなかった．身体機能は基本的動作に軽介助を要していた．

【経過：ショートステイ利用時（退院から 8 ヵ月半の間）】CL と関わり約 1 年経過し，妻から，「CL は書く事は嫌いだったけど，手の運動も兼ねて名前を書いてみたら綺麗に書くことができた．そういえば自宅では，ゴミ回収日は忘れずその日に合わせてゴミをまとめて，ゴミ袋に名前を書いて出していた．」と語られた．この語りから，病前役割作業でもあった「ゴミ袋への名前書き」を提案し実施した．作業中，自らマジックを手にする，落ち着いた表情を見せるなどの姿が見られた．妻は「お父さん助かるよ．書かないと（ゴミが）帰ってくるよね．」と話され，CL は「うん．」と頷いた．また CL は OT に「（作業を行えて）ありがとうございました．」と話され頭を下げた．病院では，作業実施を目的にベッドから離床する機会が増え，基本的動作も見守りで可能になるなど身体的にも改善がみられた．妻から「すごいね．（ゴミ袋への名前書きの）作業をやって良かった．今の所，前みたいに手がでる事が減った．これといって役割はないと思っていたけど，私の仕事が減るし本当にありがたく思っています．」と語られた．

【作業療法再評価（役割作業の再獲得時）】身体への強い接触には拒否は残存しているが，職員への拒否言動は軽減し穏やかに過ごされるようになった．排泄介助は職員 1 人でも行え，協力動作も得られるようになった．日中の臥床傾向に大きな変化はなかったが，作業従事の際には能動的な動きもみられた．

【考察】CL は意味ある作業を語ることが難しく，妻からの語りを手がかりに作業を模索した．今回の作業模索の過程において，「字を書くこと」を自宅で行っていたが，これは手指の運動や脳機能賦活など身体機能の維持向上が大きな機能・意味となっていた．一方，「ゴミ袋への名前書き」という作業には，安心して生活できる自宅環境を維持すること，妻への援助，役割作業従事による存在意義などの機能や意味があると考える．つまり，後者の作業には使命感や責任感の意味が加わり，CL に作業的ウェルビーイングの経験を促せ，病前の様に落ち着いて生活出来る一助になったと考える．

【文献】続・作業療法の視点 - 作業を通しての健康と公正 -．大学教育出版，p97，445

作業科学研究 , 10, 114-115, 2016.

Promotion of occupational well-being by writing a name on garbage bag

Kodai Aruga, Isao Kurata
Kamiinaseikyou Hospital

【Introduction】 Occupational well-being is dependent on health (Townsend2011). Finding value in an occupation and engaging in an occupational role with the help of an occupational therapist (OT) and spouse through client history promoted a feeding of occupational well-being. It provided an opportunity to find meaning in an occupation, and to formulate a progress report. Here occupational well-being was defined as the feeling of satisfaction and meaning after performing a particular task in daily life. The client and his family provided informed consent.

【Client information】 The client was a male in his 80s who lived with his wife. In his youth, he worked for a company and a farmer after his marriage. His was generally quiet. Recently, he was mainly indoors, but ventured out to look at the rice fields with his wife. A few years previously, he had been diagnosed with Alzheimer' dementia, but his life had been unimpeded. After discharge, he had repeatedly used short-stay facilities.

【Assessment (before occupational-role acquisition)】 I mainly performed an observational assessment. Toileting assistance and care were accompanied by strongly resisted by the client. Other than lunch time, he had a tendency to lie in bed, whereas before the illness, he used to read the newspaper and stroll outside. However, on discharge, he was unable to do this without assistance.

【Progress: the use of short stay (8.5 months)】 Approximately 1 year later, his wife said that although he hated to write, he was able to write his name neatly as an exercise. Because he never failed to rearrange and bring order to the house and regularly took out the garbage. I suggested that his occupation should be to write his name on garbage bag. He eagerly took to this task and exhibited a calm expression. His wife said that he greatly appreciated this task, and the client himself nodded bashfully and "thanked" the OT and his wife. Therefore, opportunities for him to move increased. His wife observed that he had calmed down, and I appreciated my work had decreased his stress levels.

【Reassessment (after occupational-role acquisition)】 The client became more cooperative with the staff, was calmer and eagerly engaged in the occupation.

【Consideration】 It was difficult for the client to express his ideas of a meaningful occupation and clues had to be derived from his wife' s story. At first, he wrote a character at home. Maintenance and improvement in bodily functions such as exercise and brain function are required for activation of the hand. For the client, writing his name on the garbage bag was a function that signified help and engagement. In other words, the particular occupation of writing his name on a garbage bag provided the client with a sense of duty and responsibility and occupational well-being to live life as calmly as it was before the illness.

【Reference】 Enabling occupation 2: advancing an occupational therapy, vision for health, well-being & justice through occupation p97, 445

身体障害者における退院後の調理の意味の変化

清田　直樹[1)]，　齋藤　さわ子[2)]
1) 茨城県立医療大学付属病院
2) 茨城県立医療大学

はじめに：作業の意味は文化が大きく影響するため，それぞれの国で研究が必要であるとされている (Hoking et al.2011). 調理は多くの人がその役割を担ったり興味を持つ活動であることから，回復期病院では多くの患者で調理の再習得のため作業療法介入が行われている．しかし，ある程度調理を再習得しても，退院後，調理をしなくなる人は少なくない．その理由について，調理の意味やその変化が関係している可能性があるとされているが，調理の意味に関する国内の研究は少ない．特に意味の変化の有無やその内容を理解した研究はなく，十分な知見に基づき作業療法介入が行われているとは言えない．そこで本研究では，回復期病院入院中に作業療法で調理練習を行い，調理を自宅復帰後に再開する予定の，同居家族のいる，身体障害を伴う 6 名の退院時と退院 1 か月後の調理の意味の変化を理解することを目的とした．

方法：研究協力者は男女 6 名であり，全員が発症から

6ヶ月未満で自宅に復帰した者であった．半構造化面接を用い，調理の意味（価値，感情，信念，知識）について質問をした．面接内容はICレコーダーにて記録した．データ収集は，退院時と退院1か月後に実施した．面接で得られた音声データから逐語録を作成し，比較継続法を用いて6人全員が説明できるモデルを作成した．なお，本研究は，茨城県立医療大学倫理審査委員会および茨城県立医療大学付属病院において審査を受けて承認された上で実施した（茨城県立医療大学倫理審査委員会承認第361）．

結果・考察：本研究の6名の研究協力者が語った退院時から退院1か月後の調理の意味は，変化しなかったもの，変化したもの，および新しく出現したものが抽出された．なお，分析結果の調理の意味カテゴリーは【　】，サブカテゴリーは《　》，で示した．変化しなかった意味は，【伝統の継承】，【役割】《分担してもいいもの》，【家族の満足】《夫と子供の満足》または《妻と子供の満足》であった．また変化した意味は，【役割】《全てを担うもの》から《分担してもいいもの》または《二人で一緒に行うもの》への変化，【家族の満足】《夫の満足》から消失，【健康への配慮】から【疾患予防】への変化または消失であった．新しく意味が出現したものは，【体の調子のモニタリング】，【生きるため】，【自分ができることの一つ】であった．

調理に【生きるため】，【自分ができることの一つ】という意味があることを示した先行研究はなく，回復期病院から自宅復帰し1か月経過した協力者特有の意味である可能性がある．また，本研究で理解された退院後1か月後の調理の意味の変化や新しい意味づけは，障害を持ちながら調理という作業の再獲得を目指し，再参加を行う人を理解し，支援するのに有用な知見だと考える．

結論：本研究により，回復期病院で入院中に，作業療法で調理練習を行い，退院時に調理を自宅復帰後に再開する予定にしていた，同居家族のいる，身体障害を伴う6名の，調理の意味の変化の有無と先行研究とは異なる意味が理解された．

文　献：Hocking C, Clair VF, Bunrayong W. The meaning of cooking and Recipe Work for Older Thai and New Zealand. Journal of Occupational Science. 9,117-127.

作業科学研究，10, 115-117, 2016.

Transformation of meaning after discharge in clients with physical disability

Naoki SEIDA[1], Sawako SAITO[2]
1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital
2) Ibaraki Prefectural University of Health Science

【Introduction】 It is necessary to research the meaning of occupation in every country due to the large influence of culture (Hoking et al. 2011). Many clients have an interest in cooking and it is used in occupational therapy intervention in recovery phase hospitals. However, after discharge, the number of clients who continue cooking decreases. One possible reason for this is transformations in the meaning of cooking, but there is little research about this. Therefore, there is insufficient information on the usefulness of occupational intervention in this area.The purpose of this study was to understand the transformation of meaning of cooking among six participants with physical disabilities undergoing discharge and among the six participants one month after discharge. The participants all retuned to their families and intended to restart cooking and engaged in cooking practice in occupational therapy in a recovery phrase hospital. This research had the approval of the ethics committee of Ibaraki prefectural university of health sciences hospital and Ibaraki Prefectural University of Health Science 【Methods】 The participants were one man and five women, who were less than 6 months from onset of their conditions. The interviewer implemented semi-structured interviews about the meaning of cooking (values, feelings, beliefs, and knowledge). The interviews' contents were transcribed after recording with an IC recorder on the date of discharge and the process was repeated one month after discharge. The interviews were transcribed verbatim from the audio data. The constant comparison method was used to create a model for the participants' transformation of meaning. 【Results and Discussion】 Six participations of this study said that one-month after discharge, new meanings of cooking were created, meanings of cooking were transformed, and meanings of cooking did not transform. Categories of the meaning of cooking showed " " and

sub-categories was ‘ ’ . When the meaning was no transformation categories included “continuing traditions” , “Roles” ‘separation of roles’ . Cases of no transformation also included “Satisfaction of family” which included ‘satisfaction of husband and child’ and ‘satisfaction of wife and child’ . Transformations of meaning included within the “role” ‘take all roles’ becoming ‘separation of roles’ and ‘sharing of roles’ . Other changes included ‘satisfaction of husband’ disappearing and “the health considerations” category disappearing or becoming “disease prevention” . Emerging meanings included “monitoring of physical condition” , “for survival” , and “the one thing I can do by myself” . These findings may be a useful construct for exploring the support, participation, and rehabilitation of clients with physical disabilities. 【Conclusion】 This study attempted to bring a deeper understanding of transformation of the meaning of cooking among six participations with physical disabilities in a recovery phrase hospital.

【Reference】 Hocking C, Clair VF, Bunrayong W. (2011). The meaning of cooking and Recipe Work for Older Thai and New Zealand. Journal of Occupational Science. 9,117-127.

急性期病院における在宅復帰予定クライアントが感じる作業遂行と「リハビリ」に対する作業的見解 -SOPI の評価から作業的不公正を考える -

安田滋至[1)] 射場靖弘[1)] 松本浩実[1)] 萩野浩[1)] 松下久美[1)]
1）鳥取大学医学部附属病院

【背景】急性期病院では在院日数の短縮によりクライアントは早期に自宅退院，または転院となる．退院後も「健康」な在宅生活がおこなえるように急性期病院での限られた介入期間においても在宅での Quality of life (QOL) を考慮した作業遂行への評価介入が必要である．

【目的】急性期病院における在宅復帰予定クライアントを対象に Self-completed Occupational Performance Index (SOPI) と Functional Independence Measure (FIM) を評価し，作業遂行と ADL との関連性と作業遂行の特徴を検討すること，さらにクライアントが「入院中のリハビリ」をどのように感じているかを評価し，その特徴について考察をおこなうことである．

【対象】平成 28 年 6 月～ 8 月に当院入院中で作業療法の指示があった在宅復帰予定が決定しているクライアント 11 名（男性 8 名，女性 3 名，年齢平均 68.9 歳）を研究対象とした．疾患分類は脳血管疾患 4 名，整形外科疾患 4 名，呼吸器疾患 1 名，循環器疾患1名，がん1名であった．

【方法】基本情報はカルテより抜粋し，SOPI，FIM，質問については担当作業療法士が評価をおこなった．評価時期は，今後の方針が在宅退院と医師からクライアントに示唆された以降におこなった．得点基準として，SOPI のそれぞれの項目で満足と評価し，100 点換算した場合の最低点が 50 点となる為，今回は基準点を 50 点と設定した．併せてリハビリに対するクライアントの視点について，主訴や目的について質問をおこなった．質問時には，作業療法士による作業遂行への具体的な目標を示唆する以前のものとする．統計学的分析では SOPI と FIM との得点関連性について，Spearman の順位相関係数で相関係数を求めた．危険率は 5%とした．

【倫理的配慮】口頭において，趣旨の説明およびデータの開示，不参加・途中棄権の自由，不利益の生じない事について説明し同意を得た．

【結果】運動 FIM は平均 73.3 点（91 点中），認知 FIM は 31.6 点（35 点中）であった．SOPI の得点は，中央値 33（最大値 69 最小値 0）であった．50 点以上は 2 名，50 点以下は 9 名であった．50 点以上の 2 名は脳血管疾患，整形外科疾患のそれぞれ 65 歳，55 歳のクライアントであった．SOPI と FIM の相関については，Spearman の順位相関係数にて r=0.018，p 値 =0.957 と有意な関連性はなかった．リハビリについての質問回答として，50 点以上の 2 名は身体機能の改善と作業遂行全体に対して目標があった．50 点以下の得点者は，身体機能の改善とセルフケア改善のみの回答であった．さらに「したい事が見当たらない」，「考えられない」，「したいけど出来ない」といった回答があった．

【考察】作業公正とは自身と社会にとって意味のある作業が出来る状態を指し，今回，多くのクライアントに作業的不公正が生じていた．そして，SOPI の得点の高さと FIM との得点の高さとの関連性はなかった．SOPI の得点が 50 点以上のクライアントは作業遂行全体を捉え，セルフケア以外での今後の目標や入院前からの作業への関心が保たれていた．つまり，作業均衡が保たれ作業ニードが明確である事が得点の高かった要因とし

て考えられる．50 点未満のクライアントは身体機能やセルフケアのみへの関心と併せて，おこないたい作業が「見当たらない」，「考えられない」，「出来ない」といった作業的阻害，剥奪，不均衡といった不公正が生じていた．その理由として，疾患や加齢に伴う身体機能の変化に対して作業が移行出来なかった点や，その移行期にセルフケア以外の生産的活動や余暇活動面へのリハビリ介入がおこなわれていなかった点，おこないたい作業に対して病院や家族などの環境因子により作業が制限された点が要因として考えられる．急性期病院では，リスク管理を含めた身体機能・ADL 訓練はとても大事な訓練である．しかし，クライアントが在宅での「健康」な生活を送る為には以前の在宅生活に戻るだけではなく，作業遂行領域について評価し介入する必要がある．

作業科学研究 , 10, 117-118, 2016.

Occupational performance and opinion of rehabilitation in patients scheduled for discharge from an acute hospital - Occupational injustice assessed by SOPI-

Shigeyuki Yasuda[1)] Yasuhiro Iba[1)] Hiromi Matsumoto[1)]
Hiroshi Hagino[1,2)] Kumi Matsushita[1)]
1)Tottori University Hospital
2)School of Health Science, Tottori University,
Faculty of Medicine

【Background】 From the point of view of medical economics, patients admitted to an acute hospital have tended to be discharged early to reduce their stay in hospital. However, occupational therapists cannot provide therapy to patients for long periods during the acute stage and therefore need to assess the influence of occupational performance on their quality of life (QOL) following intervention therapy and discharge.

【Purpose】 The purpose of this study was to clarify the relationship between occupational performance assessed by the self-completed Occupational Performance Index (SOPI) and activity of daily living assessed by the Functional Independence Measure (FIM). We also assessed the characteristics of patients admitted to an acute hospital who carried out self rehabilitation.

【Subjects】 Eleven patients scheduled for hospital discharge on either the doctor’s decision or their own opinion were eligible for the study (8 males, 3 females, mean age 68.9 yr). Four patients had suffered a stroke, 4 had musculoskeletal disease, 1 respiratory disease, 1 cardiovascular disease, and 1 cancer.

【Methods】 A SOPI score of 50 was used as the cut-off point in this study because it corresponds to limited patient satisfaction. Questions on the patient’s main complaint and their goal for rehabilitation were answered verbally. An occupational therapist asked the questions before giving a specific goal for occupational performance. Spearman’s rank correlation coefficient was used to analyze the relationship between SOPI and FIM. The level of significance was set at $p \leq 5\%$. All participants provided written informed consent and the study was carried out according to the guidelines of the Declaration of Helsinki.

【Results】 The mean FIM score was 73.3 for motor and 31.6 for cognitive function, while the mean SOPI score was 33. Two patients, one aged 65 yr with a stroke and the other 55 yr with musculoskeletal disease had a higher score (> 50), while 9 patients had a lower score (< 50). Spearman’s rank correlation coefficient showed no significant difference between SOP and FIM ($r=0.018$, $p=0.957$). Two clients with a SOPI score > 50 set a goal for occupational performance and their own physical function recovery. In contrast, clients with a SOPI score < 50 only had a goal for self-care in ADL and negative responses.

【Discussion】 Considering all occupational performance, patients who had a higher SOPI score had the capacity to maintain an occupational balance and had determinate goals for daily living. However, the other group had limited goals for physical function and self-care. We suggest that situation represents occupational injustice. We speculate the reasons that patients did not have an occupation may have been due to impairments associated with disease and aging, or they could not perform their occupation in a limited environment like a hospital. In addition, the patients may not have received occupational therapy for leisure and production activity during the period of their hospital admission. Occupational therapists should assess and intervene in the occupational performance of patients in acute hospitals, not only to establish their pre-admission living conditions, but also to maintain healthy living.

日本作業科学研究会会則

第１章　総則

（名　称）

第１条　　本会は「日本作業科学研究会」(Japanese Society for the Study of Occupation）と称する．

（目　的）

第２条　　本研究会は，作業科学の研究推進と学問的発展を目的とする．

（事　業）

第３条　　本研究会は，次の事業を行う．

1. 学術研究会の開催
2. 情報の配信
3. 会員個人による研究交流の推進
4. その他　前条の目的達成に必要と認められる事業

第２章　会員

（会員と入会）

第４条　　会員は，本研究会の目的に賛同するもので次の者をもって構成する．

1. 正会員：個人で所定の様式（別記第１号様式）にて入会手続きを行い，当該年度の会費を納めたもの
2. 学生会員：個人で所定の様式（別記第１号様式２）にて入会手続きを行い，当該年度の会費を納めた学生（大学院生を含む）

（会員の権利）

第５条

1. 会員は研究を学術研究会等で発表・講演することができる．
2. 会員は総会において，議決に参加することができる．
3. 会員は本研究会の企画するその他の行事に参加することができる．
4. 会員は本研究会の発行する配布物を受けることができる．

第３章　学術研究会長

（学術研究会長）

第６条　第３条１項の事業を行うための学術研究会長は，正会員の中から選任し，原則として担当する年度の２年以前に行う．

学術研究会長は学術研究会の企画・運営を必要に応じ本部事務局と連絡をとりながら行う．

第４章　役員

（役　員）

第７条　本研究会に次の役員を置く．

1. 会　長
2. 副会長
3. 理　事：７～１０名
4. 監　事：２名
5. 事務局員

（役員の選出）

第８条

1. 会長は，理事の中から理事会において互選する．
2. 副会長は，理事の中から理事会において互選する．
3. 理事及び監事は，正会員の中から総会において選出する．
4. 事務局長は，会長によって理事の中から選任する．
5. 運営委員は，理事会において会員の中から選出する．
6. 事務局員は事務局長によって会員の中から選任する．

（役員の任期）

第９条

1. 役員の任期は，１期２年とする．但し，５期以内の再任を妨げない．理事が会長になった場合，会長になった時点から３期以内の再任を妨げない．
2. 役員に欠員が生じた場合は理事会の議を経て，これを補充することができる．
3. 補充により選任された役員の任期は，前任者の残任期間とする．

（役員の任務）

第１０条

1. 会長は本会を代表し，会務を総括する．
2. 副会長は会長を補佐し，会務を分掌する．また，会長に事故ある時は，会長の職務を代行する．
3. 理事は，理事会を構成し，本会の目的達成のために会務を分掌し執行する．
4. 事務局長は，本会の事務的業務を統括する．
5. 監事は会計を監査し，意見，提案を述べることができる．

第５章　　選挙

（選挙管理運営委員会）

第１１条　会則第８条３項に規定する選挙を行うため，選挙管理運営委員会をおく．

（選挙管理運営委員会の構成）

第１２条

1. 選挙管理運営委員会は，理事以外の３名により構成する．
2. 委員長および委員の選任は，会則第８条５項に従うものとする．

（選挙公示と立候補の締め切り）

第１３条

1. 選挙管理運営委員会は，投票日の６０日以前に，選挙期日，選挙すべき役員の定数及び立候補の受付期間を公示し，立候補を受け付けなければならない．ただし，立候補の締　　め切り日は投票日の４０日前とする．
2. 郵送による立候補の届け出は，締め切り日までの消印があるものを有効とする．

（立候補の届け出）

第１４条

1. 理事及び監事の選挙に立候補しようとする正会員は，文書でその旨を選挙管理運営委員長に届け出なければならない．この場合の書式は，別記第２号様式に準じて作成するものとする．
2. 推薦による立候補は，２～３名の推薦者を必要とし，推薦者の代表が文書で届け出るものとする．その書式は別記第３号の様式の１に準じて作成するものとする．この場合は，本人の承諾書を添えるものとする．その書式は，第３号様式の２に準じて作成するものとする．

（理事会による立候補の推薦）

第１５条　立候補者が定数に満たない時は，理事会が定員の同数の候補者を推薦する．その書式は別記第４号様式の１に準じて作成するものとする．この場合本人の承諾書を添えるものとする．その書式は第４号様式の２に準じて作成するものとする．

（届け出受理証の発行）

第１６条　選挙管理運営委員会は，第 14 条及び第 15 条による届け出に対し，届け出受理証を発行しなければならない．その書式は別記第５号様式に準じて作成するものとする．

（立候補に伴う選挙管理運営委員の退任と補充）

第１７条　選挙管理運営委員が立候補したときは，委員の資格を失う．この場合は，欠員を補充しなければならない．

（選挙の方法）

第１８条　選挙は，総会において出席者の直接無記名投票により行う．

（選挙用紙の様式）

第１９条　投票用紙は，選挙管理運営委員会指定のものとする．

（投票の順序と投票の様式）

第２０条　役員の選挙と投票の様式は次のとおりとする．

（１）理事（７～１０名記号式投票）

（２）監事（２名記号式投票）

（開票立会人）

第２１条　開票に際し立会人２名をおく．立会人は，選挙管理運営委員長が指名する．

（有効投票）

第２２条　有効投票数は，投票総数の３分の２以上なくてはならない．

（無効投票）

第２３条　次の投票は無効とする．

（１）規定の記号以外のものを記載したもの

（２）定められた欄以外の場所に記載したもの

（３）第 20 条に規定する数を越える記載をしたもの

（当選人の確定）

第２４条

1. 得票数の多い者より順次当選を決める．
2. 当選人を決めるに当たり得票数が同じであるときは，選挙会場においてくじで定める．

（無投票当選）

第２５条　立候補者数が定員と一致した場合は，無投票当選とする．

（選挙運動）

第２６条　選挙運動は次のとおりとする．

（１）選挙管理運営委員会は，候補者の氏名，意見等を掲載した選挙公報を１回発行しなければならない．

（２）候補者及び推薦者代表が，選挙公報に氏名，意見等の掲載を希望するときは，その掲載文を文書で選挙管理運営委員会に申請しなければならない．

第６章　会議

（会議の種類）

（総会）

第２７条

1. 定期総会は，原則として年１回開催する．
2. 定期総会は会長が招集し，理事会が運営する．
3. 定期総会は，委任状を含めた会員の３分の１をもって成立し，議決は参加委員及び委任状を持って参加会員の過半数の同意を持って成立する．
4. 定期総会の議長は総会の中から選出する．

（定期総会の審議事項）

第２８条

1. 理事及び監事の選任
2. 議案，及び事業の承認
3. 予算，及び決算の承認
4. 会費に関する事項
5. 規約の変更に関する事項
6. その他　理事会が必要と認めた事項

（理事会）

第２９条

1. 理事会は当分の間，年１回以上開催する．
2. 理事会は過半数の理事の出席を持って成立し，議決は出

席者の過半数の同意を必要とする．可否同数の場合は，議長の決するところとする．

3. 理事会の議長は会長がこれにあたる．

（理事会の業務）

第３０条　本会の目的達成のため理事会は次の業務を行う．

1. 理事会は事業計画を立案しその執行に当たる．
2. 理事会は，必要に応じて役割担当を決定し，その執務に当たる．

（事務局）

第３１条

1. 事務局長は会の一切の事業，会計，外渉を掌握し，会長，副会長及び理事会に報告し，連携を図る．
2. 事務局長は，事務局員の中に会計担当を選び，理事会に承認を得る．
3. 会計担当は，会費，事業に伴う収入，寄付金その他の収入支出の業務に当たり，事務局長の管理の下に年１回以上の会計監査資料を作成する．

第７章　資産及び会計

（資産と経費）

第３２条　本研究会の資産は，会費，事業に伴う収入，寄付金，その他の収入によって構成され，経費は資産によってまかなう．

（予算・決算）

第３３条　理事会は事業計画に基づいて，予算を編成し，前年度の事業報告，収支決算を作成して，監事の監査に基づき総会の承認を得るものとする．

第３４条　本研究会の会計年度は毎年７月１日より始まり６月３０日に終了する．

（会費）

第３５条

1. 正会員：年会費　2,000 円
2. 学生会員：年会費　1,000円
3. 既納の年会費及びその他の拠出金は返還しない．
4. 会費の改訂は総会において決定する．
5. 会員は年度初め２ヶ月以内に当該年度の会費を納入するものとする．

（会則の変更）

第３６条　この会則は，総会の議決がなければ変更できない．

第８章

（附　則）

1. この会則は平成１８年１２月２日から実施する．
2. 本会の事務局は，当分の間，札幌市中央区南３条西17 丁目（〒060-8556　札幌医科大学保健医療学部作業療法学科内）に置く
3. この会則は平成２３年９月２４日から一部改正により施行する．
4. この会則は平成２３年１２月２７日から一部改正により施行する．
5. 本会事務局は，平成26年12月4日から当分の間，北海道札幌市中央区南1条西17丁目（〒060–8556札幌医科大学保健医療学部作業療法学科坂上研究室内）に置く．
6. この会則は平成２８年１２月３日から一部改正により施行する．

作業科学研究　投稿規定

（2016 年 4 月 17 日改定）

１．（編集委員会）日本作業科学研究会の機関誌「作業科学研究」（Japanese Journal of Occupational Science）の編集と発行に必要なことがらを行うため，編集委員会を組織する．編集委員会には，編集委員長を置き，編集委員は委員長の指名によって任命する．

２．（資格）投稿者（筆頭者）は原則として本研究会会員とする．ただし，依頼原稿についてはこの限りではない．

３．（論文の種類）投稿原稿は，作業および作業的存在に焦点を当てたものであり，作業科学の研究推進，学問的発展に寄与するもので，未刊行のものに限る．論文の種類は次の通りとする．

(1) 総説：研究や調査論文の総括および解説
(2) 研究論文：明確な構想に基づいた作業科学研究
(3) 実践報告：作業科学の視点に基づいた報告と考察
(4) 短報：萌芽的又は独創的な作業科学研究・プロジェクト
(5) 資料：作業科学に関連する事柄の紹介，資料を含む
(6) 書評：単行本や学術論文の紹介，抄録，評論を含む
(7) その他：編集委員が適当と認めたもの

４．（投稿手続き）投稿者は原稿の作成，投稿，編集委員会からの通知を受け取る．

(1) 投稿者は，投稿時には執筆要領が守られていることを確認する．

(2) 原稿は，Word 等の文書ソフトを使用して作成し，電子メールでファイルを送信する．
(3) 投稿後 2 週間後までに原稿受理の通知がない場合は，投稿者が編集委員会事務局に連絡する．
(4) 原稿受理の返信後 2 か月後までに掲載に関する通知がない場合は，投稿者が編集委員会事務局に連絡する．

5．（原稿掲載の判断）原稿掲載の判断および編集は編集委員会が行う．総説，研究論文，実践報告については，査読をへて編集委員会が掲載の可否を決定する．編集委員会が必要と判断した場合，字句の修正を行う．掲載の順番は，掲載決定日に基づき編集委員会が判断する．

6．（査読）機関誌の原稿について，一定の質を確保することを目的に査読を行う．
(1) 査読の対象は，総説，研究論文，実践報告，短報とする．資料，書評，その他の原稿は査読を行わず，編集委員会が掲載の可否を判断する．
(2) 査読は，編集委員会が応募原稿のすべてを読み，個々の応募原稿に適切な査読者を協議して決定する．応募原稿の執筆者となっている編集委員は，この協議には含まれない．
(3) 査読プロセスは，投稿者に対する伝達を除き，非公開とする．
(4) 編集委員会は，原則として一原稿につき 2 名の査読者を選定し，期限を付して査読を依頼する．
(5) 査読者は，担当原稿について，「作業科学研究」の執筆要領と論文審査項目に沿って，掲載に関する判定を行う．論文審査では，投稿規程との適合性に加え，内容，方法，倫理的配慮，概念や用語の用法，文章表現，図表の内容と体裁，省略語や単位や数値，表題，引用文献の内容と体裁についての適切性を判定する．
(6) 査読の判定結果（無修正で掲載可，修正後に掲載可，修正後に再査読，掲載不可）と査読者からのコメントを，編集委員会から投稿者に伝達する．

7．（掲載費用）採択された投稿原稿の図ならびに表のうち，改めて作成する必要のある場合，および，別冊については，当分の間，投稿者の実費負担とする．

8．（著作権）掲載されたすべての論文の著作権は本研究会に帰属する．

9．（その他）その他の必要な事項については，編集委員会で決定する．

＜編集委員会事務局＞
青山　真美
E-mail: sagyoukagaku@yahoo.co.jp

作業科学研究　執筆要領

（2016 年 4 月 17 日改定）

1．（原稿）原稿は和文，欧文（英文を原則とする）のいずれかを使用し，文字の大きさを 10.5 ポイント以上，上下左右の余白を 3cm 程度とし，A4 判の白紙に鮮明に印字する．和文原稿は，1 枚あたりの字数を 1200 字（40 字×30 行）とする．英文原稿は，一般的フォントおよびサイズを使用し，行間はダブルスペースとする．1 枚あたりの語数の目安は 400 語程度とする．漢字は，必要ある場合以外は当用漢字を用い，かなは現代かなづかい，送りがなを用い，句点はカンマ（,）読点はピリオド（.）とする．改行の場合は 1 字あける．図表は印刷面積によって原稿枚数に換算する．和文原稿で外国語を原語で記載するときは，固有名詞やドイツ語の名詞など特別な場合を除き，半角文字で記載する．数字も半角文字とする．

2．（論文の種類と量）枚数（本文）は，原則として次の通りとする．
(1) 総説：20 枚以内（図表を含む）（刷り上がり 12 ページ以内）
(2) 研究論文：15 枚以内（図表を含む）（刷り上がり 9 ページ以内）
(3) 実践報告：15 枚以内（図表を含む）（同上）
(4) 短報：8 枚以内（図表を含む）（刷り上がり 5 ページ以内）
(5) 資料，書評：4 枚以内（図表を含む）　（刷り上がり 1 ページ以内）
(6) その他：適量を編集委員会が判断する．

2．（著者）著者名は 5 名までとし，それ以外は謝辞に含める．著者が複数の場合は，著者名をカンマ（,）で連ねる．アルフ

ァベットで書く場合は，名の頭文字を大文字，残りを小文字にし，姓はすべて大文字にする．

3．（表紙）第1枚目を表紙とし，論文の種類，原稿の枚数，図表の数を記載する．表題，著者名，所属機関，連絡先（住所，メールアドレス等）については，日本語と英語で記載する．

4．（要旨）要旨と，内容を示す適切なキーワード4以内を，日本語と英語で記載する．要旨は日本語では400字程度，英語では300語程度とする．

5．（構成）論文は，論理的な構成で書き，必要に応じて見出しを記載する．原則として，研究論文では，はじめに，方法，結果，考察，文献とする．実践報告では，はじめに，実践の紹介（経過を含む），考察，文献とする．論文のはじめに，論文の目的と意義を記載する．

6．（図表）図表は，必要最小限度にとどめ，重複をさける．本文と分けて作成し，原稿の末尾に添え，本文中の欄外余白に挿入箇所を赤字で指定する．図表は，表1，Table 1，図1，Fig.1のように番号を付ける．図の表題は図の下に，表の表題は表の上に入れる．

7．（人名）本文中の人名は，必要な場合を除いて姓のみを書き，敬称は省く．欧文綴りのときは，頭文字を大文字，その後を小文字する．本文中の引用箇所では，引用文献の著者と出版年を記す．　記載例を示す．

作業科学研究では，特定の個人を作業的存在として理解する試みがなされている（Clark 他, 1999, 小田原他, 2011）．Polatajko（2010）は，作業について誰が，何を，いつ，どこで，どのように，なぜ，を理解することが作業の真の理解につながると述べている．

8．（文献）文献は引用文献のみ記載する．記載は，著者名のアルファベット順とし，文献番号は付けない．各文献は，著者名，刊行年次，表題の順とする．単行本の場合には，表題の後に版数，出版社名（外国の場合は出版地も記す）を書き，雑誌論文の場合には，表題の後に雑誌名，巻数，ページを記す．雑誌名は省略せずに書く．編者がいる単行本の場合には，引用した章の著者名，刊行年次，表題，編者名，書名，版数，出版社名，章のページを記す．翻訳書の場合には，著者名の後に訳者名を書き，できれば原著の情報を記載する．書名および雑誌名は斜字体とする．ウェブサイト上の文献は，サイトのアドレスと参照日を記載する．記載例を示す．

Aoyama, M., Hudson, M.J. & Hoover, K.C. (2012). Occupation mediates ecosystem services with human well-being. *Journal of Occupational Science, 19,* 213-225.

Clark, F., Ennevor, B.L. & Richardson, P.L.（村井真由美・訳）(1999). 作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメーキングのためのテクニックのグラウンデッドセオリー．In Clark, F. & Zemke, R. (Eds.)（佐藤剛・監訳），*作業科学－作業的存在としての人間の研究.* 三輪書店, pp. 407-430.

小田原悦子，辻郁（2011）．ある脳卒中者が経験した作業の変化～指向性～．*作業科学研究，5*，36-44.

Polatajko, H.J. (2010). The study of occupation. In Townsend, E.A. & Christiansen, C.H. (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living 2nd ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson. pp. 57-79.

World Federation of Occupational Therapists (2012). Position statement on occupational science revised. <http://www.wfot.org/ResourceCentre.aspx>　参照日 2012.7.10.

吉川ひろみ（2008）．*「作業」って何だろう．*医歯薬出版．

9．（脚注）脚注は，通し番号をつけ，本文と分けて記載し，原稿の末尾に添える．脚注に対応する本文中の語句の右肩に上付き数字を記載する．

編集後記

本年，『作業科学研究』は，記念すべき第１０巻を発刊することとなった．これを祝して，各国の作業科学の組織より，暖かい言葉をいただき，日本作業科学研究会も世界の作業科学組織の一員であることを改めて感じた．また，本巻より，短報を設けて，萌芽的研究の投稿を促進した．その結果，投稿論文の掲載は，研究論文２編と短報２編の合計４編と過去最高となり，「作業」の研究が活発になっていることが伺えた．第11巻は，「作業的公正」の特集を企画している．さらに，多くの論文が投稿されることを期待したい．

(M.A.)

「作業科学研究」編集委員会

編集長　近藤　知子（杏林大学）

編集委員　Peter Bontje（首都大学東京）

西野　歩（社会医学技術学院）

青山　真美（自宅）

向井　聖子（自宅）

村井　真由美（介護老人保健施設 愛と結の街）

三木　恵美（広島大学）

山根　伸吾（広島大学）

作業科学研究　第10巻 第1号

2016（平成28）年12月4日印刷

2016（平成28）年12月20日発行

編集：日本作業科学研究会 機関誌編集委員会

発行：日本作業科学研究会

事務局：北海道札幌市中央区南3条西17丁目

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

電話　011(611)2111（内線 2885/2983）坂上真理研究室内

FAX　011(611)2155

URL　http://www.jsso.jp/

印刷：株式会社アライブ

〒733-0012　広島県広島市西区中広町 3-6-6